

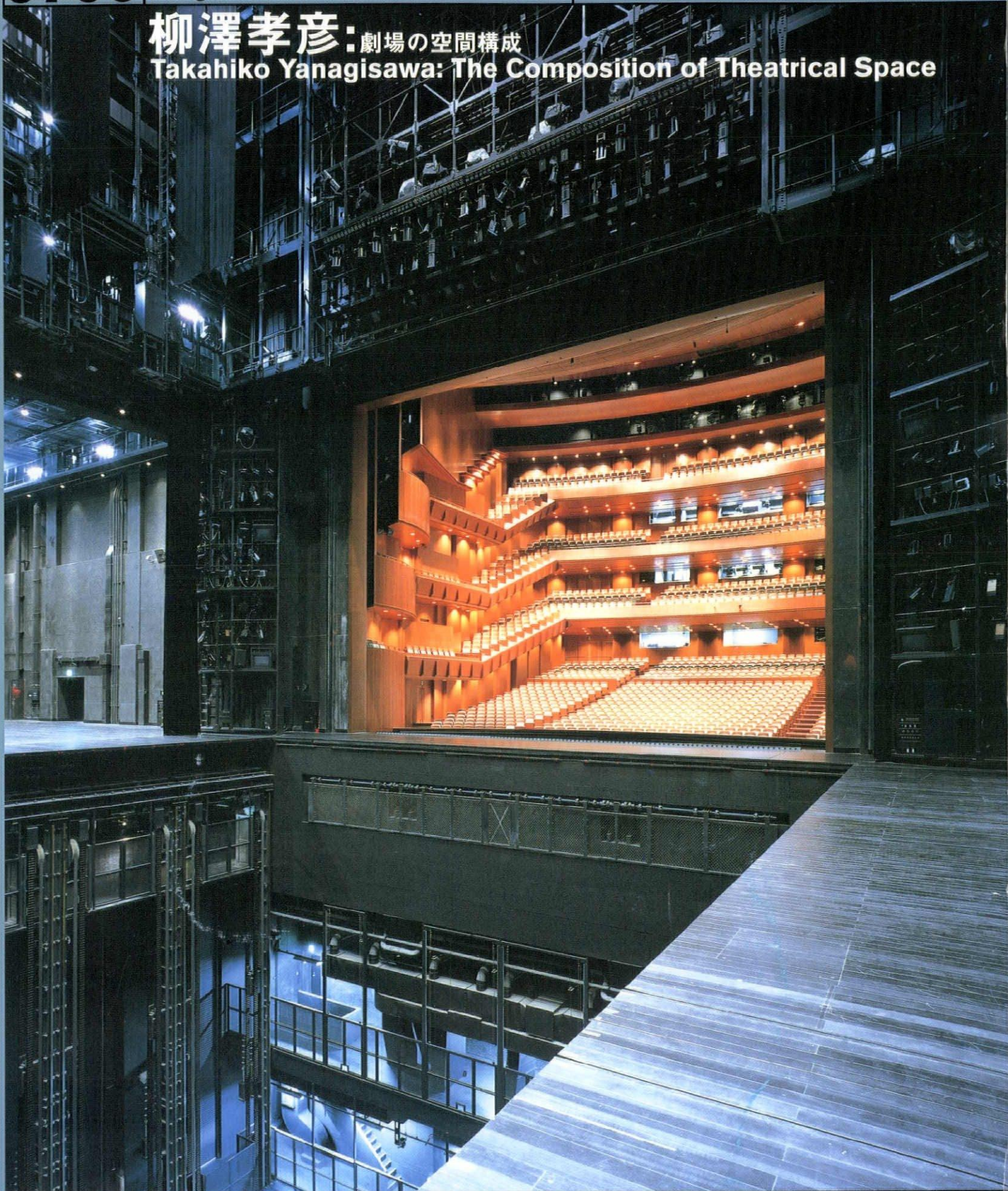
9706

Space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第393号 1997年6月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

柳澤孝彦：劇場の空間構成
Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space

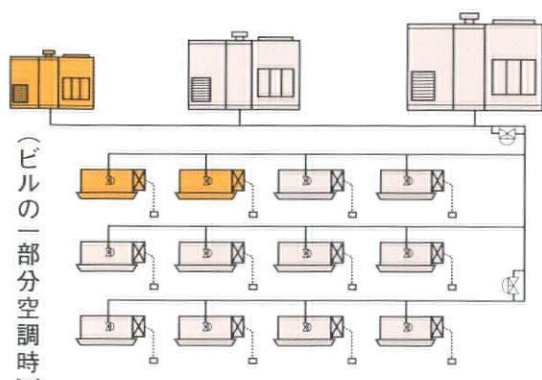


あつ
もつた
ない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をい
かんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコン
トロールパネル【DCP】のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物
全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転。経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.053-461-5112

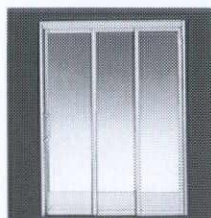
札幌支社	TEL.011-852-2914	名古屋支社	TEL.052-833-8415	中国支社	TEL.0829-23-2115
仙台支社	TEL.022-284-9115	大阪支社	TEL.06-458-4825	四国支社	TEL.0878-33-3336
東京支社	TEL.03-3298-3140	北陸支社	TEL.0764-41-6516	九州支社	TEL.092-411-4835

高齢社会の 水まわり、それは



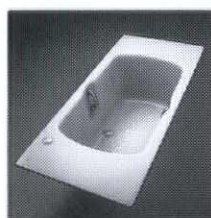
壁掛式大便器コンボ

便器への立ち座りやトイレ使用時の姿勢をラクにするコンボタイプの大便器。手すり、背もたれなど便利な機能も豊富です。



段差解消3枚引戸

浴室入口部の床段差をなくし、水仕舞をよくした段差解消3枚引戸。有効開口幅は930mmでシャワーチェアの出入りもラクに行えます。

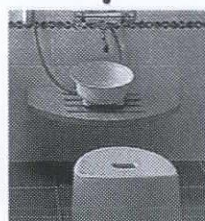


レブリス浴槽

高齢者が自立して入浴できるよう、安全性や使い勝手をトータルに考えた浴槽です。フルタイムバスやブローバスも取付けられます。

洗面器置台

洗面器を置いてラクな姿勢で、洗髪や洗顔ができる置台です。高さの合ったふろいすとセットで使えます。



壁掛角形洗面器

車いすでの使用を考えた洗面器です。洗面ボールの深さを浅めに設定し、洗面器下にひざがラクに入るよう設計しています。



レブリス商品を組合せた空間提案が「寝室・隣接ニューバスルーム」の発想です。トイレ・浴室・洗面所を1か所にまとめ、さらに寝室と隣接させることで、省スペース化と動線の効率化、段差解消など、今まで住宅がかかえていた問題を解消しました。

**これからの空間提案
寝室隣接ニューバスルーム**

**(SILVERを
新しい視点から
考えました。)** **レブリスです。**

カタログご希望の方は、〒154 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TOTO 広告宣伝部「ニューバスルーム」係まで住所・氏名・電話番号を記入のうえご請求ください。

National/Panasonic

AV&C FTAP S

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR&AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

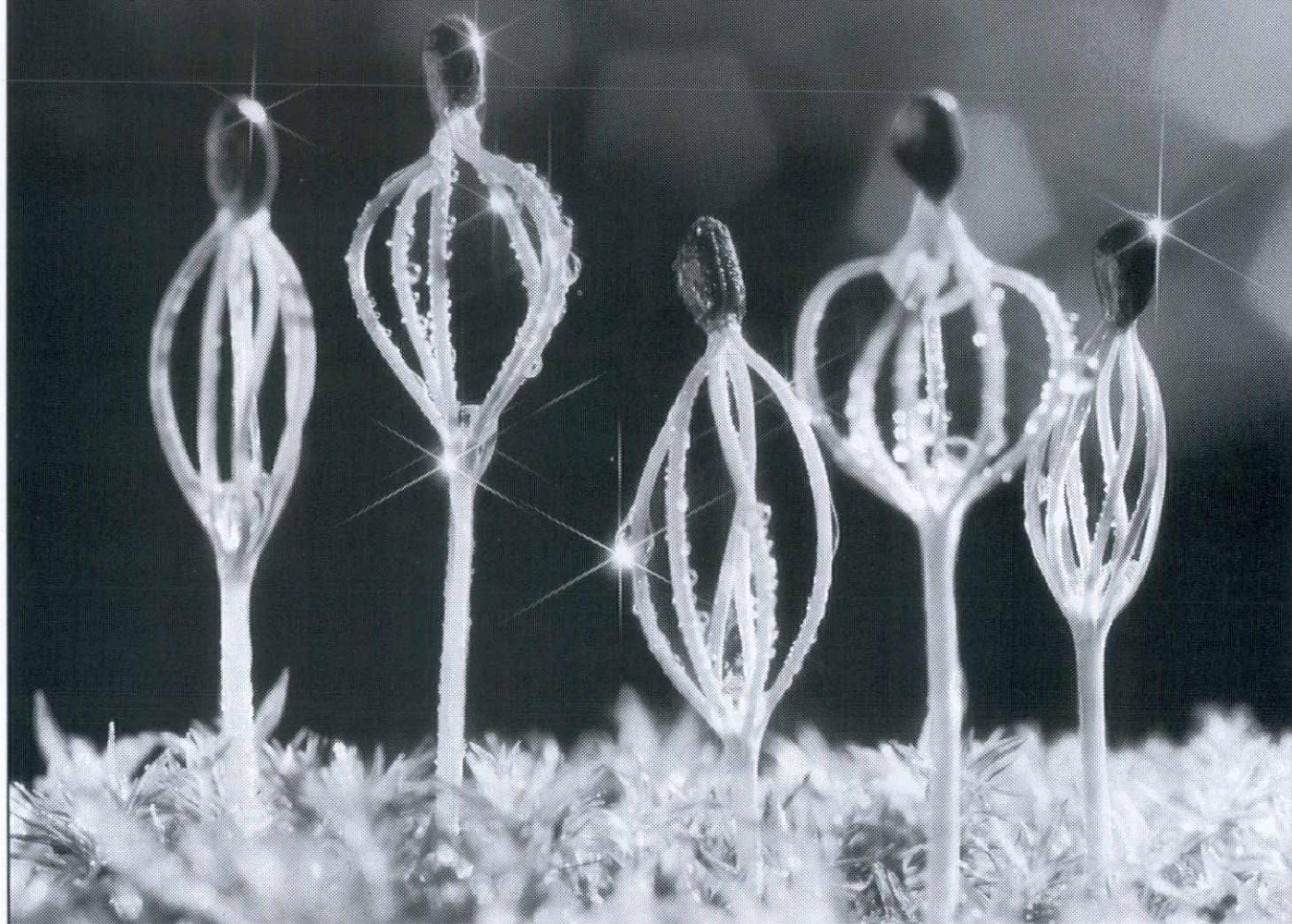
SOFTWARE&
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926



松の芽ばえ

地球と育つ。

地球環境の再構築は、すでに切迫した課題です。地球が保有する資産を大切に活用しながら、新たな資産を発見・創出していかなければなりません。そのためには、私たち人間はあらゆる生物たちと対話し、その力を借りながら、共に成長していくことが大切です。竹中工務店は、早くから独自の「地球環境憲章」を制定し、地球環境の再構築をめざす新技術を育成してきました。その成果をふまえ、いま、技術のさらなる高度化を積極的に推進しています。

創業1610年



竹中工務店

お問い合わせは 総本店広報へ
〒541 大阪市中央区本町4丁目1-13 Tel.06 (252) 1201
〒104 東京都中央区銀座8丁目21-1 Tel.03(3542)7100
[WWW Home page] <http://www.takenaka.co.jp/>

SとLを兼ねたMです。



大きなアリーナ。いいですねえ。夢がありますよね。世界大会、大コンサート、何万人もの観衆、沸き上がる歓声…。大空間はやっぱり建築の醍醐味です。でも、最近、空間の巨大さが気になることが、ときどきあるんですよ。というのは、大きな空間になればなるほど、「本来の目的」以外の使い方が、必ず増えてくることははっきりしてきたからなんです。（プロ野球の本拠地になっているところさえ、ほかの目的で利用される回数の方が圧倒的に多いそうです。）ところが、いままでのやり方だと、たとえばアリーナ全面を使う必要のない場合でも、無理して全面使ってしまったら、あるいは仮設スタンドを入れても、実は天井から跳ね返ってくる音のことを我慢していたり。人が気持ち良く過ごすことを目指した場所で、結果としてまずその気持ち良さが犠牲にされている。おかしいことだと思いませんか。

長野に世界一のスピードスケートリンクをつくらう、ということになったときは、だから、大イベントだけでなく、他の目的で空間を小さく使うこともほんとに真剣に考えたらどうなるか、初めてやってみたいと思ったわけです。全世界に向け、日本をアピールできる大空間であることと、その後何十年も何百年にも渡り、少しでも多くの地元の方に気持ち良く使っていただけることの両立…。

いわば、ほんとの意味で「大は小を兼ねる」といったところでしょうか。

この建物の愛称「M wave（エムウェーブ）」の由来になっている、ドームとは逆に真ん中の下がった「木造吊り屋根構造」は、そんなわけで、「前代未聞の形」とか「日本らしさ」とかそういうこと以上に、アリーナの大きさをいろいろ変えても、気持ちいい空間規模をつくれることが狙いなんです。スタンドだけでなく、照明も音響も含めた全体を可変式にしたのも同じ意図です。その結果、アメフトとママさんバレーが、一流の大コンサートと一流の小コンサートが、じっさい両方できるようになりました。（もちろん、この空間、空調がしやすいので氷の状態がベストに保てるし、木だと結露しにくいのでリンクに露がたれてこないし…と、世界一のスピードスケート競技を実現するたくさんのメリットが集約されているのは、いうまでもありません。ご心配なく。）

ところで、いろいろな仕事で、このようにいろいろな疑問にぶつかり、答えを探していくうち、わたしたちは、こんな考えを持つようになりました。「技術やスケールだけで建築を語る時代は、そろそろ終わりにしよう」。どんなにすごい建物でも、できただけでは、まだ未完成。これからの建築は、そこで人間が様々なドラマを繰り広げて、初めて完成したというべきなんじゃないかな。そう思うんです。

以上、わたしたち鹿島は、そんな視点で、新しい仕事に取り組んでいることを、ここにご報告いたします。

ある日、
その発想に
人は集まる。

鹿島

〒107東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311（代表）
http://www.kajima.co.jp

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

モダンを楽しみ、ヨーロッパを想う 東京都現代美術館宿泊プラン

■期間 1998年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日(祝日の場合は翌日)となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を十分に満喫できるプランです。

お一人様料金

1室1名様利用(シングル).....	¥16,500
1室2名様利用(ツイン).....	¥13,000
1室3名様利用(トリプル).....	¥11,500

※一泊朝食付・美術館入場券(常設展)・お土産・サービス料込み、税別。



株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.5 ツーバイフォー



新検見川マンション販売事務所

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。

〒107 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL03-5474-6054 FAX03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

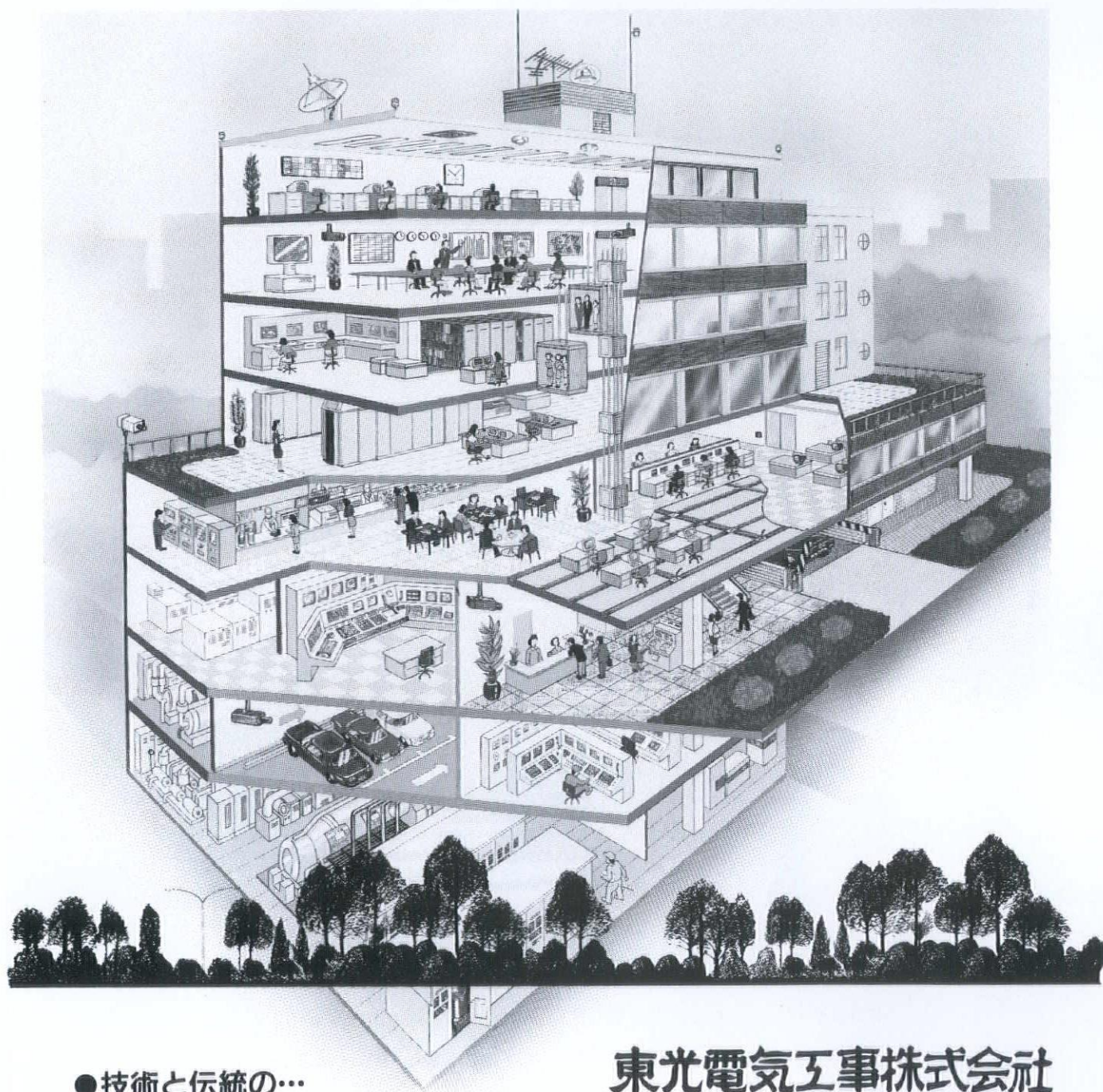
札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…

内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

C&C for Human Potential

新しい自分に出会う時、
きっとそこにあるNEC。



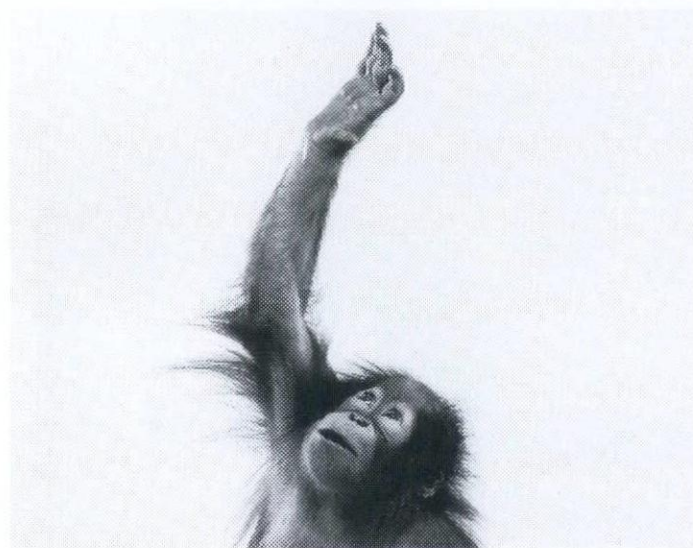
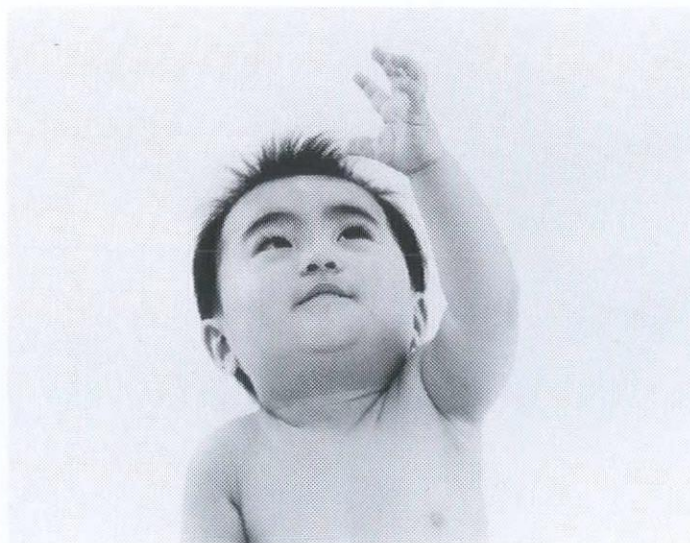
自分の中には、きっと、もっと大きな可能性がねむっている。

マルチメディアに触れるたびに、ネットワークへアクセスするたびに、新しい世界の扉が、次々と開かれていく。

本当にやりたかったことが、探していたなにかが、鮮やかに見えてくる。

あなたが新しい自分に出会う時、きっとそこにNECがいます。

NEC



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TNet 03(4431)2111

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

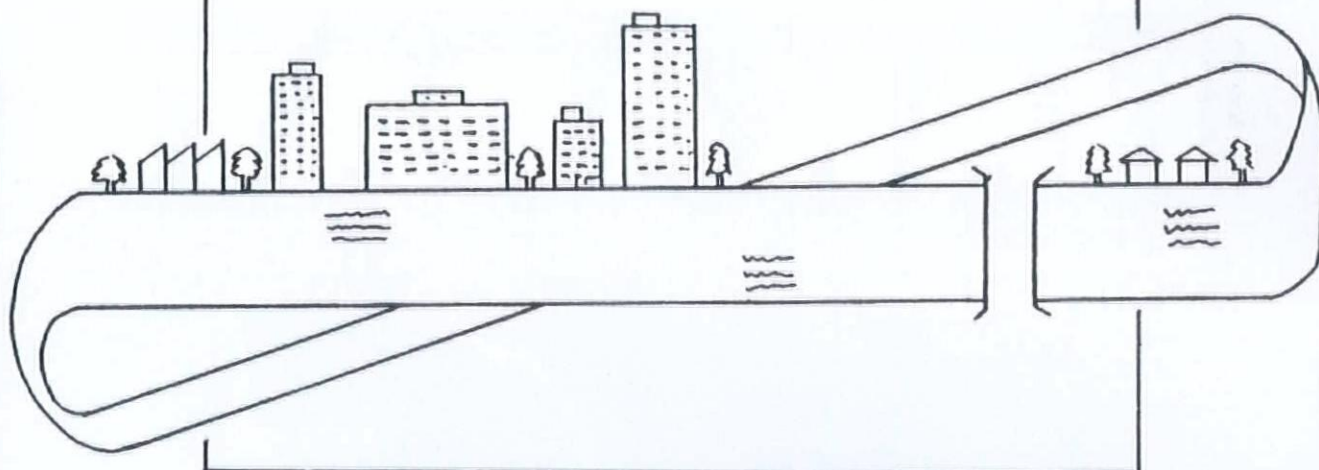
営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京 ☎03(5644)7221 (代表)	福岡 ☎092(451)1095 (代表)
千葉 ☎043(227)9971 (代表)	札幌 ☎011(281)6328 (代表)
横浜 ☎045(316)7885 (代表)	仙台 ☎022(263)0315 (代表)
大阪 ☎048(642)5811 (代表)	広島 ☎082(294)6006 (代表)
名古屋 ☎06(533)3191 (代表)	高松 ☎0878(34)0336 (代表)
	金沢 ☎0762(22)3321 (代表)



水環境を

クリエイトする



株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work
for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work



テクノロジー&システム

中立電気株式会社

〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 TEL (03)3356-2511 FAX



もっと新しく、もっと美しく

営業種目 建築内部造作
住宅、家具、建具、設計施工

現代にマッチした宮崎の内装材

不燃内装化粧材 **ミヤライト**

木質・金属複合化粧材 **ミヤメタル**

純木質系防火扉 **ミヤドア**

ミヤメタル規格品 **ミヤモール**

難燃化粧台板 **ミヤノン**

ウルシパネル

天然木化粧シート **エースウッド**

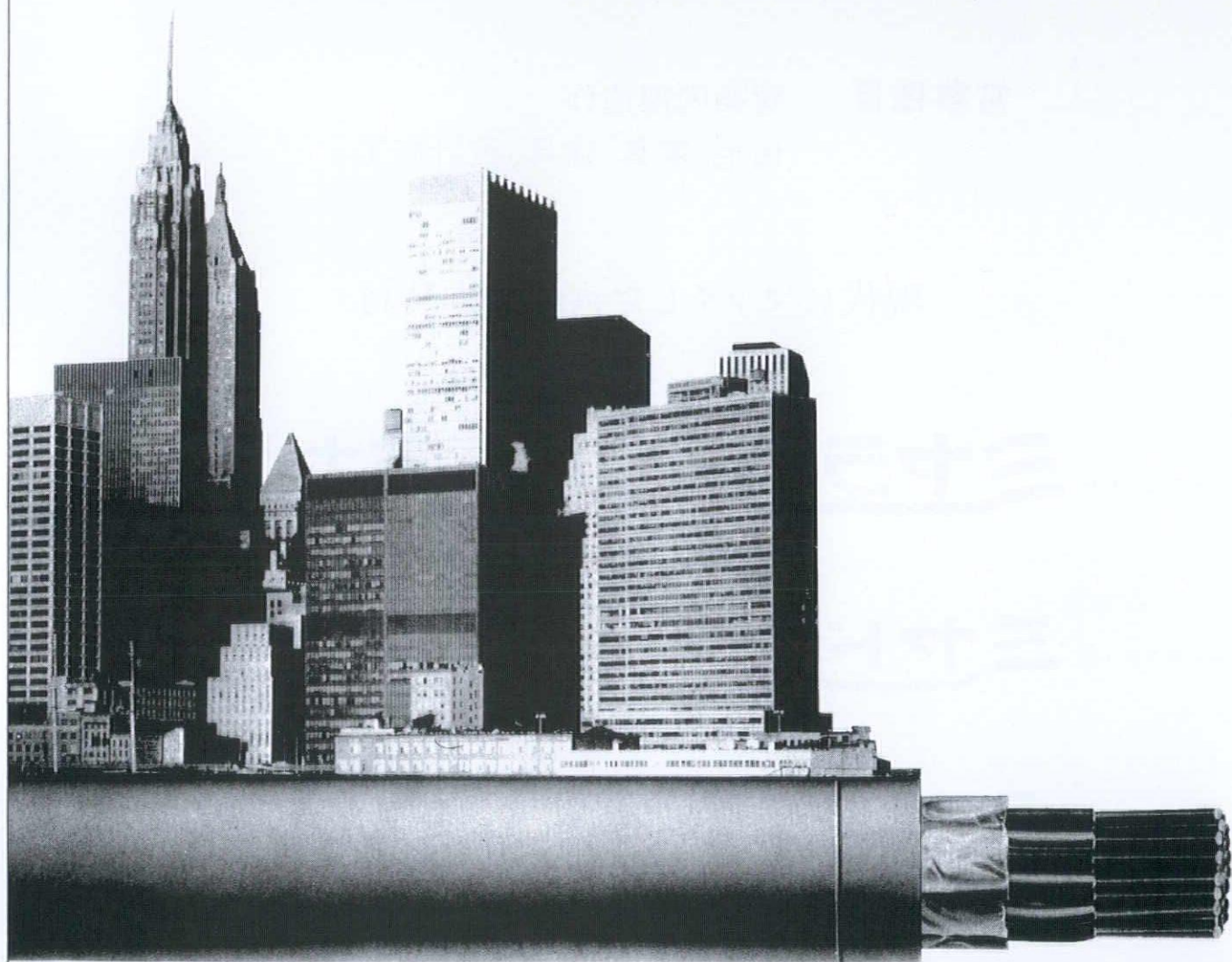
ミヤザキ
テクノスーパー

宮崎木材工業株式会社

〒616 京都市右京区太秦下角田町5
TEL(075)864-7000(大代表) FAX(075)882-6926

東京支店 ■ 〒104 東京都中央区新川1丁目16番14号 アクロス新川ビル・アネックス3階
TEL(03)3555-2541 FAX(03)3555-9637
大阪支店 ■ 〒541 大阪市中央区高麗橋2丁目2番5号 小山ビル4階
TEL(06)231-5723 FAX(06)231-5720
開発営業部 ■ 〒604 京都市中京区夷川通堺町西入絹屋町129
TEL(075)213-0333 FAX(075)212-8154
ハウジング部 ■ 〒604 京都市中京区夷川通堺町西入絹屋町129
TEL(075)213-0350 FAX(075)213-0338
営業所 ■ 名古屋・京都・広島・福岡

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています。

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報
を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれか
らの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中核神経といわれる電気系統の安
全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。
私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のパイオニア



株式会社 弘電社

取締役社長 成 吉 信
〒104東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

夢×技=無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



創業1919 あなたの街でお会いしています

K 栗原工業株式会社

本社/〒530 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(313)1101
東京本店/〒105 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。

TOE/NEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111
東京本部/東京都豊島区東横1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181

“環境を重視するインテリア空間の創造”

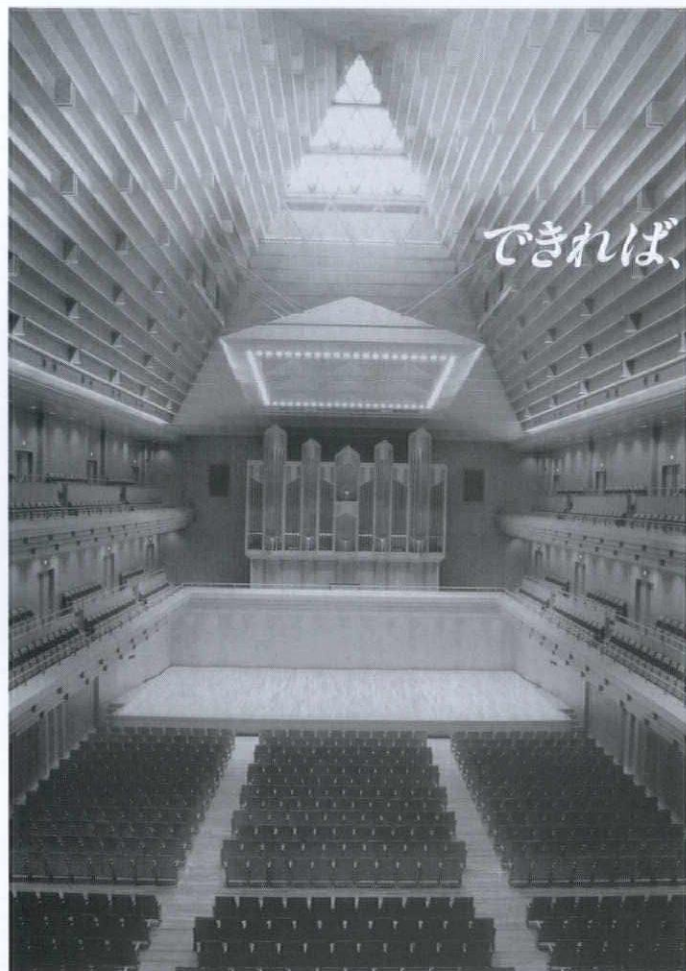


いつも、人から。

私たちを取り巻く環境。それは自然と人間、機能性が共存する空間です。常に人と環境の最もよい関係を第一に考える。「温もりの創造」こそが私たちのコンセプトです。



〒103 東京都中央区日本橋茅場町 2-12-7
TEL (03) 3668-8202
〒556 大阪市浪速区日本橋 3-5-25
TEL (06) 632-3190



できれば、好きな音たちと暮らしたい。

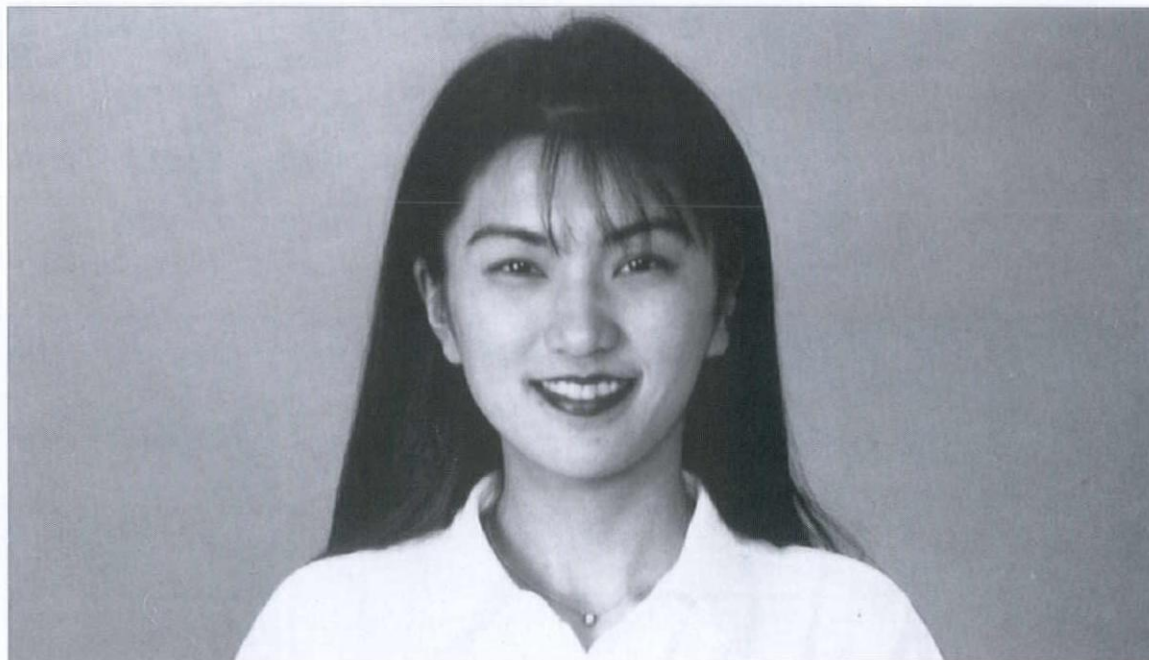
室内音響設計・施工
音響材料の開発研究
音響測定・調査
騒音対策
防音建具設計・施工

有限会社 ジャーレンテック

〒103 東京都中央区日本橋本町 4-3-4
ホワイトボックスビル 2F
TEL.03-3273-2822(代)
FAX.03-3273-2823



確かな歩み未来まで……

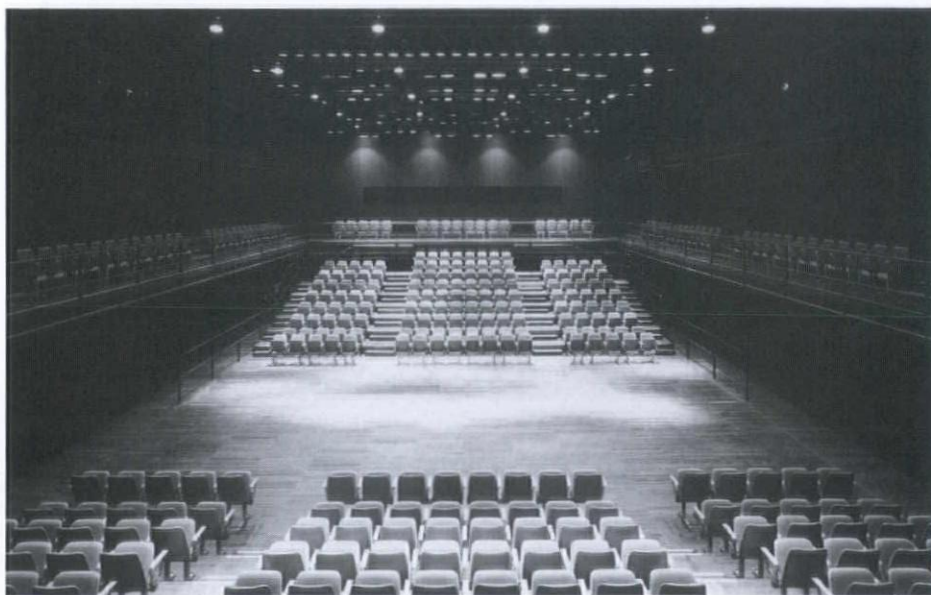


総合設備の設計施工 電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

株式会社 中電工

本店／広島市中区小網町6番12号 TEL (082)291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

劇場に感動の創造を御手伝いするカヤバ



新国立劇場・小劇場 ((株)テクニカル・アート提供)

舞台機構設備

吊物機構・床機構

可動客席機構

大型文化・スポーツ施設

その他各種関連機構全般

企画・設計・製作・施工

KYB カヤバ工業株式会社

本社 〒105 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル
☎(03)3435-3511 FAX (03)3436-6759

装置事業部 舞台営業部

〒105 東京都港区芝大門2-11-1 富士ビル
☎(03)3578-1791 FAX (03)3578-1789

株式会社カヤバ・レイステージ

舞台営業部

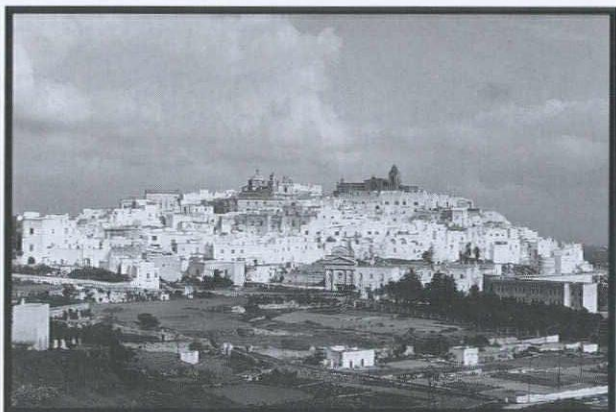
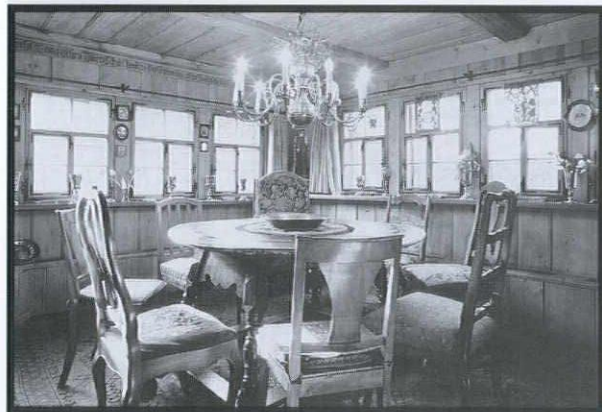
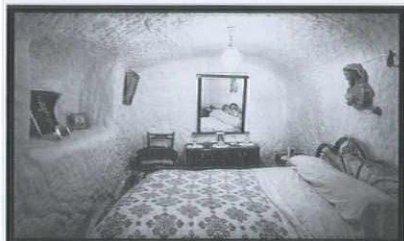
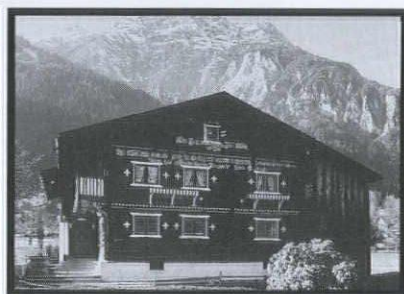
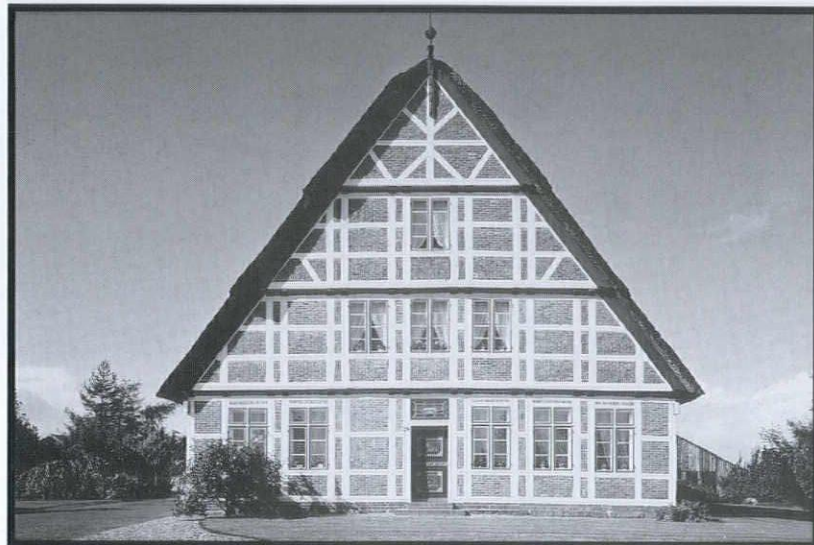
サービス部

〒105 東京都港区芝大門2-11-1 富士ビル
☎(03)3578-1791 FAX (03)3578-1789

—— 豪華写真集 ——

EUROPEAN HOUSE

ヨーロッパ・ハウス — その風土と伝統 — 監修/木村尚三郎 写真/和田久士



ヨーロッパの風土が育んだ住まいの文化と輝かしき伝統

第12回木村伊兵衛賞受賞 和田久士『アメリカン・ハウス』に続く大作

イタリア、フランス、スペインからイギリス、オランダ、ノルウェーまで、13カ国、166市町村を取材。ヨーロッパ人が長い歴史の中で築き上げた、多様な居住形態、魅力あふれる生活スタイルを大型カメラで撮影、迫力ある写真と解説で紹介。カラー写真620点

美しい写真で紹介するヨーロッパ人の住まいの文化と暮らしのスタイル

【本書の5大特色】

- I ヨーロッパ各地に現存する主な歴史的住宅を網羅。
写真はすべて撮り下ろし。
- II ヨーロッパ各国の住宅建築の特徴がひと目でわかる。
- III 建物だけでなく、くらしのインテリアにも注目、細部まで丹念に取材。
- IV 格調高い造本・装幀。
- V デザイン、造形、インテリアに関心のある方に貴重な資料。

【I】 イタリア 迷路のなかの住居 スペインに定着した「往來建築」
ポルトガルにおける南北二つの伝統 フランス 相対する二つの居住形態

【II】 イギリスを変えたホールのある家 アイルランド 妖精の通う家
ドイツの伝統的ハーフティンバー オーストリア 移住民族がもたらした家屋
スイス 複雑な地形に建つ家屋 オランダ 切妻屋根の接する家
ノルウェーの自然が生み出した家屋 ギリシャにおける単体構造の家屋

【解説】
木村尚三郎（東京大学名誉教授）「見える「常識」の棲む家」
陣内秀信（法政大学教授）「ヨーロッパの都市風景を読む」
J・クワイズニエ（元仏民族博物館館長）「ヨーロッパの住居 大いなる伝統」

I巻290ページ II巻282ページ（分売不可） 体 裁：（天地295ミリ×左右295ミリ）段ボール箱入り 製 本：布貼り上製本・紙カバー装・
ホロウバック・糸かがり綴じ・丸背・厚表紙・みぞつき 本文用紙：OKスーパーアート 地図、年表、取材行程、参考資料一覧、索引付き

〈お問い合わせ〉〒104-11東京都中央区築地5-3-2 朝日新聞社 書籍販売部 TEL.03-5541-8838
●お求めは書店、ASA（朝日新聞販売所）でどうぞ。



定価：本体19,048円＋税
ISBN 4-02-257136-5

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話:03-5561-2111(代)
振替:00160-2-180883
Home Page Address: http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm
年間定期購読料
25,000円(特別定価号十消費税、送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有榮堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学理
工学部 関東学院大学

9506 デジタル・アーキテクチャの可能性 1988円

インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室
資料の可能性:笹田研究室、高角・位寄研究室、他。[自然と共存
する家具] 写真=浅川敏

9507 柳澤孝彦／美術館の空間とディテール 2752円

作品:東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、
他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美主
司+柏木博+柳澤孝彦。写真=村井修

9508 まちのパブリックスペース 1988円

人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・
橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文:中川
理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明

9509 丹下健三 3873円

最新作シンガポールの超高層ビル「UOBプラザ」、新宿の新たなスカ
イラインを構成する「新宿パークタワー」を中心に、東南アジア、
ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。

9510 環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作 1988円

近年、海外での活躍が目されるペリの最新作を紹介。[ランドマー
ク・グラフィティ——「タワーアート in 通天閣:ヴァナキュラーな
電脳都市展」より]

9511 長谷川逸子:1985—95 3059円

過去10年に達する主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作
品:山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。
文=ピーター・クック、他。対談:多木浩二×長谷川逸子

9512 SDレビュー1995 1988円

第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美樹、李錫男、トム・ヘ
ネガン+アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana:ローマの
ヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポーター・デザイン]

9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践 2854円

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例:くまもと
アートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサ
ンス、白石メディア・ポリス

9602 建築のメモリア:イタリアの合理主義の流れ 1988円

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の
建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フラン
コ・ステラ、他。

9603 ベトナム建築大博覧 2548円

ベトナムの都市と建築:ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、
ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。
文=重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他

9604 大地と光の変様 オーストラリア建築1788- 1988円

1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジ
ェネレーション in New York:スミス=ミラー+ホーキンソンとジョ
エル・サンタース]

9605 多様性と調和の建築 ゲルカニ+マルクの最新作 1988円

コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。
[海と建築——鈴木了二の最新作] 物質試行:佐木島プロジェクト、
佐木島の住宅



9606

建築家の椅子111脚

19世紀後半から現在に至るまでの
建築家がデザインした椅子を111脚
紹介。C.R.マッキントッシュ、A.
ガウディ、O. ワグナー、ル・コ
ルビュジエ、M.van D.ロエエ、G.
イームズ、A.ロッシ、他

3059円



9607

再考 建築家土浦亀城

戦前、戦後の作品を紹介しながら、
昭和初期モダニズムにおける土浦
の再評価を試みる。作品:土浦邸
(第1、2) [スタジオ建築計画の集
住者] 最新作 FH-HOYA-IIを取りあ
げながら彼らの設計思想を紹介

1988円



9608

マイケル・ホブキンス

「構造上の表現がクリアな」主要作
品を紹介。ホブキンス自邸、イギ
リス国税局新庁舎、ブラッセン・ハ
ウス、他 [光と空間の夢を訪ね
て:トナルド・ジャッドとウォルタ
ー・デ・マリア] 文=南條史生

2447円



9609

デンマーク・モダンハウスの
最盛期

デンマークの50-60年代の住宅を紹
介。キンゴフ・ハウス、ヨーン・ウ
ッフォン、他 [山上の都市と塔の
家——イェメン:都市と住居の形
態学] 文+写真=芦川研究室

1988円

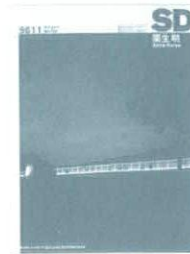


9610

中世の光と空間:フランス中
南部のロマネスク建築

ル・トロネ修道院、他。写真=堀内
広治、文=羽生修二、他 [ふたつ
の都市考<近代都市と芸術展>「未
来都市の考古学展」] [97の椅子プ
ロジェクト]

1988円



9611

栗生明

彼のみごとなディレクションに裏
付けられた、コラボレーションの
結晶を紹介。岡崎美術館、植村
直己冒険館、カーニバル・ショーゲ
ース、他。[田窪義治のサン・ヴィ
ゴール・ミュージアムプロジェクト3]

2548円



9612

SDレビュー1996

第15回SDレビュー誌上発表。ユスト
ス・ベザール+ペーター・ルゲ(Pysall
Ruge Architekten)、高橋昌巳(シテ
イ環境建築設計)、城戸崎和佐建築設
計事務所 [伊丹潤の近作より:石彩
の教会、木の教会、土の教会]

1988円



9701

葉祥栄: カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔
軟体操
キーワード「柔軟体操」をもとに
12のカテゴリーに分けて、全主要
作品を紹介。老人保健施設センダ
イヤル、他。

3059円



9702

木を生かした架構と空間

木の性質を生かした国内外の25例
を紹介。全山の火葬場、モルジュ
のホール、他。文=川口衛、今川
憲英 [アジアを熱くする新世代建築
家たち:IAA国際会議より] アジア
の都市・建築の現在、未来を問う。

1988円



9703

ミニマル・スペース・アーキテ
クチャ

ミニマルでシンプルな建築表現が特
徴的な、4人の建築家を紹介。ジョ
ン・ボーソン、小川晋一、岸和郎、
石田敏明。文=丸山洋志、他 [東
京国際フォーラム] 写真=堀内広治

1988円



9704

拡張するデジタル・デザイン

コンピュータとネットワーク技術によ
る、建築・都市の新しい環境を造り
出すプロジェクトを紹介。文=田島
剛行、山口重之、桂 英史、マイケル・
ベネディクト、藤嶋正樹、久保田晃弘、
坂村 健、奥出直人、高角光男、他

3059円



9705

アフラ+トビア・スカ
ルパと「ベネトン」

アフラ+トビア・スカルパによるベ
ネトンのオフィス社屋、ショップ
などを紹介。文+インタビュー+
写真=豊田博之 [都市ビザとカル
マシの住事]カーサ・ムーティ、
ヴェルディ劇場修復計画など

2000円

SDレビュー1997

第16回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[審査員]

香山壽夫（建築家）

渡辺邦夫（構造家）

岸 和郎（建築家、京都工芸繊維大学助教授）

團 紀彦（建築家）

[応募の受付]

開始 1997年6月24日（火）

締切 1997年7月1日（火）

[SDレビュー1997入選展]

東京展

期間：1997年9月10日—9月21日（予定）

会場：東京都渋谷区猿楽町18-8代官山ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間：1996年9月26日—10月2日（予定）

会場：大阪府南河内郡河南町東山 大阪芸術大学芸術情報センター

●詳細はp.78をご覧ください

5 特集 柳澤孝彦： 劇場の空間構成		35 対談 川向正人×柳澤孝彦 身体性から劇場を語る 新国立劇場の 設計コンセプトを中心に	47 音楽文化と劇場建築 長友宗重		編集長：相川幸二 編集スタッフ： 寺田真理子 高木伸哉 大野由美 飯塚りえ 高森和志 制作協力：久世 健 アドバイザー：伊藤公文 発行人：河相全次郎 編集人：長谷川愛子 発行所：鹿島出版会 〒107 東京都港区 赤坂6丁目5番13号 電話： (03) 5561-2551 営業 (03) 5561-2555 編集 FAX： (03) 5561-2561 営業 (03) 5561-2565 編集 TELEX： 02422467 KAJIMA J 振替00160-2-180883番 Home Page： http://www.kajima.co.jp/ kajima_mall/publish/ index.htm 印刷・製本： 凸版印刷株式会社 〒174 東京都板橋区 志村1丁目11番1号 電話： (03) 3968-5111 案内 取次店：トーハン・日販・ 大阪屋・大洋社・ 栗田出版販売・誠光堂・ 鈴木書店・西村書店・中央社 定価：2,000円 [本体1,950円] 年間直接購読料：26,000円 特別定価号+送料込み 表紙：新国立劇場・オペラ劇場 表紙写真：テクニカル・アート 表紙デザイン：小泉均
		25 都市と劇場のはざま 小倉善明	34 ウィーンの平面、 ベルリンの断面 本杉省三	45 時が育む文化の場 川村純一	
6 新国立劇場	26 東京オペラシティビル	39 三鷹市芸術文化センター	46 埼玉県立近代文学館 (仮称) および 桶川市民ホール (仮称)	59-75 空間のパラメーター 音のデザイン 光のデザイン 地勢のデザイン 素材のデザイン	
81 装飾を排したフォルム・デザイン 「スウェーデンのグッドデザイン」展より		82 スウェーデンのデザイン 飾りより実を ウルフ・ベックマン	92 スウェーデンの グッドデザイン展が 教えるもの 川上信二		
81 ステッラ アンデシュ・ユングバリ、 イボンヌ・ストレム	84 シールス ピーア・トーネル	85 ビンボー ビエテル・ブラント	86 ボラリス M. クラエゾン、 E. コイビスト、O. ルーネ	87 カミエラ ヨーン・カンデル	
88 キャンパス J. ホエッシュム、 P. ヒロットローレンセン	89 ビートル M. ヤンソン、G. ゴンザレス、 M. エングプロウ	90 スピード・グラス 9000 C. ヨーラン・クラフォード、 H. ベリクヴィスト	91 エルゴノミカリー・デザイン ツールズ エルゴノミ・デザイングループ	93 シティ ビルギッタ・ハーン	
93 フィーリング レーナ・ラフォールト	93 ヤーデット ビルギッタ・ハーン	94 ストライプ アンネ・ニルソン	94 ハヴァンナ レーナ・ベリストレム	95 オーク材と縄のベンチ ビョーム・ダルストレム	
95 スパッラ ポリエ・リンダウ	95 シネマ グニッラ・アラード	96 スクイーズ アンキ・グネイブ			
78 SDレビュー1997 募集要項					
98	連載：apple tomology トムの時空形象学 21		100色のタイルを均一に貼るには		戸村 浩
101	連載：サイバートーク 電子メディアのフロンティア		6. 「つながり」のまちづくり		石原弘明
105	隔月連載：ネットワークキングの極意 その1. オンラインネットワークキングの理想と現実				
111	新刊紹介				
112	書評				
114	ニュース： NTTインターコミュニケーション・センターオープン				
116	お知らせ				
119	海外建築情報リミックス：12 Architects 6. エンリック・ミラーレス				

5 Special Feature:

Takahiko Yanagisawa:**The Composition of
Theatrical Space**

35

Discussion:
Masato Kawamukai and
Takahiko Yanagisawa
Human Physique and
the Theatre: The Design
Concept of the
New National Theatre

47

Acoustic Culture and
Theater Architecture
Muneshige Nagatomo

25

Between City and
Theater
Yoshiaki Ogura

34

Vienna in Plan,
Berlin in Elevation
Shozou Motosugi

45

Arenas of Culture
Nurtured by Time
Junichi Kawamura

6

New National Theatre,
Tokyo

26

Tokyo Opera City
Building

39

Mitaka City Arts Center

46

Saitama Museum of
Modern Literature and
Okegawa City Arts
Theatre

59-75

Parameters of Space
Design for Sound
Design for Light
Design for Topography
Design for Materials

81

**Undecorated Form Designs:
Swedish Good Design**

82

Swedish Design:
More Facts Than Frills
Ulf Beckman

92

Learning from the
Swedish Good Design
Exhibition
Shinji Kawamukai

81

Stella
Anders Ljungberg and
Yvonne Ström

84

Cirrus
Pia Törnell

85

Bimbo
Peter Brandt

86

Polaris
Mårten Claesson,
E. Koivisto and O. Rune

87

Camilla
John Kandell

88

Campus
Johannes Foersom and
Peter Hirot-Lorenzen

89

Beetle
M. Jansson, G. Gonzales,
M. Engblom

90

Speed Grass 9000
C. Crafoord and
H. Bergqvist

91

Ergonomically Designed
Tools
Ergonomi Design Gruppen

93

City
Birgitta Hahn

93

Feeling
Lena Rahoult

93

Gärdet
Birgitta Hahn

94

Stripe
Anne Nilsson

94

Havanna
Lena Bergström

95

Bench in oak and cord
Björn Dahlström

95

Sparta
Börge Lindau

95

Cinema
Gunilla Allard

96

Squeeze
Anki Gneib

78

Guidelines for Entrants:
SD Review 1997

98

Series:
apple tomology 21
How to Lay 100 Colors of Tile Evenly

Hiroshi Tomura

101

Cybertalk: Reports from the Frontiers of Electronic Media
6. Community Building for Linkage: Kita Ward Information Community's NPO

Hiroaki Ishihara

105

Bimonthly series: The Ultimate in Networking
1. The Ideal and the Real in On-Line Networking

111

Book Information

112

Book Review

114

News:
Opening of the NTT Inter-Communication Center

116

Announcements

119

Eminent Works Abroad: 12 Architects
6. Enric MirallesChief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Adviser: Kobun ItoPublisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko HasegawaPublished by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
[http://www.kajima.co.jp/
kajima_mail/publish/
index.htm](http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm)

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 132

Cover:
New National Theatre, Tokyo
Cover Photo: Technical Art
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

柳澤孝彦

劇場の空間構成

SPECIAL FEATURE

Takahiko Yanagisawa

The Composition of Theatrical Space

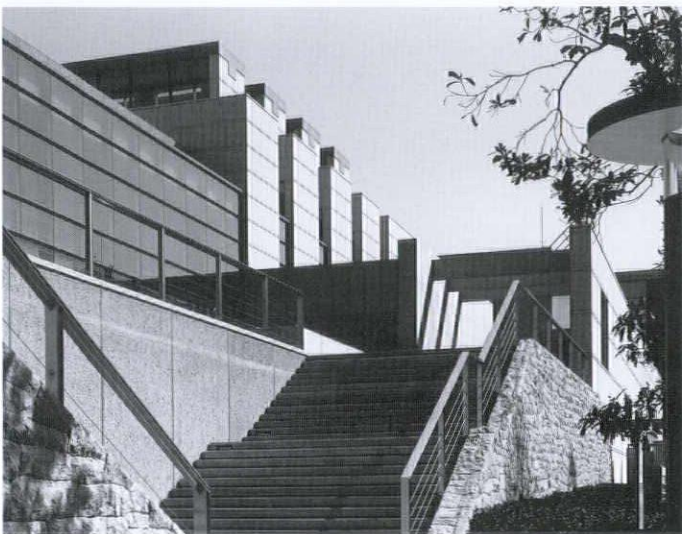
写真＝村井 修、他

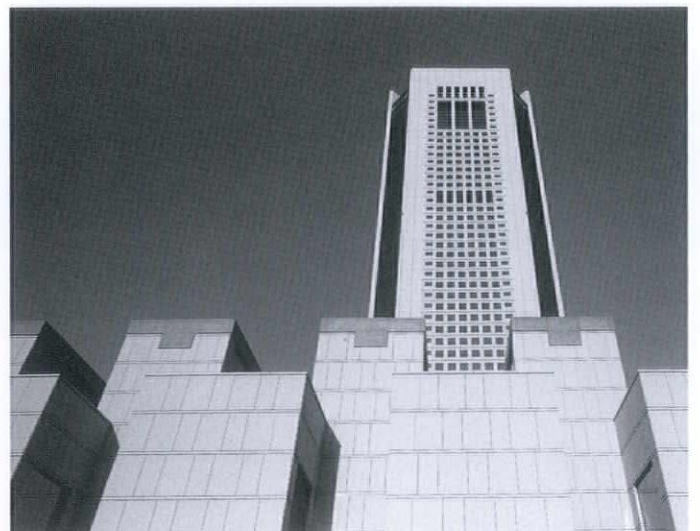
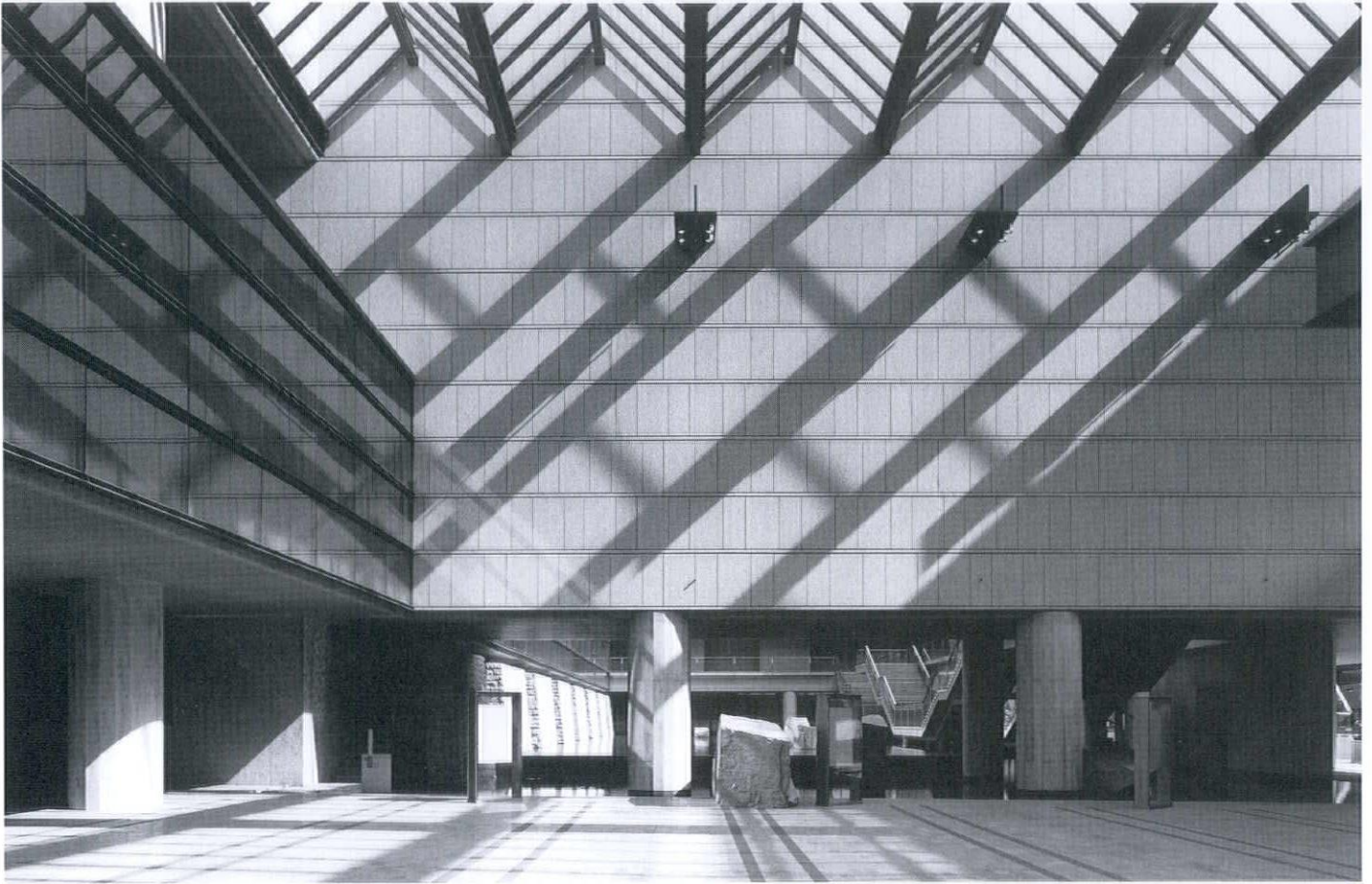
新国立劇場

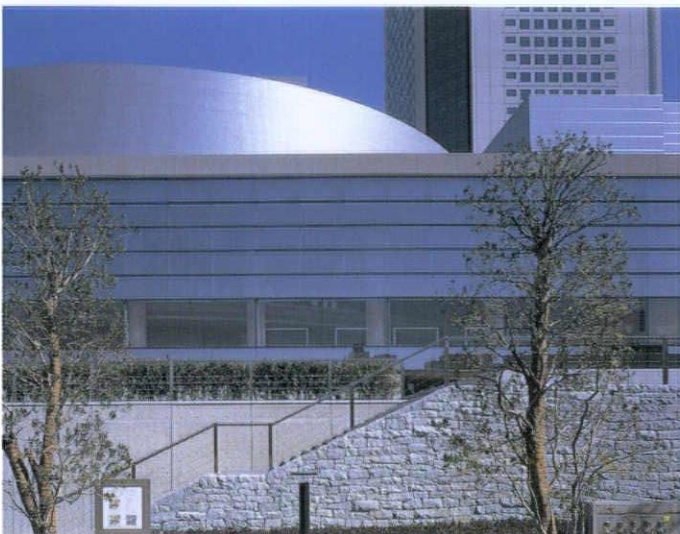
東京都渋谷区本町 1997

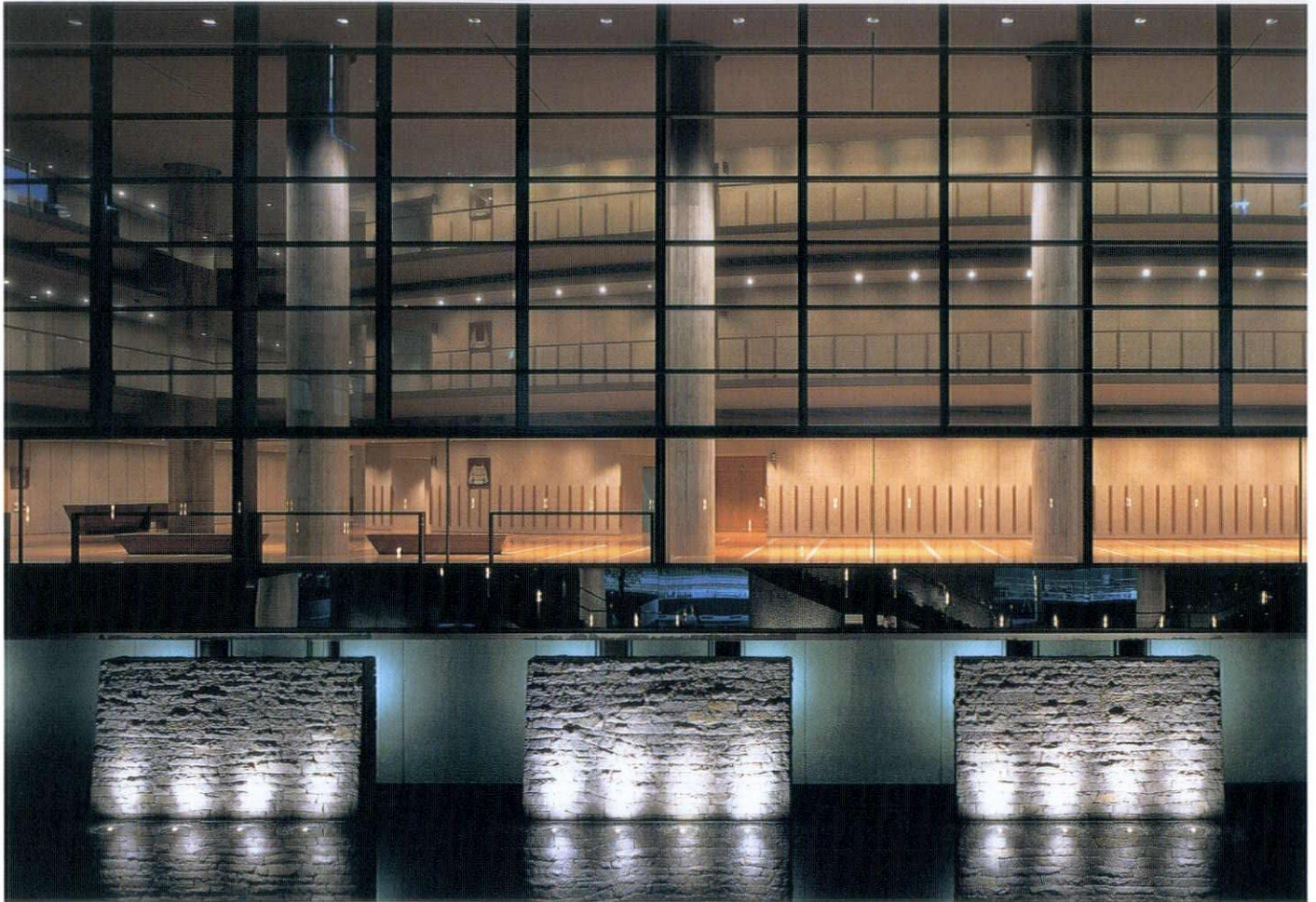


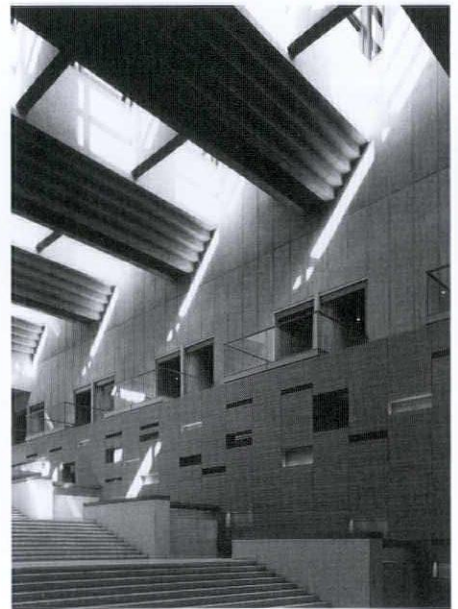
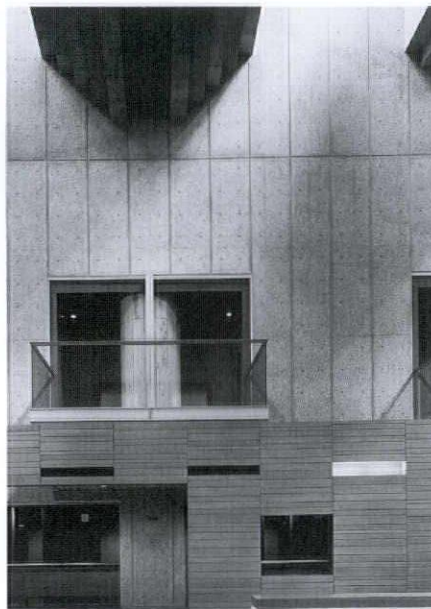
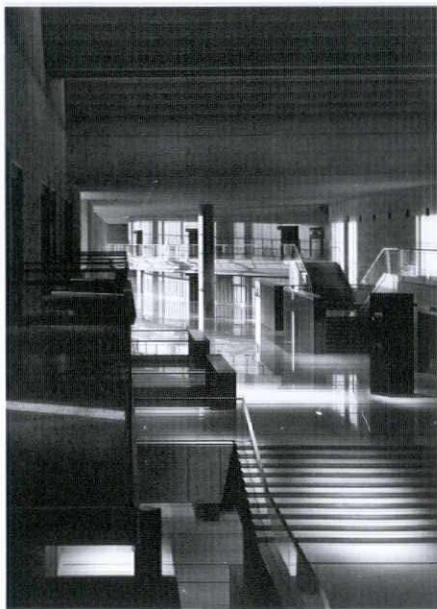




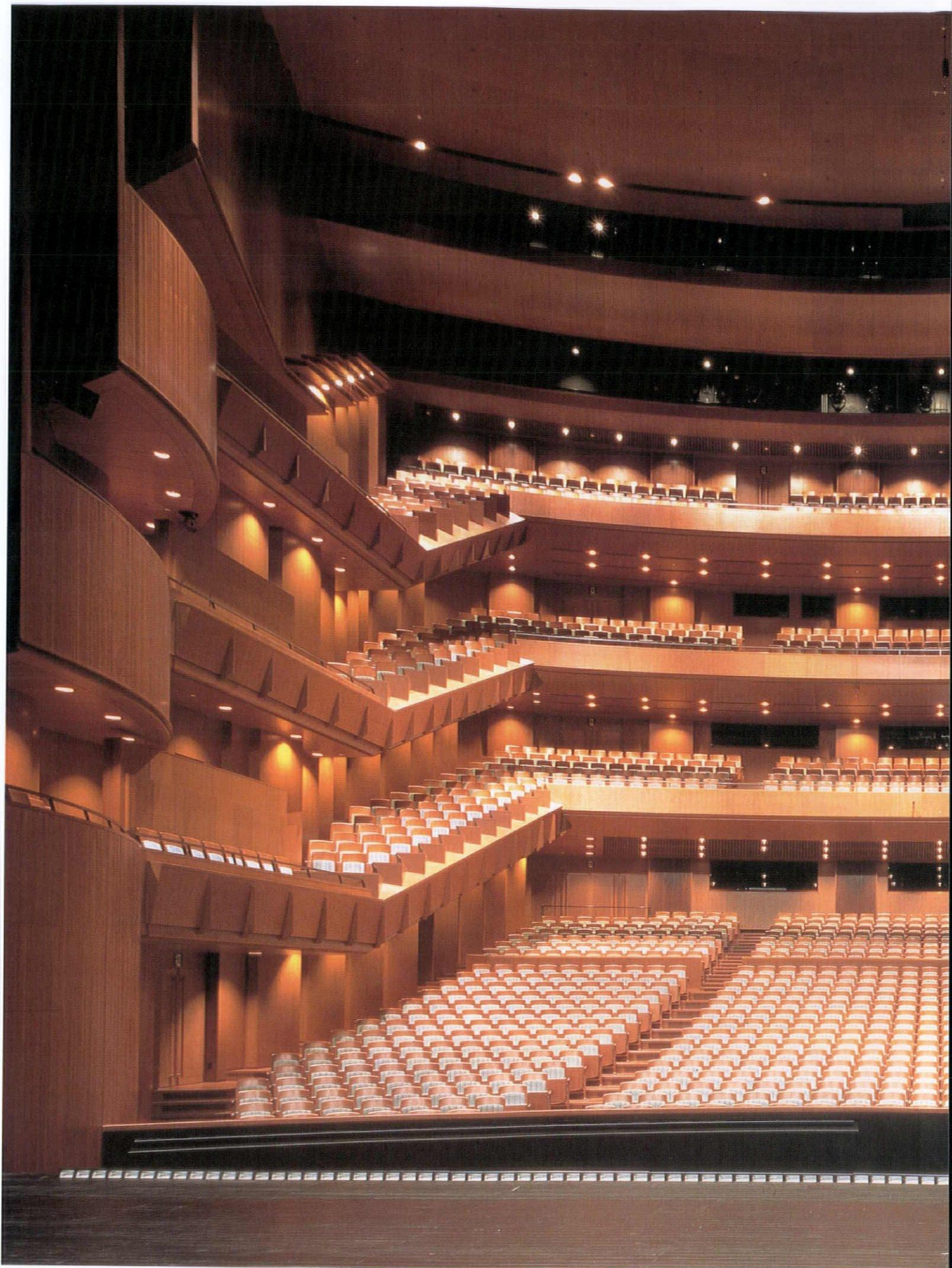


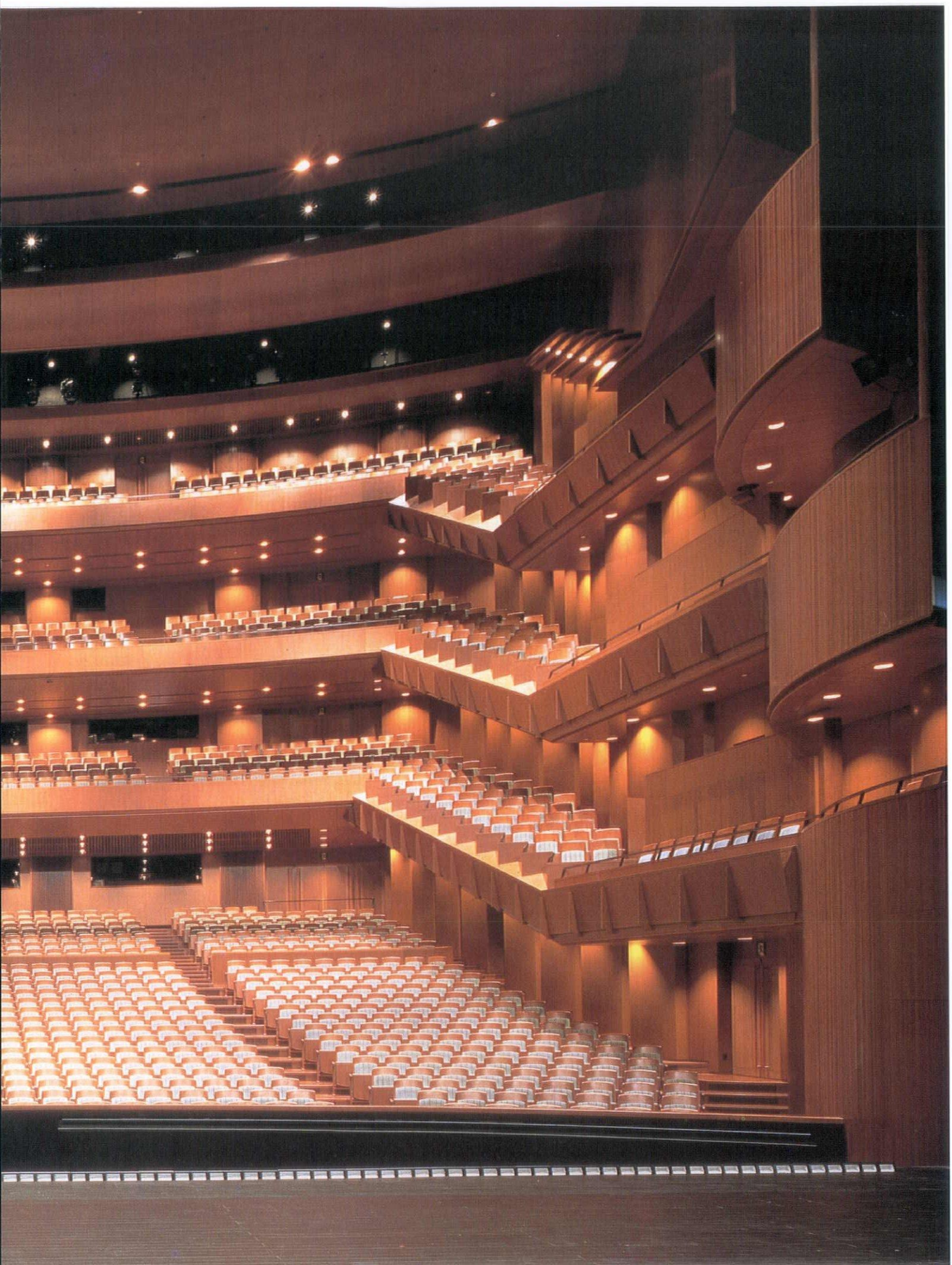














チューニングコンサート

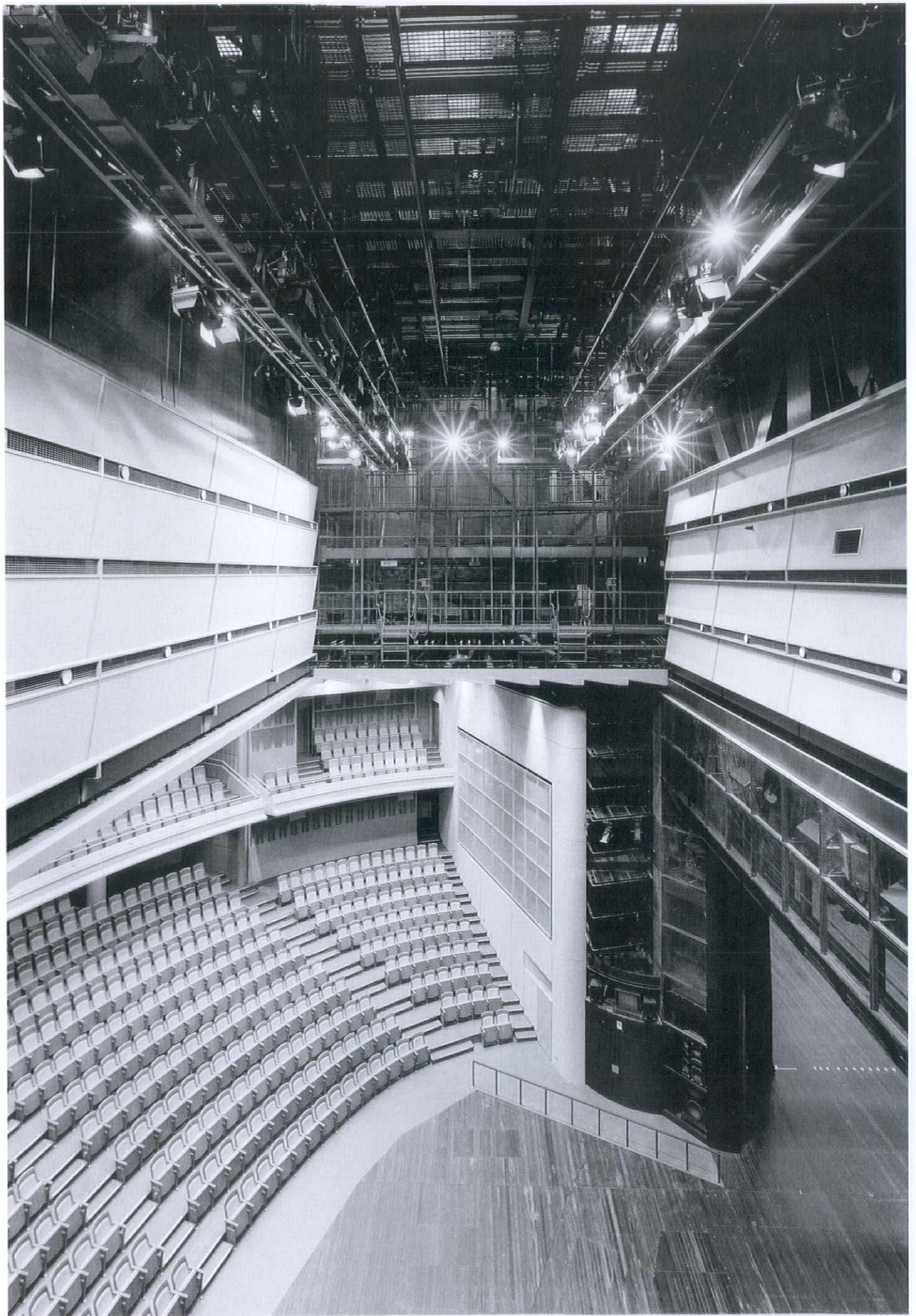


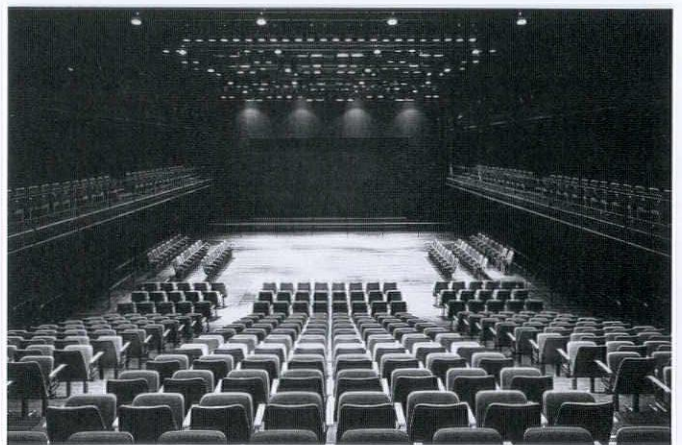
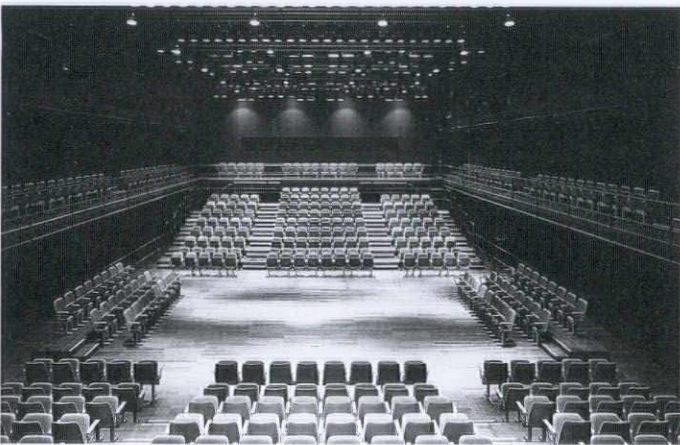
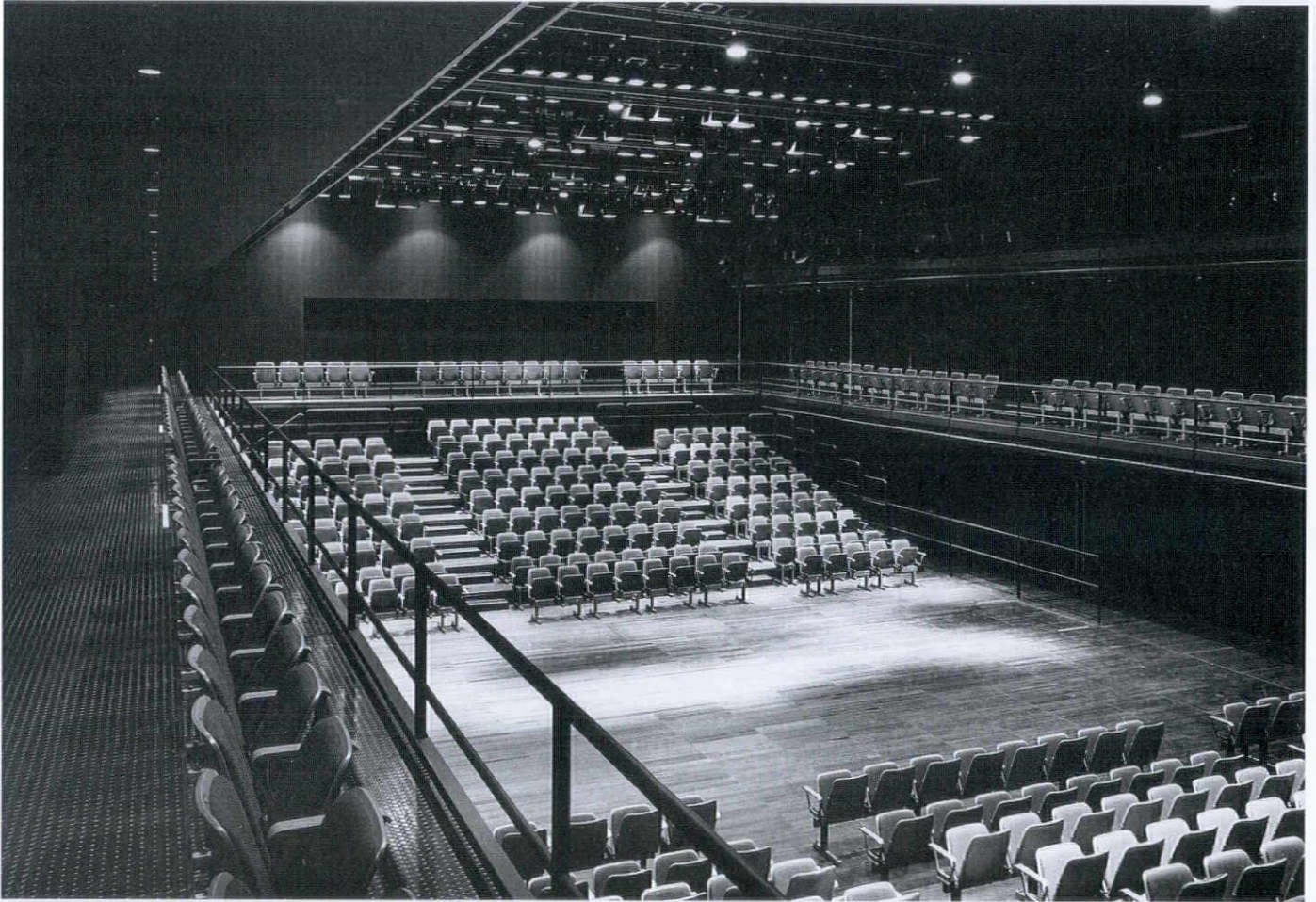


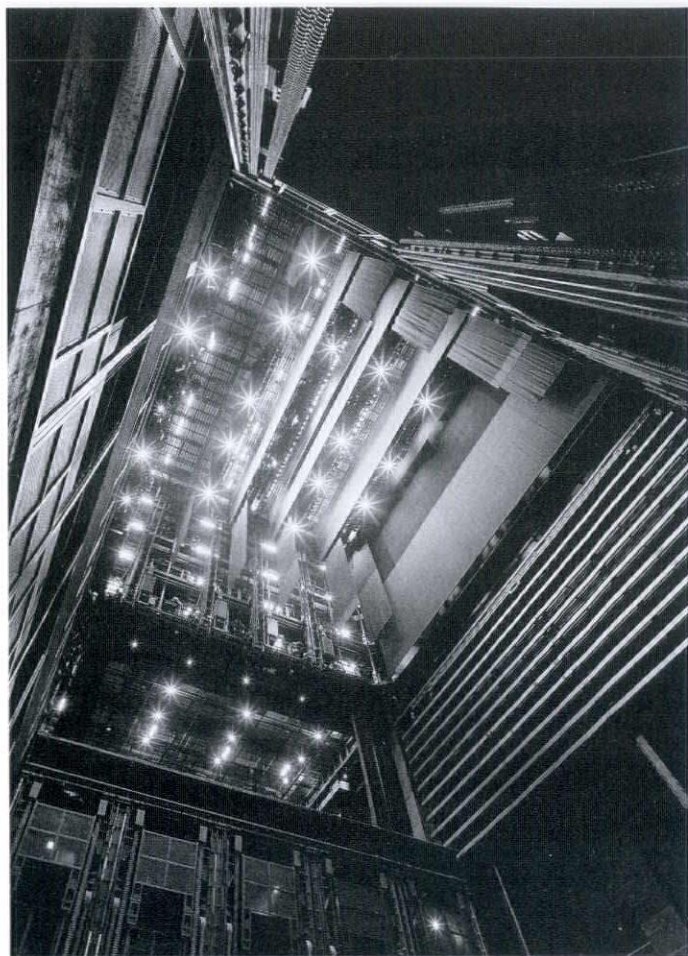




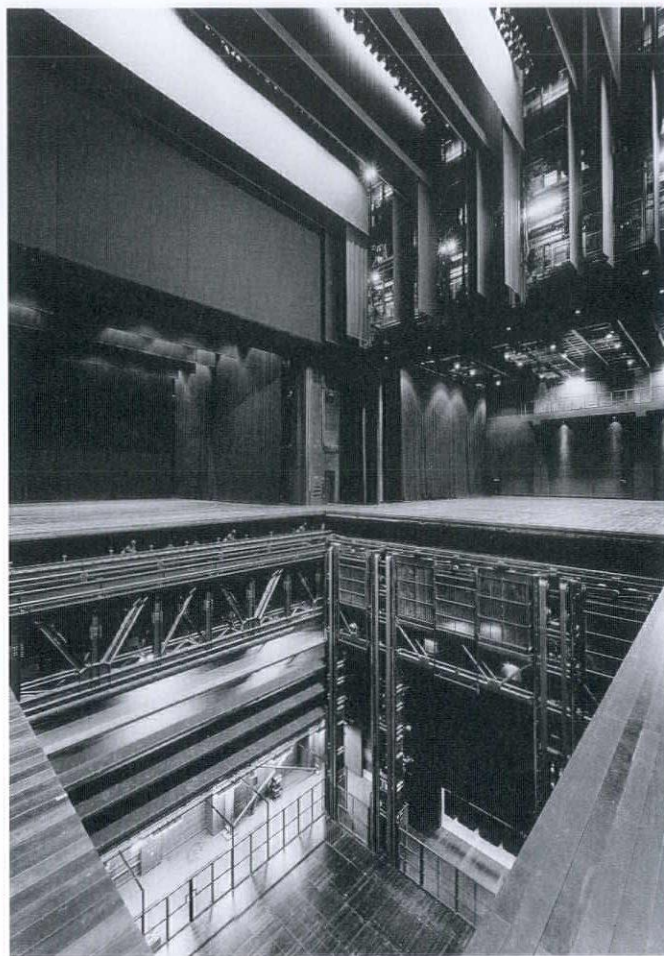
チューニングコンサート



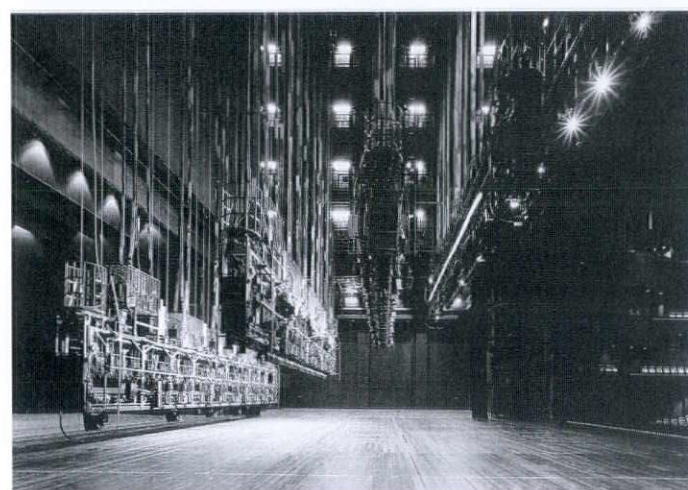




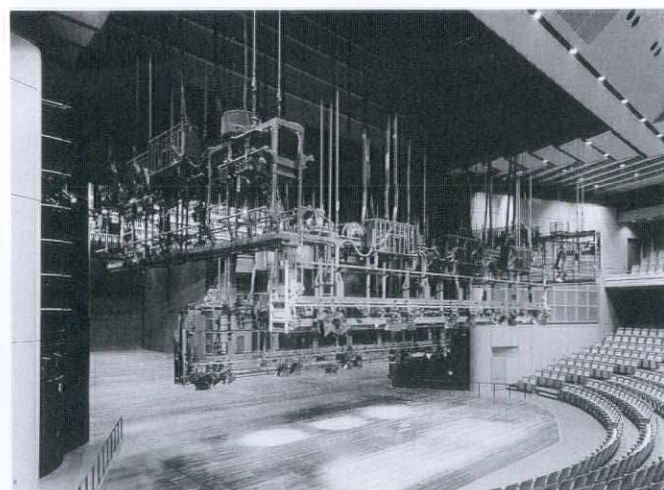
オペラ劇場奈落よりスノコを見上げる



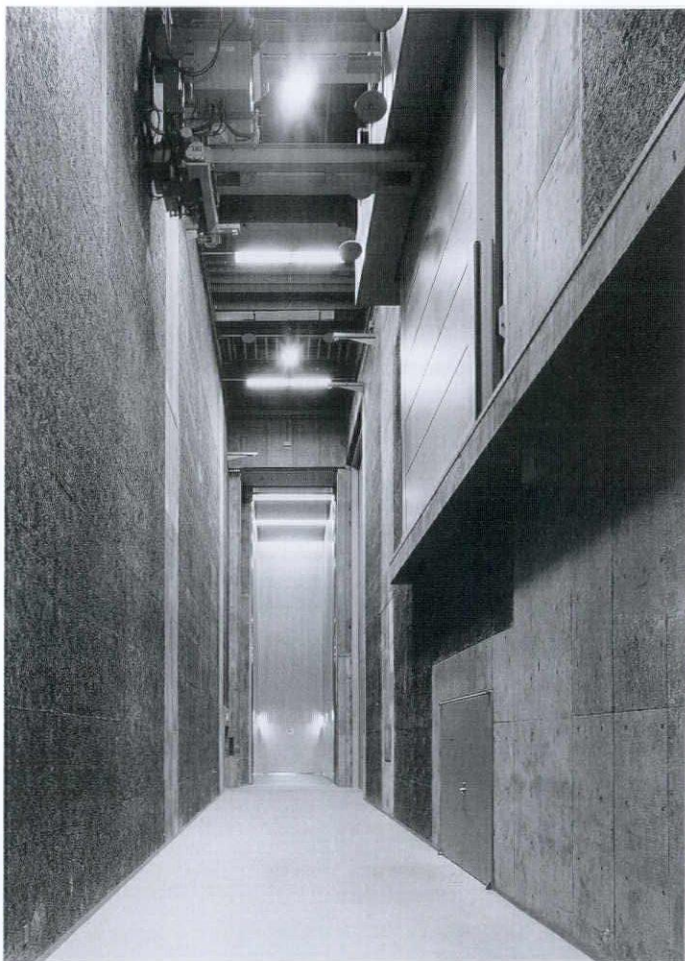
中劇場主舞台



オペラ劇場主舞台



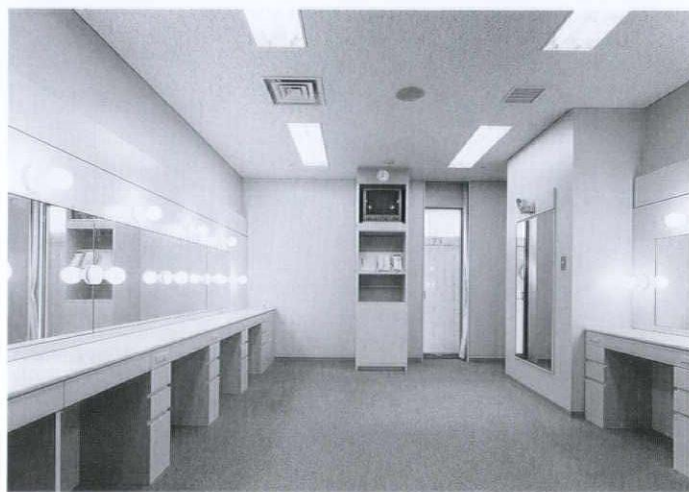
中劇場前舞台



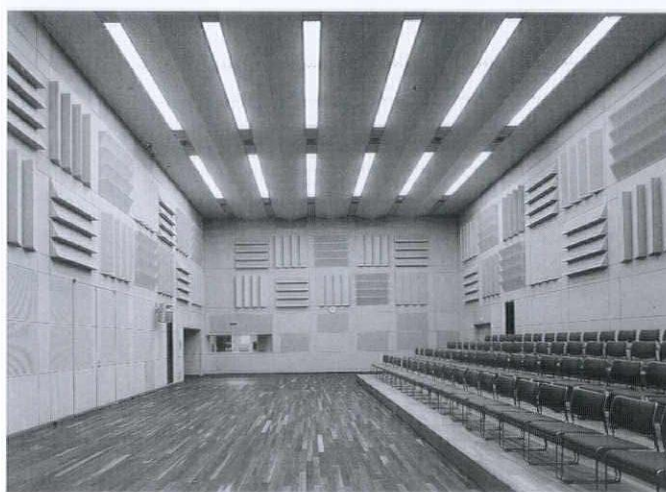
道具搬入路 (正面に見えるのは道具リフト)



オペラ劇場楽屋廊下



楽屋



オーケストラリハーサル室

小倉善明

都市は劇場であるといわれる。劇場はまた都市の建築である。都市において知らず知らずのうちに自らドラマを演じている人々が、改めてドラマを楽しむという、現実と仮想の二重性が劇場と都市とを固く結びつけている。そしてミラノのガレリアの街並みやシドニーのポートジャクソン湾の景観が、開演前の期待感や興奮冷めやらぬ気持ちをもたせるのに必要な空間であるように、劇場と都市環境は不可分である。

伝統芸能を対象とした第一国立劇場が皇居を目前とした地に建設され、オペラ、演劇を対象とした新国立劇場は、まだ成熟していない新宿の街に建設地が定められたのは対照的な敷地の選択であった。第一国立劇場の立地に異論を唱える人はいなかったし、現在では皇居前の景観としてふさわしい姿を見せている。一方、新国立劇場が新宿でどのように市民の心に刻み込まれるのかは、劇場建築という見方ばかりでなく、都市と建築という視点からも関心をもってみたい。設計者もまた、この点については心を砕いたことと考える。

コンペにより、このプロジェクトの実施案が決定された後に、隣接地に東京オペラシティの建設が決まった。この計画は、国が隣接民間地権者に対して新国立劇場と一体的に、文化的環境の整備に協力要請したことが発端となったものである。結果として、東京オペラシティはアートミュージアム、さまざまなアメニティ施設といった新国立劇場を補完する機能をもつ建築として、柳澤孝彦自らも設計に参加して実現した。彼がこの設計を新国立劇場の一部として認識して設計したことはいうまでもない。ガレリアと呼ばれる新国立劇場との間に設けられた階段状の公共空間は、音楽ホールへのアプローチとなっているが、両施設を結ぶ空間でもある。ただ、ふたつの計画のタイムラグの結果としか判断しようがないが、両施設が壁によって仕切られている事実は残念である。しかしながら、東京オペラシティはランドマークとして、劇場を訪れる人々を含めて、市民が楽しめる公共空間としての役割を大いに期待したい。

新国立劇場を見ると、設計者が内包する3つの劇場設計に力を注いだことはもちろんであるが、周辺の都市環境を正確に把握した上

で、施設を機能させるために建築と都市をどのように融合させ、あるいは遮蔽する関係をつくるかに腐心した跡がうかがえる。騒音のなかに静けさを求め、視覚的な秩序をつくり出す建築構成は、甲州街道沿いに配置された壁面によく表現されている。この壁は、その仕掛けを悟られることなく、歩道を歩く人々に建築を垣間見させ、ホワイエからは建築の奥行きを感じさせる。壁の内側の水と石の庭の持つ静けさは、劇場を訪れる人の気持ちを捉えるだろう。混在する都市環境のなかで、一瞬の間とでもいえる柳澤流の空間の精神的な表現が効果的である。観客は入口から大階段へ導かれる。この階段は、3つのホールを結ぶものであり、水の中庭から階段へ、階段からホワイエへという透明感のある空間の構成がこの建築の内部空間の特徴となっている。石と木とコンクリートという設計者の使い慣れた素材による内部空間は、控えめであるがのびやかである。特に大階段の空間と一体となってつくられた、バルコニーのついたギャラリー空間は、建築の中に街づくりの手法を見る気がする。

オペラ劇場および、中・小劇場のデザインはそれぞれの特徴を個別に表現している。オペラ劇場は、日本で初めて実現するオペラ・バレエの専用劇場として、伝統的なクロスプランの4面の舞台構成をとり、大規模な公演と多様な演出をするに十分な舞台の大きさと装置を兼ね備えている。1800席の客席は、舞台からの最大距離が、第3バルコニーの最後列までで30.7mに抑えられている。内部の壁と客席には落ち着いた色調のオーク材が用いられていて、オペラハウスとして必要な適度な暗さ感を保っている。壁面は音響効果のための形をそのままデザインとして捉えている。ポール・マランツの計画による照明効果は、観客が開演を心待ちにするにふさわしい空間となっている。建築家にとって、劇場は多くの専門家とのコラボレーションを必要とする建築であり、この計画でも音響、舞台機構、照明、アート等、多くの専門家の協力による完成度の高さが感じられる。中ホールも4面舞台をもつオーソドックスなプロセニウム形式が基本であるがオープン形式にも変換する柔軟な劇場であり、小劇場は実験劇場と

して上演する作品に合わせ自在に舞台と客席を変換し、多様な演出に対応するものである。これら3つのホールの専門的な評価はオープン後に待ちたいが、見る側ばかりでなく演ずる側にとって高いレベルの環境が創られていることは間違いない。

この新国立劇場が、オペラを中心とした演劇を楽しむ我が国の第一級の劇場として市民から愛されることはもちろん、都市環境との共存を目指して創られた建築に対して、街がどのように応えるかにも期待したい。

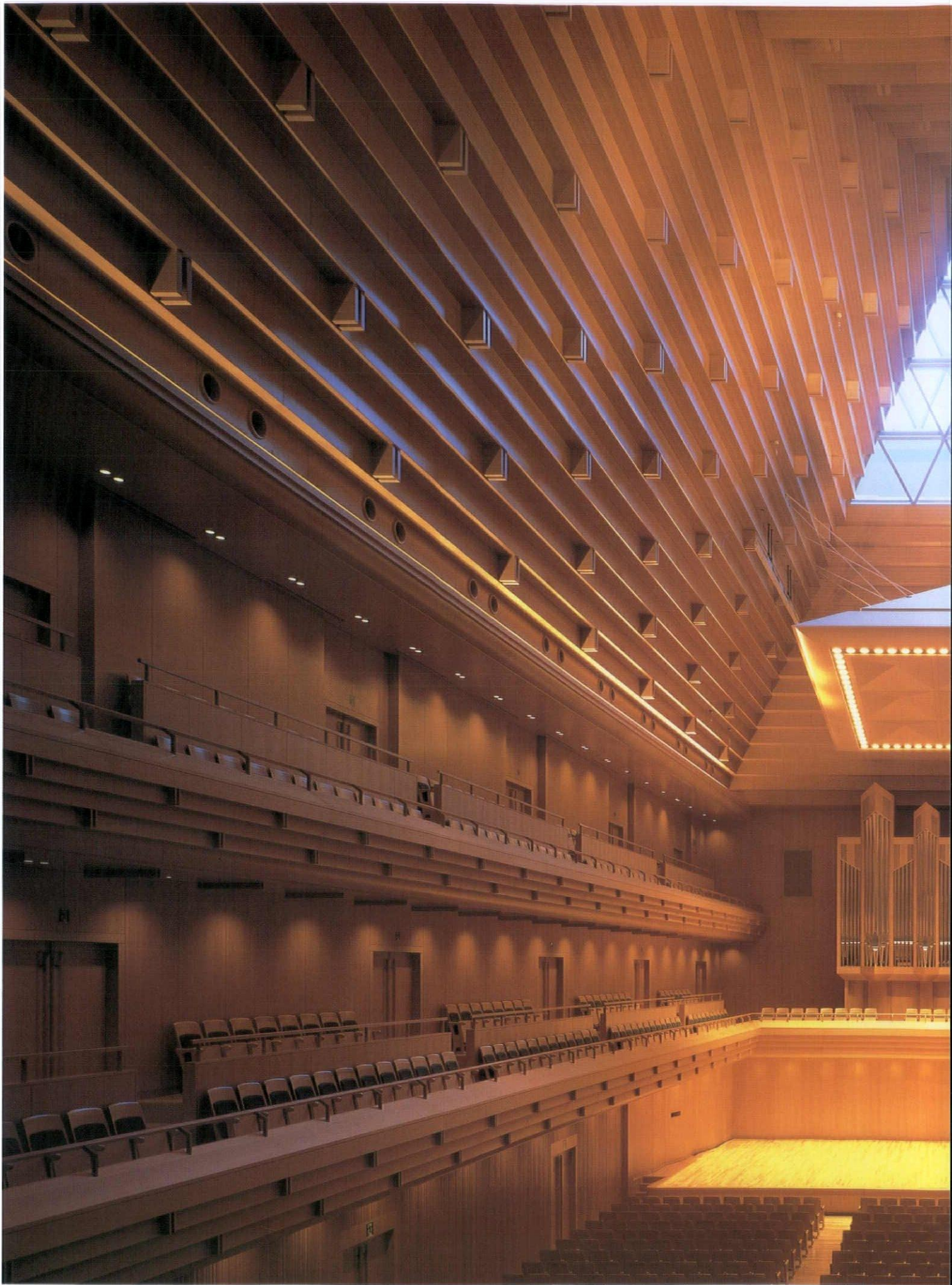
●おぐら・よしあき／建築家、日建設計

東京オペラシティビル

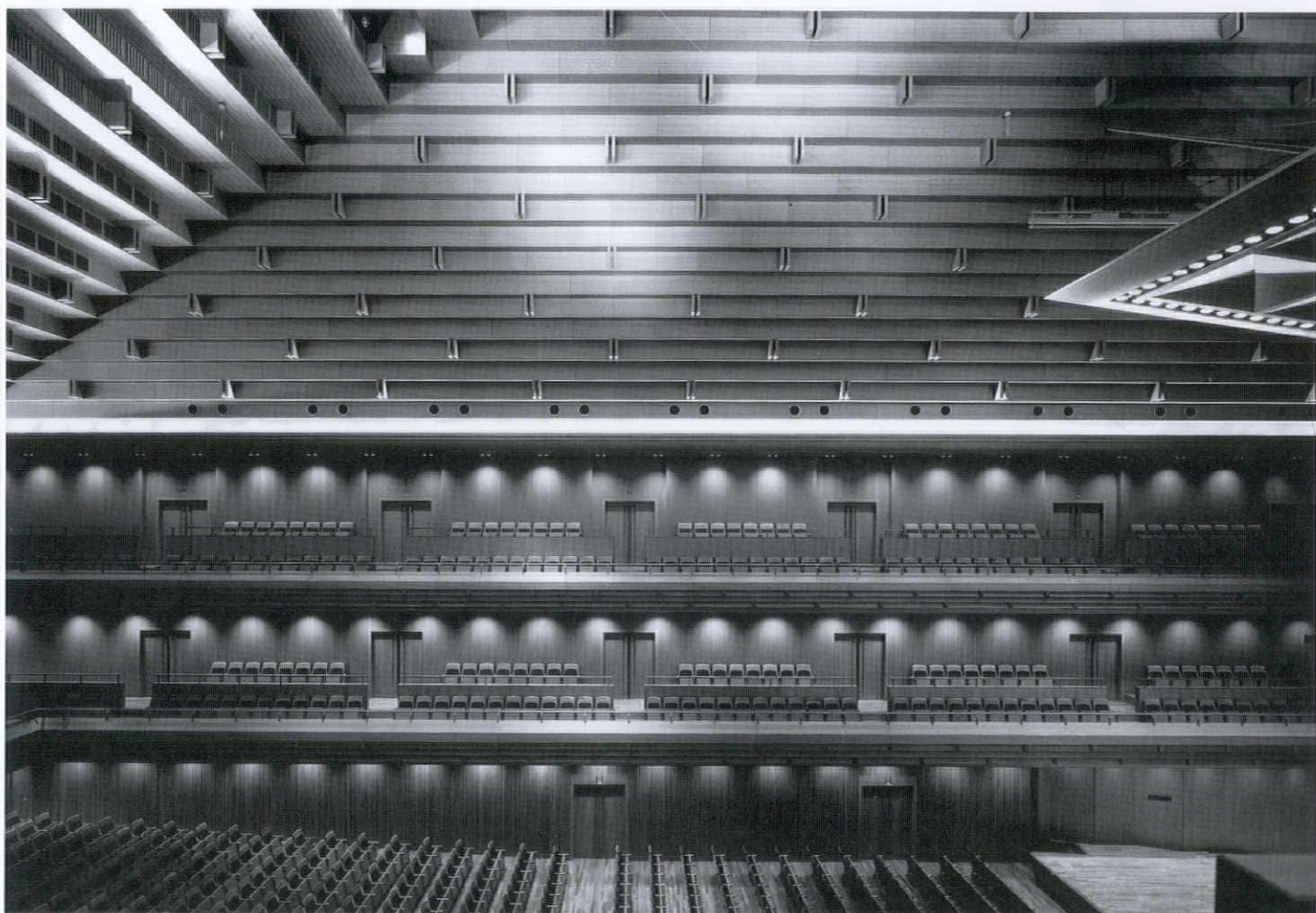
東京都新宿区西新宿 1996



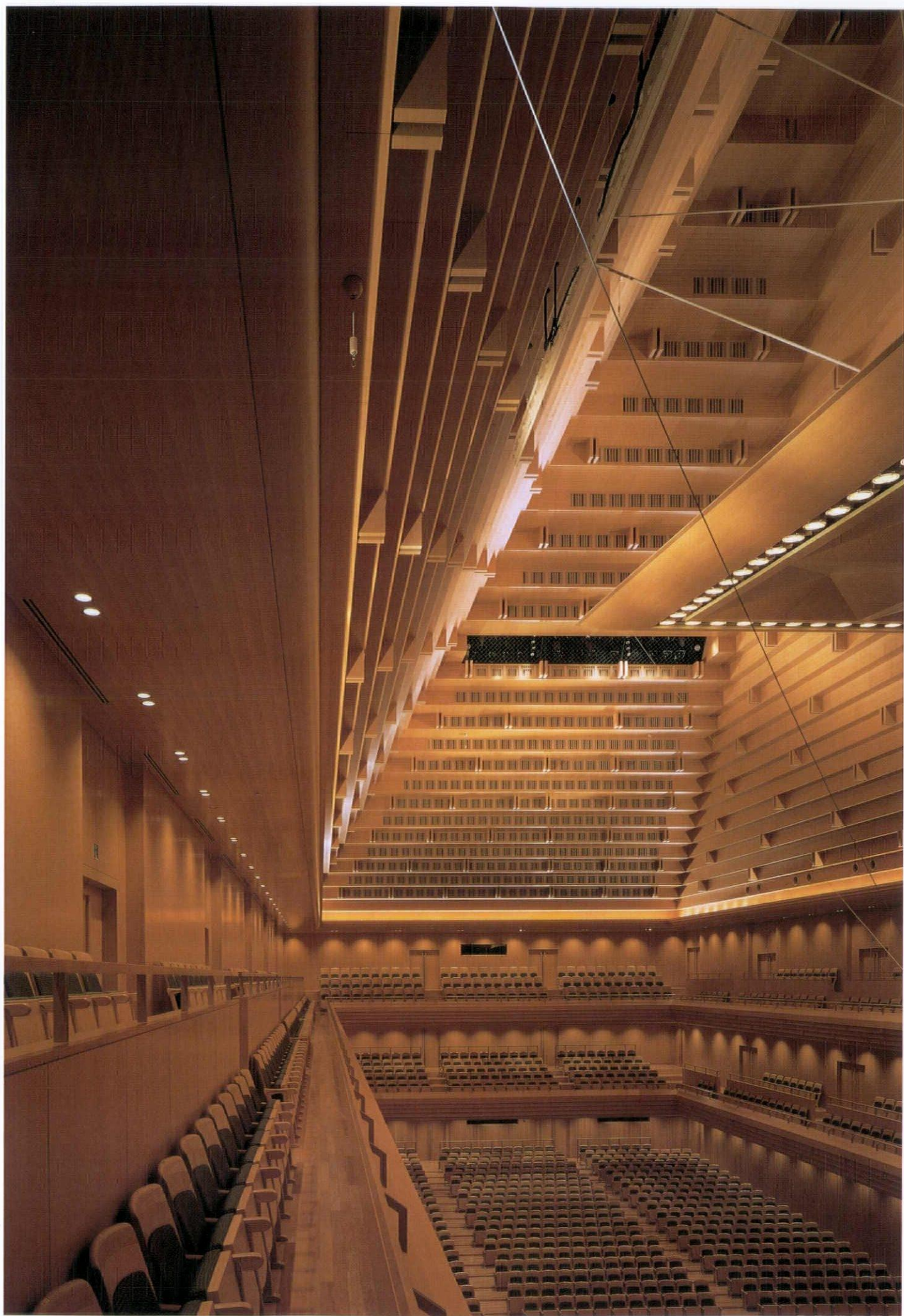














ウィーンの平面、ベルリンの断面

本杉省三

何故？

平面図を一見すると、まさにこれでもかというばかりのシューボックスを連想させる。しかし、空間としては長方形平面に変形ピラミッド型の天井を被せたものとなっている。シューボックスならそれをそのままやるのが普通なのに、何故あの平面にあの天井なのだろう。

プロポーションあるいはウィーン

それで思い出したのが、シューボックスということが設計競技時からの命題であった〈京都市コンサートホール〉である。というのも、平面のプロポーションがとても似ているように思われたからである。平面の縦横比を調べてみると、驚いたことに〈東京オペラシティ・コンサートホール〉と〈京都市コンサートホール〉は、1:2.35でほぼ一致する。どちらが先ということもないから、単純に興味深い。

コンサートホールの平面プロポーションについて考えてみると、ムジークフェラインスザールの1:2.7やハイドンザールの1:2.6が、まずひとつの典型として思い浮かぶ。ハイドンザールは、ムジークフェラインスザールが建設されるほぼ1世紀前の1761年から約30年間にわたって、ヨーゼフ・ハイドンが宮廷楽長を務めた宮廷の大広間である。今日では、彼にちなんでハイドンザールと称せられる最も初期のコンサートホールとして知られる。さて、そのハイドンが、1791/92年と1793/94年の2シーズンにわたってロンドンに招かれ、交響曲第94番「驚愕」等を作曲、発表した場所がハノーヴァースクエアルームで、その比例が1:2.35というわけである。

磯崎新は音響理論と建築理論はともにプロポーションに基づいているという仮説を元に、しかしシューボックスの古典的とも言える空間的な比例関係の中にズレを生じさせることで現代におけるコンサートホールのひとつの在り方を示した。それに対し柳澤孝彦は、コンサートホールの平面においては徹底的にシューボックスの原則に則っているように見える。磯崎が嫌ったシンメトリー性についても、ここでは疑いないくらいに明確に採用されている。こうした意味で、両コンサートホールは全く性格を異にするものとなっているが、何故か唯一平面の縦横比が見事に一致す

るのである。柳澤は、「プロポーション」という言葉をしばしば口にするし、そうしたことからこの比例関係がどこに由来するものなのか、その根拠をどのように導き出したのだろうか。ハイドンザールには客席側面に7つのニッチがあるが、オペラシティ・コンサートホールにも側面の出入口が7つある。別に謎解きをしようというわけではないが、柳澤ならば、もしかしてこれらのことについて隈無く調べているかもという気がするからだ。とにかく、平面からはまるでウィーンの音が聞こえてきそうである。

ピラミッドあるいはベルリン

ところで天井部を見上げると、というよりもどうしてもそちらに目が行ってしまうのだが、シューボックスらしい天井面でないのが、このホールの最大の驚きである。どうも僕の第一印象は、南大門をひっくり返したような感じだった。上方に行くに従って迫り出すように窄まっていくオーク突板練付板と肘木が突き出たような天井面の様子は、ただならぬ気配を感じさせてくれる。

何故、この断面なんだろう、どうしてシューボックスじゃなくてピラミッドの天井なんだろうと断面に想像を巡らしていると、ハッと気が付いた。これはもしかして、ベルリンの〈フィルハーモニーホール〉なのかも知れない。つまり、フィルハーモニーも舞台上部がホール内で最も高い断面をしており、客席後部壁面に近づくに従って天井が低くなっていく構造をしている点で一致している。舞台レベルから最頂部までの高さは、フィルハーモニーが21.5mであるのに対して、オペラシティ・コンサートホールでは27mとずっと高い。このため天井面の勾配もずっと急なために、全く別物の印象を与える。

柳澤がシューボックス平面を原点としながらも、単純にそれを空間化しなかったのは、理由があってしかるべきだろう。ちょうど、磯崎が京都でシューボックスに依りながらシューボックスをはぐらしてデザインしたのと同様に、しかし全く別の思考方法によって、柳澤はひとつの成果を見つけ出したかのように見える。それは、異質ものを再構成することへの挑戦だったかも知れない。

20世紀のコンサートホール空間を代表するベルリンの〈フィルハーモニーホール〉は、聴衆もまた演奏者とともに音楽を作る喜びを共にするという、新しい視点を開いたものであった。演奏者を取り巻いて色々な位置で、できるだけ近くで楽しむことの意味を気付かせてくれた。これによって、我が国にも〈ザ・シンフォニーホール〉、〈サントリーホール〉、〈愛知芸術文化センター・コンサートホール〉といった優れたコンサートホールが生まれてきた。これらはいずれも短辺でも30mを超える幅広の室形であるのに対し、今度の〈東京オペラシティ・コンサートホール〉は、20.5mと極端に細い。しかも、天井は最頂部で27mと、断面高さが幅よりも強調されたちょうどオペラハウスのようなプロポーションとなっており、天井高さの方が室幅方向よりも小さな横断面を持った従来のコンサートホールとは、明らかに逆の思考をしている点で興味深い。

ウィーンとベルリン

乱暴な言い方にお叱りを受けるかも知れないが、つまり、ホールの床から壁面までがムジーク・フェラインスザール型で、天井がフィルハーモニーホール型である。一見相反するそれらが、ここではまるでぶつかり合ったかのように合体していると言えないだろうか。無論、それは単純に衝突するといったものでない。音楽空間として、極めて周到に計算され尽くした結果に違いない。異なったコンサートホールのスタイルがひとつの中に折り合うことで、もうひとつ別の新しいコンサートホール空間の在り方がここで具体化されたいと考えることができる。

期待感を持って述べれば、ピアノシモからフォルテシモまで美しい豊かな響きとブレンド感のあるウィーンの音と、ベルリンにおけるシャープさや透明感、ライブ感といった特徴が、ここ〈東京オペラシティ・コンサートホール〉で調和することを願っている。そして、これが東京の音だというような音楽を創り出す、そんな活動の場になってくれば、聴衆のひとりとして幸せだ。（敬称略）

●もとすぎ・しょうぞう／日本大学理工学部助教授

身体性から劇場を語る

新国立劇場の設計コンセプトを中心に

川向正人×柳澤孝彦

根源的な出会いの場としての文化施設

川向 1986年の国際コンペから10年、今年の2月に新国立劇場がついに完成し、現在は今秋の柿落しに向けて、言葉通り最後の調整段階に入っています。柳澤さんはその国際コンペに勝って、それをきっかけに竹中から独立してTAK建築・都市計画研究所を創設されたから、TAKそのものが創立10周年を迎えたことになりますね。おめでとうございます。

この10年を振り返ると、次々に話題作を発表して、本当に走り続けた10年だったのではないかと思います。仕事の内容はほぼ文化施設にまともめられるようですね。そしてそのなかで、一つは美術館・博物館などのミュージアム、そしてもう一つはコンサートホールなども含む劇場建築という具合に、二分することができるのではないのでしょうか。

前者のミュージアム建築については、本誌でもすでに特集が組まれ、また私も一度柳澤さんと対談する機会がありました。そこで今日は、後者の劇場というテーマでお話をうかがいたいと思います。

広い意味で「機能」を大切にする建築家というのが私が抱く柳澤さんの印象で、文化施設についても、「文化施設とは、かくかくしかじかの働きをする場である」ということをはっきりおっしゃいますね。

柳澤 確かに私自身、ミュージアムにせよ劇場にせよ、それが文化施設であるということ強く意識してまいりましたけれども、文化施設では、本当の意味で、人と人が根源的なところで立ち向かい、心の交歓をする場にほかなりません。そしてそれが根源的である程にその場の形成が瞬間のうちに濃密化されるものです。このような原理を働かせるのが文化施設だと思ってきました。美術館であれ劇場であれ、根本は同じである、というふうにこの頃考えているのです。

劇場では、そこはまさに舞台の上で生身の人間が発する人間に関する情報を、観客席にいる生身の人間が受け取るという、まったく直接的に心の交歓が行なわれる場です。美術館も、作家という生身の人間の分身である作品と、生身の鑑賞者が、そこで直接的に交歓するという意味では同じです。

つまり、五感をめぐらす身体から発する人

間の力が相手の身体性すなわち五感をゆさぶるといった触覚的とでもいえる身体感覚の直接的な交流の場です。そこは、時間・空間に対する行為という外から眺めるといったものではなくて、時間・空間のその世界の只中に入り込んだ行為の実に濃密な場なのです。文化施設の設計は、かような濃密な世界を発展させる空間性をデザインすることだと考えています。

川向 新国立劇場の大ホールは、私もチューニングコンサートにお招きいただいて、透明度の高いすばらしい音を響かせているという印象をもちました。あのホールもまた、一方に歌う者と楽器を奏でる者、そして他方に聴く者、その双方が「直接的に交歓する」「非常に濃密な空間」だというわけですね。

あの音に、柳澤さんの「生身の人間と人間の交歓」という思いが込められているというただ今のお話は、分かるような気がします。単に「音を聴く」「音楽を楽しむ」場を技術的につくり出すとは根本的に違う何かがあります。

柳澤 さらにまたその世界は、時間的、空間的限定が濃密さを際立ててくるものです。またとなないその場の瞬間性が人の五感をするどくそばだてて、そこはもう異界ともいえる世界へ入り込むのです。空間的にも、一つの世界をかこい取ってしまうある種のフレーミングがその場の情景を際立てるものだと考えています。日本の伝統的な建築作法には、巧みな限定が、切り取られた情景を際立てるとともにそこにある種の劇場性を見事に立ち上げて見せています。居合わせる人を主役にする舞台がそこに用意されているのです。

「機能」を突き詰め、「交歓の場」へ

川向 最近の文化施設の傾向として複合化が挙げられると思うんですが、あれもこれも求めた結果、複合化されるどの機能も十分に満たされていないという不満が、私たちの間に少しずつ溜りつつある。その中であって、柳澤さんは、先程ちょっと申し上げましたが、「機能の充足」という課題にオーソドックスに、かつ柔軟に取り組んでこられたのでは。

柳澤 私にとって機能の充足という場合は、いかに濃密な世界を立ち上げることができる

かという、その場の密度が尺度になります。したがって単にピクチュアレスな建築といったものではなくて、その場の状況とともにある時空間の情景を想い描いているのです。すなわち触覚的な空間とでもいうような五感がいきいきと流通するものでありたいと思っています。コンサートホールであれば、ステージ上の人の力をなんの損傷もなく受け取る側に伝えることとともに、ステージ上の創造者の力を最大限に引き出すことをも含めた基本的機能を充足させねばなりません。そのためには、客席から見える部分だけに意を用いる傾向にある劇場設計を、むしろ出演者の側すなわち舞台裏からの空間機能に設計の意を注ぐ方向に変える必要があると思います。新国立劇場はむしろ舞台の裏から表へと設計の意を向けた感もあります。

最近、機能という言葉の意味が希薄化していませんか。劇場を成立させる原理が見落とされているのは劇場になりません。

私はまた空間の「劇場性」とでもいうものにも興味があります。演奏とか作品は舞台上や展示壁の上に独立して存在するのではなくて、鑑賞する人との交歓を通して、はじめてその価値がその時々で成立するという考え方です。むしろ、芸術的交歓の場そのものが作品の価値を有しているという考え方で、これは劇場だけではなく美術館にも当てはまりますし、交歓の場への着目は、より広く「劇場性」を求める動きとも重なっています。こうして、私の思考は再び交歓の場というものに立ち返るわけですが、たとえば、美術館の設計でも空間に「劇場性」を求めるとすれば、その場の時空間としての情景を想い描くことになるのです。

この意味で、芸術作品というものの定義とも絡んで、機能という定義の広さや深さに留意する必要があります。

空間構成によって身体に働きかける

川向 それは、具体的には、どのような空間になっていくのでしょうか。

柳澤 劇場では聴覚や視覚が重要な働きをしますが、それらがいきいきと働くには、その背後に五感を動員したとぎすまされた感応の世界が広がっていることが肝要だと考えます。



川向正人

(かわむかい・まさと)

1950年生まれ。東京理科大学理工学部助教授・建築史家。1974年東京大学建築学科卒業、同大学院進学。1977～79年ウィーン留学。専攻は、近現代建築史・建築論。著書に『アドルフ・ロース』『住まいの図書出版局』、『ウィーンの都市と建築』（丸善）、『風土・地域・身体と建築思考』（日刊建設通信新聞社）など。訳書に、V.M.ラムブニャーニ『現代建築の潮流』（鹿島出版会）などがある。

その一つの感覚にコンセントレイトするために、五感が整備されている必要がある。バックアップする状況を整えることです。

つまり、見るということのためには、それ以外の感覚が、身体性として見させる状況をつくっているわけです。すなわちある感覚に集中するにはそれ以外の感覚に対して身体的に安心な状態をつくらねばならないと私は考えています。そのためには、感覚相互が適度な緊張の中に調和をつくる必要があります。そしてそのような状態は、建築の空間デザインの中にいかに限定を意味づけて、異界を開いとるにかかっていると思います。

川向 感覚が鋭く作用したり、身体性として安心していられる状況というのが、柳澤さんの空間と建築の構成における重要なポイントのようだというのは、私も感じていたところですが、都市の、あるいは日常の喧騒の場から離れ、そのような状況に至るまでに、必ず「渡りの空間」のようなものが用意されていますね。

柳澤 劇場の舞台空間は非日常の空間にちがいませんが、客席もまた舞台と時空を共有する異界だと言えます。あるいは劇場は、日常と非日常の狭間にあるものとも言えます。それは互いにその一方を際立て合っているという関係にあると思うからです。その意味で、日常から非日常へのシークエンスをどのようにデザインするかが重要となります。私がプロムナードに特別な意を向けるのもそのためです。すなわち日常的な状態を身体的経験を通じて非日常へと向かわせる道程です。そのためには五感を動員する時空間の変化が必要で、長い距離の移動の中に、視点の変化がもたらす視界の展開、階段によるステップの触感があり、風、光、音が情景を変えます。とりわけ風や光は自然の力として情景の変化を際立てます。それは常なる変化を寄せてくる自然の力に、瞬間が生み出す「生きた時間」を発見するからです。かような自然のリズムに身体性が同調する時、五感が互いにある緊張を保つのでしょうか。そしてまた人工照明が、建築に異界を際立てる格好な道具立てになります。

川向 確かに、美術館ならばメインの展示空

間に、劇場ならばオーデトリウムに到達する時に、柳澤さんの建築では、かなり長いプロムナード、ゆったりした階段、吹抜け空間を一回りするような回廊などが用意されています。身体を移動させながら、心と感覚の準備をする空間ということになりますね。

柳澤 そうです。身体の運動として、長大な空間の中を移動したり、階段によって身体を上方にもち上げ、さらに視線を方向転換したりしますが、その身体運動が心に作用し、心を動かすことを期待しているのです。同じ移動でも、水平よりも垂直方向の移動のほうが、受けるインパクトは強いように思います。新国立劇場でも大階段を試みっていますが、すでにバロック建築が着目していたように、階段はその上下の移動が異界への期待感を高める重要な装置だと捉えています。一段一段とステップを踏む時間の経過が身体に刻み込まれて、次なる世界への期待を増幅するでしょう。

素材、特に木という素材

川向 その場合、素材はどのような役割を果たすのですか。柳澤さんは、石、ガラス、木のような素材を、あらゆる場所に徹底して使う傾向があるようですが。

柳澤 素材の力を借りなければ、決して空間に力が出ないだろうと思うんです。形の力だけではそんなに強くなくて、むしろ、そこに構成されていく材料の力、素材の力が大きいと考えています。そして、素材はむしろ空間をある意味で限定するものともいえます。空間を開いとる道具です。したがって素材には空間を立ち上げるための力が必要なのです。その力が人間の五感に働きかけるのです。コンクリートは構造体の力の重みを表現していますし、木造部分は人間の皮膚と筋肉の力とも言えましょうか。

川向 私がじっくり拝見し、その音響効果まで確かめることができた新国立劇場の大ホールでは、その内部は全面オーク材を使っておられました。本当に何から何まで。

柳澤 あたかも森の中に分け入ったような、一種の異界をつくらうとの意図です。異界を開いとるために身ぐるみ木で覆いつくそうと考えました。その自然の風合いはまた、圧迫感を感じさせない適度な緊張をもたらずに違

いないと考えていました。それはきっと、聴覚をそばだてる背景として応分の力を発揮しているものと思っています。

川向 壁面・天井・床、そのあらゆるものを全部木で仕上げる徹底ぶりですが、やはり音響的效果にも直結しているのでしょうか。

柳澤 物理的に考えても、確かに、木は音にやさしく、目にもやさしい。音の質を決める音響効果は最適です。

異界を予感させる石庭のただならぬ気配

川向 日常から非日常の世界へ、柳澤さんの表現を借りれば「異界」へと入っていく、そんなことを予感させ、「これは、ただごとではない」と無意識に緊張するような巨大な石を使った石庭も、新国立劇場の導入空間に用意されています。この種の石庭は、窪田空穂記念館、郡山市立美術館、東京都現代美術館にもありました。あの石庭は、あたかも荒海や険しい山を越えて、非日常の、アートの空間、すなわち異界に分け入るようで、そんな予感に思わず脊を正す、厳しい雰囲気を感じ出しています。

柳澤 あの石庭も、水とともに自然の力を示します。自然の力には、人々を平常な存在に安住させるものがあります。しかし反面には、その巧まざる美しさや思わぬ表情の中に私たちに非日常の顔を向けてもくる。そのように自然の力は、日常と非日常の狭間で人々の心を動かし、二つの世界を行き来するのです。

川向 それにしても、石庭、そして一つひとつの石が、畏怖と申しますか畏敬と申しますか、何か神的なものを感じさせる、そんな感情を私たちの内部に呼び覚ますような姿とスケールを見せています。あのような石庭も、異界に向かう心とか感覚の準備を促すものの一つであることは理解できるのですが、なぜ巨石と水面なのですか。

柳澤 重力の申し子だからです。石の重みは垂直の力を感じさせます。そして水が広く面をひろげるのも重力（引力）の仕業にほかなりません。これが、水平の力の人々に感じさせていると私は考えているのです。そしてそれらの自然の力には思わぬ表情を潜めているので、石に造形の妙や波立つ水の様相は時に異界を垣間みせるのです。そして石と水の広



柳澤孝彦

がりはまた、大地を現します。建築とそれが立脚する大地との力関係を明確にしたいとも考えているからです。大地は、建築の周辺を超えてその建築がたつ都市へと続くものでもあります。その連続性をも現したいと考えています。

都市に「劇場性」の波及効果を

川向 そして、日常の生活空間では出会うことのないようなあの巨石と水で構成された静謐な空間は、背後にある劇場に対してのみならず、表の都市空間に向かって開くことによって都市に働きかけ、表通りを過ぎ行く人をも、柳澤さんのおっしゃる「交歓」とか「劇場性」に観客として参加させる力をもっています。とくに夜は、巨石の黒々とした存在と水面に映る照明が生む凄味のあるコントラストが、あの石庭そのものを、さながら一つの舞台空間に仕立て上げているようにも感じました。

柳澤 新国立劇場が都市を観客席とした舞台であるよう仕立てたいと考えてきました。都市を引き込んだ構えをつくりたいと思い、連続する大地をその基盤として、建築と都市が大きくかみ合うダイナミックな空間が、プロムナードの特徴となるようにデザインしました。共通ロビーの大階段も「坂のある街」を建築の中へ引き込もうとの意図によるものです。都市のスケールを引き込んだダイナミックな空間構成や、坂の街のごとく刻々と視点を変える高さの変化を持つ空間性が、上下する身体運動を伴って、情景の常なる変化を呼び起こし、日常を超えた世界への期待を高めようと意図したのです。これは一方では都市に開いた構えでもあって、道行く人々が光を砕く波間にホワイエのにぎわいを映し見ることもできるのです。

川向 むしろ劇場全体として、都市に対して閉じずに、都市の「劇場性」を増幅するような存在を目指しているということですね。

柳澤 そう考えました。パリのガルニエのオペラ座は、立面が閉鎖的で非日常の世界は建築の中に隠蔽されている。都市の広場とは強い空間的な連携をもっていないのですが、私は都市に参加させた「劇場性」に発展させようと考えました。

例えばドイツのゲルゼンキルヘンのオペラハウスは、ヨーロッパの劇場がどこでもそうであるように広場に面して建っています。広場側のファサードは全面ガラス張り、劇場のにぎわいが、広場を観客とする舞台のごとく、くっきりと見通せるのです。広場の人々が、スクリーンに映る映画を見ているかのような、視覚の直接的な交流が印象的でした。

「見る－見られる」という関係が可逆的な原理を持つものが劇場だとすれば、これは都市劇場ということができます。

どこをとっても劇場である

川向 もともと、ひとつの建築類型として劇場建築が形式化される前は、「劇場性」なるものは、都市の中でもっと多様な発生の仕方をしていってほしいですね。日本は日本で「劇場性」を発生させる特有の方法を育んでいたように思うけれども、やはりヨーロッパの大都市は、何気ない一角ですら、すぐれた舞台になる空間性のようなものを備えています。

柳澤 そうです。都市が劇場の機能を分有しているのです。それが都市に祝祭性を発揮して、劇場都市ともいえる例えばイタリアの広場や街並みなどをつくりあげています。そして、都市の中のどこもが舞台のようなヨーロッパの街を想い浮かべながら、新国立劇場のここかしこが舞台になりうる空間のネットワークを構成しようと考えました。その意味で新国立劇場の石庭にしても、私は、あそこを舞台にすることもイメージしています。池のところで1幕が始まる、観客は回廊にいる。2幕は共通ロビーで、観客は上のギャラリーのバルコニーに、そして終幕の3幕でようやくホールの中に入って、本来の舞台と観客との関係に戻る、という具合にです。どこでも「見る－見られる」の関係が生まれ、どこをとっても劇場である。それが劇場建築というものでしょうか。

観客同士の無意識の連帯というのもとても大切に、その多元的な関係があって初めて、劇場空間というものが成立します。ホワイエ、共通ロビー、プロムナード、あるいはカフェとかレストランなども、観客同士がフェイス・トゥ・フェイスで直接的に心の交歓を行なう場として第二、第三の劇場空間として非

常に大切な空間だと思います。

そして、これをどんどん発展させると、都市に広がっていく。ベネチアとか、その他のイタリアの小都市も、パリも、都市そのものが劇場の機能を分有している。

施主も、ときには専門家も、ホールのみに注目する。しかし、ホールのみではなく、それに付随する空間の展開が豊かであるかが劇場建築にとって極めて重要だと感じています。

川向 美術館も劇場も、意味付けがないままに単純にコスト削減という理由で、サポートシステムがすっかり切られてしまう例は本当に多いですね。

柳澤 劇場はとくにそうだと思うんです。舞台裏と呼ばれる空間から主役が出入りするわけですから、裏という表現では非常にまずくて、あれは表なんです。それを垣間見るのが、裏の観客席であると考えた方がいいかもしれません。

たとえば、新国立劇場では、4面舞台だけで観客席の3倍くらいの面積を占めている。そしてその舞台にしても、観客はプロセニウムの枠の中に1場面だけを見ている。実際は、劇場性の本質は裏の奥深いところから生まれているのです。

シアターツアーというのがありますが、私は、必ず裏まで、しかも奈落の底まで案内するように要請しています。劇場とはそういうものだということを、一般の人々にしっかり理解してほしいのです。

川向 ヨーロッパのオペラ座は大体そうで、とにかく舞台裏が大きく広いですね。

柳澤 大きいですよ。それこそ、オペラ座の怪人が住む地下室があるわけですから。

日常性に根ざし、文化を育てる劇場に

川向 世界の超一流と肩を並べるものができたということでしょうか。

柳澤 新国立劇場の機能構成とその規模は、世界と肩を並べる充実度だと言えます。3つの劇場のコンプレックスとして68,000㎡にも及ぶ劇場舞台の集約した施設は、世界にも例を見ないと思います。

これを正当にうまく使うことが重要だと思っています。そういう意味で、いつも言うの

ですが、これから始まる建築の命を建築家は準備したにすぎなくて、これから本当の命が時間を刻み始めるのです。この出発点がとても大事で、その空間をすべて知り尽くしている者として、多少とも運営の初速度に貢献する力を発揮できないかと考えているのです。

たとえば、公共施設の竣工時には一般市民の見学会を必ずやって、建築家がどうやって設計したかを説明するくらいのことはできないか。一般市民の関心を建物に直結させる手立ては、ほかにもいくらかでも考えられると思いますが、建築が社会に理解される一步になることを願っているのです。建築が社会の中に理解される一步に参加したいと願っているのです。

新国立劇場の場合、私は、椅子については寄付してもらってはどうかと提案していたんです。寄付者の名前を脇に書く。お祖父さんが寄付した椅子に孫が座ってオペラを見る。そういうことをして初めて、国民がつくる劇場という意識も育ってくるのではないかと、と。残念ながら聞く耳をもってくれなかった。

川向 出し物がなくても、建築だけを楽しむために、都市施設として劇場建築が使われることがあっていい。そしてむしろ日常生活の中で、劇場にあるいは「劇場性」なるものに親しんでおいてもらって、出し物があるときには、観客として、異界としてのホール内で意識や感覚を100パーセント集中してもらうということが、劇場の管理運営方針として常日頃から考えられていてもいいはずですね。

柳澤 そうあるべきだと思いますね。新国立劇場でも、極力オープンな関係をデザインしたつもりです。たとえば、切符を買わなくても共通ロビーには誰でも来れるし、上のギャラリーは誰でも見れるわけですから、あの空間性を一般の方が楽しみ、演出してくれることを願いたいと思いますね。

管理運営が拒絶したら駄目で、そういうことを促すようなものであるべきだと考えています。

その点は、外国人はうまいですよ。スペイン階段に座っている人を見ても、あたかも

主役のように振る舞って絵になるわけです。そういう生活そのものを、日本人は発展させていく必要があるだろうと思います。

劇場だけではなく美術館でもそうですが、クロークに荷物やコートを預けるとか、雑談したり飲食する場所を選ぶといった基本的なマナーができていないと、そういう絵になる振る舞いもなかなか育ってこないのですが、この種の文化を先導するという意識も、運営者にはもってほしい。

先日チューニングコンサートの時にがっかりしたのは、ロビーの脇でお弁当を食べているんですよ。それが現状で、いくらいい演目で、そういったものを何十、何百見たと言ったところで、まだ文化の本質とはかけ離れたところにいるんじゃないかと思いました。

川向 日本の伝統芸能には、幕間にちよいとお弁当を広げるというのがありますからねえ。あるいは、芝居を見るのに、主催者側がわざわざ弁当を出すという例もある。

柳澤 西洋でも、かつては舞台なんて二の次で、会食しながら談笑しながらの社交が優先する時代がありましたね。しかし、感動やときめき、直接的な心の交流、人の力というものの出会い、そういったものがますますスポイルされる現代社会においては、劇場の意味は、食べたり飲んだりするのとは違うところに求めたい。そう深刻になる必要はないのかもしれませんが、美術館もそうですが、私としては「場所の意味」を深めていく方向を目指したいのです。

管理運営する係の人、外から訪れる一般市民、そういった普通の人々が主役になったり脇役になったり、うまく振る舞ってくれることで、ホールの内でも外でも、あらゆるところが劇場空間になっていく。それは、人間の本来の存在を見出すことであり「場所の意味」を深めることでもある。私が設計を通して期待したことは、まさにこの点なんです。

川向 結局、多様な文化の本質を見分けることも含めて、「文化を身につける」と申しますか、「身についた文化」と申しますか、そういうものが大切なわけですね。最後は普通の人々としての日本人の文化性が問われてくる。これは言葉で言うのは簡単で、これまで

もいろいろな人が言ってきました。しかし、都市との接し方からホール内部、舞台裏まで、あるいは具体的な素材選びから空間構成にまで、それを一貫して具体化していくこと、いや、その問題意識をもち続けること自体が、生易しいことではありません。今日のお話でも、「身体に働きかけ、感覚や意識を導く」ということを繰り返しおっしゃったことが強く印象に残りました。

そしてもうひとつ、新国立劇場を語りながら、国家様式とか「日本的なもの」については一切触れませんでした。逆に国際社会の中での、まだまだ育成する余地をたくさん残した日本人の文化性なるものに対する柳澤さん特有の捉え方と解答の出し方が、よく見えてきたように感じました。

長時間にわたっての貴重なお話、本当にありがとうございました。

(1997年4月14日 於：TAK建築・都市計画研究所)

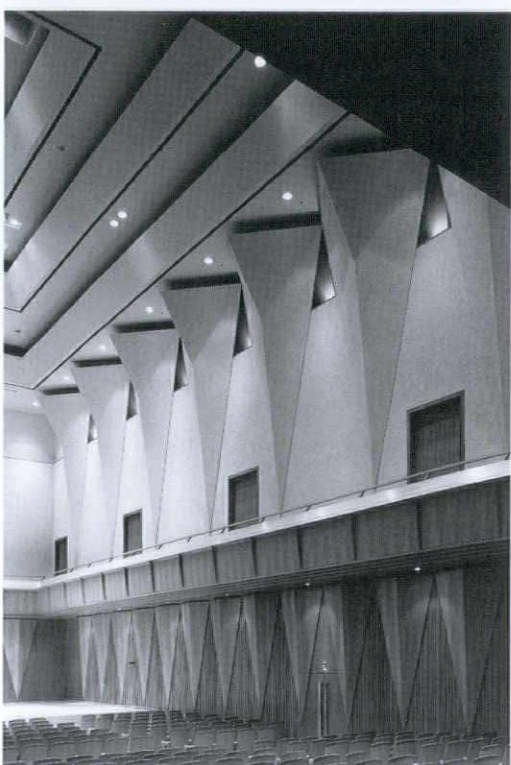
三鷹市芸術文化センター

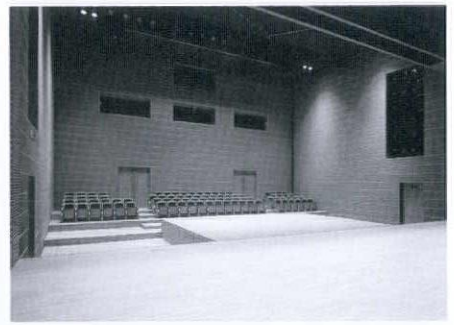
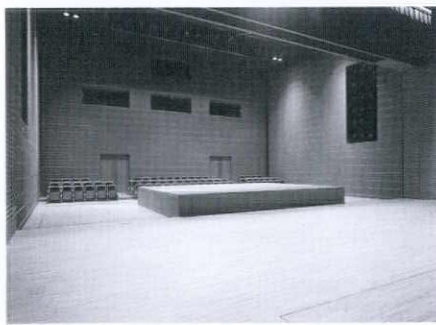
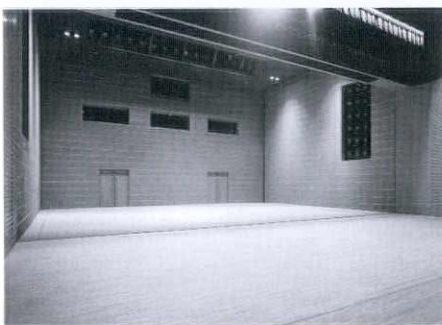
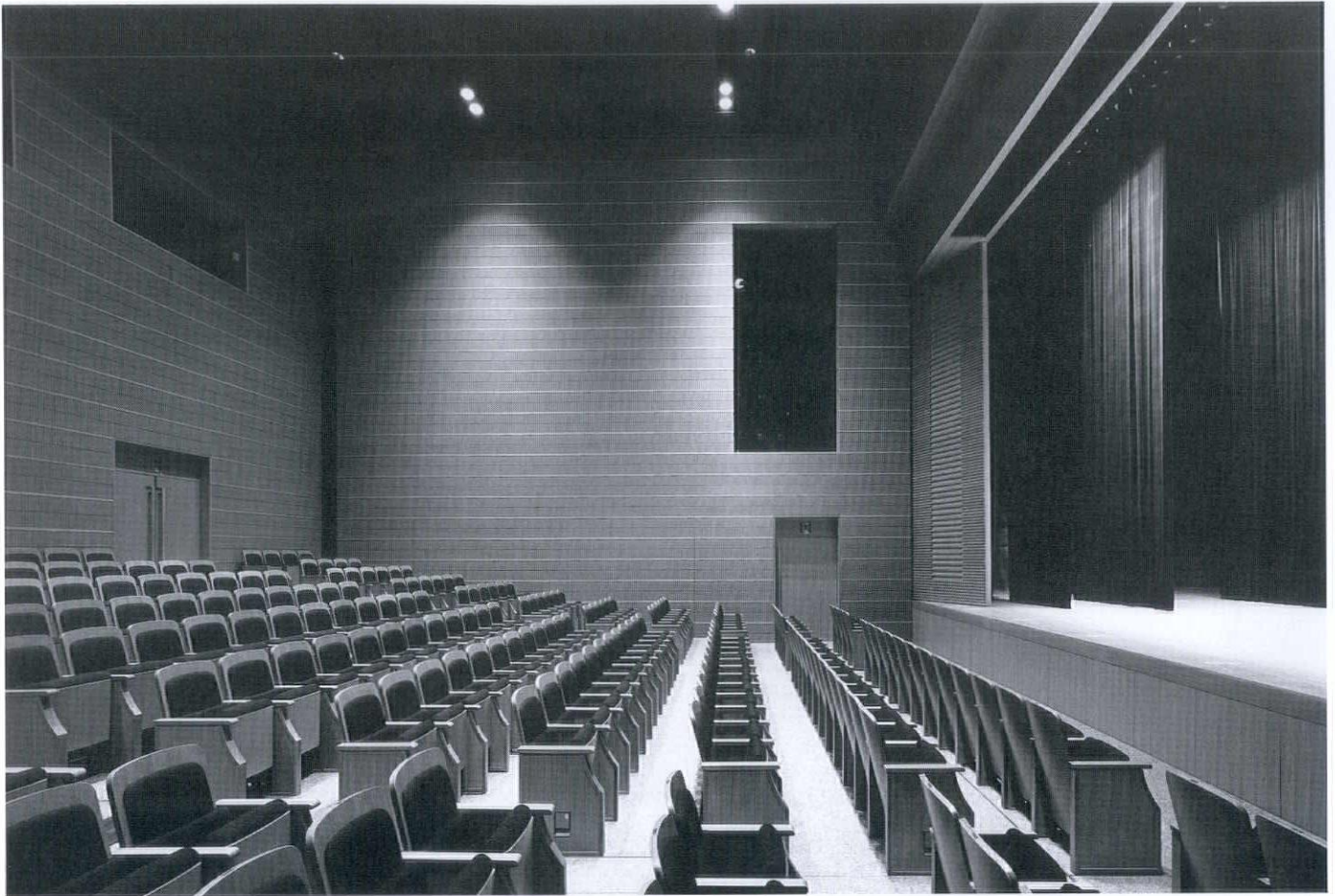
東京都三鷹市上連雀 1995













川村純一

劇場へのアプローチ、それは異空間へのプロログであり、期待に興奮を高めつつ日常から仮想経験の体験への道行きである。こういった催しにいつも遅れがちな小生でも、この切り替えは、出し物の期待があるほど、またその場が魅力的であるほど、短時間で大きくなる。

劇場での体験は、瞬時のものであり、時とともに消え去るが、ここでの体験は観客の心に残り、その場に刻み込まれて行く。これが街をつくり、また街が文化を育てる。

日が西に傾く頃、三鷹市芸術文化センターを訪れた。北側のバス通りより近づくと細かい水平線の端正なタイル壁面が現れ、サンクンになったフェスティバルスペースを挟んでエントランス棟が見えてくる。周辺の住宅地に配慮して、ホール棟の屋根はカーブしながら低く押さえられているため、東側からのアプローチに対してもメインエントランスが容易に認識される。特注された外壁タイルは187mm×30mmでL型の断面をしていて、この出が水平線の陰をつくるとともに雨による壁面の汚れを防ぐ水切りの役目をけなげにも果たしている。さらに西側に回ると、低めのタイル壁面とアルミのフレームで構成された80m程のエントランスホール棟を背景に、ケヤキ、コナラ、クヌギなどが植栽され、武蔵野の原風景をとったプロムナードで周辺との連続性がはかられている。地下の美術創作・展示室に光を送る4個の箱とサブエントランスがプロムナードと近隣に対してヒューマンスケールを確かなものにしている。南側も、このプロムナードが回り込み連雀中央公園の緑に連続するように計画されたが、残念ながら新築された住宅で、サンクンブラザからの空間の連続性がそこなわれている。周辺への配慮は、建物交互にあってしかるべきもので、どんなに小さな建物でもそれを設計し建設する者は、景観に対する意識を持つべきである。この芸術文化センターが、いきいきと活動しそれによってさらにこの土地に深く根づくことができれば、建築家の公共的性格への使命感が周辺へも伝わり、この施設にふさわしい環境に変化してゆく力をもつであろうことを期待したい。

先に設計が開始された新国立劇場と同様に、ここでもエントランスからの大きな共通ロビーが設けられているが、中小ホールの舞台部分を背中合わせにしてあるため、その構成はより単純明快になっている。音楽と美術の活動がその領域を超えて相乗的に創造されるように、掘り下げられたフェスティバルスペースに面して美術制作展示室、レストランが顔を出し、ホール楽屋や地下2階の音楽練習室とも連携が取れる配置となる。中ホールはコンサート、小ホールは演劇を中心にそれぞれ固有の機能分担がされ、中途半端な多目的ホールを脱している。中ホールでは床、壁、客席ともナラ材を多用し、楽器のような空間を創りだし、外光をトップサイド窓から取り入れる試みにより、教会堂のような効果もあると思われる。小ホールは芝居小屋としてのからくりが試され、奈落、可変床、可変プロセニウムや、空目地を利用したのタイルの壁面が、きちんとしたディテールのもとに、納められている。ただ全体として私の印象では、あまりにも端正に納められているためか、少し乾いた空間を感じた。

一方、新国立劇場はコンペに当選してから竣工まで10年以上の歳月を要した大作である。遅れた原因は、わが国の文化行政上の諸事情によるものであろうが、この規模を考えると決して長すぎることはないのではないかと感じた。じっくり時間と知恵をかけて造られるべきもので、その間に準備すべきソフト面を考えると、むしろ短かすぎたきらいさえある。いずれにしろ結果的に良かったのは、その間にTAK建築・都市計画研究所において、設計と監理を通して弛まずデザインが続けられていたことで、この作品の密度の高さに現れている。当然先に竣工した他の作品で試された事柄もあるであろうし、そこで得られたノウハウがまたここに活かされている。アプローチ空間やサンクンガーデンの構成などの明快な構成は、東京都現代美術館や、三鷹市芸術文化センターなど指名プロポーザル最優秀賞で勝ち取った作品に共通するものであり、その完成までに検討された仕上げ材料やディテールにその成果を見ることができる。この間において、単なる数字や前例に固執する傾向

の発注者側である行政（本当は市民であるのだが）との交渉は並々ならぬものであったろうと察しがつく。その努力により、28にもおよぶセンター特認を得て、自然な感覚のわかりやすい空間が生まれている。そもそも平均地盤面の設定やら階数の規定、避難距離、防火排煙区画などそれぞれ建物の状況によって総合的に判断されうるもので、単に絶対的な数字で規定して安全性が確保できるものではない。私は、行政と建築家の責任回避のための今の建築基準法など必要ないとも思うのだが、そのためには、建築家側も哲学と責任を持たなくては、実現しないことであろう。

新宿のこの敷地が、果たしてわが国のオペラを中心とした劇場に相応しい場かどうかは別として、ここでも柳澤さんの周辺への配慮と好意的な信頼関係による建築のあり方が示されている。環境と対立するのではなく、その場のエネルギーを取り入れることにより建築が生き、時とともに建築が育つことで、それにふさわしい環境を作り上げる可能性に対する自信を感じさせる。

吉村順三先生が亡くなられて1カ月が経過した。芸大で最後に授業を受けることができた者の一人として、今、教えられた事の重みを感じさせられている。

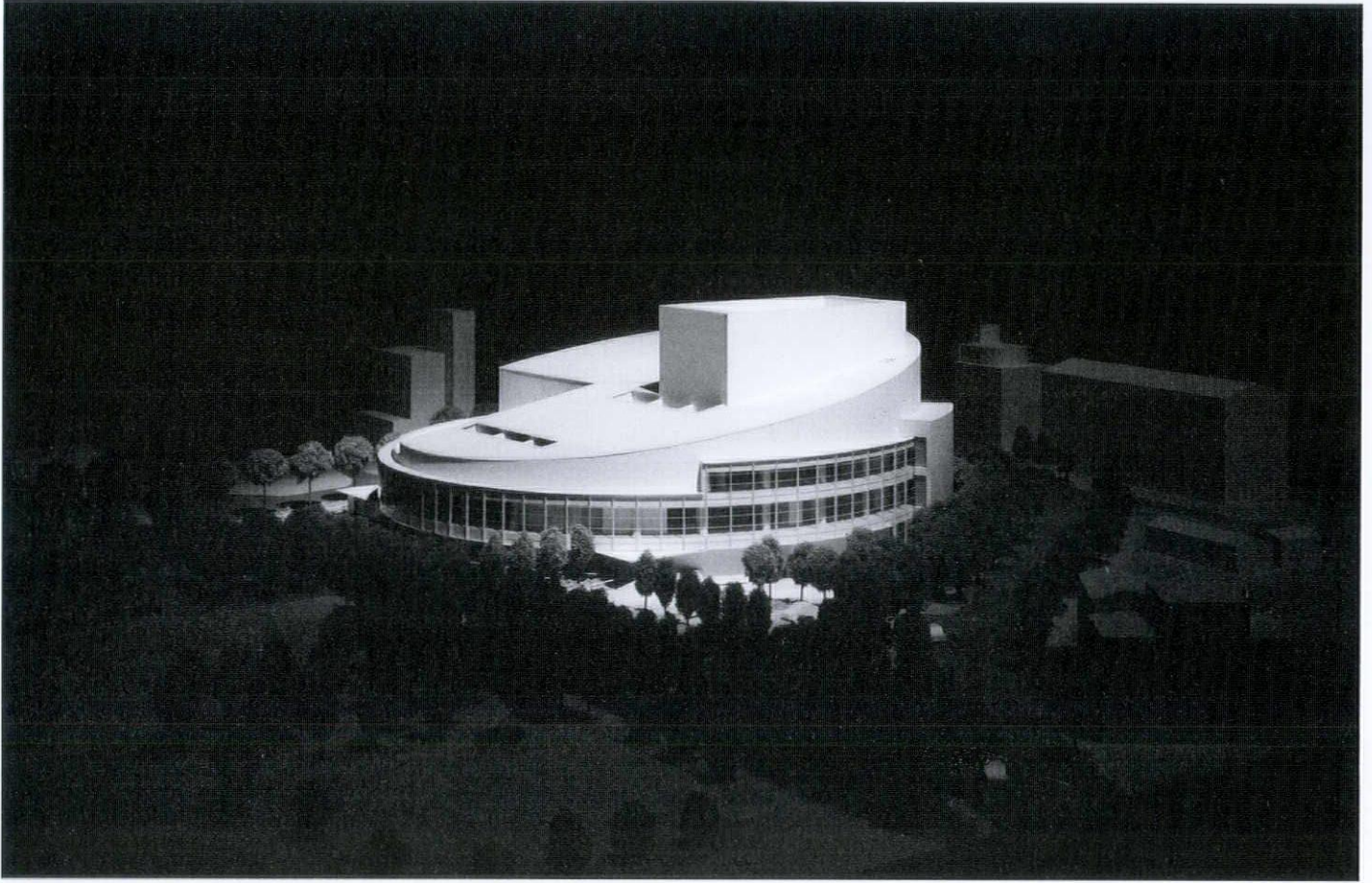
先生の言っておられた「建築家として、最もうれしいときは、建築ができ、そこへ人が入って、そこでいい生活がおこなわれているのを見ることである。」ということが、いかに建築家にとって大切であり難しいことか。

柳澤さんの建築を拝見していて、「住宅の作り方ひとつで、その家族を幸せにも出来るし、離婚させることもできる。」と話していた吉村先生の言葉も思い出した。

●かわむら・じゅんいち / 建築家、アーキテクトファイブ

埼玉県立近代文学館（仮称）および桶川市民ホール（仮称）

埼玉県桶川市若宮（工事中）



長友宗重

序

欧米型の音楽文化は長年、作品、演奏者、観客とそれが行われる場、ホールや劇場、広場などから成り立ってきた。今世紀に入ってそれは映画の世界に広がり、現在はラジオ、レコードからビデオ、テレビによって音だけでなく姿も映像化され、かなりの高品質で家庭の中でいながらに楽しめるようになった。それはそれで立派に音楽文化の一翼を形成していると言える。

しかしながらしばしば臨場感という言葉で表現されるように、コンサートホールで生で接する交響曲の響きや、直に観るオペラの舞台からは、本物のみが発散するオーラ、魅力、迫力に没入の喜びを一期一会の緊張や感激と共に味わい、経験できる。

現在もまた将来も、機器による記録再生という手段では得られない音楽文化の最も重要な領域がそこに厳然と存在している。

我が国はクラシック音楽愛好者の層が厚く、欧米に比較してCD、LD、ビデオなどの売り上げが多いことが統計に現れている。反面、近年全国各地に専用ホールが開場し演奏会活動が活発化しているのに、実際にコンサートやオペラに通う人口は必ずしも多いとは言えないようである。

筆者には建築音響を専門とする以上に、欧米を含めて長年コンサートやオペラに通い、放送から全曲を録音し徹夜で聴いた愛好者としての思い入れがある。

長い間待たされた国営のオペラ劇場が新宿新都心外縁に完成、開場するのも間近になった。折角の機会に、音楽文化、オペラ、都市、建築そして音響をキーワードに日頃考えていることを述べさせていただく。

1. オペラとオペラ劇場

オペラは1597年、ルネッサンスの末期にイタ

リアはフィレンツェの貴族の宮廷で生まれてから現在まで400年間、その時代を反映しつつ幾度かピークの時期を経て発展を重ね、今世紀に至るまで広い層の愛好者に普及してきた。

ここ数年我が国にもようやくオペラブームが到来したと騒がれ、オペラに関するいろいろな情報にも事欠かなくなってきた。

オペラと劇場の状況は、外国文献とその翻訳を含めかなり多くの解説や紹介書、雑誌の特集などがあるのでここでは進行に必要と思われることだけを記す。

オペラと劇場の成立には、当時の貴族や富裕階級の「音楽的欲求」と「社会的必要」というはっきりした動機付けがあったと言われる。

始まりがルネッサンス最終期の影響を強く受ける時代にあたっていたこともあり、多くのギリシャ神話や伝説、悲劇や喜劇が台本に使われた。初期には宮廷の広間、城内の広場が上演の場であり、円形劇場形式も取り入れられた。

そうした背景のもとに初期のオペラは、少数の「上品な喜劇」と呼ばれたものを除くと貴族と賓客達のための、大仰な舞台装置、派手な演出のスペクタクル、合唱を含む多数の演奏者、スター歌手の存在といった大変お金のかかるものだった。作曲者よりヴィルトゥオーゾが大切にされる状況で、芸術から離れた見せ物的舞台も多かったようである。

現在あるオペラハウスの形態は、大きく二つに分けられる。

一つはその発祥の由来と伝統に基づくものでルネッサンスイタリア劇場と呼ばれる。18世紀以前のオペラハウスと普通の劇場の違いはあまり明確でなく、観客の構成から比較されることが多い。馬蹄型の平土間とそれを取り巻く重層のボックスもしくは桟敷席からなる点は共通で、前者は一流人士あるいは社交界最高のクラスの客が平土間とボックス席の

大部分を占め、後方最上部に従者達のための桟敷席が設けられていたのに対して、一般の劇場はあらゆる階層の観客が入り、土間と桟敷席のみだった。

営利を目的にオペラが興行されるようになってからもその点は変わらず、収容人数が増え大規模化したオペラハウスでも、恵まれた有産階級のみがボックスや上等の席を持つ常連となってオペラを支える状況が長く続いた。

本来オペラは、音楽、詩、ドラマ、美術などが総合された究極の舞台上演芸術(Performing Art)とされた。音楽は中核として最も重要であり、台詞が中心の演劇とはその点で区別されるが、劇場内部空間について音響的配慮はほとんどなかったと言ってよい。ただしこの時期の音響知識は、経験のみに頼る貧弱なもので、円形や卵形の平面が焦点を結ぶ現象さえもプラスと見なされていたらしい。

19世紀の後半、ロンドンのコヴェントガーデン、パリのガルニエ、ニューヨークメトロポリタン、ドレスデンのゼンパーオーパー、バイロイト祝祭劇場など火災や戦災に会って後に復興されたものも含めて、現在も使われているオペラハウスの多くが完成した。

この時期のオペラハウスのあるものは、ようやくイタリアタイプの踏襲から脱し、ゼンパーやワーグナーの思想やそれぞれのお国柄による新しい建築形態を実現している。この第二の型は、誰もが均等に舞台の楽しみに集中できるように、客席を扇形斜面上に配置して、重層のボックスまたは桟敷席を廃した。

この頃、特に理論が進んだわけではないが、ウィーンの楽友協会大ホール、アムステルダムコンセルトヘボウなど素晴らしい音響で現在も最高の地位を保っている名コンサートホールが完成している。少なくとも経験の積み重ねに基づく音響上の配慮がなされるようになり、オペラハウスもその影響を受けてかな

り良くなってきたように見受けられる。

第2次大戦後ドイツの大都市、ハンブルク、ケルン、ベルリンなどに発し最新のパリのバステューに至るオペラハウスは、第2の型の延長上であらゆる伝統様式から自由であり、むしろ我が国に多く見られる多目的ホールを改良し必要十分な舞台設備と裏方の諸施設を整備した形に近いと筆者は考えている。

舞台機構も遠近法を利用した非常に長い奥行きイタリア型から、機械力を駆使した3、4面舞台に変わってきている。

2. 日本におけるオペラ

明治政府による文明開化の推進以来、音楽教育の西欧化はかなり顕著だったといっても、社会システム、生活、趣味、思考様式の違う世界に、異国の長い歴史を背景に発展した舞台上演芸術としてのオペラが根付くには大変な困難と長い時間を必要とする。むしろ性風俗の違いが明治の官憲にオペラを忌避させ、正しい導入を妨げられた明白な形跡がある。

大正期の我が国のオペラ？のありようは、洋楽を曲がりなりにも大衆化したという意味では重要である。しかし正統という立場から見れば翻案、短縮、娯楽本位、演目のほとんどがオペレッタといった非常に歪められたものだった。

この頃に使われた劇場は、帝国劇場を別格として赤坂ローヤル館、浅草オペラの三友館、日本館、観音劇場、金竜館などがあつた。

昭和初期から本格的な芸術的歌劇の要望が高まり、スカーピイタリア歌劇団などの来演(1927年)も行われた。

しかしオペラの上演は十分な準備と大変なお金がかかるもので、日本の当時の観衆対象では興行的に無理であり、勢い変則的にラジオを通した放送歌劇として普及することになった。現在でも映像を伴うテレビ放送、LD、

ビデオが加わって大きなファンの層を虜にしている。

1939年、藤原歌劇団が初めて歌舞伎座で単独で公演を行って以降、継続してドイツ、イタリアの主だった作品と山田耕筰など日本の創作歌劇を上演した。帝国劇場、歌舞伎座、東宝劇場、日比谷公会堂などが使われている。

戦争は当事国諸都市の文化施設の破壊と演奏活動の停滞をもたらし、深い傷を残して過ぎ去っていった。

太平洋戦争末期に日比谷公会堂のコンサートで聴いた三浦環の蝶々夫人のアリアとアンコールに着替えて舞台に現れたもんぺ姿を忘れられない。

戦後のオペラ普及の先駆けとなった、NHK放送30年記念のイタリアオペラ招聘第1回「アイダ」は1956年、東京宝塚劇場と産経ホールで上演された。日本の観衆が国内で絢爛豪華なオペラの本物の舞台(といっても限界があつたが)に接した最初とされている。

その後の40年間に、度重なるイタリアオペラ招聘のほかにもウーン、ベルリン、ミラノ、バイロイトなど世界の超一級のオペラが続々と来日して多い年には3団体が訪れるような状態が続いている。演目も我が国で馴染み深い定番のほかに、バロックから現代、フランス、ロシア、東欧まで幅広く選ばれ紹介されるようになった。この時期にはNHKホール、上野の東京文化会館、神奈川県民ホールなどの果たした役割が大きい。

いかに庶民の懐に余裕ができてきても、コンサートを含め本場からの来演が続くと国内の演奏活動は苦しくなる。それでも日本人の手になる初演、創作上演活動を含めて国内オペラ団体も活発に仕事を続けている。この辺に対する援助協力も新国立劇場の重要な仕事になるはずである。

3. 都市とオペラハウス

多分に西欧に傾斜した音楽文化を持つ先進国としては珍しく、我が国ではヨーロッパの都市の多くに見られる劇場、音楽ホール、オペラハウスから成る文化施設3点セットを持たなかった。大都市の私立劇場を除けば多目的の公共ホールがその需要を満たしてきたわけだが、オーケストラコンサートやオペラ上演に満足できる容器では決してなかった。

1980年代になってようやく経済的ゆとりと音楽文化意識の高まりを受けて、まずクラシック音楽専用もしくはそれに重点を置いたホールが、戦後比較的早い時期に造られやや老朽化してきている既設の県民会館、市文化センターといった多目的ホールを補うものとして多くの都市に建てられた。

さらに新国立劇場の計画が遅々として進まない間に、地方自治体の文化施設建設がエスカレートした。これらの公共的事業は、今まで通り幅広い目的の用途に応えなければならないが、以前と比べて遙かに高級なものを指向している。

中でも大規模な複合文化施設は、用途の専門化した大小いくつかのホールを備え、主ホールはオペラの本格的上演にも耐えられる規模と舞台設備、補助施設を準備している。

1992年、名古屋市に完成した愛知芸術文化センターには、オペラ、バレエの上演を主目的とした3面舞台、5層2,500席の愛知芸術劇場大ホールがあり、ここ5年間の活動は目覚ましい。海外からのオペラ、バレエ団、国内諸団体などによる、古典から創作までの各種の作品上演は、準備期間などを考えると驚くべき回数密度でバラエティに富み、今後の劇場運用の貴重な資料になると思われる。

1994年には、浜松市に複合街区アクトシティが完成した。コンサートホールと我が国最初の4面舞台装置を誇る2,300席の大ホールがあり、内外のオペラ、オペレッタ、バレエ、ミュージカルなど設備を生かした演目も多く盛んに活動している。

こうした新しい型の文化施設では、愛知の世界バレエコンクール、よこすか芸術劇場の世界オペラ歌唱コンクール・アジア予選など世界に開かれた企画が目につくが一方で、財政やソフトの弱体に苦しむ状況が多く、団体から聞こえてくる。

ここでコンサートホールやオペラハウスの立地に触れておきたい。先に地方自治体中心に多数の音楽ホール、オペラ上演に対応できる劇場が建てられたことを述べたが、問題はこれらが国内全体として何の脈絡もなくそれぞれの都合で行われたことである。折角のシューボックスホール、パイプオルガンもその地域だけでは十分に機能を発揮できず、音楽専用の故に使い勝手が悪く敬遠される施設も多いと聞く。

後背地の規模、地域特性、時間距離と観客の分布などを考えると到底成立不能の専用施設もある。仕込みに膨大な時間と費用がかかるオペラ上演には、超大都市間だけでなく地方のこうした施設の適切な動員が不可欠であり、情報のデータベースと緊密なネットワークの構築が国立劇場の重要な役割になるだろう。

4. 新国立劇場

オペラだけでなく観劇、コンサートなど、舞台芸術を楽しむ歓びは日々の生活の中から切り出された時間全体にある。

座席に落ち着くまでの交通、歩く道筋、エントランスからクローク、幕間のロビー、ホワイエ、バー、シャンペンテーブル、満ち足りた興奮と余韻のなかの遅い夕食、劇場の雰囲気はこうした全体像の要にあり最高の実現を常に期待される。

一方でオペラ通いは二極に別れていくように思われる。歌舞伎と比較される時、オペラは貴族、富裕階級のもの、歌舞伎は町人のものとされる。我が国のオペラファンの多くは、

その伝統性、貴族性に対する憧れと自尊を帯びてオペラに出かけるように見える。その対極に天井桟敷の人々がある。欧米では良い席に一回行くお金で十数本の出し物を見ることができ入場料で、服装に気を使うこともなく手軽に入れる。そこには歌舞伎と同様に本場にオペラ好きなファン、研究者、勉強会員、音楽家の卵などが集う。

本格的活動開始を秋に控え、こけら落としも間近い新国立劇場を設計者柳沢氏の丁寧なご説明で案内していただいた。建築工事はほぼ完了し、現在舞台機構の調整工事などが行われている。

もともと筆者は人の居る、使われているときの建築を見る方が好きだが、逆に真新しい内装の、清潔でぴびと広がるアプローチに、ドレスアップした客達が行き来する姿をイメージしたり、大ホールの中程左寄りの席に腰を下ろしてふと目を閉じ開演前の客席のさんざめき、チューニングが終わって指揮者がスポットライトの中に拍手で迎えられ、無音と化した客席の緊張と期待の内に静かに序曲のイントロのユニゾンが、と想像するのも楽しい。

劇場の真価は本番で初めて発揮され認められるわけで、ときには長い使いこなし、熟成の期間を経てそれが実現することもある。親近感(intimacy)の溢れるこの空間は、場違いといわれたここ下町近傍からのアクセスによく馴染んで、次の時代の大衆の親しめるオペラ文化の中核となるべき場として期待できる。

音響は著名な学者ベラネク氏の助言を得たと聞くが、同じく柳沢氏の手になるオペラシティの中のコンサートホールとどちらも、自然で素直な姿で新型の音響調整部品が建築内装化されて美しく、全く違和感を持たせない。

オペラとの言語障壁は我が国だけでなく世界共通の問題だった。ニューヨークで伊独仏露オペラは原語で上演される限りやはり外国

語である。ロンドンにはあらゆる演目を英語で上演するオペラハウスがあるが、音楽との一体性という点で原語に勝るものはない。

最も楽しめるのは劇の進行を頭に入れ、できれば主なアリアや台詞の内容をあらかじめ覚えて本番に臨むことで、歌舞伎と同様にそうした熱心なファンも増加している。プロセニウム周辺に設けられる字幕設備は問題解決の手段として有効で、世界中で採用されつつある。しかし建築空間やステージとの関係を誤ると雰囲気や正しい鑑賞を台無しにしかねない。照明、音響装置などと併せ使いこなして行く間に、熟成のプロセスとして建築的試行錯誤が是非必要だろう。

設計競技が行われてから足かけ11年、様々な紆余曲折、障碍があったにしても、優勝者であり、明快な主張と十分な知識を持った建築家の手で日本の舞台上演芸術の中軸となるべき場の建築が完成、存在を始める意義は大きい。

今後日本のオペラ文化は、伝統の忠実な踏襲、新しい解釈と演出、日本のオペラの創作の3つの道筋が糾われたものになると考えられる。容れ物以上にシステムの能力に負うところが大きい、世紀末から新時代にかけての新国立劇場の活動を期待を持って見守りたい。

●ながとも・むねしげ/鹿島 常任顧問

参考文献

『音楽五十年』、園部三郎著、時事通信社
『音楽のための建築』、Mフォーサイス著、長友宗重・別宮貞徳訳、鹿島出版会
『音楽と音響と建築』、LLベラネク著、長友宗重・寺崎恒正訳、鹿島出版会
『世界のオペラハウス』、Rターンブル著、堀内修訳、音楽の友社
『オペラ史、上・下』、DJグラウト著、服部幸三訳、音楽の友社、など

新国立劇場

建築設計：柳澤孝彦・TAK建築・都市計画研究所

新国立劇場は、オペラ・バレエ・演劇および新しいタイプの舞台芸術などの上演を主軸に、現代舞台芸術の多彩な公演事業をはじめ、研修、舞台芸術資料の収集・保存・公開、諸外国との交流や地域文化振興などの諸事業を行うことを目的とした、日本に初めて実現する国立劇場である。

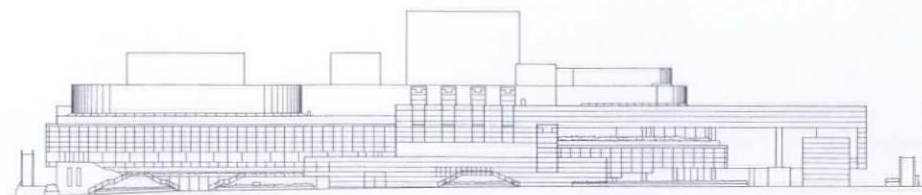
多目的劇場が主流だった10余年前に国際設計コンペによって、建設への確かな歩みが始められたこの企画は、本格的な専用劇場を目指すもので、日本の劇場史に専用劇場指向への大きな影響を与えつつ、一方では国際的なネットワークに劇場を位置づけるものとして注目を集めてきた。

四面舞台を持つオペラ劇場および中劇場と、新しい試みの舞台芸術公演用の小劇場を併せ持ち、また多数の稽古場、研修施設などを配した69,000m²に及ぶ新国立劇場は、あらゆるジャンルの現代舞台芸術に対応できる一大劇場コンプレックスとして、世界に稀有の規模と内容を備えたものといえよう。したがってこの設計にあたっては、本格的な専用劇場の建設とあらゆるジャンルの舞台芸術の拠点づくりが主要テーマであった。

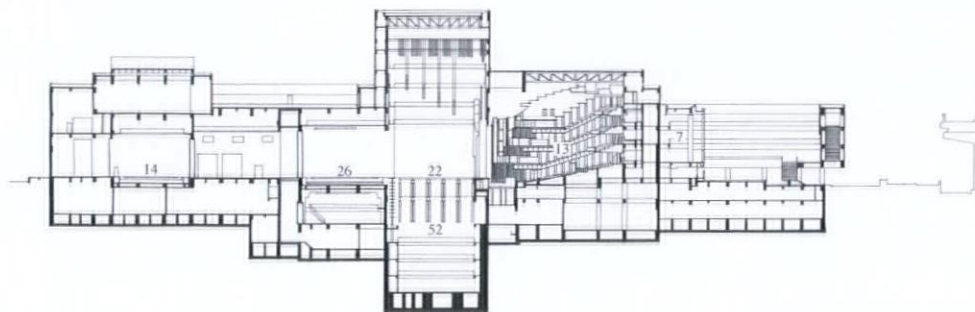
高度に情報が進展する現代において、生身の人間が演ずる真に人間の力に出逢うことのできる場こそが「劇場」であるという意味が、設計の心であった。従って、触覚的ともいえる全感覚的な世界を発展させる空間づくりに意が向いたのも当然といえよう。そこでは、あらゆる場所が舞台となり、そこに居合わせる人々がその情景の構成者ともなり、多様でイリュージョナルな展開を備えた空間を随所につくり出すネットワークを構成の骨子とした。

それらは、大きなディメンションによるダイナミックな空間構成や、「坂の街」のごとく刻々と視点を変える高さの変化を持つ空間性が、上下する身体運動を伴って情景の常なる変化を呼び起こし、日常を越えた世界がそこに準備されることを期待した。そしてそのネットワークには、都市をも引き込みたいと考え、劇場を取り巻くように配置したパブリックな空間を周辺に向けて開くことで、都市を引き入れダイナミックな空間性を備えることとした。

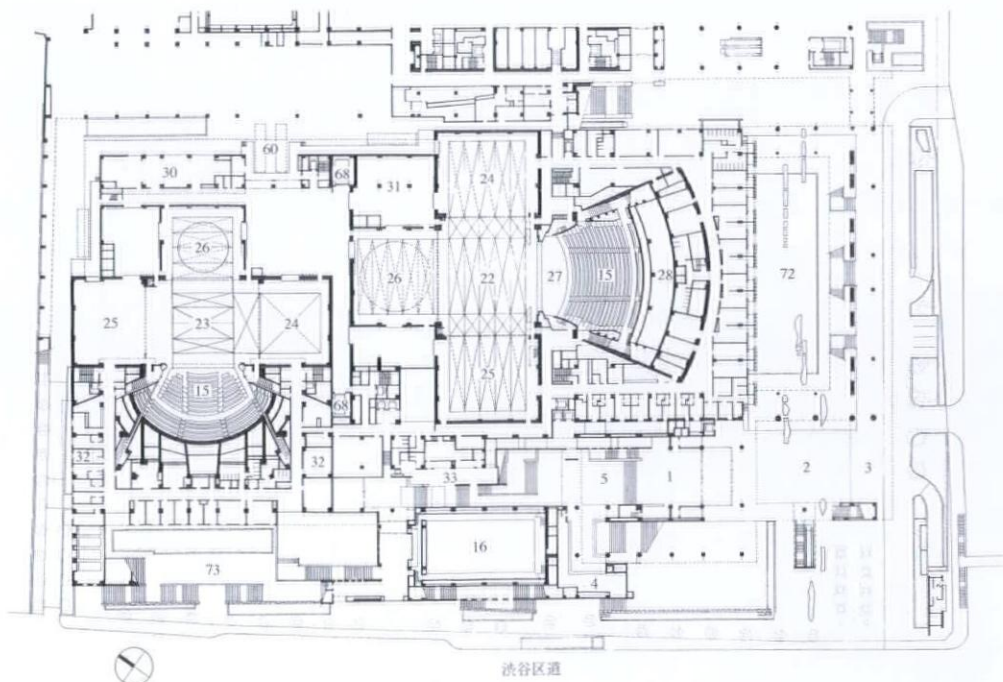
すなわち、新国立劇場で繰り広げられる人々の交感の場が、向き合う都市を客席とする舞台となることで、開かれた劇場がその構えとなった。



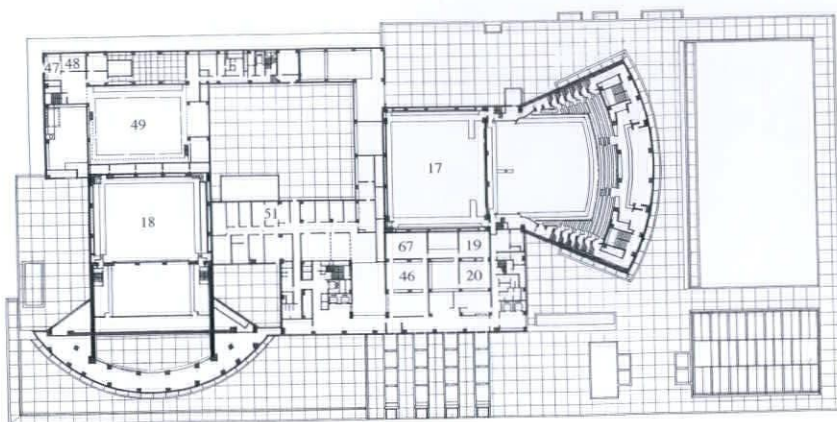
西立面図 S=1:1800



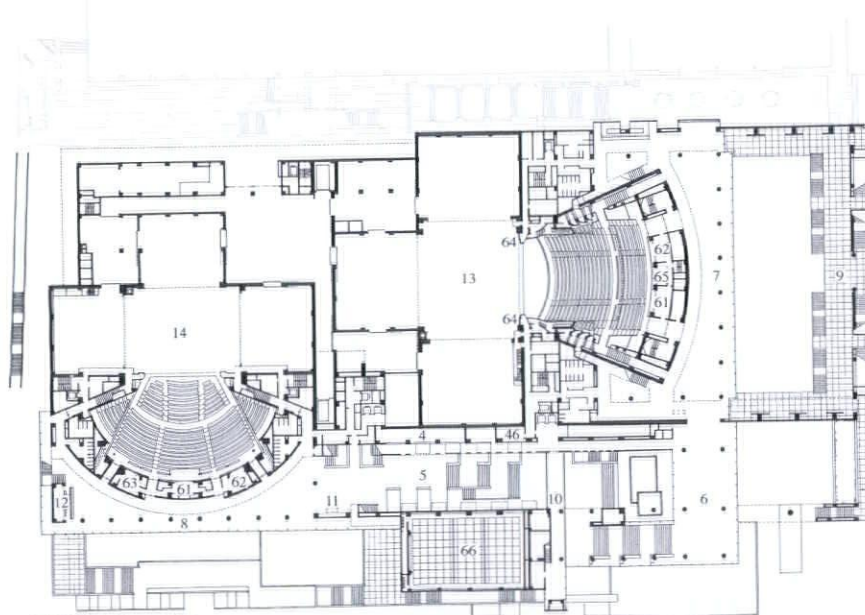
断面図 S=1:1800



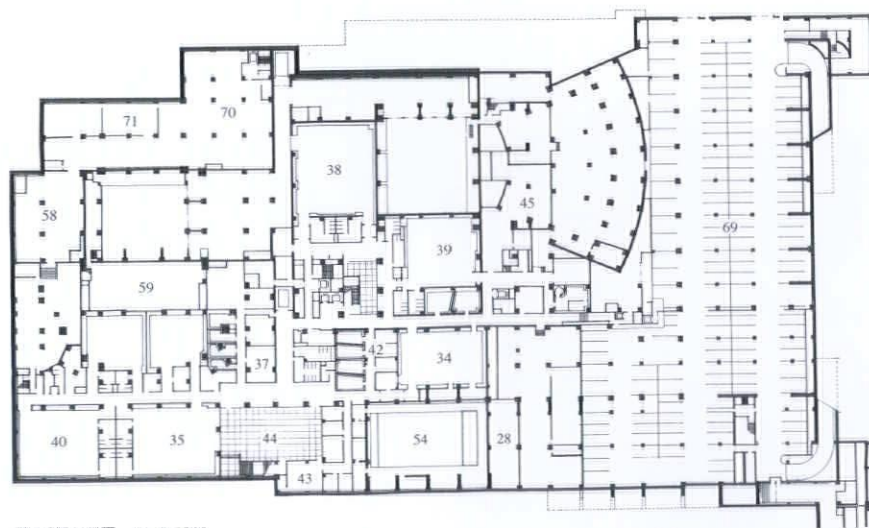
1階平面図 S=1:1800



5階平面図 S=1:1800



2階平面図 S=1:1800



地下2階平面図 S=1:1800

- 1: メインエントランス
- 2: プロムナード
- 3: 車寄せ
- 4: クローク
- 5: 共通ロビー
- 6: オペラ劇場プロムナード
- 7: オペラ劇場ホワイエ
- 8: 中劇場ホワイエ
- 9: テラスガーデン
- 10:ブリッジ
- 11: 受付
- 12: ビュッフェ
- 13: オペラ劇場
- 14: 中劇場
- 15: 客席
- 16: 小劇場上部
- 17: 第2ギャラリー
- 18: 第3ギャラリー
- 19: ビデオシアター
- 20: ビデオブース
- 21: 閲覧室
- 22: オペラ劇場主舞台
- 23: 中劇場主舞台
- 24: 上手側舞台
- 25: 下手側舞台
- 26: 奥舞台
- 27: オーケストラピット
- 28: チャンバー
- 29: 組立場
- 30: 製作場
- 31: 収納庫上手
- 32: 楽屋
- 33: ボックスオフィス
- 34: オーケストラリハーサル室
- 35: バレエリハーサル室
- 36: 合唱リハーサル室
- 37: リハーサル室
- 38: リハーサル室A
- 39: リハーサル室B
- 40: リハーサル室C
- 41: リハーサル室D
- 42: スタジオ
- 43: 講義室
- 44: リハーサルライトコート
- 45: 書庫
- 46: 事務室
- 47: 染色室
- 48: 絵具庫
- 49: 画工場
- 50: テラス
- 51: 役員室
- 52: オペラ劇場奈落
- 53: 中劇場奈落
- 54: 小劇場奈落
- 55: オペラ劇場道具収納庫
- 56: 中劇場道具収納庫
- 57: リハーサルロビー
- 58: 特高受電室
- 59: マシンピット
- 60: トラックヤード
- 61: 音響室
- 62: 調光室
- 63: アナウンス室
- 64: フロントサイド投光室
- 65: 監督室
- 66: 小劇場すのこ
- 67: コンピュータ室
- 68: リフト
- 69: 駐車場
- 70: 空調機械室
- 71: 電気室
- 72: 池
- 73: テラスガーデン

東京オペラシティビル

建築設計：NTTファシリティーズ、都市計画設計研究所、柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所

コンサートホールは、「劇場都市」をコンセプトとする東京オペラシティビルの顔で、1,632席の音楽専用ホール。よく響く巨大な楽器を目指した純木造（38条申請による特認）で、ホールの形状は平面が長方形、断面はホールの歴史にもまったく新しい変形ピラミッドの空間形が特徴である。舞台からの音を客席に返しやすいく勾配が複合された形態として、綿密な設計の過程でいくつもの中から選び出したものである。

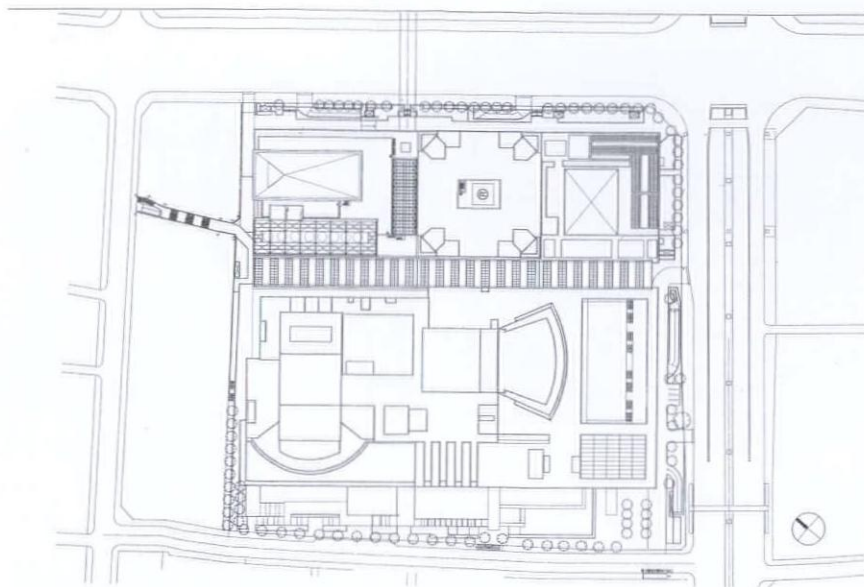
そしてまた、天井の低辺部から一気に最頂部の一点に向けて傾斜するホールの空間は実にダイナミックで、居合わせる人びとの心を揺さぶるに違いない。天空に向けて上昇する強いベクトルをもつ空間性と、次々に新しい音を発展させる音楽の時間性が交錯する新しい興感の場をつくらうという設計の意を用いた。

また、舞台を巡るデザインも特徴的で、そのひとつは舞台上に吊られたピラミッド型の音響反射板である。音の初期反射を強力にする機能と共に、舞台後方上部に配置されたパイプオルガンと相まって、ホール正面のデザインにアクセントをつけている。

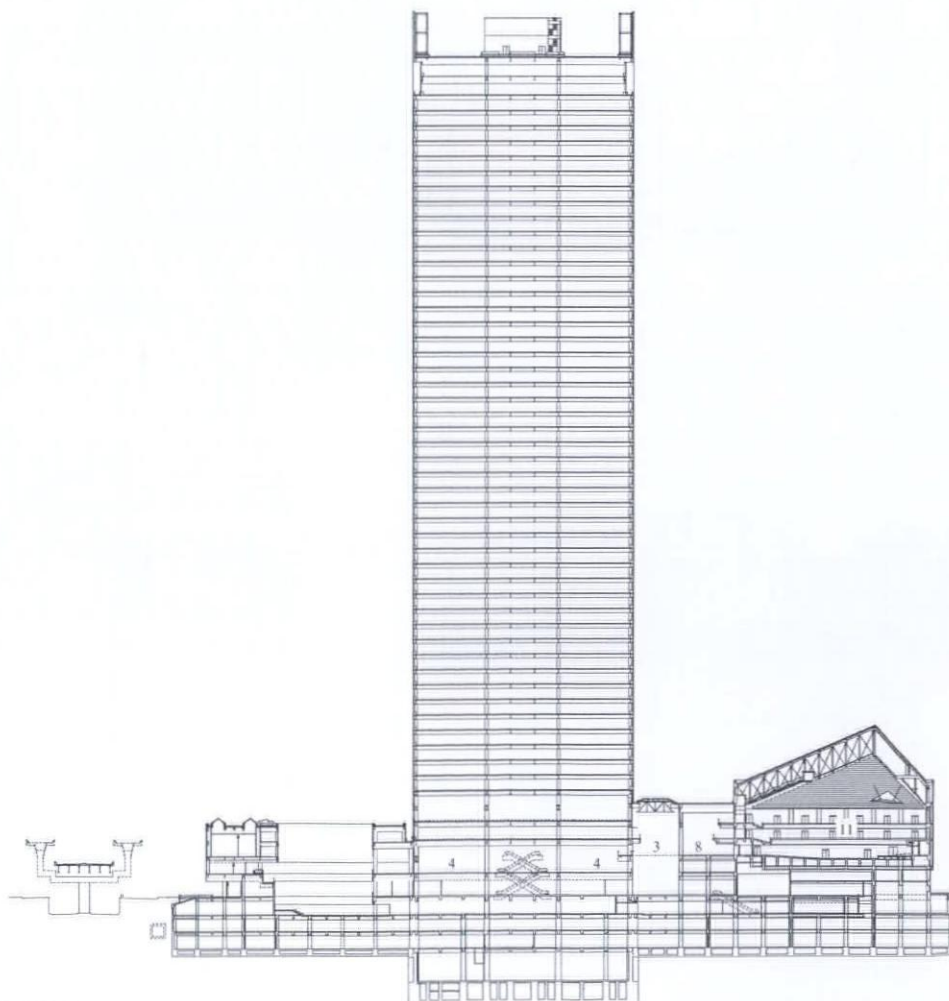
ふたつには、ピラミッド天井の最頂部のスカイライトである。切り取られた窓から差し込む自然光は、空間性をますます活気づかせてゆく。音楽と光の交錯もまた、時空に新しい感性を与えるに違いない。

音楽ホールは、舞台と観客の芸術的な交感はもちろんだが、観客相互が時空を共有するある種の連帯意識も十分働くことが大切である。観客は劇場の興感をつくり出す共演者だ。東京オペラシティコンサートホールに、2層のバルコニーを四方に巡らせた長方形の平面構成が選ばれたのもそのため、舞台を囲み込みかつ、観客相互も親しく向き合う空間形となっている。舞台と観客、観客と観客といった多元的な意識の結び合いが、さらなる劇場の興奮を起爆すると考えているからだ。

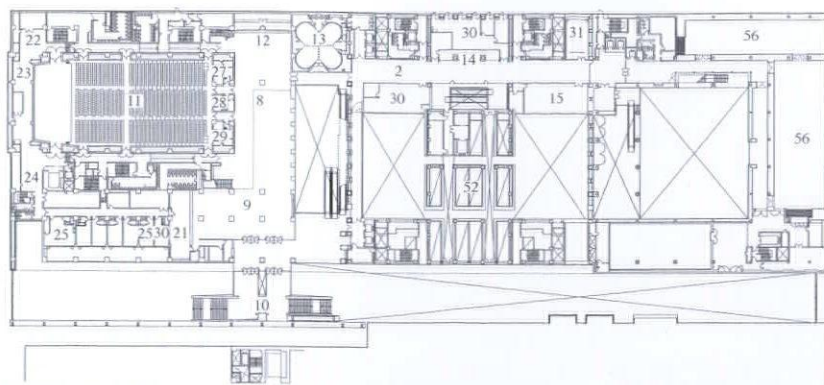
純木質によって構成された内装は、自然の木目を輝かせて、目にも耳にも自然の寛容さをもたらすに違いない。そしてこのホールの空間が漂わせる、木の精に囲まれた深い森の中に音を聴くごとき静謐さは、心の琴線の響きに耳を飲たせる一種のディグニティを潜めている。



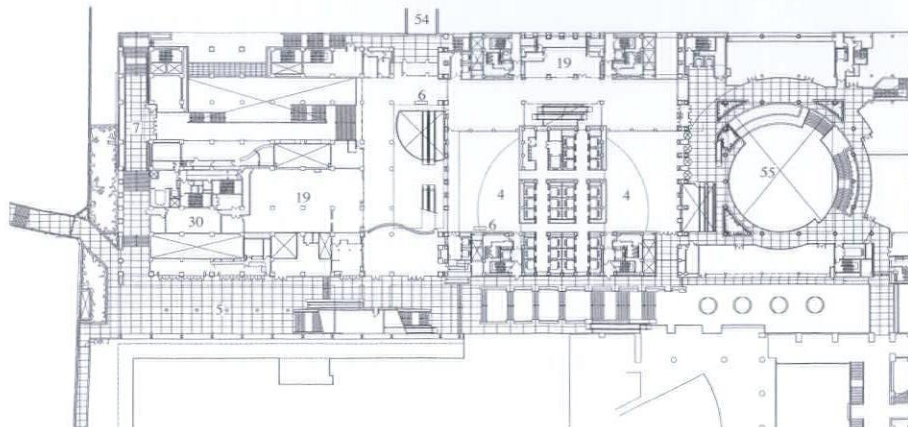
配置図 S=1:3500



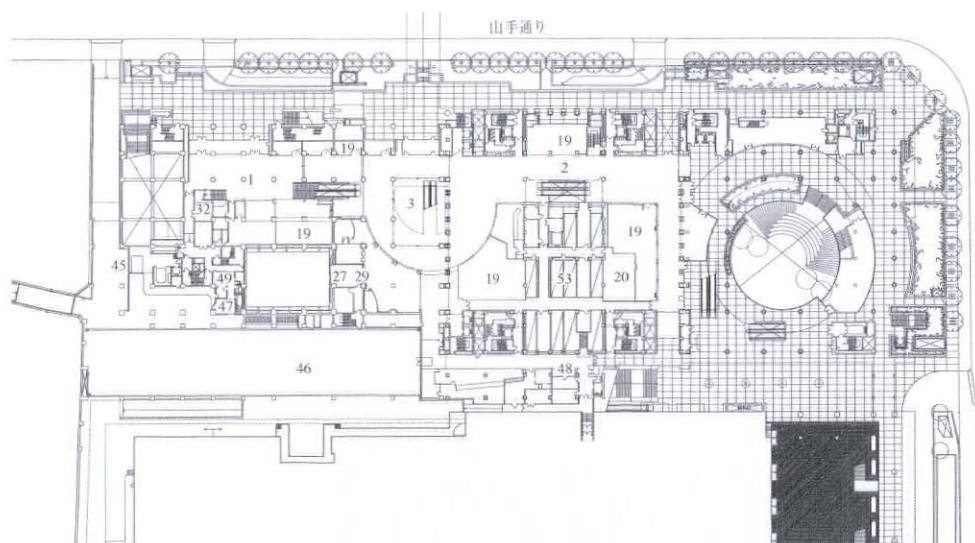
断面図 S=1:2000



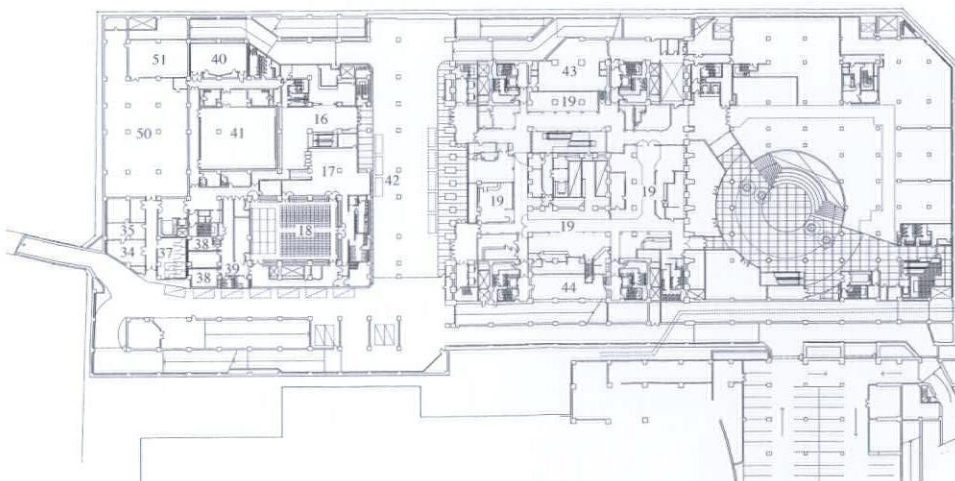
3階平面図 S=1:1800



2階平面図 S=1:1800



1階平面図 S=1:1800



地下1階平面図 S=1:1800

- 1: エントランスホール
- 2: プロムナード
- 3: アトリウム
- 4: オフィスロビー
- 5: ガレリア
- 6: 受付・案内
- 7: 北側アレイ
- 8: ホワイエ
- 9: ロビー
- 10: アブローチテラス
- 11: コンサートホール
- 12: ビュッフェ
- 13: 近江楽堂
- 14: チケット売場
- 15: 展示室
- 16: 文化ロビー
- 17: ホワイエ
- 18: リサイタルホール
- 19: 店舗
- 20: バントリー
- 21: クローク
- 22: 上手溜り
- 23: オーケストラロビー
- 24: 下手溜り
- 25: 楽屋
- 26: スタッフルーム
- 27: 音響調整室
- 28: 関係者控室
- 29: 調光操作室
- 30: 事務室
- 31: 応接室
- 32: 録音室
- 33: 調光電源室
- 34: 楽器庫
- 35: 係員控室
- 36: ホールコンプレックス管理事務室
- 37: ピアノ庫
- 38: 控室
- 39: 出待ちロビー
- 40: 小リハーサルルーム
- 41: 大リハーサルルーム
- 42: 車寄せ
- 43: 防災センター
- 44: 店舗従業員控室
- 45: 自転車置場
- 46: 搬入用車寄せ
- 47: 中継盤室
- 48: 警備員室
- 49: 搬入事務室
- 50: 空調機械室
- 51: 電気室
- 52: エレベーターシャフト
- 53: ビット
- 54: 山手通り横断通路
- 55: サンクンガーデン
- 56: アートミュージアム

三鷹市芸術文化センター

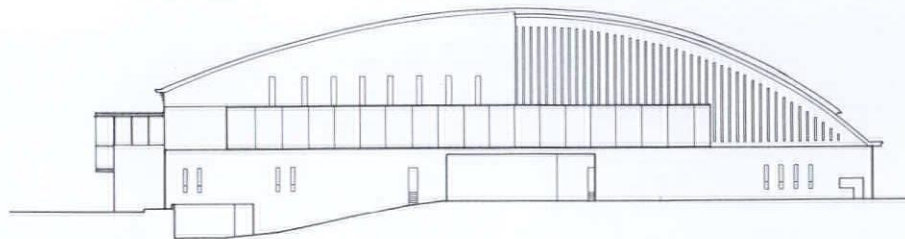
建築設計：柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所、劇場工学研究所

高度に情報化が進展する現代においてこそ、自らの体を震わせる芸術的営為によって新たな未知に挑み、そこに自身の存在を発見すべきときだといえる。三鷹市芸術文化センターは、まさに時を得た格好な人間性回復の舞台だと受けとめた。それは音楽や美術の創造的な活動の力が真にいきいきと発揮される豊かな空間性をつくり込むこと、すなわち真に人間の力に出会える場づくりにほかならない。

とりわけ中・小の劇場では、演出用途に理想的な空間規模（中ホール625席、小ホール250席）が、それぞれにコンサートや演劇などの固有の機能分担を際立てて専用化による存在を特徴づけている。中ホールでの音響設計においては、科学的アプローチのみならず感応的なアプローチも加えた、数多くの音響的クライテリアに充分な検討を加えた最近の音響設計手法を活用した。豊かに感応する音響空間と、時空を共有する鑑賞者相互の連帯感が舞台を包み込み、演奏者との親密な関係をつくり出す心地よいホール空間を簡潔な構成で特徴あるものとした。

また音楽や美術などの領域を超えて相乗的に発展する新しい「場」を生み出す空間構成にも意を用いている。建物の構成は機能別に明快に分別した3つのゾーン（パフォーマンスゾーン・フェスティバルゾーン、コミュニケーションゾーン）を並列させ、それぞれが相乗的に発展する構成で建築全体のアクティビティを最大限に昂めるものとしている。このような多様な発展の可能性を備えた構成は、未知を潜ませた空間相互の働きが利用者の創る心を待っているといえるであろう。クローズドに空間機能を固有化する一方、それらがオープンな系で互いに手を結び交流するという両義的な関係に空間構成の特色があるといえるであろう。

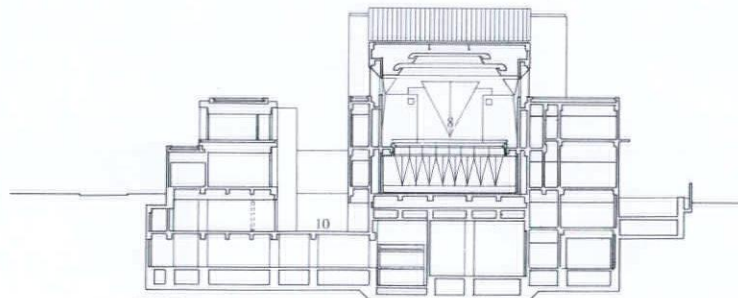
外部構成も土地の記憶と関わるデザインが特徴をもっている。建物の中央を縦断して掘り取って、建物を土地に深く組み込ませ武蔵野の土に根を下ろすがごとくに土との結びつきを空間化したダイナミックな構成としている。そしてそれは、樺や雑木が四季を刻むランドスケープと相まって、文字通りの武蔵野の原風景を内在させた新しい環境としての風景が街並の中に根を下ろすにちがいないと信じている。



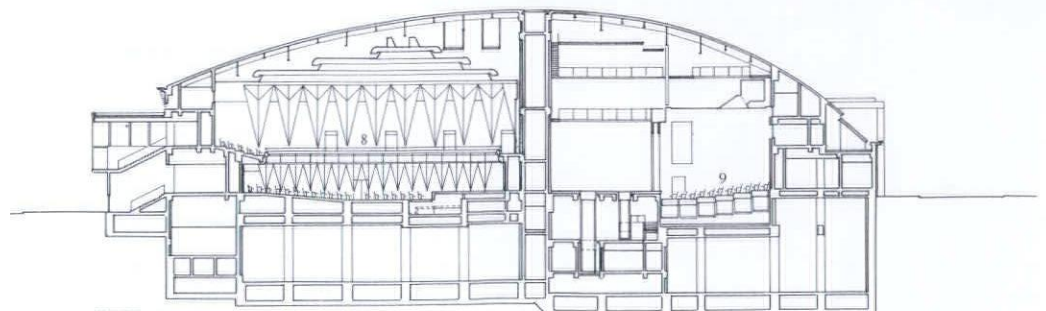
東立面図 S=1:800



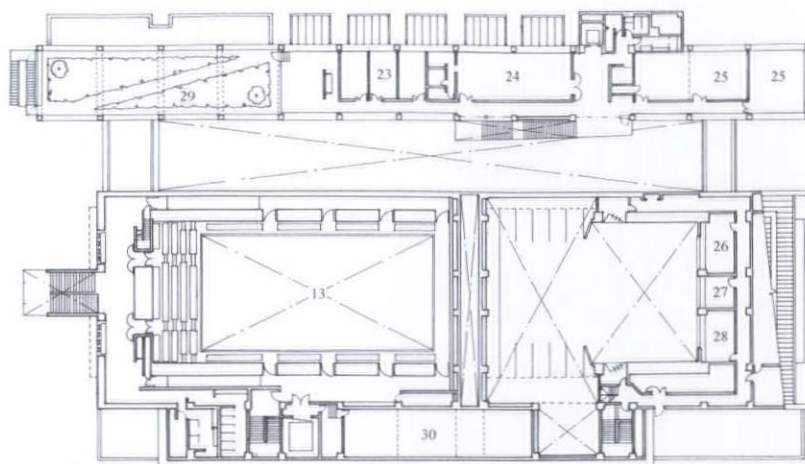
南立面図 S=1:800



断面図 S=1:800

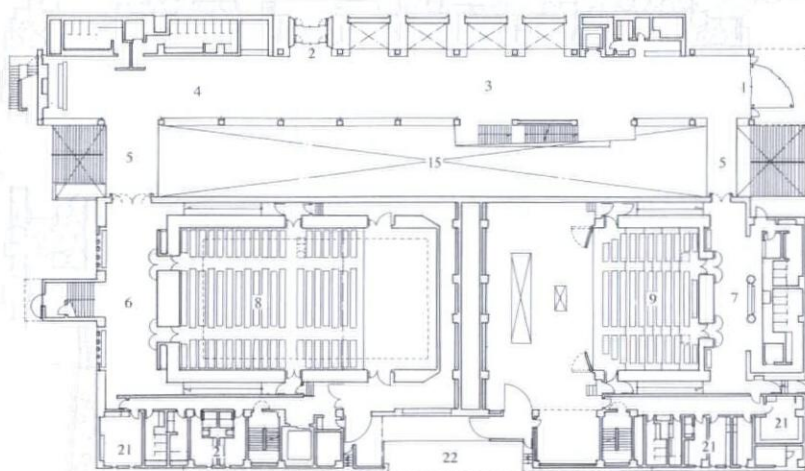


断面図 S=1:800

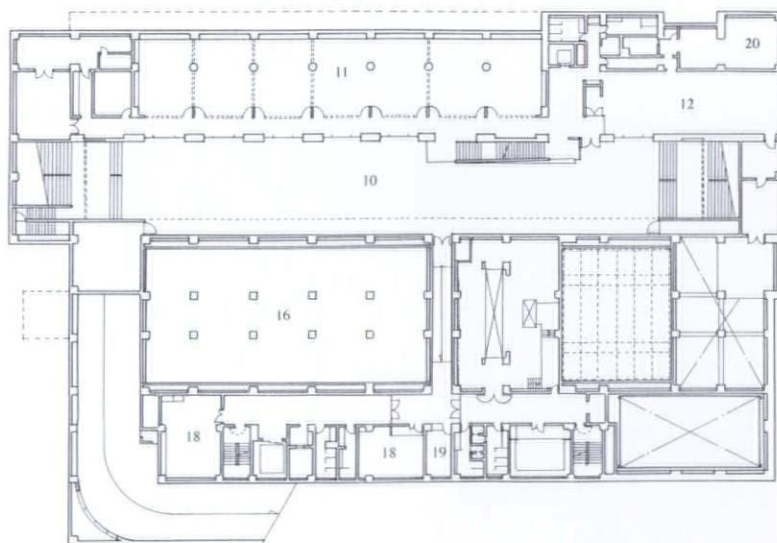


2、3階平面図 S=1:800

- 1: メインエントランス
- 2: サブエントランス
- 3: エントランスホール
- 4: 中ホールホワイエ
- 5: ブリッジ
- 6: ロビー
- 7: ホワイエ
- 8: 中ホール
- 9: 小ホール
- 10: フェスティバルスペース
- 11: 美術創作・展示室
- 12: レストラン
- 13: 中ホール上部吹抜
- 14: 小ホール上部吹抜
- 15: フェスティバルスペース上部吹抜
- 16: チャンバー
- 17: 奈落
- 18: 控室
- 19: 楽屋事務室
- 20: 厨房
- 21: 楽屋
- 22: トラックヤード
- 23: 役員室
- 24: 事務室
- 25: 会議室
- 26: 調音室
- 27: 投映室
- 28: 投光室
- 29: 屋上庭園
- 30: 屋外設備エリア



1階平面図 S=1:800



地下1階平面図 S=1:800

埼玉県立近代文学館（仮称）および桶川市民ホール（仮称）

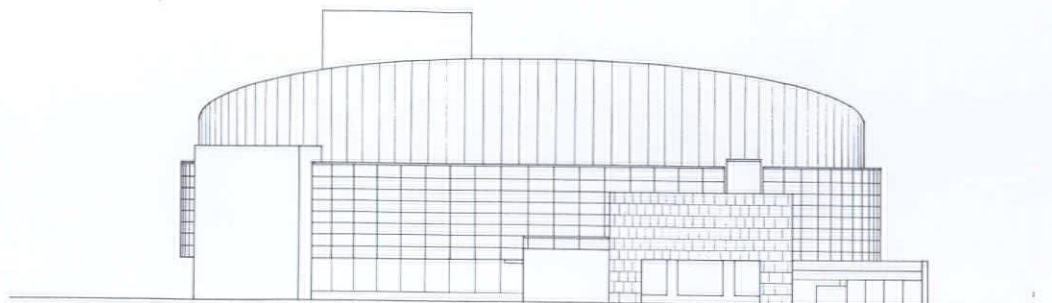
建築設計：柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所

敷地を公園と街路に囲まれた都市の中心に展開するこの計画は、埼玉県立近代文学館（仮称）と桶川市民ホール（仮称）との合築による施設そのものを一つの都市と見立て、円形のリング状に組み直すことによって建物の中にまで街並みを取り込み、外部との遠心的、求心的な双方の視覚的交流を生み出そうとするものである。エントランスのアトリウム空間を起点として各階で建物を周回する回遊廊下は、施設の諸機能を連続的に統合する街路に他ならず、諸室が番地によってその位置を確定されるという、まさに街並みとしてのシステムを備えることとなる。

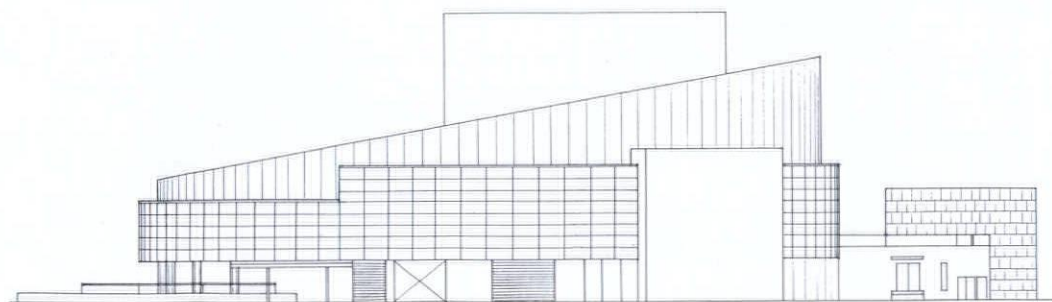
この街並みは、とりわけ文学館の諸室において敷地北側の公園との連携を強めている。1階および地下1階の展示室は、サンクンガーデンを介して公園と一体化する構えとなり、2階諸室も、ガラスカーテンウォールを介して公園の自然と一体化する。これは、自然との関わりの中に文学のための諸活動を位置づけようとの意図である。

一方市民ホールでは、日常的な街路空間から非日常的な劇場空間への求心的連携を確保することを意図して、回遊廊下から各機能諸室へのヒエラルキーが構築されている。その中心となるオーデトリウムでは、演劇やクラシック音楽という用途にフレキシブルに適合する音響条件を実現するために、このプロジェクト固有の新技術を開発してきた。それは、客席天井裏の大空間と客席空間とを音響的に隔離、接合させることにより、客席内の音場を各演目ごとに最適化させようとの試みであり、設計段階から施行に至る期間、綿密な模型実験、シミュレーション、そして現場実測を重ねた結果として、実現を目前に控えている。

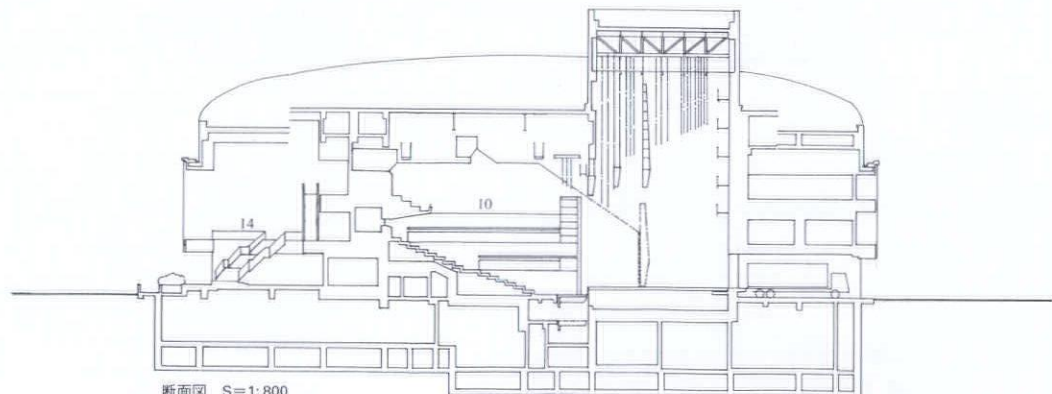
なお、本施設は名称を「さいたま文学館」、「桶川市民ホール」として開館を迎えることとなる。



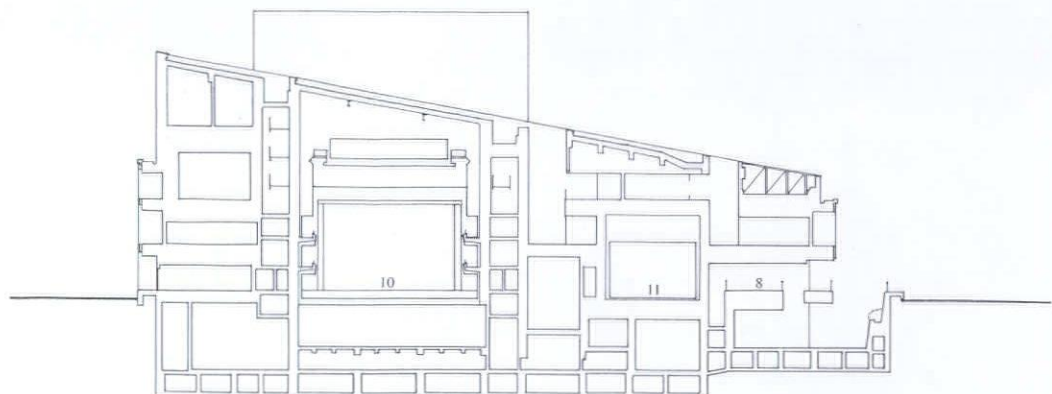
南立面図 S=1:800



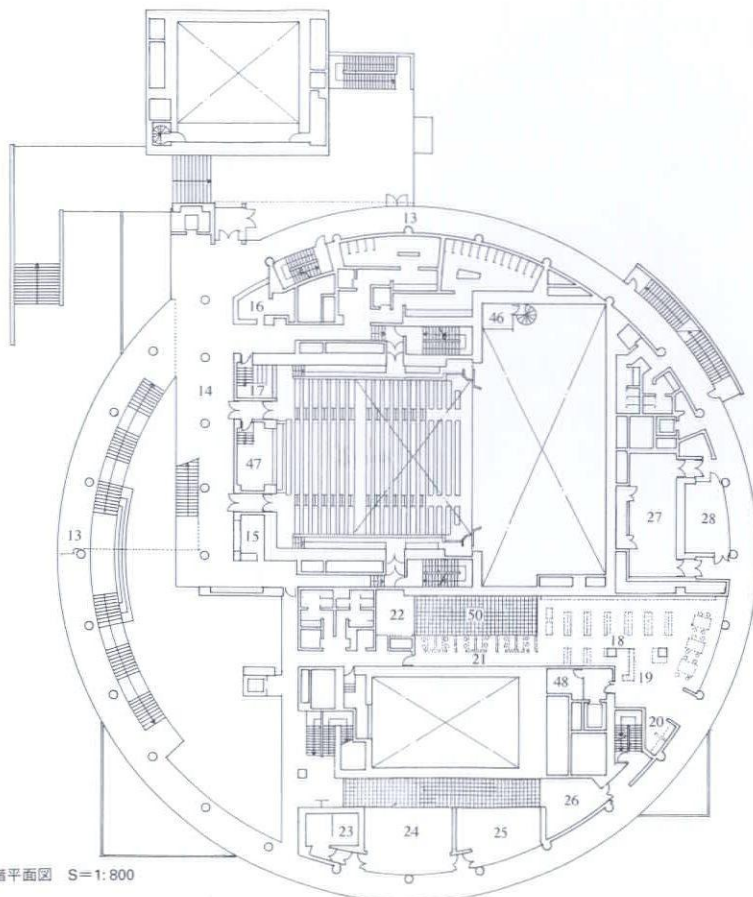
西立面図 S=1:800



断面図 S=1:800

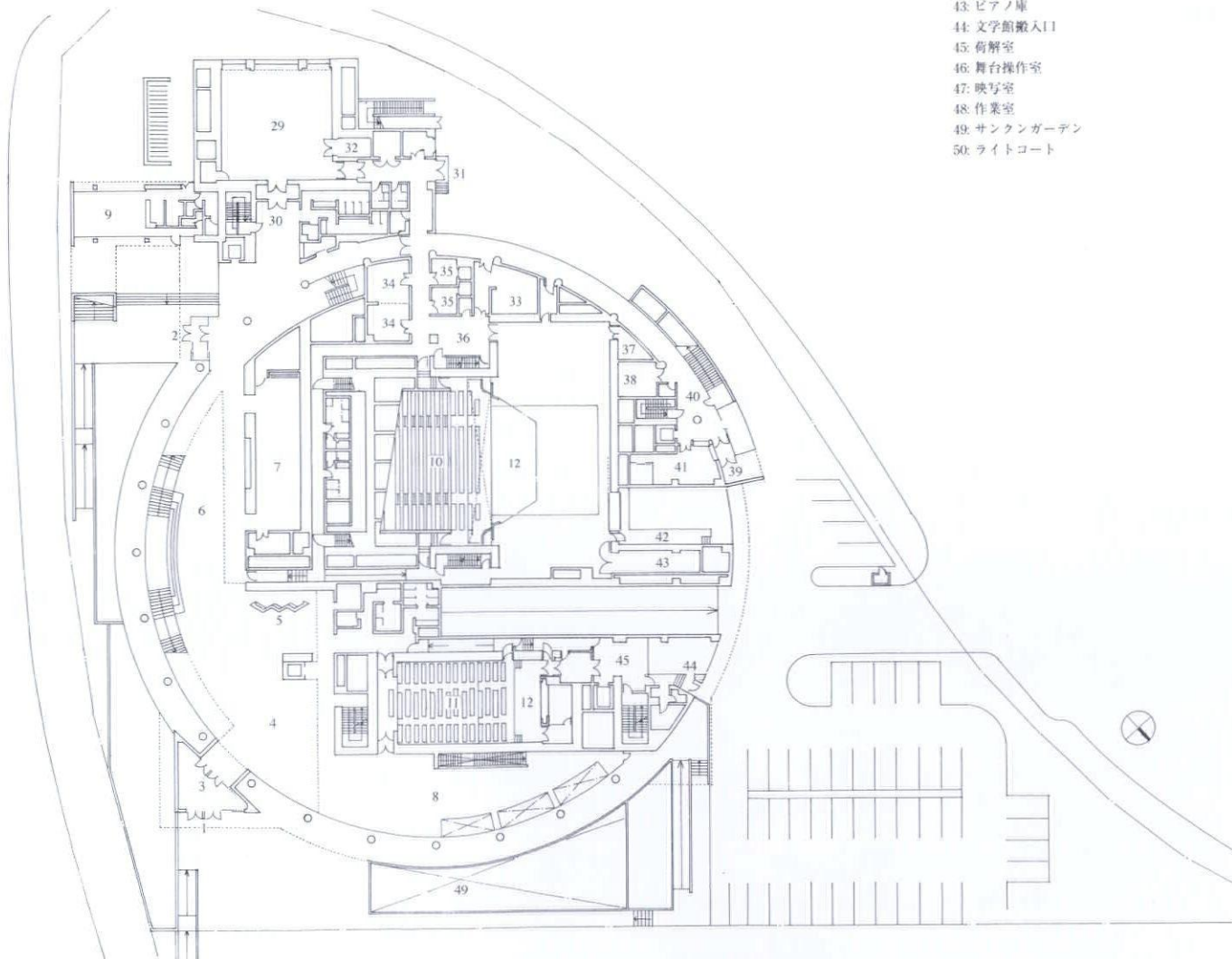


断面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800

- 1: メインエントランス
- 2: サブエントランス
- 3: 風除室
- 4: アトリウム
- 5: インフォメーション
- 6: ギャラリー1
- 7: ギャラリー2
- 8: 文学展示室
- 9: カフェ
- 10: 市民ホール
- 11: 文学ホール
- 12: 舞台
- 13: 回廊廊下
- 14: ホワイエ
- 15: ビュッフェ
- 16: クローク
- 17: 観客室
- 18: 文学図書室
- 19: レファレンス
- 20: AVコーナー
- 21: 学習ブース
- 22: 文学館託児室
- 23: 文学スタジオ
- 24: 文学講座室1
- 25: 文学講座室2
- 26: 文学館会議室
- 27: 大会議室
- 28: 小会議室
- 29: リハーサル室
- 30: リハーサル室ロビー
- 31: リハーサル室搬入口
- 32: ピアノ庫
- 33: 大楽屋
- 34: 中楽屋
- 35: 小楽屋
- 36: 楽屋ロビー
- 37: 舞台スタッフ控室
- 38: 委託業務控室
- 39: 通用口
- 40: 通用口ロビー
- 41: 防災監視室・守衛室
- 42: ホール搬入口
- 43: ピアノ庫
- 44: 文学館搬入口
- 45: 荷解室
- 46: 舞台操作室
- 47: 映写室
- 48: 作業室
- 49: サンクンガーデン
- 50: ライトコート



1階平面図 S=1:800

作品データ

新国立劇場

設計:

建築: 柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所/設計協力: Prof. Dipl. Ing. Harald Dcilmann (共同設計) Prof. Adolf Zotmann VDI (劇場技術コンサルタント) 川上喜三郎 (デザインコンサルタント) TL Yamagiwa Laboratory Inc. and Jules Fisher and Paul Maranz Inc. (照明デザインコンサルタント) Dr. Lco L Beranek (音響デザインコンサルタント) 本杉省三 (劇場計画コンサルタント) 清水裕之 (劇場計画コンサルタント)

舞台設備: 柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所、劇場工学研究所、永田音響設計/舞台設備設計協力: 小谷喬之助、吉井澄雄 (舞台統括): 本杉省三、小栗哲家、堀尾幸雄、真野純、三田村晴夫、伊藤久幸 (舞台機構)、奥畑康夫、服部基、室伏生大、磯野睦 (舞台照明) 本間明、高橋敏、本間俊哉 (舞台音響) 秋月宏文、中塩隆、八木亮敏 (技術協力)

所在地: 東京都渋谷区本町1-1他

主要用途: 劇場

敷地面積: 約25,500m²

建築面積: 19,489.29m²

延床面積: 68,879.22m²

構造: 鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造

杭・基礎: 場所打ちコンクリート杭、一部直接基礎

規模: 地下3階、地上5階、塔屋1階

駐車台数: 地下230台、地上4台、トラックヤード12台

外部仕上げ:

屋根: アスファルト防水コンクリート押え、スラブ下木繊維セメント板厚50打込/外壁: 花崗岩厚40WJ仕上 ボーダー: 花崗岩本磨及び機械ビヤン、コンクリート打放し杉小巾板本型枠 撥水性表面処理剤塗布/フライタウ: 45角ラスタータイル貼り/開口部: アルミカーテンウォール合金発色 合わせガラス厚8+8 熱反ストライプ加工/外構: 中国産インターロッキングブロック150×300×60バーナー磨 ボーダー: 花崗岩バーナー+WJ仕上

内部仕上げ:

[共通ロビー・中劇場ホワイエ]

床: トラベルチーノ・ローマ厚25本磨 ボーダー: フローリングナラ厚12ポリウレタン樹脂塗装/壁: コンクリート研仕上撥水性表面処理剤塗布 木壁: ホワイトオーク練付OS CL 柱: コンクリート打放し杉小巾板本型枠 撥水性表面処理剤塗布/天井: リップ付岩綿吸音板厚15

[オペラ・中劇場客席]

床: フローリンググナ厚12ポリウレタン樹脂塗装/壁: オークムク材厚30又はランバーコア厚30の上シルキーオーク練付OS CL/天井: オークムク材厚30又は不燃下地厚30の上オーク板練付OS CL

[オペラ・中劇場舞台]

床: 米松厚30OSウレタン塗装合板厚15捨貼/壁: コンクリート打放しEP 木織セント板厚50打込み/天井: GW厚50ガラスク

ロス押え

[大劇場ホワイエ]

床: フローリングナラ厚12ポリウレタン樹脂塗装 ボーダー: トラベルチーノ・ローマ厚25本磨 3、4階: カーペット厚7+フェルト厚8/壁: コンクリート研仕上 撥水性表面処理剤塗布 木リブ: オークCL/天井: リップ付岩綿吸音板厚15

[中劇場観客席]

床: フローリング ナラ厚12ポリウレタン樹脂塗装/壁: コンクリート打放しVP、スチールグリッドパイプOP 可動壁・後壁: 繊維混入ケイカル板 (リップ付) 色ラッカー塗装一部吸音スリット仕上/天井: PB厚12.5四層貼EP スリット: スチール曲げ加工OP、フラットメッシュ (25×50×3.2Φ)

[小劇場]

床: 米松厚30OSウレタン塗装 合板厚15捨貼/壁: ケイカル板厚8+8VP/天井: すのこ グレーチングアクリル樹脂焼付塗装

[小劇場ホワイエ・ロビー]

床: ゴムタイル厚4/壁: コンクリート研仕上 撥水性表面処理剤塗布、コンクリート打放しVP/天井: リップ付岩綿吸音板厚15

[小楽屋]

床: タイルカーペット/壁: 不燃クロス貼/天井: 岩綿吸音板厚12

[リハーサル室 (一般)]

床: ラウン合板 厚12+12OF 合板厚15捨貼 防振下地/壁: ケイカル板及び有孔ケイカル板EP (一部折版型) GW充填 防振下地

/天井: 岩綿吸音板及びケイカル板EP (折版天井) 防振吊、鋼製グリッド天井OP

東京オペラシティビル

設計:

建築: NTTファシリティーズ、都市計画設計研究所、柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所/企画・調整: 都市計画設計研究所/設計協力: 竹中工務店/高層棟実施設計協力: 日総建/音響コンサルタント: Dr. Leo L Beranek + 竹中工務店技術研究所/造園計画監修: 中島 健/商業施設企画: BAC-UP/サイン計画: GK設計/環境造形計画: 柳澤孝彦+小池 一子

所在地: 東京都新宿区西新宿3

主要用途: 事務所、商業施設、文化施設 (コンサートホール・音楽練習室・美術館・展示施設)

敷地面積: 44,091.60m² (街区全体)

建築面積: 13,936.07m²

延床面積: 242,014.85m² (1期部分: 221,098m²)

構造: 鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造

杭・基礎: 場所打ちコンクリート杭、一部直接基礎

規模: 地下4階、地上54階、塔屋2階

駐車台数: 637台 (1期分: 449台)

外部仕上げ:

屋根: コンサートホール: 亜鉛・ステンレス複合金属板段葺 高層棟: シート防水 (断熱工法) /外壁: 高層部花崗岩WJ貼乾式カーテンウォール 低層部花崗岩WJ打込PC板 50角磁器タイル アルミパネル/開口部: アルミサッシュ二次電解着色 ステ

ンレスサッシュ/外構: 花崗岩荒掘り

内部仕上げ:

[ガレリア]

床: 花崗岩荒掘り 砕石敷/壁: 花崗岩WJ花崗岩割石積 高透過合わせガラス熱反ストライプ加工/天井: 高透過合わせガラスリップ付岩綿吸音板

[アトリウム]

床: トラベルチーノ・ローマ厚25本磨 ピアンコ・カララ・ブルイレ本磨き/壁: クレマ・マルフィル本磨き/天井: 高透過複層ガラス PB EP

[コンサートホール]

床: 客席: フローリングナラ厚12 舞台: フローリングカバザクラ厚15/壁: オークムク材厚12~3 オーク突板練付/天井: 不燃ボード捨貼 オーク突板ケイカル板厚6

[ホワイエ]

床: トラベルチーノ・ローマ厚25本磨 ピアンコ・カララ・ブルイレ本磨き/壁: トラベルチーノ・ローマ厚25本磨 ピアンコ・カララ・ブルイレ本磨き ガラス繊維入クロス貼EP/天井: PB EP

[リサイタルホール]

床: フローリングナラ厚12/壁: ナラ練付ケイカル板/天井: 岩綿吸音板 (平板+キューブ)

三鷹市芸術文化センター

設計:

建築: 柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所、劇場工学研究所/設計協力: Dr. Leo L Beranek (音響デザインコンサルタント) 実施設計、監理: 川上喜三郎 (デザインコンサルタント) 基本計画

所在地: 東京都三鷹市上連雀6-12-14

主要用途: 劇場

敷地面積: 5,329.93m²

建築面積: 3,043.58m²

延床面積: 9,983.07m²

構造: 鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎: 直接基礎

規模: 地下2階、地上3階

駐車台数: 49台 (2段式駐車18台を含む)、トラックヤード1台

外部仕上げ:

屋根: ホール棟: ステンレス鋼板厚0.8 (ラジアル加工) フッ素樹脂焼付塗装 エントランス・事務棟: アスファルト防水コンクリート押え/外壁: ホール棟: 特注磁器タイル (L型187×30)、リブ部化粧型枠コンクリート打放し出目地仕上げ エントランス・事務棟: アルミパネル厚3二次電解着色、アルミ押出型材二次電解着色/開口部: アルミサッシュ押出型材二次電解着色、フロートガラス (一部特殊フロスト加工) /外構: 砕石洗出し平板、砕石敷、ボーダー: 御影石割肌仕上げ、バーナー仕上げ フェスティバルスペース: 砕石洗い出し一部陶板割タイル敷

内部仕上げ:

[エントランスホール]

床: ピアンコ・カララ本磨き仕上げ ボーダー: フローリングナラ厚12/壁: 特注磁器タイル (L型187×30) /天井: 木練付不

燃板小幅度目透し張り

[中ホール]

床: 客席: フローリングナラ厚15、ウレタン塗装 舞台: フローリングカバザクラ厚15、ウレタン塗装/壁: 木練付不燃板 (パネル仕様、リブ仕様) アクリル樹脂モルタル骨材入り木ゴテ仕上/天井: PB EP

[小ホール]

床: 客席: タイルカーペット

舞台: ヒノキ集成材厚30、ウレタン塗装/壁: 特注磁器タイル (凸型180×32) /天井: PB EP

[美術創作室]

床: フローリングナラ厚15、ウレタン塗装/壁: ガラスクロス EP/天井: 岩綿吸音板

[音楽練習室]

床: フローリングナラ厚15、ウレタン塗装/壁: 木練付不燃板 (一部有孔板) /天井: 岩綿吸音板

埼玉県立近代文学館 (仮称) および桶川市民ホール (仮称)

設計:

建築: 柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所

所在地: 埼玉県桶川市若宮1-101-82他

主要用途: 文学館および劇場

敷地面積: 9,391.05m²

建築面積: 5,147.19m²

延床面積: 13,281.53m²

構造: 鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造

規模: 地下2階、地上4階

駐車台数: 地下49台、地上47台

外部仕上げ:

屋根: 傾斜大屋根: シート防水の上、アルミ化粧ルーバー アトリウム屋根: アスファルト防水の上、透水性コンクリート舗装/外壁: カーテンウォール上部: 45角特殊リブ付二丁掛磁器質無釉タイル カーテンウォール下部: 化粧コンクリート打放仕上 リハーサル棟: 花崗岩厚30JB仕上/開口部: カーテンウォール: アルミ型材陽極酸化皮膜の上、合成樹脂クリアー塗装 特殊断熱複層ガラス 一般部: アルミサッシュ/外構: 花崗岩厚30JB仕上、透水性コンクリート舗装

内部仕上げ:

[市民ホール]

床: 客席: フローリングナラ厚15、合板厚12捨貼 舞台: ヒノキ集成材、着色保護塗装、合板厚15捨貼、GW厚25/壁: 化粧コンクリート打放仕上、傾斜壁研り仕上 バルコニー: 不燃化粧ボードの上木練付 (リブ付) /天井: 化粧コンクリート打放研り仕上、曲面FGボードEP

[文学ホール]

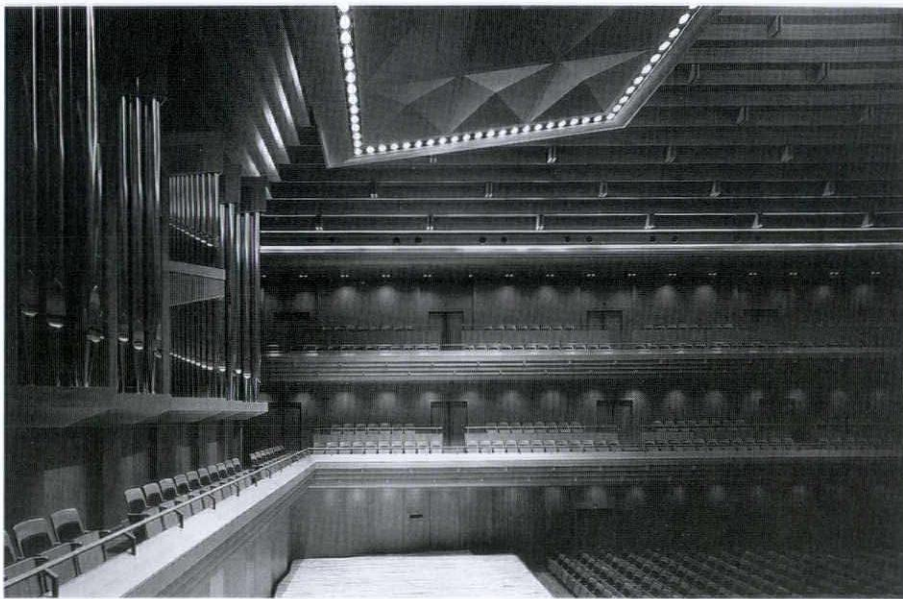
床: 客席: タイルカーペット 舞台: ヒノキ集成材、着色保護塗装、合板厚15捨貼/壁: 化粧コンクリート打放研り仕上 (リブ付)、木練付ケイカル板 後壁: 木練付有孔板 (リブ付)、GW/天井: 岩綿吸音板

- 音のデザイン
- 光のデザイン
- 地勢のデザイン
- 素材のデザイン

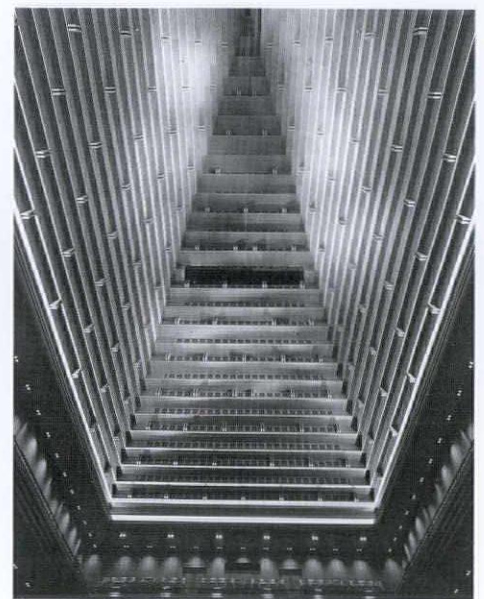
高度に情報化が進展する現代では、全てを識ることができるといっても過言ではない程の情報の波の中にいる私たちが、しかしそこには、自身の体を震わせるようなときめきや感動が、いつしか遠のいてしまったことに気が付くこの頃である。この時にこそ、自らの体を震わせる芸術的営為によって新たな未知に挑み、そこに自身の存在を発見すべき時だといえる。劇場こそはまさにその格好な人間性回復の舞台として真に人間の力に出会える場所となろう。それにはいかに濃密な世界をそこに立ち上げることができるかが重要で、それは触覚的な空間とでもいうべき五感が活き活きと流通するものにちがいないと考えている。

音

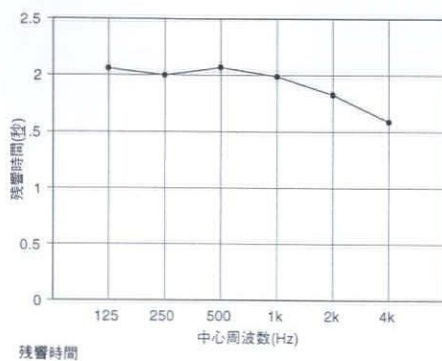
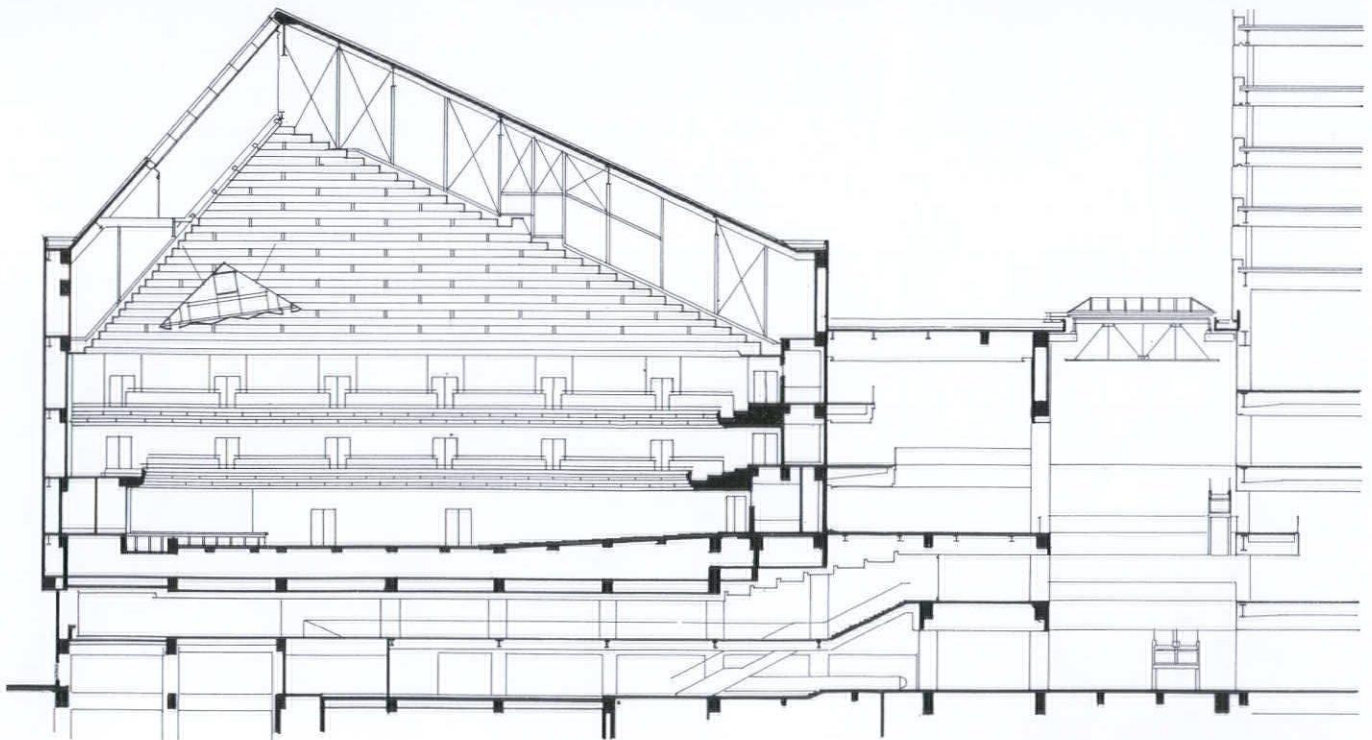
東京オペラシティビル：コンサートホール



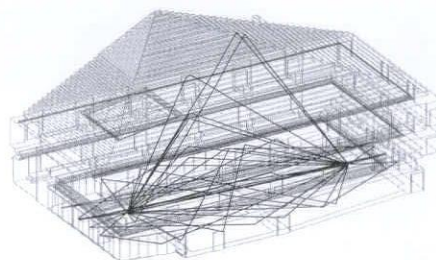
ステージ廻り



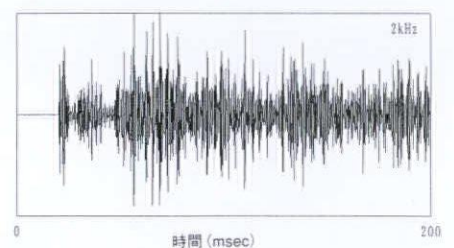
天井形状



残響時間

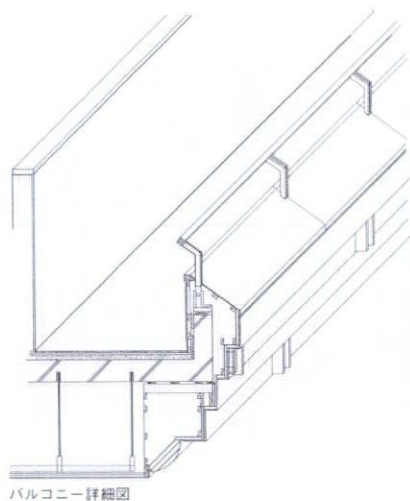


音線図

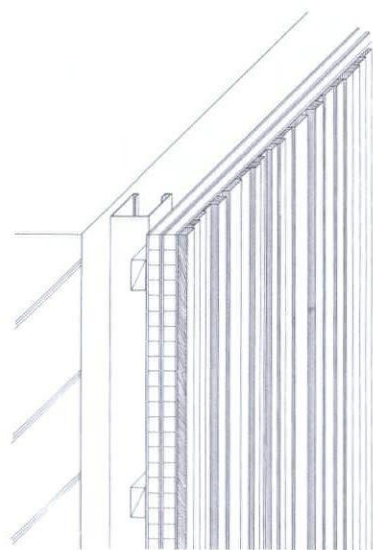
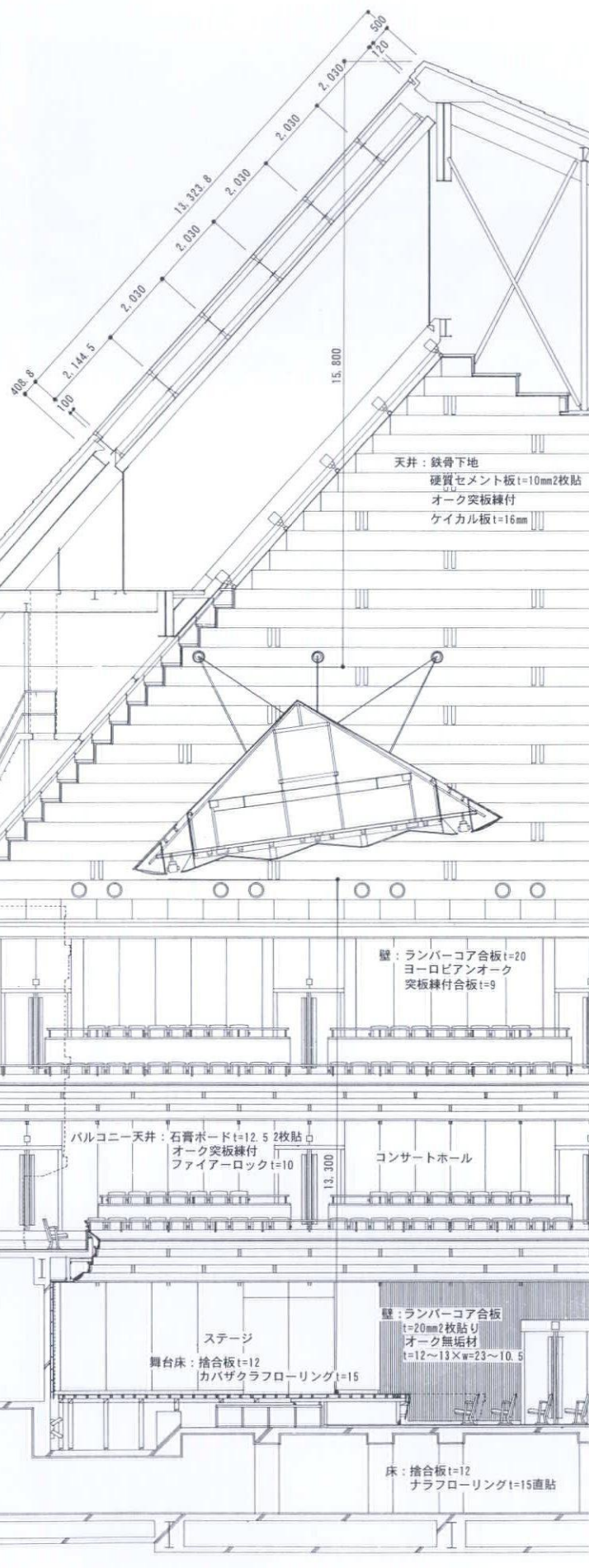


リフレクトグラム

※ここに示す音響データは、音響的条件が厳しいとされる平土間階の席におけるものを表した



バルコニー詳細図

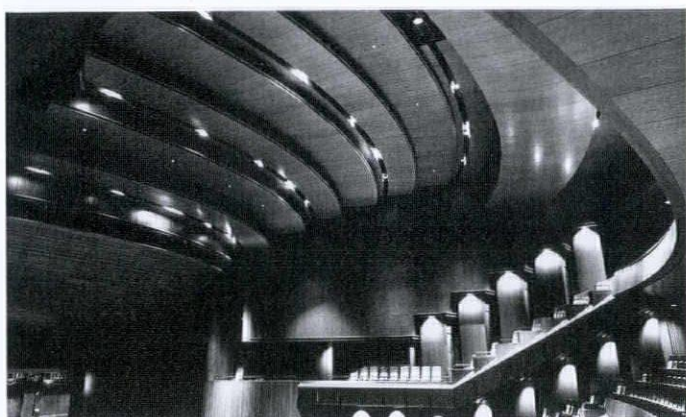


ディフュージョン詳細図

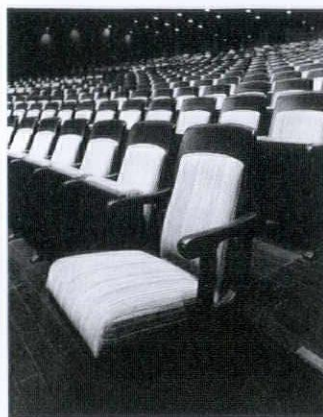
ステージ廻り矩計図 S=1:160

音

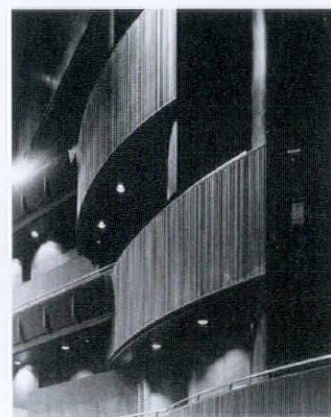
新国立劇場：オペラ劇場



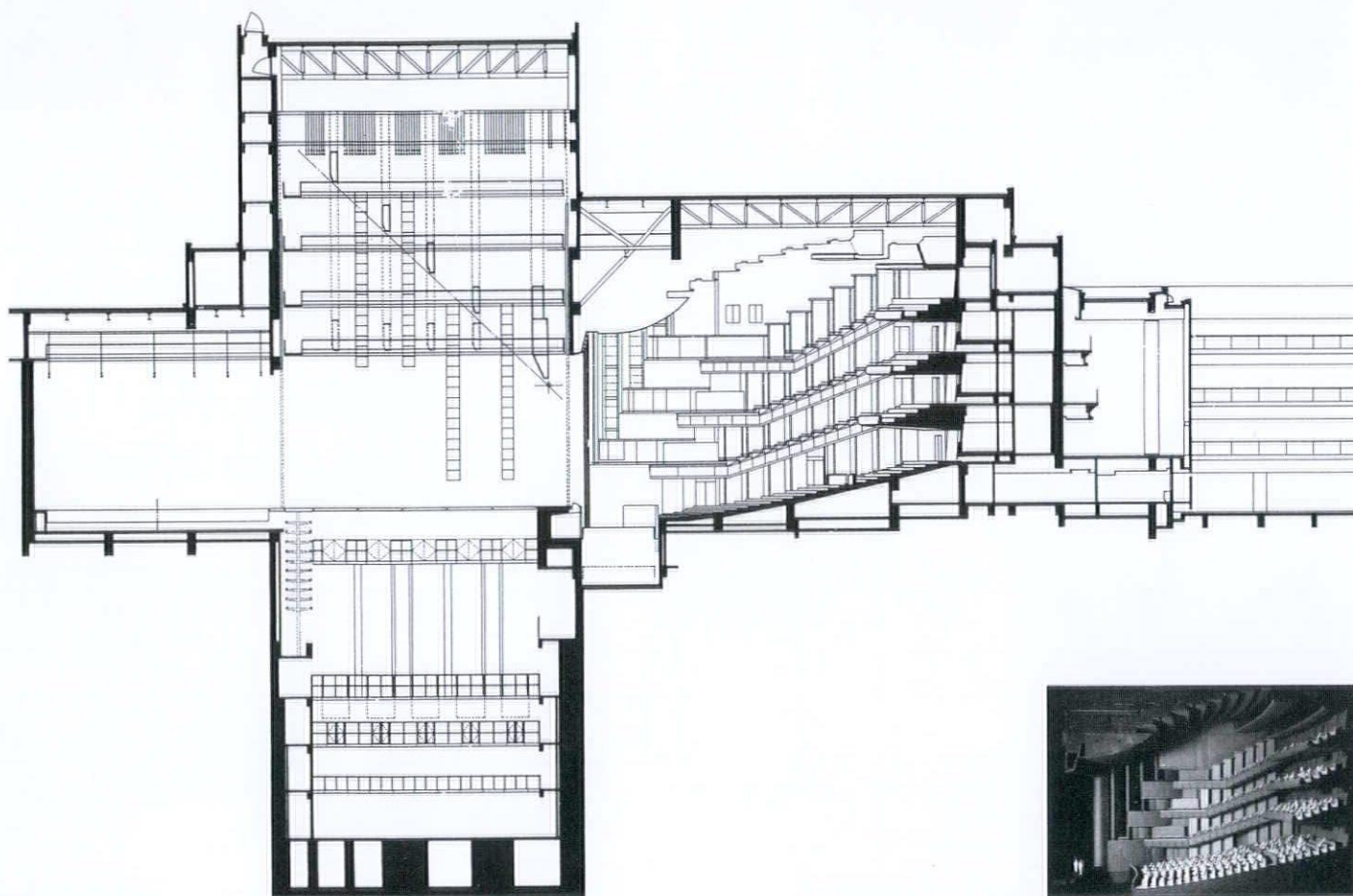
天井形状



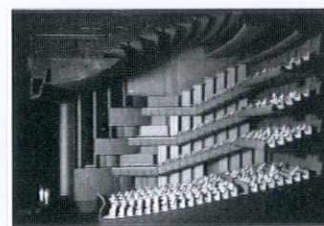
観客椅子



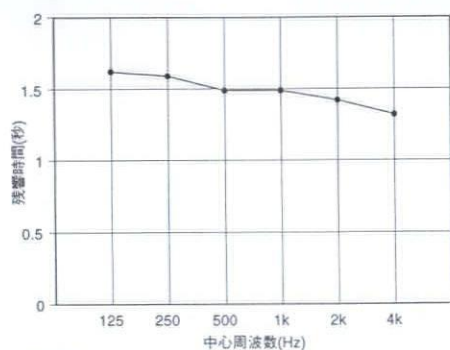
バルコニー先端部音響反射壁



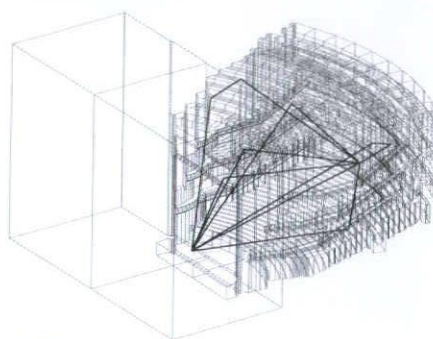
断面図 S=1:600



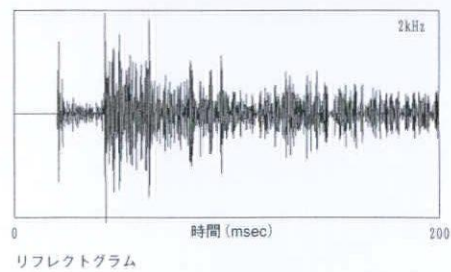
模型

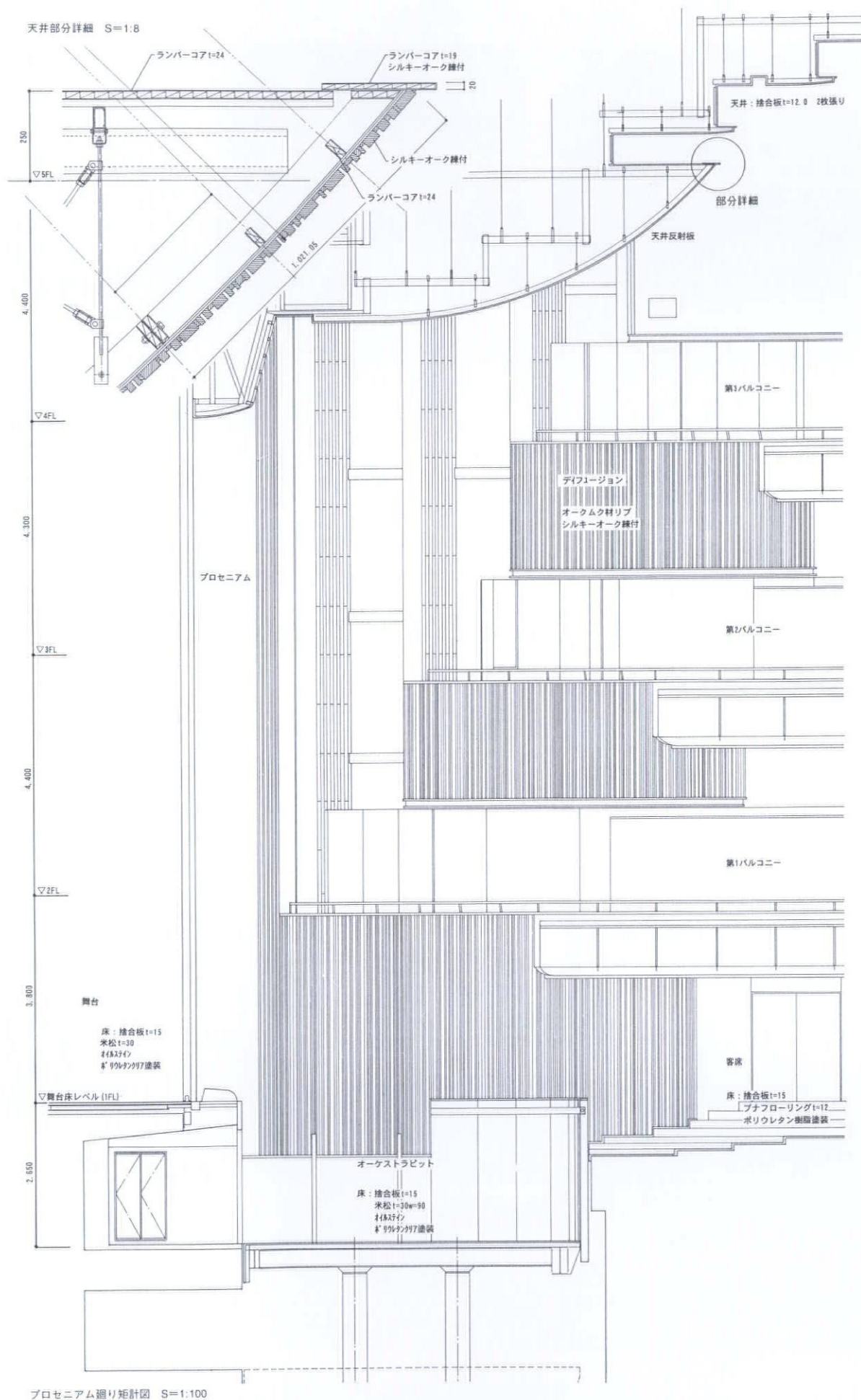


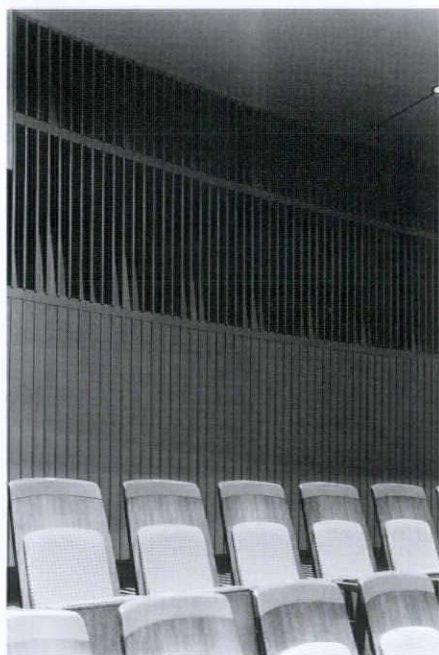
残響時間



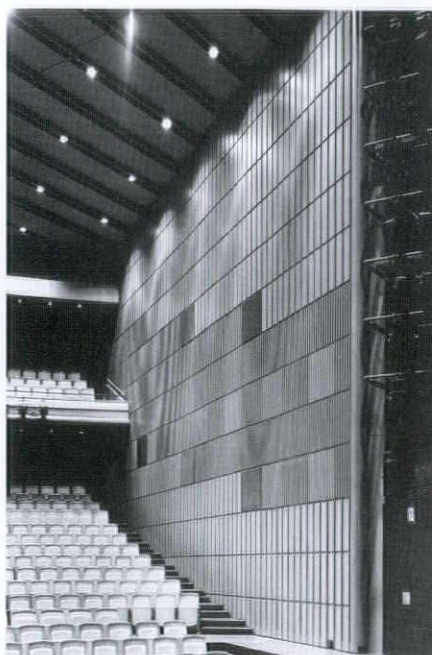
音線図



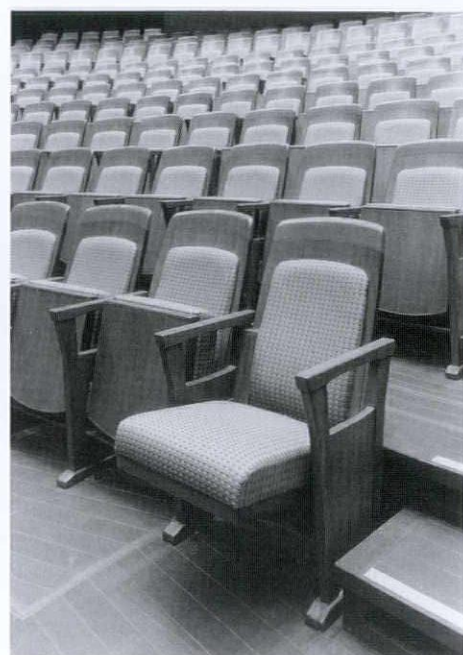




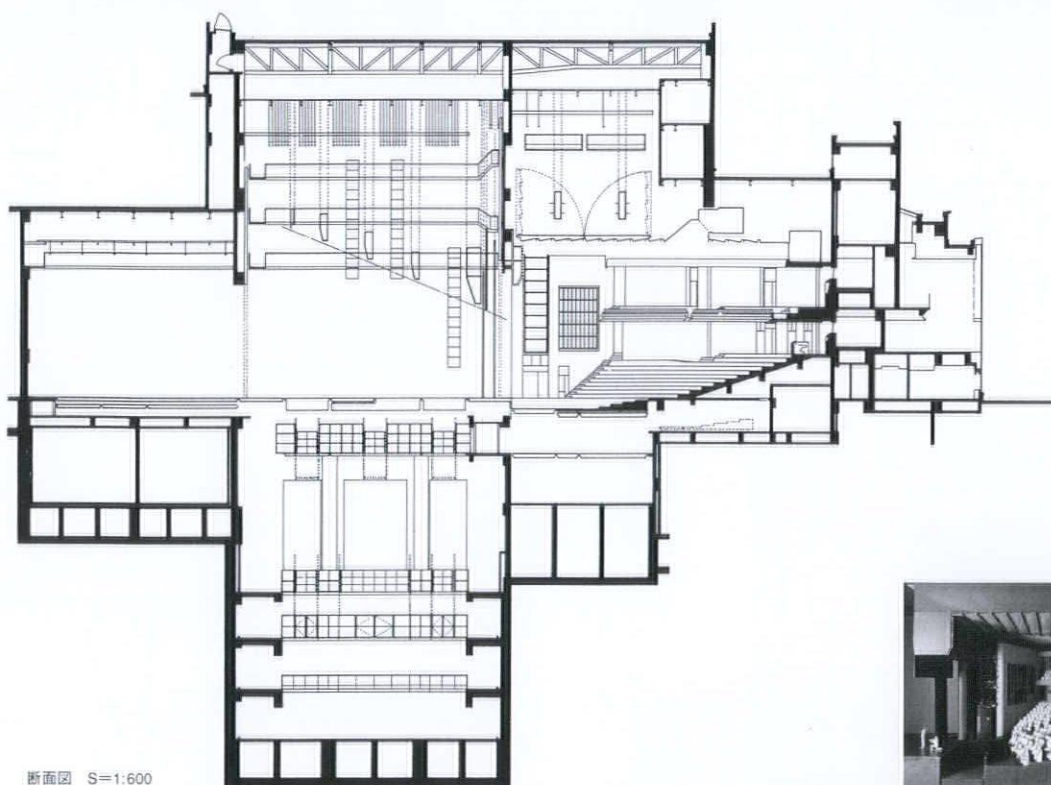
後壁部吸音用QRD壁



可動側壁



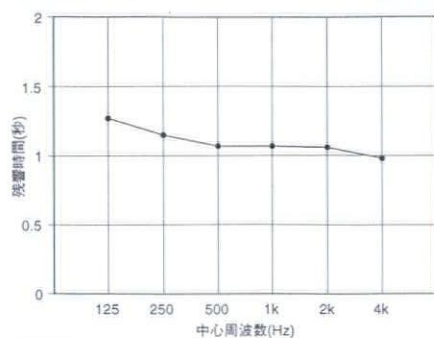
観客椅子



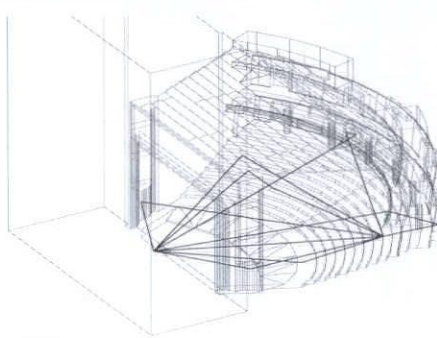
断面図 S=1:600



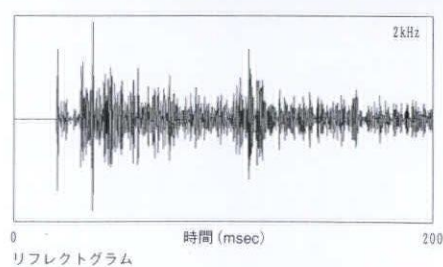
模型



残響時間
SD9706
64

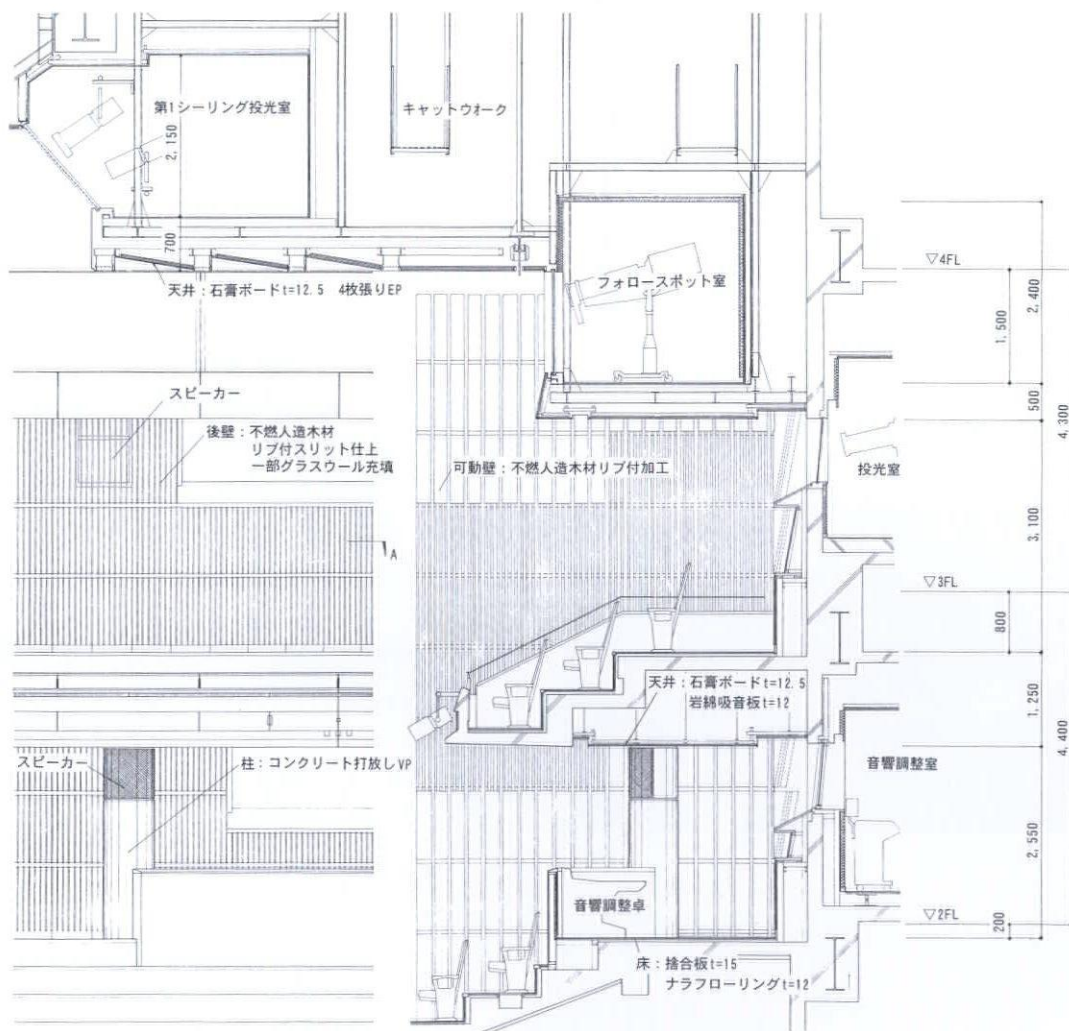
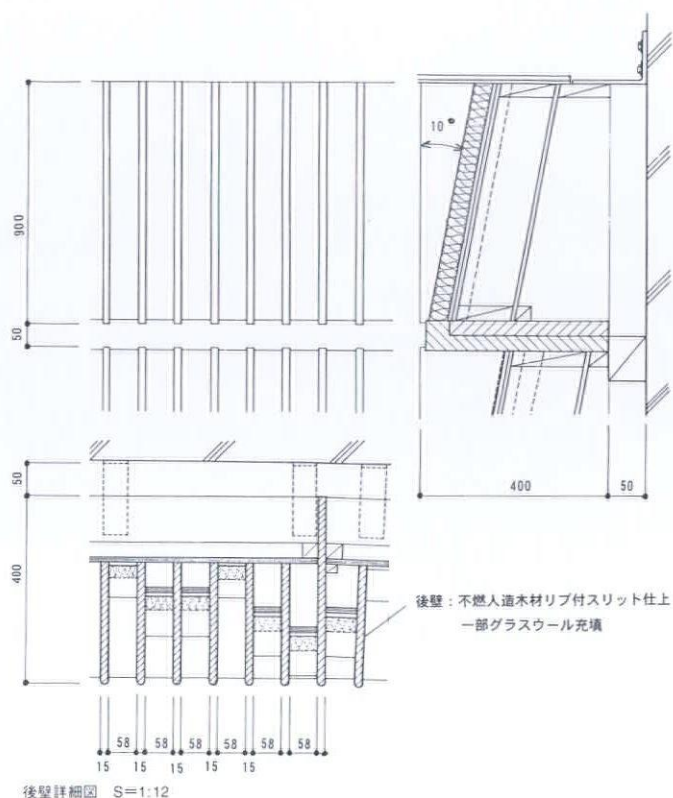


音線図

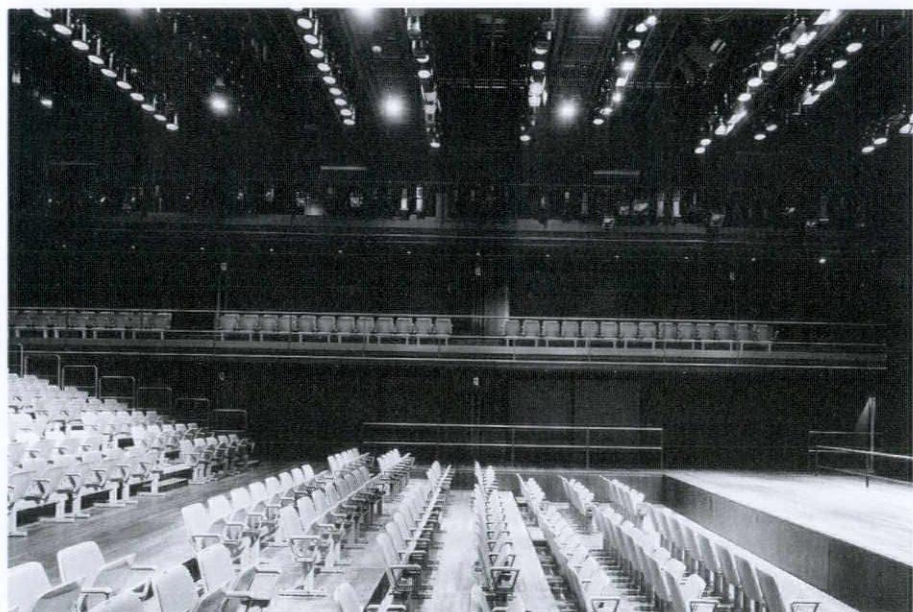




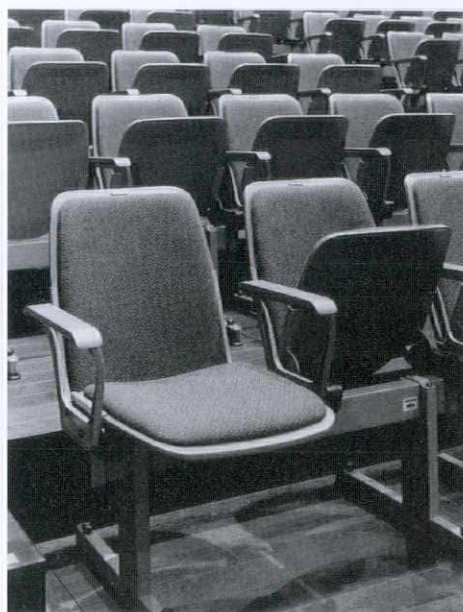
舞台より客席を見る



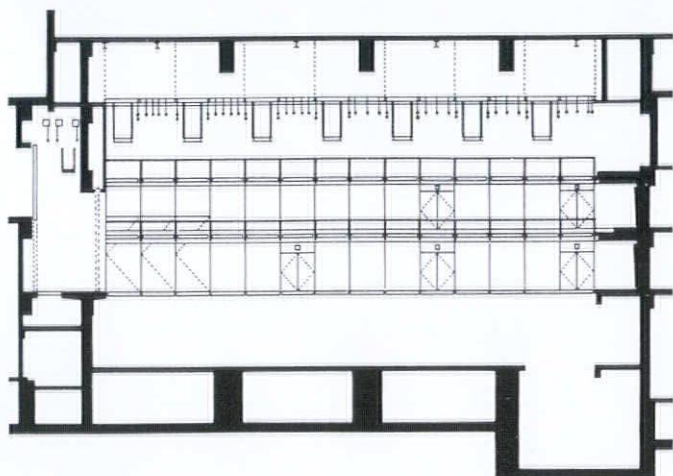
後壁廻り矩計図 S=1:100



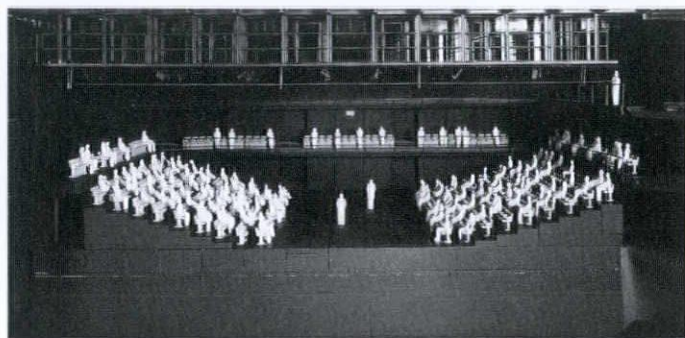
エンドステージパターン



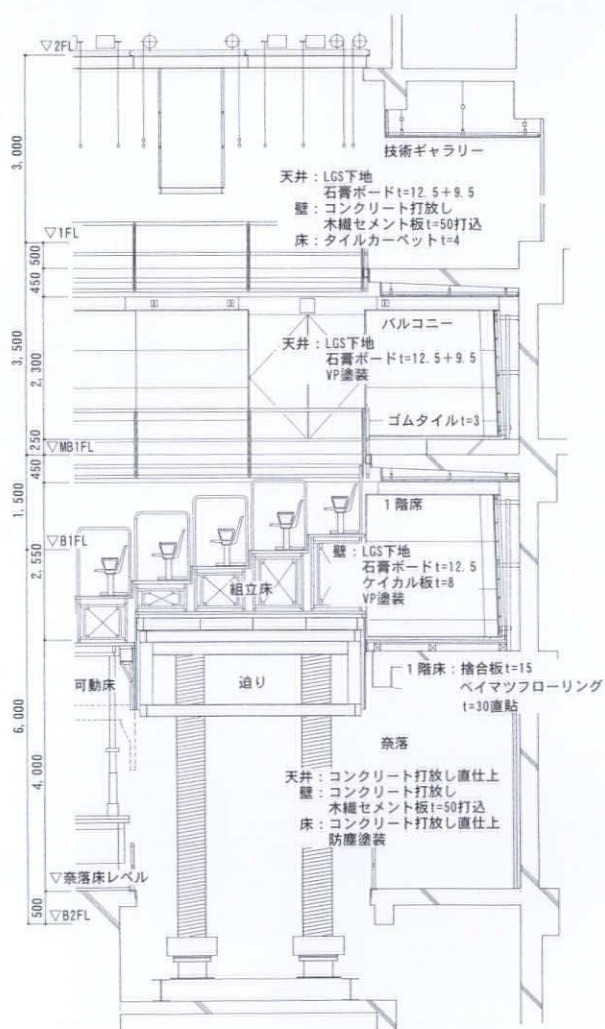
観客椅子



断面図 S=1:400

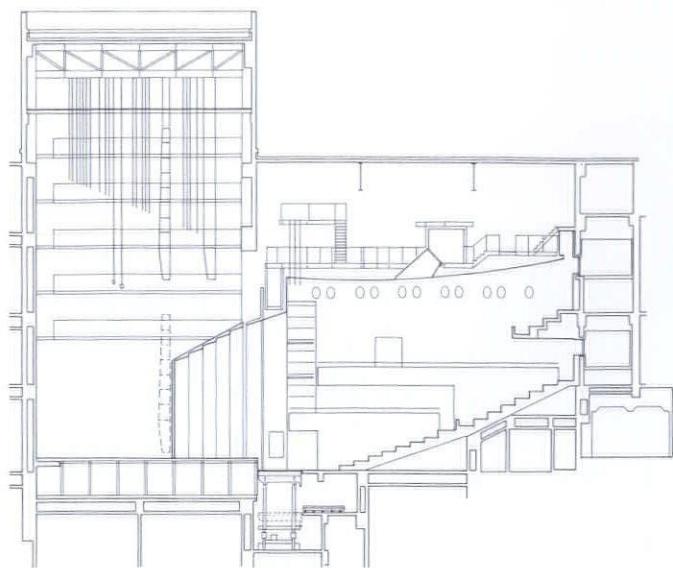


模型

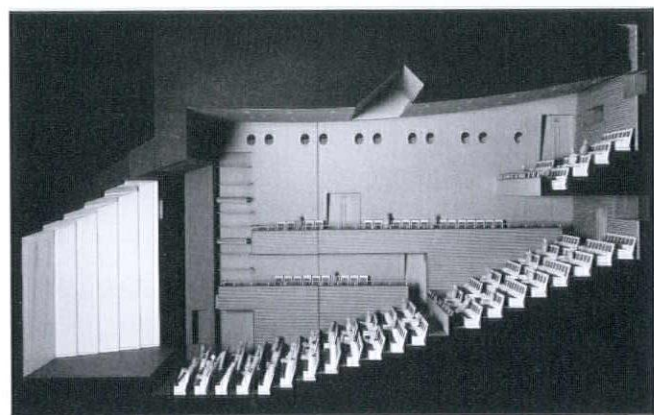


音

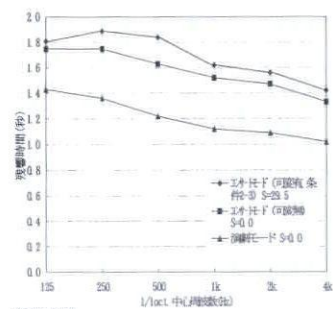
桶川市民ホール(仮称)



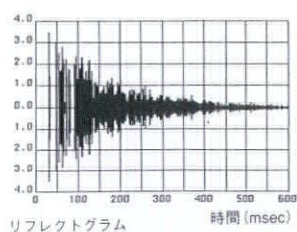
断面図 S=1:500



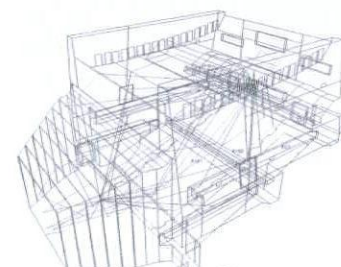
模型



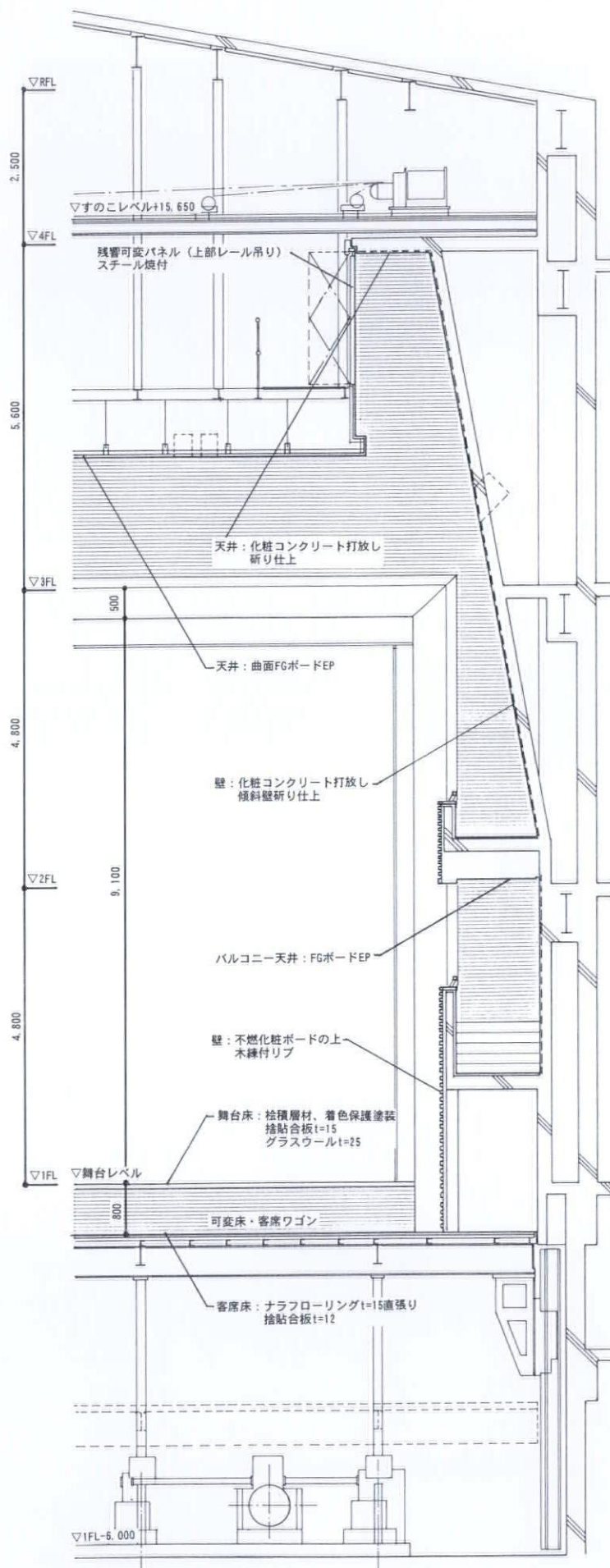
残響時間



リフレクトグラム



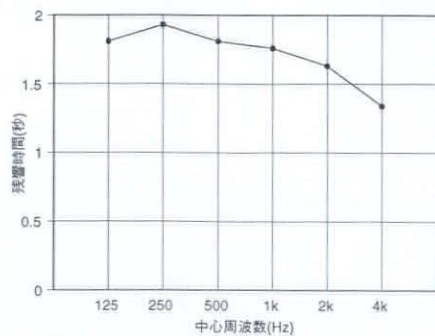
音線図



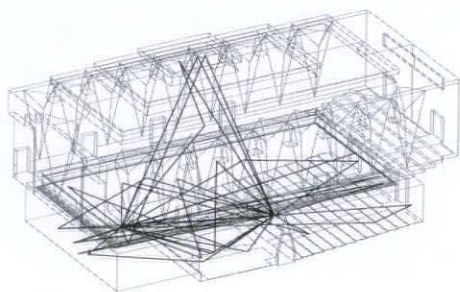
後壁廻り矩計図 S=1:100



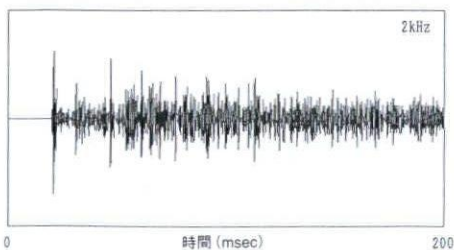
音響拡散効果をもつ壁面デザイン



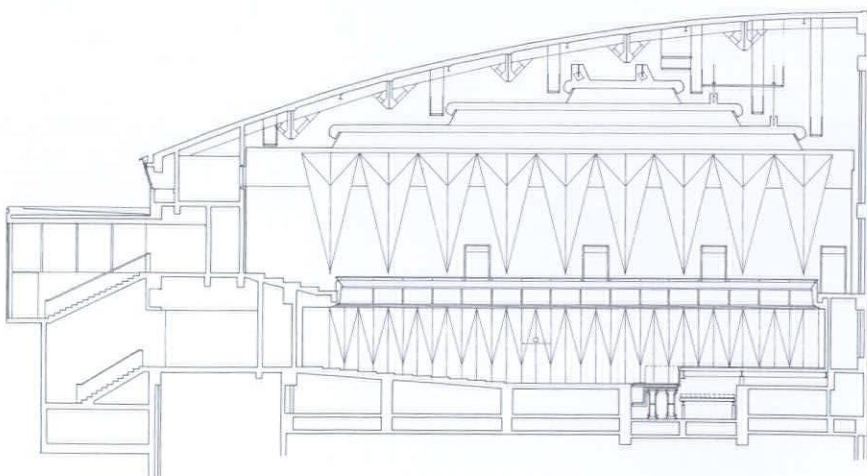
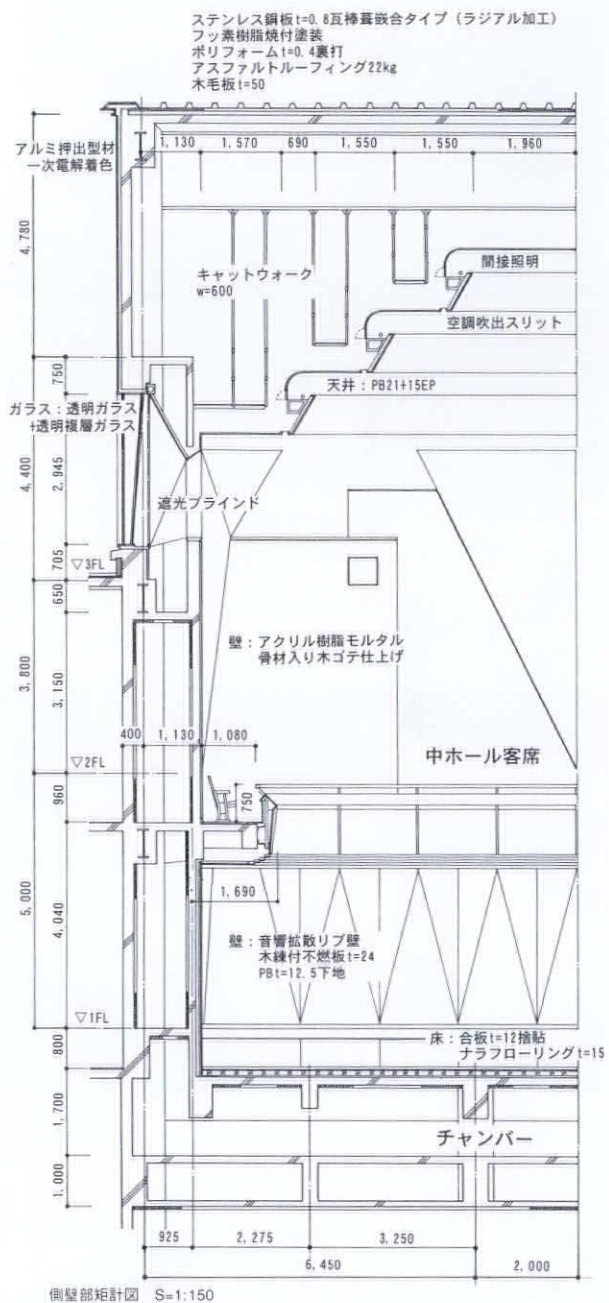
残響時間



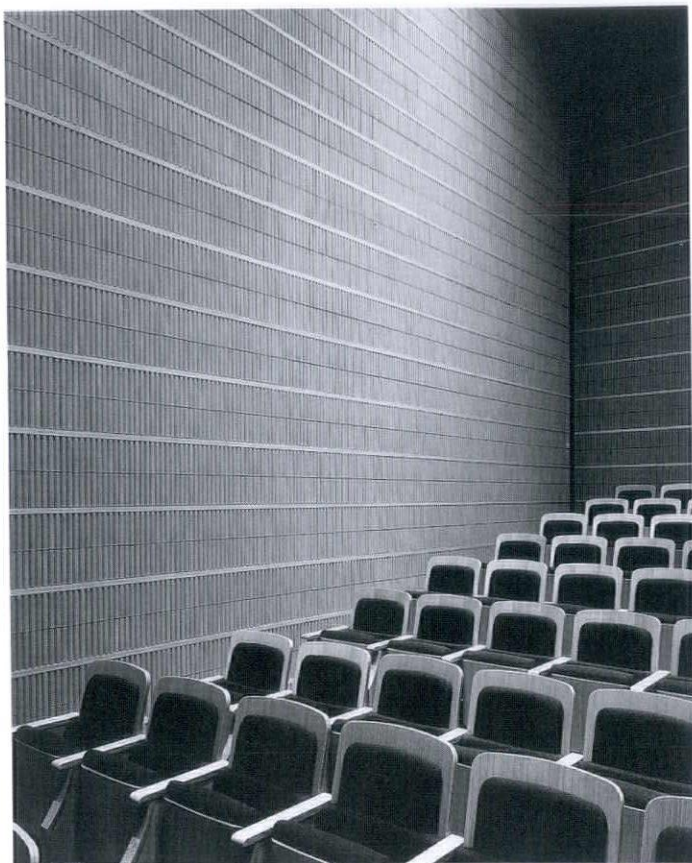
音線図



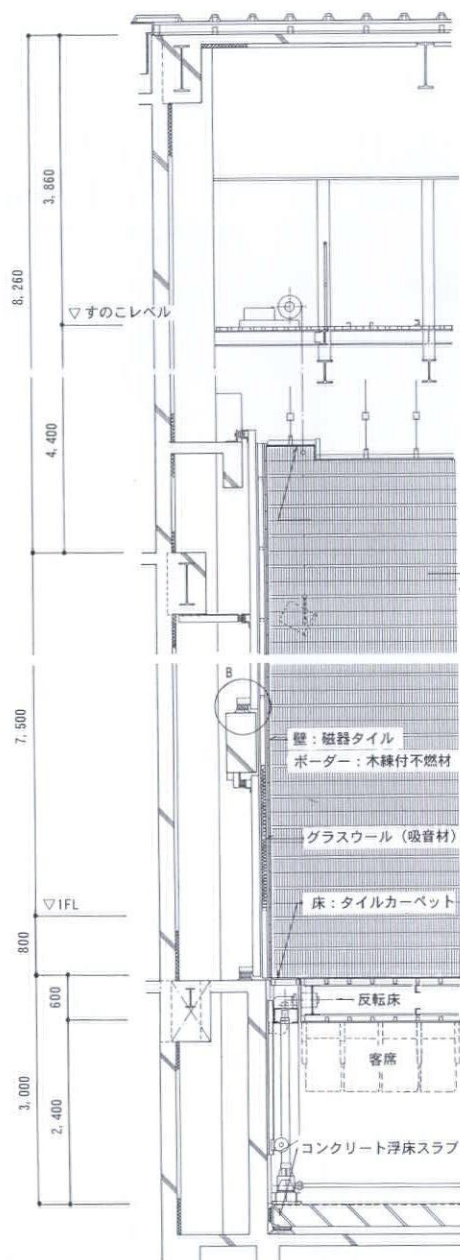
リフレクトグラム

SD9706
68

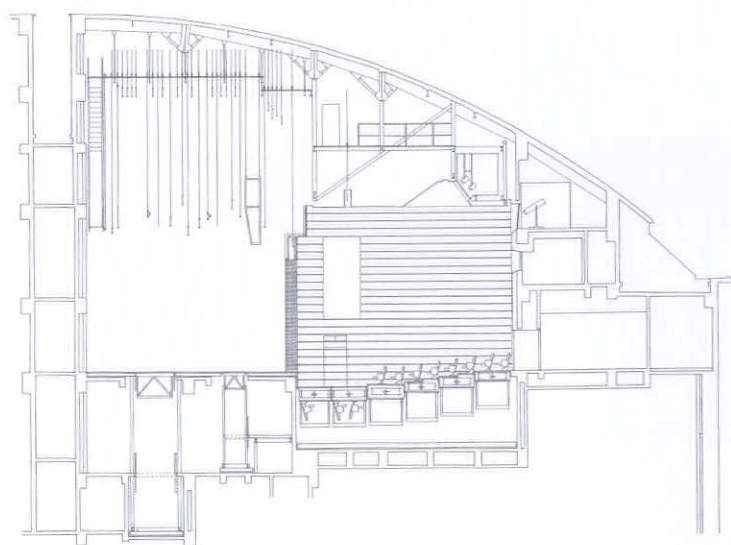
断面図 S=1:400



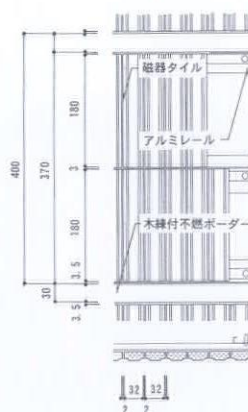
吸音性能を持つタイル空目地壁



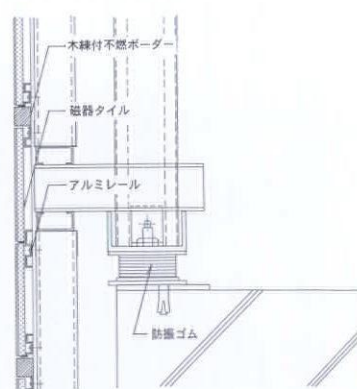
側壁部矩計図 S=1:100



断面図 S=1:400



タイル壁詳細図 S=1:12



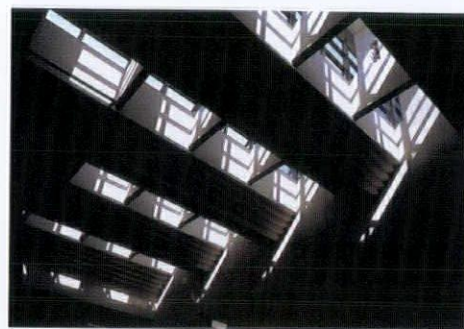
防振部詳細図 S=1:12

光

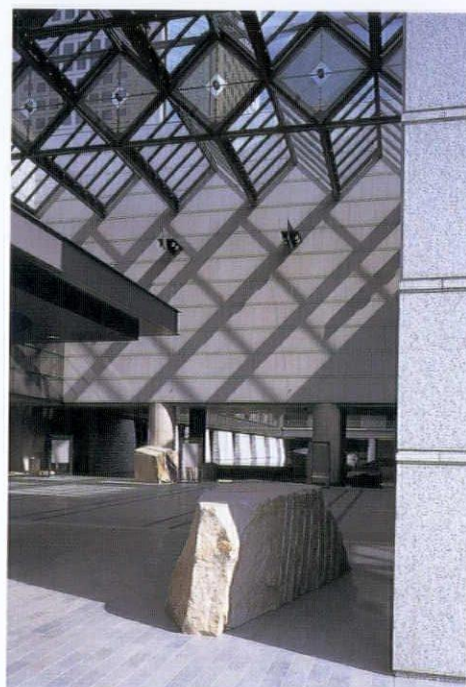
新国立劇場、東京オペラシティビル



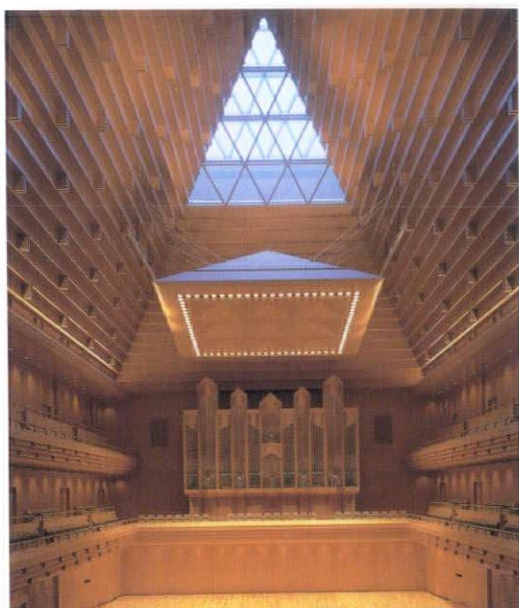
点在する光たちが空間に劇場性を立上げる。人工光は建築に異界を際立てる格好な道具立てだ



光と影の変化は次々に情景を発展させて
プロムナードを演出する



射し込む光は素材の力を照らし出して空間を確立する



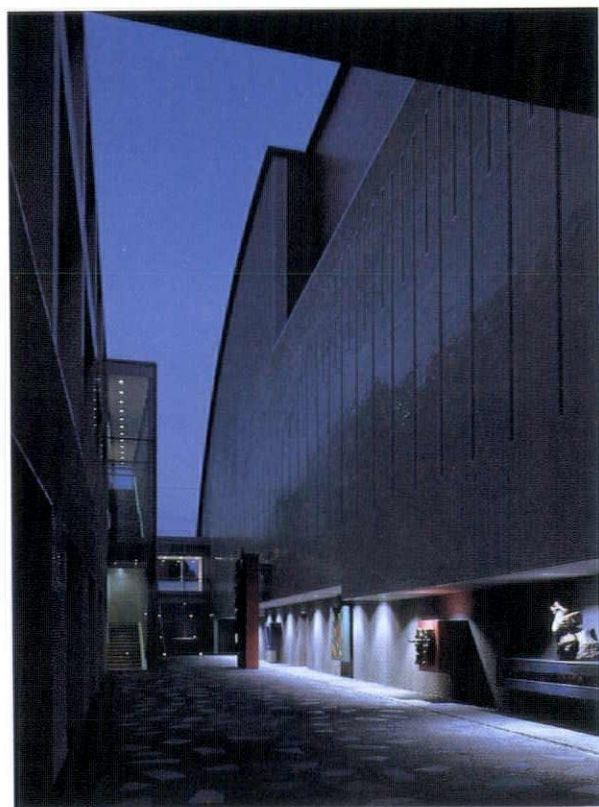
降りそそぐ光は、音までも照らし出すかのように緊張ある
感応の世界を築く



光と影のリズムが大階段のステップと同調して
空間にリズムを奏でる

光

三鷹市芸術文化センター



ダイナミックな曲線が空を切り取り固有な世界をつくる



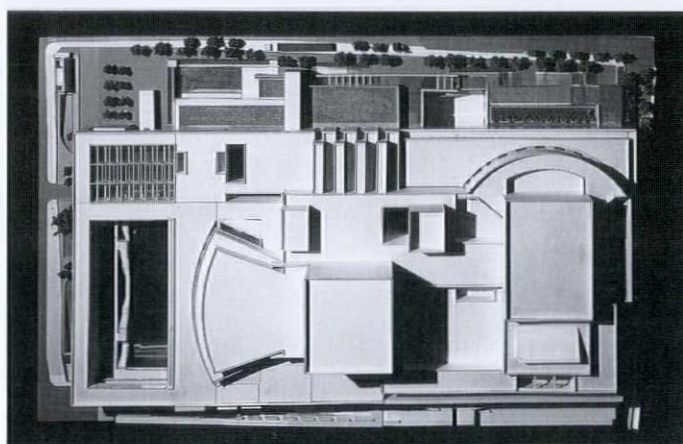
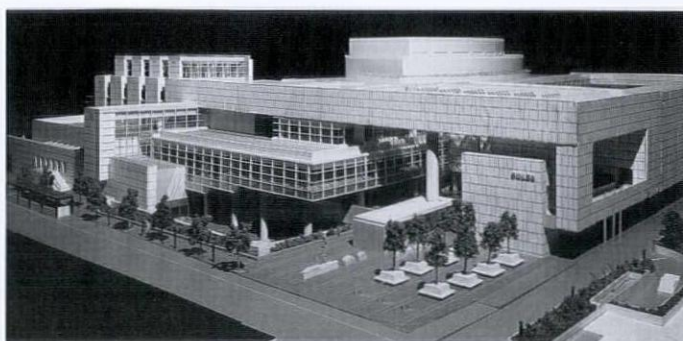
光を砕くタイルの腰が壁の量感を際立てる

地勢

新国立劇場、東京オペラシティビル



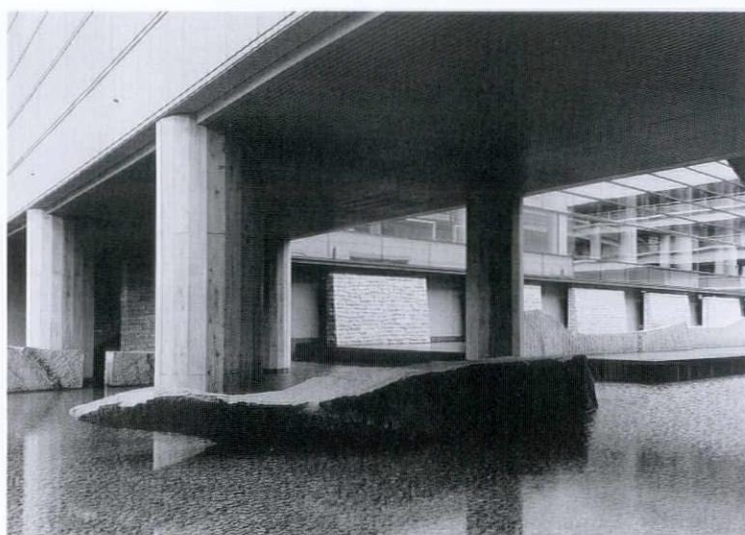
劇場性は都市へ向けて発展する



都市を引き込んだダイナミックな空間構成



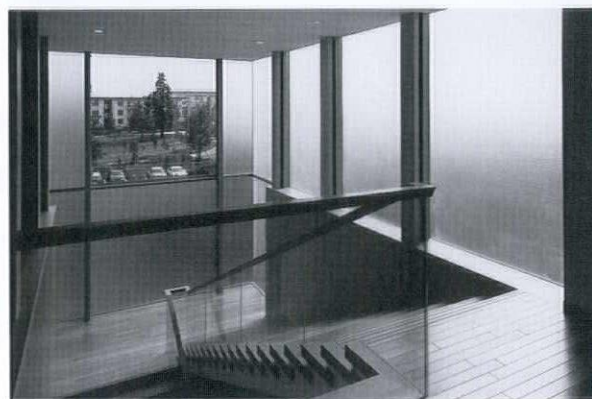
「坂の街」を引き込んだダイナミックな空間



石や水は大地を表現する。水は重力による水平面を、
石は重力による垂直のベクトルを交差させる

地勢

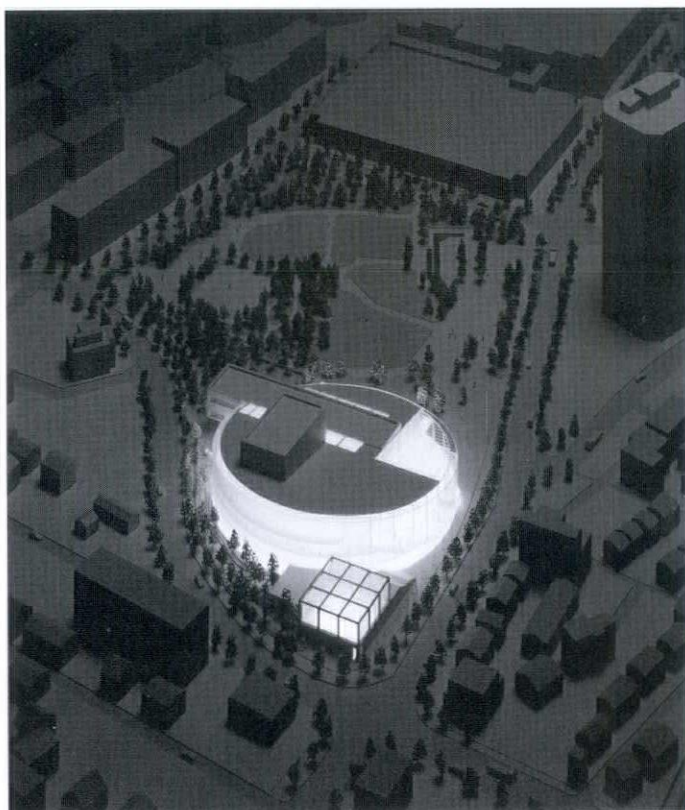
三鷹市芸術文化センター



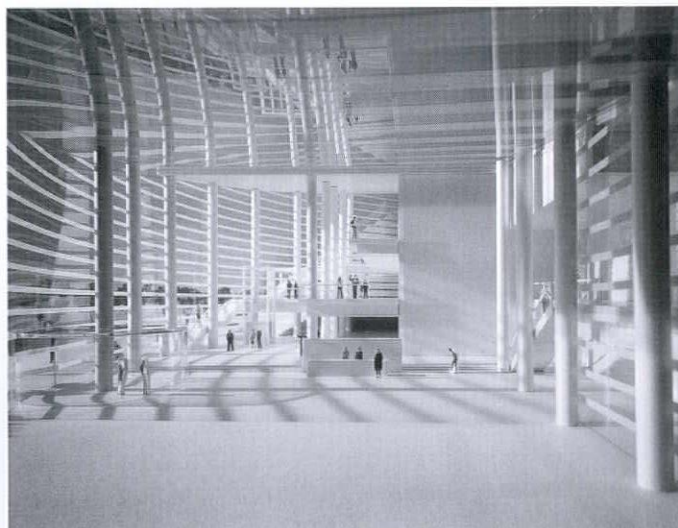
建物の中央を縦断して掘り取って建物を土地に深く組み込ませ、土との結びつきを空間化したダイナミックな構成

地勢

埼玉県立近代文学館(仮称)および桶川市民ホール(仮称)



建物自体が「円形都市」となり周辺環境を一体化する



空間相互の視覚的交流はアトリウムに「劇場性」を発生せしめる

素材

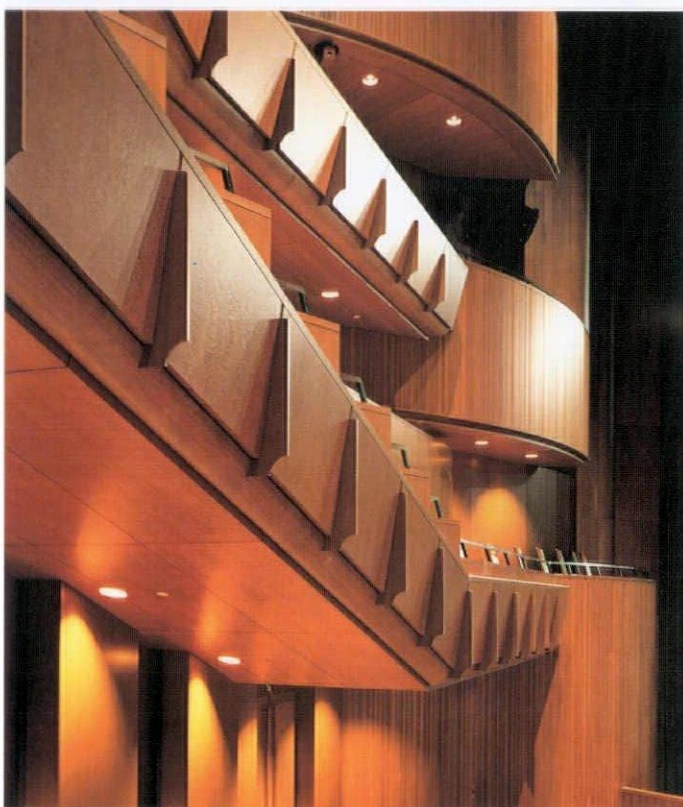
新国立劇場、東京オペラシティビル



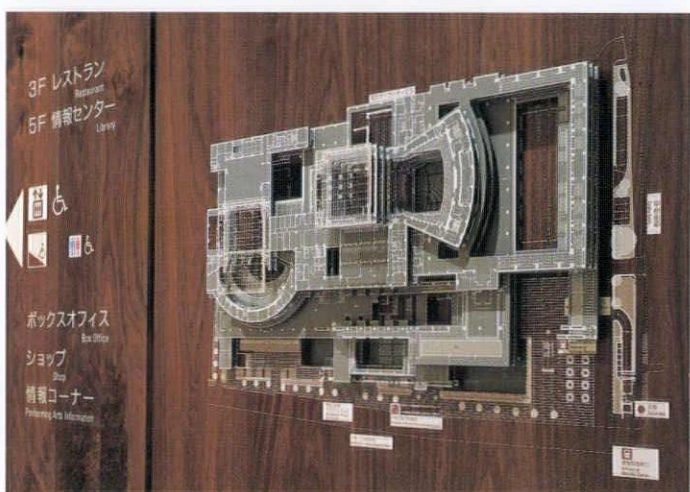
コンクリート打放しは構造体の力を率直に表現する



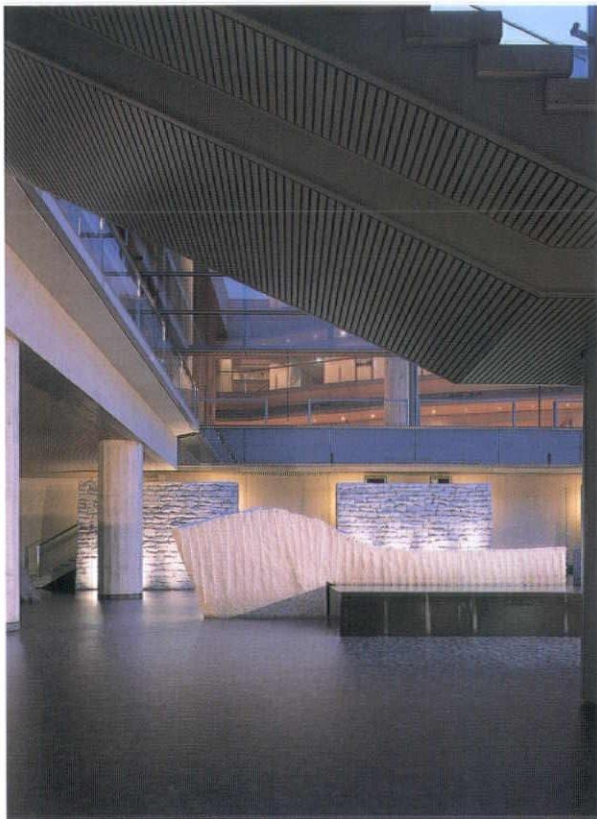
コンクリート打放し磨り仕上げは光を碎く影が構造的な力の表現を際立てる



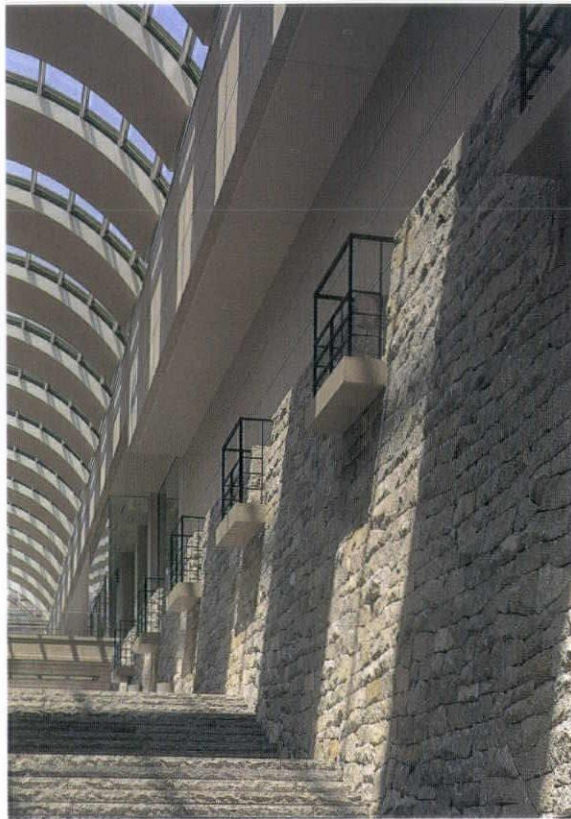
ホールを覆いつくす木理が放つかすかな光の変化



コンクリート打ち放しに対する木製サイン板



巧まざる石の造形と波立つ水面は思わぬ自然の表情を向けてくる



石の重力が大地を象徴する

素材

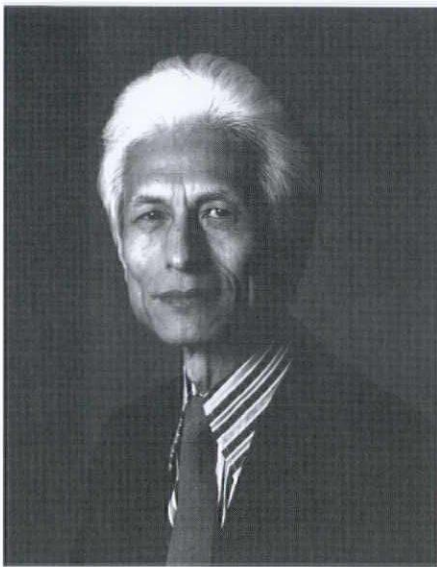
三鷹市芸術文化センター



光をくたくたイルの影の変化が刻々と新しい表情を展開する



コンクリート打ち放しの出目地は鈎込まれたコンクリートの重量を際立てる



柳澤孝彦(やなぎさわ・たかひこ)

- 1935年 長野県松本市に生まれる
 1958年 東京芸術大学美術学部建築科卒業
 1981年 (株)竹中工務店東京本店設計部長
 1985年 (株)竹中工務店プリンシパル・アーキテクト
 1986年 「第二国立劇場」国際設計競技で、最優秀賞を受賞
 同年 (株)TAK建築・都市計画研究所を設立
 代表取締役就任、文化施設を主軸にした設計活動を展開
 1990年 真鶴町立中川一政美術館にて第15回「吉田五十八賞」を受賞
 1992年 真鶴町立中川一政美術館にて第33回「BCS賞」を受賞
 1994年 郡山市立美術館にて「第35回BCS賞」を受賞
 1995年 窪田空穂記念館にて1995年「日本建築学会作品選奨」を受賞
 同年 「郡山市立美術館および一連の美術館・記念館の建築設計」にて第51回「日本芸術院賞」を受賞
 1996年 東京都現代美術館にて第14回「日本照明賞」を受賞
 同年 東京都現代美術館にて第37回「BCS賞」を受賞

主な作品

真鶴町立中川一政美術館、郡山市立美術館
 窪田空穂記念館、東京都現代美術館
 富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館
 三鷹市芸術文化センター(JV設計)
 新国立劇場(第二国立劇場)
 東京オペラシティ(JV設計)

建設中および設計中の作品

東京オペラシティ第3期
 埼玉県立近代文学館(仮称)および桶川市民ホール(仮称)
 など

所属

新日本建築家協会、日本建築美術工芸協会(理事)
 東京建築士

フォトリゼット

村井 修: pp.8~9, p.10下, p.11, p.12下, pp.13~20, p.22, pp.26~33, pp.39~42, p.43上, p.44, p.60, p.62上左, p.64上中, p.64下, p.66下, p.67, p.68上, p.70左下, 右上, 右中, 右下, p.71上左, 下左, 下右, p.72上左, 上右2点, 下左, p.73上右2点, p.74上左, 上右, p.75下右

テクニカル・アート: pp.6~7, p.10上, p.12上, p.21, pp.23~24, p.62上中, 上右, 下, p.64上左, 上右, p.65, p.66上左, 上右, p.70上左, p.71上中, p.72下右, p.74下左, 下右, p.75上左

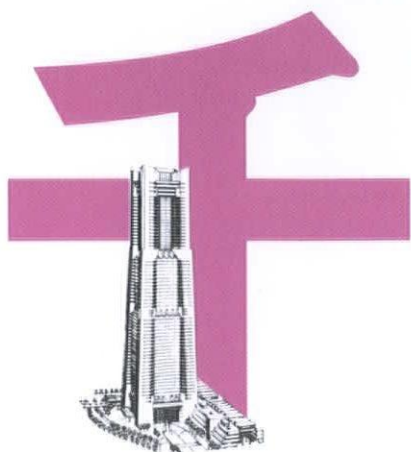
マツダプロ・カラー: p.43下

相原 功: p.69, p.75下左

門馬金昭: p.71上右, p.73上左

堀内広治: p.75上右

いろいろな未来を乗せています。



夢の分速1,000mを目指して。

乗用エレベーターで世界最高速、ただいま分速750m。高層・高速エレベーター
横浜の新しい顔、ランドマークタワー。そのビル内交通を支えるのが、私たちの
エレベーターです。現在、乗用としては世界最高速。高性能・省エネルギーの最新
インバータ制御方式を採用し、安全性についても最先端技術を結集しています。



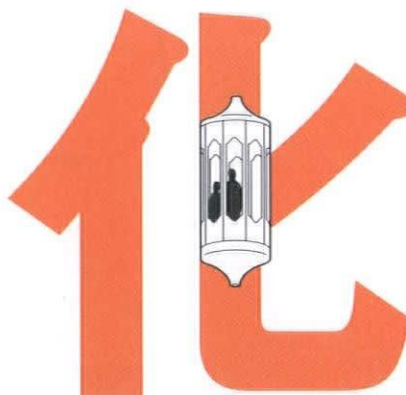
カタチが変われば、気分も変わる。

そこで、途中にほっと一息つける工夫をしました。踊り場付きエスカレーター
長くて急なエスカレーターの、あの不安な視界をやわらげたい。そこで、私たちは
エスカレーターに踊り場を設けました。生まれたものは、今までにない安心感。
子供からお年寄りまで、すべての人に快適を。三菱電機のひとつの答えです。



近ごろの空間設計は、千差万別。

それでは、こんなフォルムはいかがでしょう。スパイラルエスカレーター
あなたはお乗りになりましたか。三菱電機ならではの技術が生んだ、カーブを
描くエスカレーター。ショッピングセンターを始めとする、全国の様々な施設で
大活躍。動くほどに変わってゆく光景と広がる視界が、なかなかの評判です。



ビルにあわせてお化粧するエレベーター。

乗って、眺めて、ますます楽しい乗り物になりました。展望エレベーター
美しいビルに気付いたら、エレベーターにもご注目を。きれいにお化粧した展望
エレベーター。単なる移動手段をこえて、ビルの空間に溶け込む、美しい乗り物へ。
多様化するビルとともに、個性豊かに進化していく三菱電機のビル内交通です。

あんなこと、こんなこと。ビル内交通の“もっと快適”を実現します。
三菱電機のビル事業

S

D

SDレビュー1997作品募集

第16回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

募集要項

R

e

V

〔応募者の資格〕

特に必要なし。

〔提出物〕

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等、特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内に

まとめたもの、パネル化は不可(クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します)。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2, 3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話番号、FAX番号)、共同設計者名、設計者略歴(入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします)。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

〔応募の受付〕

●開始 1997年6月24日(火)

●締切 7月1日(火)

郵送または持参のこと。(持参の場合は平日の午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)受付後、受領通知を発送いたします。提出後7日以内に通知が届かない時は、SD編集部へお問い合わせください。

〔提出先〕

〒107 東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係
TEL.03-5561-2555 FAX.03-5561-2565
(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分
鹿島建設赤坂別館4F)

1

9

9

SD

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア 国外に建つものも含める。
但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、
実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品(公開、指名、入選、落選を問わず)は対象外とする。
応募作品点数は原則として一人一点に限る。

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[審査員]

香山壽夫(建築家)
渡辺邦夫(構造家)
岸 和郎 (建築家, 京都工芸繊維大学助教授)
團 紀彦 (建築家)

SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

i

e

w

[結果通知]

前記の審査員により15点前後が選抜された後、
入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

[提出物の返却]

提出物(図面、添付書類等)は、1997年8月19日(火)から
9月24日(水)までの平日午前11時から午後5時までの
間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに
来られた場合に限り、返却します。但し、
梱包材、クリアファイルなどはお返しできません。

[入選者の出展]

入選者は通知後、指定期間(約40日間)以内に、
展覧会に出展するための図面、模型、その他の
プレゼンテーションを製作し、後日指定の

日時、場所に搬入する。

この作品は、SD1997年12月号に掲載され、
誌上发表される。入選者には製作費用として、
一律5万円が支払われる。

[SDレビュー1997入選展]

東京展
期間: 1997年9月10日—9月21日(予定)
会場: 東京都渋谷区猿楽町18-8
代官山ヒルサイドテラスF棟
ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間: 1997年9月26日—10月2日(予定)
会場: 大阪府南河内郡河南町東山
大阪芸術大学芸術情報センター

[誌上发表]

SD1997年12月号(予定)

[鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞]

入選展に展示された作品の中から、
鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞を選び記念品を贈呈
します。発表はSD1997年12月号誌上にて行う予定。

[お問い合わせ]

SDレビュー1997についての御質問は、
SD編集部へハガキまたはFAXにて
お問い合わせ下さい。宛先は提出覧参照のこと。

7



新国立劇場

S T O N E



郡山市立美術館



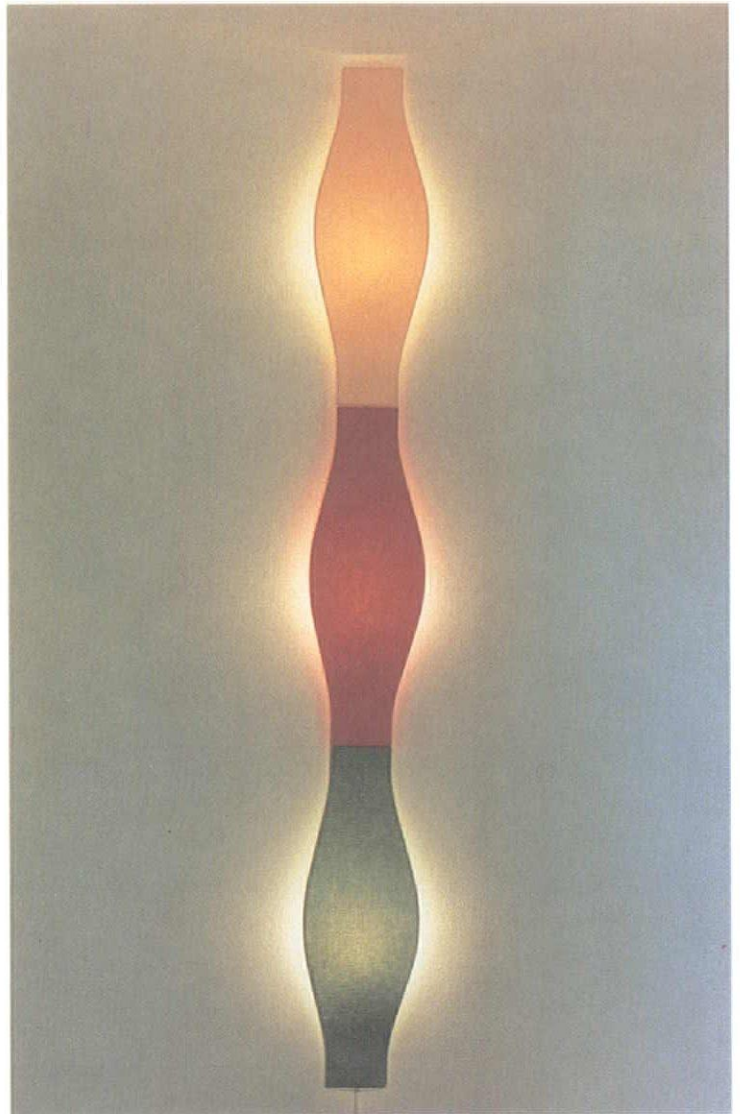
東京都現代美術館

(株)和泉屋・石のアトリエ 主宰／和泉正敏

〒761-01 香川県木田郡牟礼町牟礼3717 TEL.0878-45-9887(代) FAX.0878-45-4324(代)

装飾を排したフォルム・デザイン

「スウェーデンのグッドデザイン」展より



Stella

壁と壁、あるいは壁と天井のコーナー用の照明 / design: Anders Ljungberg and Yvonne Ström

スウェーデンのデザイン——飾りより実を

ウルフ・ベックマン

“Less is a bore”。これはポストモダニズム全盛の1980年代に言われていた皮肉のひとつです。スウェーデン人ならば、古典的近代主義のスローガンをひねったこの文句が、スウェーデンあるいは北欧の近代建築や工芸品のデザインを皮肉ったものであることが分かります。

この退屈さ (boredom) は、都市的西洋文明の頂点にある「もっと、より多く」という指向 (more-dom) が引き起こしたものではないかと思います。いつも外食ばかりしている人が機能的なキッチンを見て刺激的な楽しみを感じるでしょうか。スウェーデンでは、産業がこぞって本質的に必要でないものを作ることが、道徳的に正しいこととされたことはかつてありません。むしろ、デザインに関する視点は常に洗ひ場のメイドと同じ視点でした。つまり、機能性が90%、後の10%が飾り、というようなものです (あくびをしている人がいそうですね)。

これが当たり前と思って育った1950、60年代世代のスウェーデン人である私は、外国で借りたアパートのキッチンにこういう視点が欠けているようなことがあるといつも、いっばしの専門家気取りになって、レンジはなぜキッチンカウンターと同じ高さになっていないのか、シンクと食器棚の間になぜ鍋の蓋がガラガラと落ちるような2インチもの隙間があるのか、などと文句をつけたくなってしまふのです。

歴史的に見ると、スウェーデンでは福祉に対する要求が強まりを見せた時に、あらゆる場面への適応性をもった物が求められ、この点を解決する機能的なデザインが促進され、ここから一般日用品がひとつの文化として完成されたといえます。家の中での生活が、綿密に調査研究され、家具類や道具、器具は想定されるあらゆる要求に対応するようにデザインされました。例えば、泡立て器を逆さまに持とうとしてしまった時などには、機能性を重視することを「退屈」なこととは言ってはられないでしょう。

さらにこの姿勢は18世紀のスウェーデンと、

19世紀の作家C.J.L.Almqvistが書き記しているところの「スウェーデンの貧困の重要性」にも関連しています。当時の貧困は、王室と、聖職および俗社会の最上層のごく一握りの人々を除き、貴族や上流階級をも容赦なく襲いました。当時の日記や旅行者が記したものと見ると、食事は家の主人も使用人も同じ粗末なものを食べ、家具もいかに質素であったかが分かります。

しかし、質素な生活を営むというのは、北部プロテスタンティズムの厳格な宗教理念でもありました。この生活様式はスウェーデンの王室自らが設定した基準で、16世紀初頭のヴァーサ朝の時代から1920年代後期まで続きました。その後社会民主主義がとってかわり、宗教は以前よりも世俗的なものとなりましたが、この質素な簡潔さと機能優先主義の基本的な流れは、近代主義の中でも大きく変化することはありませんでした。

今日世界中で「スウェーデン・スタイル」あるいは「グスタフ・スタイル」として知られているインテリア様式に見られる、色褪せることのない美しさを生み出したのは、まさにこの貧困なのです。こぢんまりとした部屋に、当時のフランスの立派な家具を簡素化したものが、柔らかな光に包まれて、むき出しの床板に置かれている。色はグレー、グリーン、ブルーや赤の薄めの色合い、また、ゴールドの代わりにイエローオークルできれいに粉をかけたような彩色。大邸宅の部屋でさえも、田舎の少女のような新鮮さと清楚さが感じられます。

こうしたインテリアが現代スウェーデンのインテリア、建築、製品デザインに与えられた影響は計り知れません。精密に設計されたスウェーデンのインテリアは洗練されていてシンプルにデザインされた家具のひとつ、あるいは、機能面に工夫の凝らされた道具のひとつをとっても、全てこの時代の伝授を受け継いでいるのです。

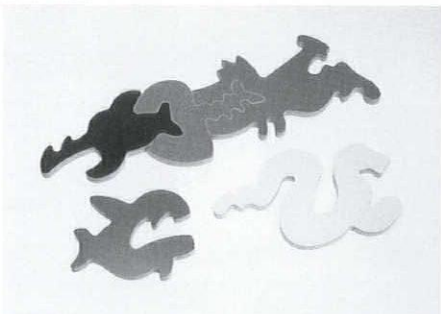
例えば建築家であり、教授でもある Love Arbén がデザインした現代的な部屋を見ると、その正確さと抑制された豪華さは、Jean Eric



機能的なポケットがたくさんついた工具ベストと職人用ズボン / design: Matti Viio



Dart: エナメル加工のスティール製のサイドテーブル / design: Johan Hult



ひとつひとつのピースが大きく、木で丁寧に作られ、様々な色に塗られたジグソーパズル / design: Pan Toivanen



つや出し塗装仕上げの木馬玩具 / design: Ulf Hanses

Rehnが17世紀にデザインしたストックホルムの王宮のインテリアのそれと同じです。また Claesson、Koivisto、Runeら若手インテリアデザイナー達が1994年にストックホルム国立美術工芸デザイン大学 (the National College of Art Craft Design) で試験作品として提出した、国際的なミニマリズムの北欧版の作品は、シンプルな構造の落ち着いたインテリアで、非常に高い位置の窓から柔らかく外光を取り入れており、夏のスウェーデンの白夜のような瞑想的な雰囲気を醸し出しています。

スウェーデンの現代ガラスデザインにも、これと同じ雰囲気を持つものが多くあります。例えば若手ガラス芸術家 Lena Bergström の新しい作品もそのひとつです。その透明さと落ち着きは、私たちの視界の中にぽっかりとあいた穴のようで、何世紀にもわたって乱雑に、常に物がひしめいてきたこの世の中に、ほっとできる空間を作り出しています。

大量の「モノ」に飽きた世の中が今求めているのは、シンプルであること、控えめであることのように。あるいはハンマーのような作業用具に見られる「退屈」なくらいの質素さ、と言えましょうか。デザインのために、人間工学に関する何年何ヶ月にもわたる調査研究を行うなどということは、イタリアのデザイナーにとってはとても信じがたいことでしょう。反対に、スウェーデンのデザイナーにとっては上品なフルーツ・ボウルひとつを作るのに真剣になる方が難しいのです。ストックホルムのデザイン事務所 The Ergonomi Design Gruppen は、人間工学上の問題を解決するため、数年にわたって数多くの職場を調査し、草分け的な仕事を成し遂げました。その結果生まれたのが多種にわたる工具ですが、身体にかかる負担が引き起こす危険性に関する新しい発見がなされる度に、これらの工具は改良されるのです。グループの最新の作品のひとつに、Hultafors社というメーカーのためにデザインされたハンマー・シリーズがあります。このシリーズは、ハンマーで雷や稲妻を起こしたといわれる北欧神話の神「トール」にちなんで、Tors hammare (トールのハンマー) と名付けられています。

これらのモダンなハンマーは、本来専門の職人が使うためのもの、つまり広告でも謳っているように「他人にハンマーを貸すなら歯ブラシを貸した方がまし」というようなプロのためのものです。このハンマーはバランスや重さが慎重に計算され、ハンマーを叩くときに職人の手や腕にかかる衝撃は少なくしています。

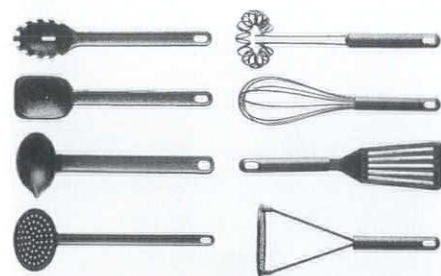
こういったものが、「洗ひ場のメイド」的な視点なのです。エレガントな装飾性とは無縁で、一見非常につまらない物と言われても仕方がないかもしれません。しかし、これをつまらないと言って片付けてしまったなら、スウェーデンのデザインのもうひとつの大事な特色を見逃していることになります。なぜなら、全てはスウェーデンという国の本質的な理念、すなわち自由という理念に関わるからです。

そう、スウェーデンは決して社会主義の奴隷になったことはありません。あらゆる物を機能優先に改良してデザインしてきたように、社会主義をも、性的、社会的、経済的平等のために最大限機能し、個人の自由を抑圧することのないよう改良したのです。その自由も、メンテナンスの負担を均等にし、平等を実現するために必要な努力を軽減するような製品や環境のデザインがあればこそあるのです。

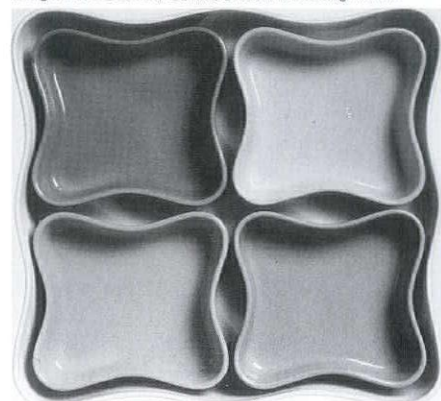
今日のスウェーデンの建築家やデザイナーは、この伝統を生かしてポスト福祉時代の世界のデザインに貢献しなければなりません。こうした点においては、スウェーデンはこれまでにない良い条件下にあります。倫理や人間工学は今に世界のデザインにおける最優先事項となるでしょう。そして美学においては、新しい「美」の方向が見出されることでしょう。

●Ulf Beckman / スウェーデン“FORM”誌編集長

※本文は、1997年3月18日～27日まで、世界貿易センタービル別館4階にて開催された、財団法人日本産業デザイン振興会の主催の「スウェーデンのグッドデザイン」展のカタログより転載。



テフロンやスプラなどで表面加工されたキッチン用品一式 / design: Arne Daenell, Gunilla Lindahl and Bengt Rodell



Sinus: 4つの小皿が大皿にぴったり納まるスナック皿 / design: Pia Törnell



Uni: 手や腕に不自由な人のための日常生活を助けるための製品 / design: Ergonomi Design Gruppen



スウェーデンのもつ自然と文化により、発案された青氷の雪の荒野を走るためのアイススクーター / design: Lars Eriksson and Bergt Petterson



Cirrus

ヴォリューム感が植物の世界を連想させ、羽根部分がボディと空間の両方を形取る花瓶／design: Pia Törnell

SD9706

84



Bimbo

かたちがシンプルで積み重ねができる小型スツール／design: Peter Brandt



Polaris

消灯時には全体は白一色だが、点灯時は乳白ガラスを通してカラーフィルターの色が照らし出される / design: Märten Claesson, Eero Koivisto and Ola Rune

SD9706

86



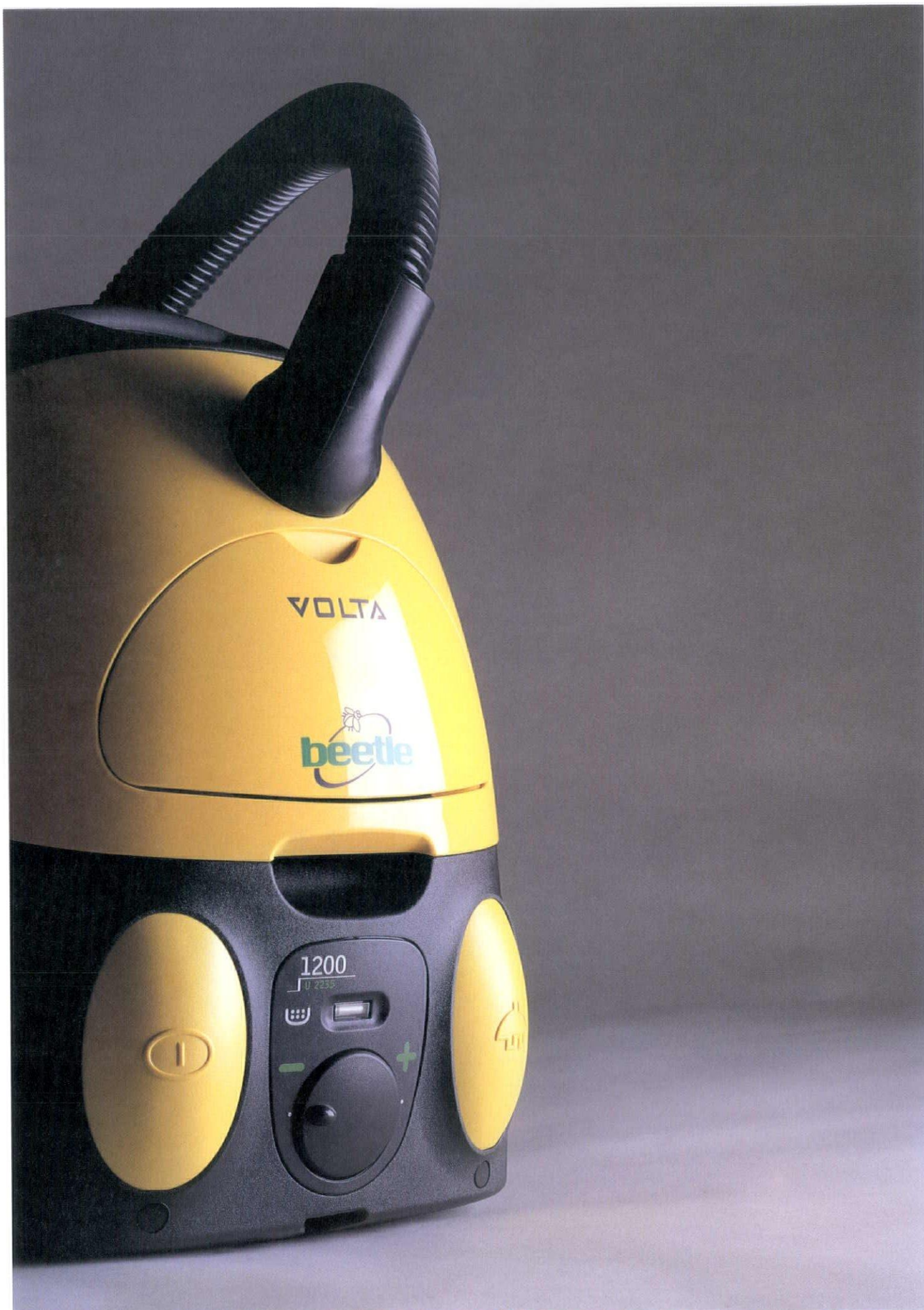
Camilla

平らでない床でも使えるように3本足となっている／design: John Kandell



Campus

公共空間用にデザインされたもので、積み重ねたり、一列につなげることもできる椅子 / design: Johannes Foersom and Peter
SD9706



Beetle

斬新でユーモラスな形の小型掃除機 / design: Mattias Jansson, Gina Gonzalez, Mikael Engblom



Speedgrass 9000

人間工学的に優れた溶接用のヘルメット / design: Car-Göran Crafoord and Håkan Bergqvist /Ergonomi Design Gruppen AB
SD9706
90



機能性の面ばかりでなく、人間工学的にすぐれたデザインの工具 / design: Ergonomi design Gruppen

スウェーデン・グッドデザイン展が教えるもの

川上信二

今回の展示会は非常に小さな規模のものであったが、内容は現代デザインを考えるにあたって大変に示唆に富むものであった。

その第一に挙げられるのが、1960年代に世界のデザイン・福祉大国として最盛期を通り過ぎた国が、この30年間の激動の波を乗り越えて、今なお確実に日常生活のなかにデザインが生き、前進していることを展示品が明確に示していることであった。

スウェーデンのデザイン協会は、今回の展示会でも紹介されているが、世界で最も早く設立され、創立150年を越える歴史を持っている。

寒く厳しい北国、そして今回とくに指摘されている生活の貧困の中から、自然と共に生き、それを支えるハンディクラフトをベースに、生活の向上を目指してデザイン運動が始まっている。

19世紀末、社会運動家のエレン・ケイ女史の「全てに美しさを！」の呼びかけに応えた国民的画家カール・ラーションは、自然の中のアトリエでの家族との生活を描いた画集によって、スウェーデンスタイルとも言うべき質素な中の優雅さとも言われるグスタビアン・スタイルのインテリアを提示し、建築家、デザイナーの活動を支援している。

1919年、当時のリーダーであったグレゴール・パールソンは、「日用品をより美しく」をモットーにデザインの効用を説いた啓蒙書によってデザイン運動を展開。1930年建築家グンナール・アスプルンドの協力を得て、歴史に残るストックホルム住宅展が開催され、北欧にモダン・デザインが導入された記念すべきエポックとなった。

これを契機にデザインに拍車がかかり、1937年のパリ博を経て、1939年のニューヨーク博においてスウェーディッシュ・モダンという評価を得た。「スウェーディッシュ・モダン」は日常用具のための良質を意味し、近代技術の研究を用い、自然な形と素直な素材の利用を意味している」という賛辞であった。

「質素で控えめな美しさ」として「スウェーディッシュ・グレース」とも呼ばれ、スウェーデン・デザインの代名詞となった。

スウェーデンでは、1945年の第二次世界大戦終結直後に、デザイン協会創立100年記念行事を行っている。日本にとっては、ここからが事実上の世界のデザイン界での出発点であったことを考えると、スウェーデンとのその差はやはり大きい。1955年のヘリシンボリでの〈H55展〉には日本も参加し、出展作品の多くに見られた「近代日本調デザイン」は好評を博したが、一方北欧デザインは当時、デンマークの家具デザイン、フィンランドのクラフト・デザインがイタリアのミラノ・トリエンナーレ展で数々の金賞を獲得、世界を席捲し全盛期を迎えた。私はこの時期少し遅れてスウェーデンでデザインを学ぶ機会を持ったが、その頃スウェーデンでは何人かの著名デザイナーを除いて、共同作業によるアノニマスな社会デザインが一般的になっており、社会的ストックの積み重ねとしての福祉デザインが盛んになっていた。1960年代をピークに世界規模での社会変革のなかで、北欧のデザインは苦難期を迎えるが、量産と流通システムの革新的な変革を可能にした〈イケヤ〉、鋭角的デザイン・コンセプトにより廉価な日用品を実現した〈イノヴェーター〉デザインの出現は、スウェーデンのデザインにおける良質主義と社会主義の二面性をよく表しているように思える。

1970年代から1980年代前半にかけてのイタリアからの新しいデザインの波は、機能尊重のモダン・デザインへの挑戦として、大きな嵐となって新世紀のポストモダン確立への希望を抱かせたが、結果は儚くもデザインの混沌を生んで現在に至っている。

1983年スウェーデンのグッドデザイン賞「utmåkt Svensk Form」がそのような時期に、制定されたことは何か大きな意義を感じざるを得ない。150年の歴史のなかでは遅過ぎる感があるが、敢えて混沌のなかでの新しいデ

ザイン活動は、政治の上でもスウェーデン・スタイルと言われた大きな革新的体制を創り上げたこの国ならではの思慮深い国民性の表れのように思える。1991年ミラノ家具見本市では、「スウェーデン・ネクスト」と銘打ったブースで、1992年にはセルビア博で椅子のコレクションをこれらの受賞作品の中から選ばれたもので新しい世代へのデザインをアピールし、スウェーデン・デザインにとっては、再出発となった。

今回のこのデザイン展での私の一番の関心事は、「スウェーデン・グレース」と呼ばれた「質素そして清楚な優雅さ」がこの激動期の中で、どの様に保たれているかということであったが、この期待は裏切られることはなかった。むしろ新しいデザインの波は、現在の生活の中でしっかり消化して、健全な日常品の中に生かされていることを目の前にし、羨望とも思えるものを感じた。

はからずも、今回来日のデザイン協会会長ヨハン・フルト氏、そして100年の歴史を持つデザイン誌『フォルム』の編集長ウルフ・ベックマン氏のコメントは、「スウェーデンのデザイン——飾りより実を」と題し「実用品としての美しさ」こそがスウェーデンでの命題であり、またそれは「19世紀スウェーデンの貧困からの自立が生んだ成果」としてデザインの原点でもあると言っている。また、今スウェーデンの建築家、デザイナーは150年の伝統を生かし、ポスト福祉時代の世界デザインに貢献すべきであり、倫理や人間工学は今や世界のデザインにおける最優先事項となり、新しい美の方向を見出すであろうと結んでいる。

今回はまさに、スウェーデン・デザイン運動の奥の深さを思い知らされた展示会でもあった。

●かわかみ・しんじ／フォルムSKR代表

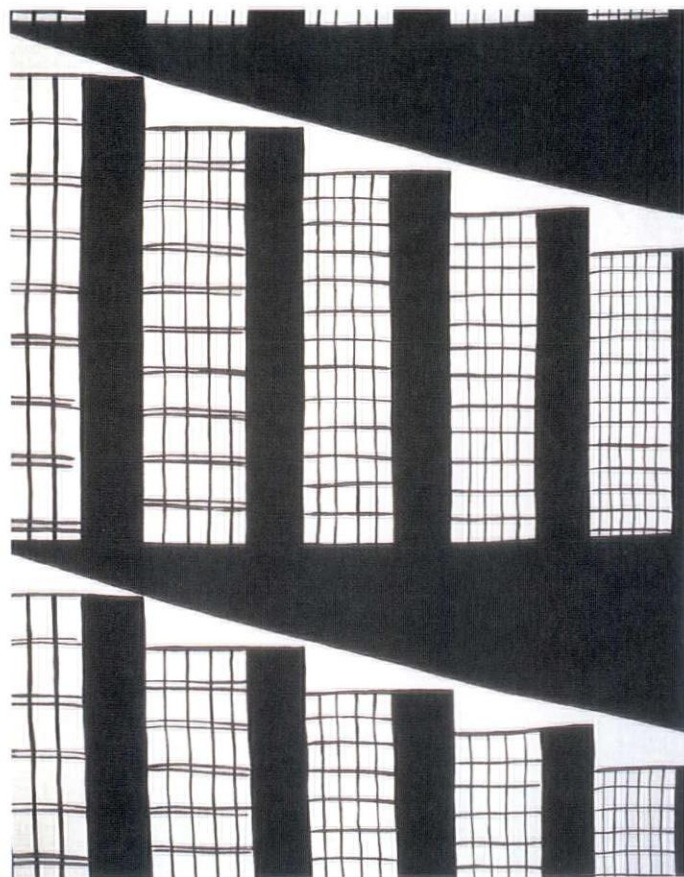
City (右上)

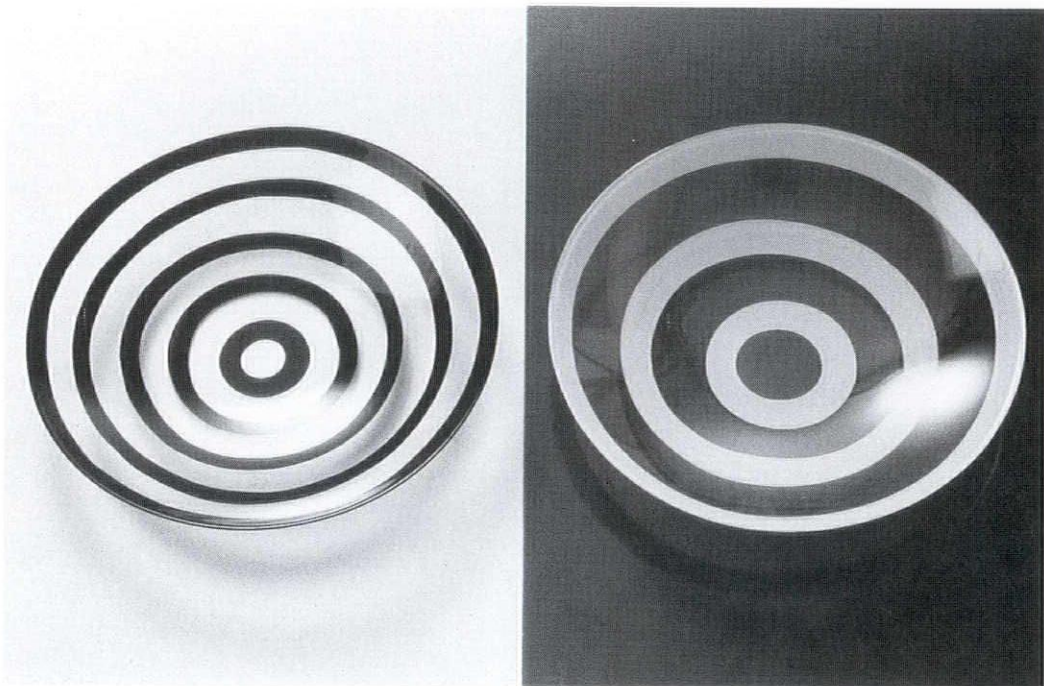
ストックホルムの街をモチーフとしたデザイン・コレクションのひとつ。ストックホルムの中心街の5つのオフィスブロックがリネン生地に表現される／design: Birgitta Hahn

Gäddet (左下)／design: Birgitta Hahn

Feeling (右下)

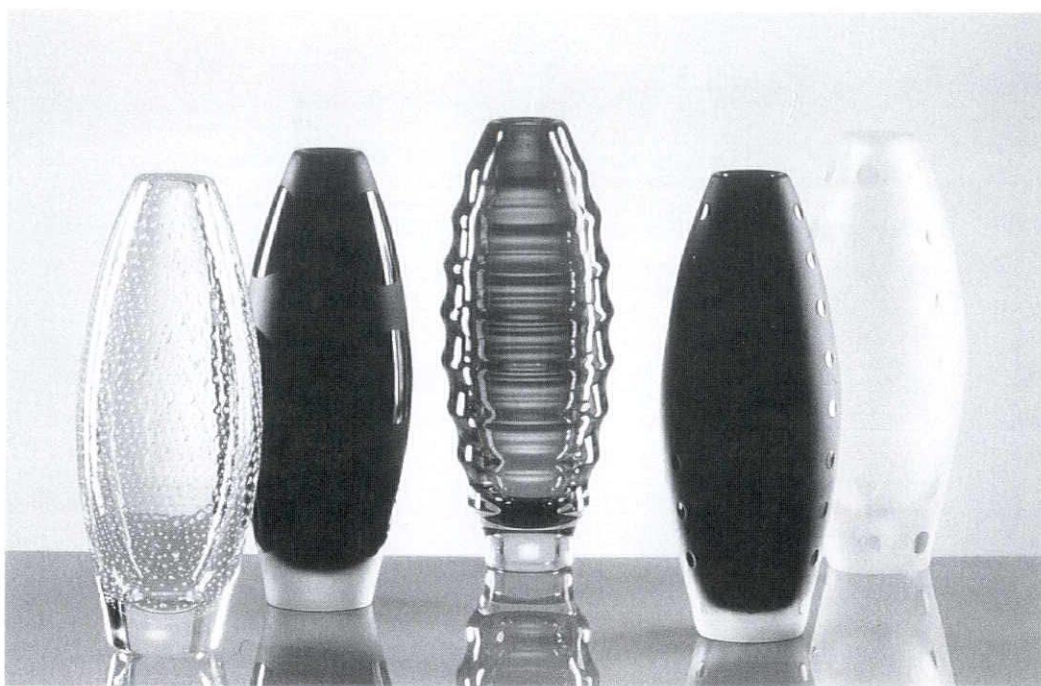
スウェーデンの伝統に忠実に、綿、亜麻、毛が機械織りされたテキスタイル／design: Lena Rahoult





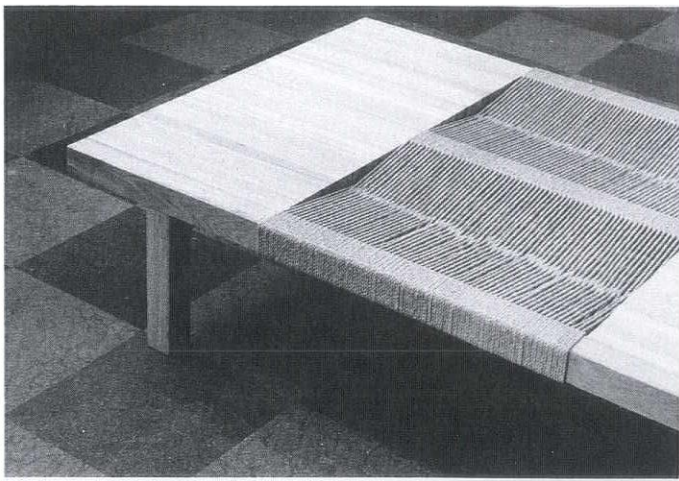
Stripe

強烈な装飾を施しながらも、中味をおしゃれに演出するプレート／design: Anne Nilsson



Havanna

光沢のある表面と艶消した表面のコントラストを持つ花瓶／design: Lena Bergström



椅子とテーブルの機能を合体させた家具／design: Björn Dahlström



Sparta

シートの両面が使える折り畳み椅子／design: Börge Lindau



Cinema

メタル部分の範囲とその扱い方、そしてレザーの使用によって究極のシンプルさを追求してデザインされた
イージー・チェア／design: Gunilla Allard



Squeeze

側面と仕切を斜めにして、奥行きを最小限にした小型の壁掛け棚／design: Anki Gneib

Photo Credit

財団法人 日本産業デザイン振興会

p.81～83、 p.93～96

平井広行 p.84～91

資料提供

財団法人 日本産業デザイン振興会

地震は玄関ドアを直撃する。



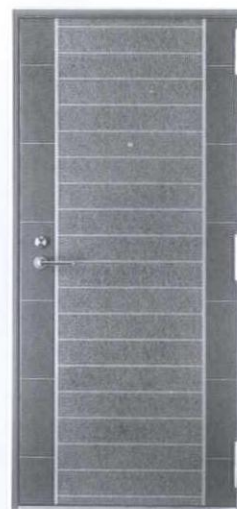
(突然おそう地震)

中高層集合住宅等では、地震は玄関ドア枠にゆがみを与えます。枠の変形や傾きが生じると、開閉に必要な扉とのクリアランスがなくなり、緊急時の迅速な避難に支障をきたします。建築基準法施行令第82条2項では、地震力によって各階に生ずる水平方向の層間変位の高さに対する割合が、間仕切りやドアなど非構造部材に関しては120分の1以内と規定されています。つまり、それだけの変異が生じても開閉のできることが、ドアにも要求されているのです。三和の耐震ドア「フレキード」は、地震に対する機能を備え、毎日の生活に安心をお届けします。

三和の耐震ドア

フレキード

鋼製軽量ドア・鋼製重量ドア



●詳しくはカタログをご参照ください。

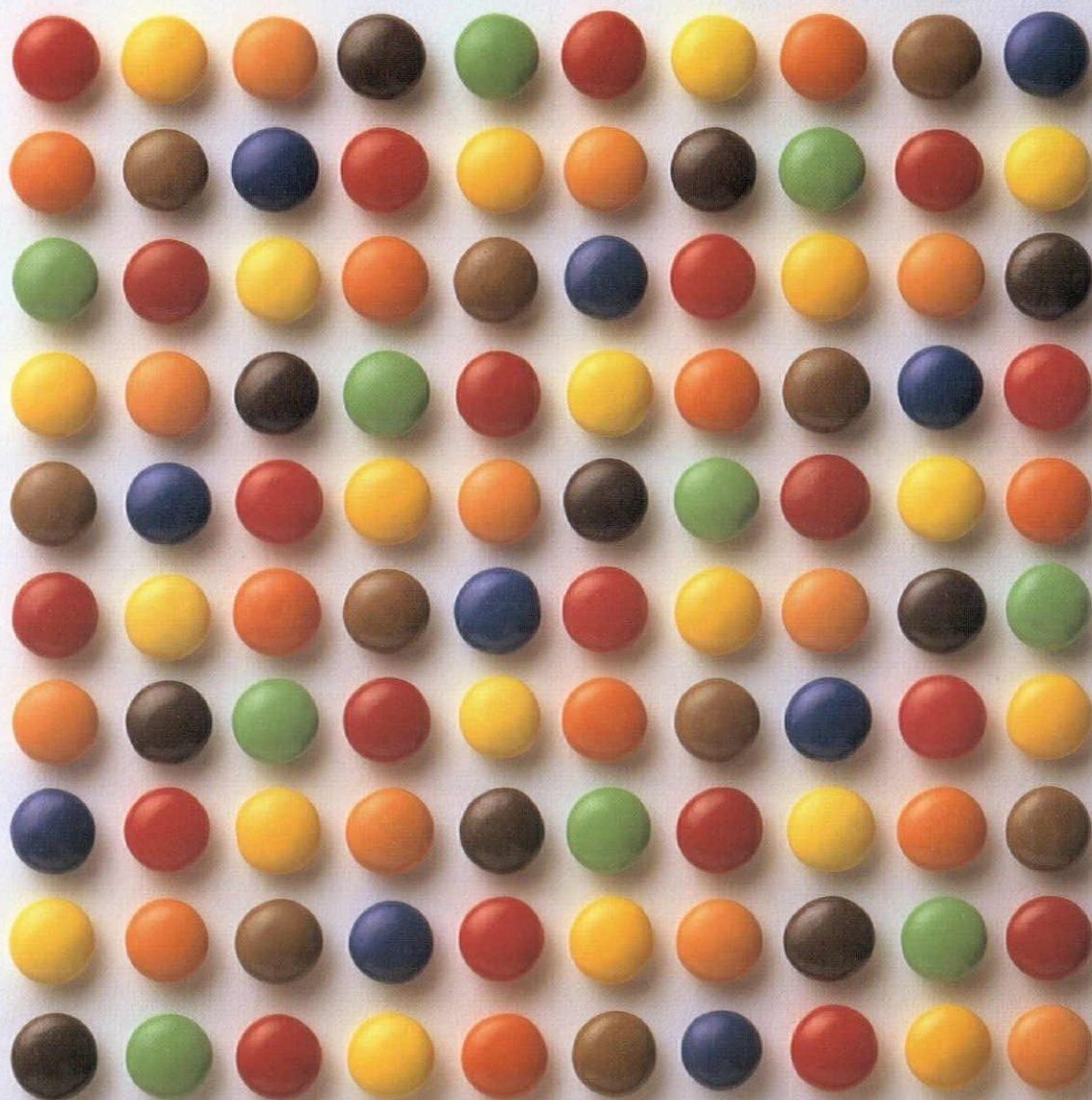
三和シャッター工業株式会社

本社 〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル52階 ☎03(3346)3011(代表)



戸村 浩

100色のタイルを均一に張るには



パターンとしての魔方陣への興味は、「100色のタイルを、いかにして均一に張り詰めることができるか」という問題へと深まった。

100色のタイルを張り詰めるには、先々号で紹介した魔平面のように、1～100までの数字が入る10×10の魔方陣を作り、それぞれの数字に異なる色を与え連続させるだけでも良い。だが、より均一に完璧なる平面を求めて、平面を構造的に捉えてみることを試みた。

その「平面構造」の考えは、2次元と認識している面でも、実は単なる1次元の重なりであるに過ぎないことが多いのではないかと。

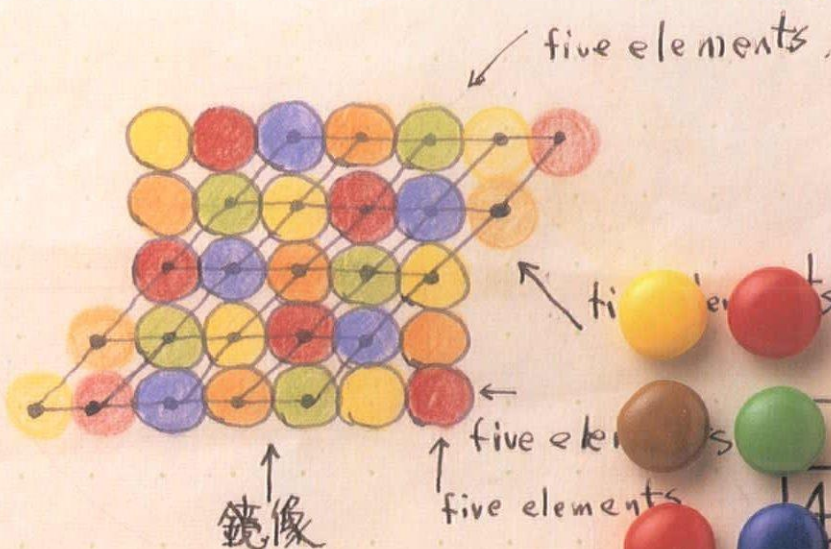
て、真なる平面とはどういう構造をもつものかを探るものである。

チョコレートを使った上のパターンは、10色のタイルを並べてみた例である。縦横の列で必ず各色を揃えることが出来、見事な平面を形成しているといえよう。ところが、斜めの対角線上では5色しか数えられないのが残念である。それに引き換え、右ページの5色の場合は、縦横斜め、いずれの列でも5色が得られ、より高度の平面となっていると考えられよう。いずれにしろ、それを超2次元平面「完全平面」と呼ぶことにした。

●とむら・ひろし／造形美術家

No. 6

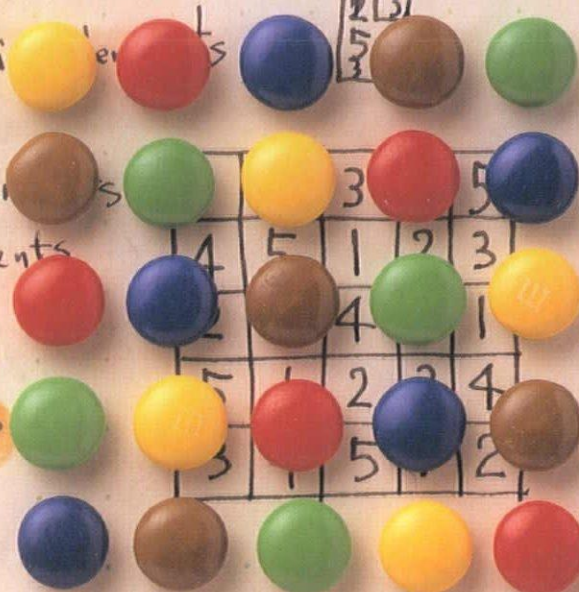
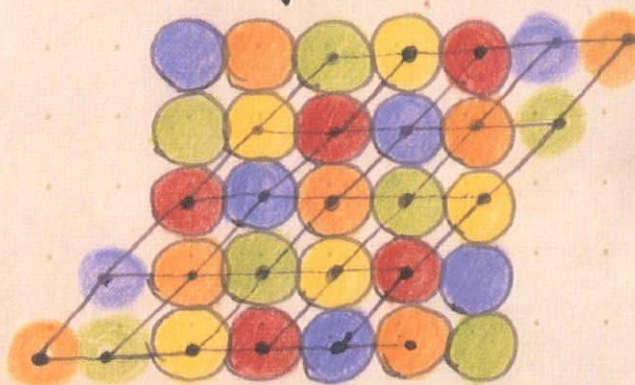
NO.2



1	2	3	4	5
4	5	1	2	3

1	2
4	5
2	3
5	1

NO.3



1	2	3	4	5
3	4	5	1	2
5	1	2	3	4
2	3	4	5	1
4	5	1	2	3

完全なる平面

次元の金、平面構造 (No.1)

物質としての直観

一ツピンを用いて、水に米、大豆、アズキ、空豆を入水、新しい物質を生み出すこととする。

しかし、A国の様に米、大豆、アズキ、空豆と順に入水したのでは、物質は生れてはいない。米、大豆、アズキ、空豆の層が重なって、各々独立した物質の配列でしかない。

そこで、二ツピンを用い、米、大豆、アズキ、空豆を、お互いに入れ替えるようにする。すると、B国の様に、よく混合されたものになり、どの部分でも、米、大豆、アズキ、空豆が入っていることになる。

この様に、二つの要素を混合した物質が、生れてくる。これは、すべての化合物に生じている。何となく、二つの要素が、お互いに入れ替わっている。その物質の構成は、お互いに入れ替わっている。その物質の構成は、お互いに入れ替わっている。

平面上の次元

本体の構成に入る前に、平面に投影した図を想像してみよう。すると、重なりや配列と、立体としての物質の構造の違いがよくわかる。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。

左図は、初めに述べた、各要素の、重なりである。つまり、○要素の層と、●要素の層とが、順に重なって、お互いに入れ替わっている。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。

次に、NaClの構造を、平面に表現した図は、右図である。これは、上図との違いは、お互いに入れ替わっている。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。

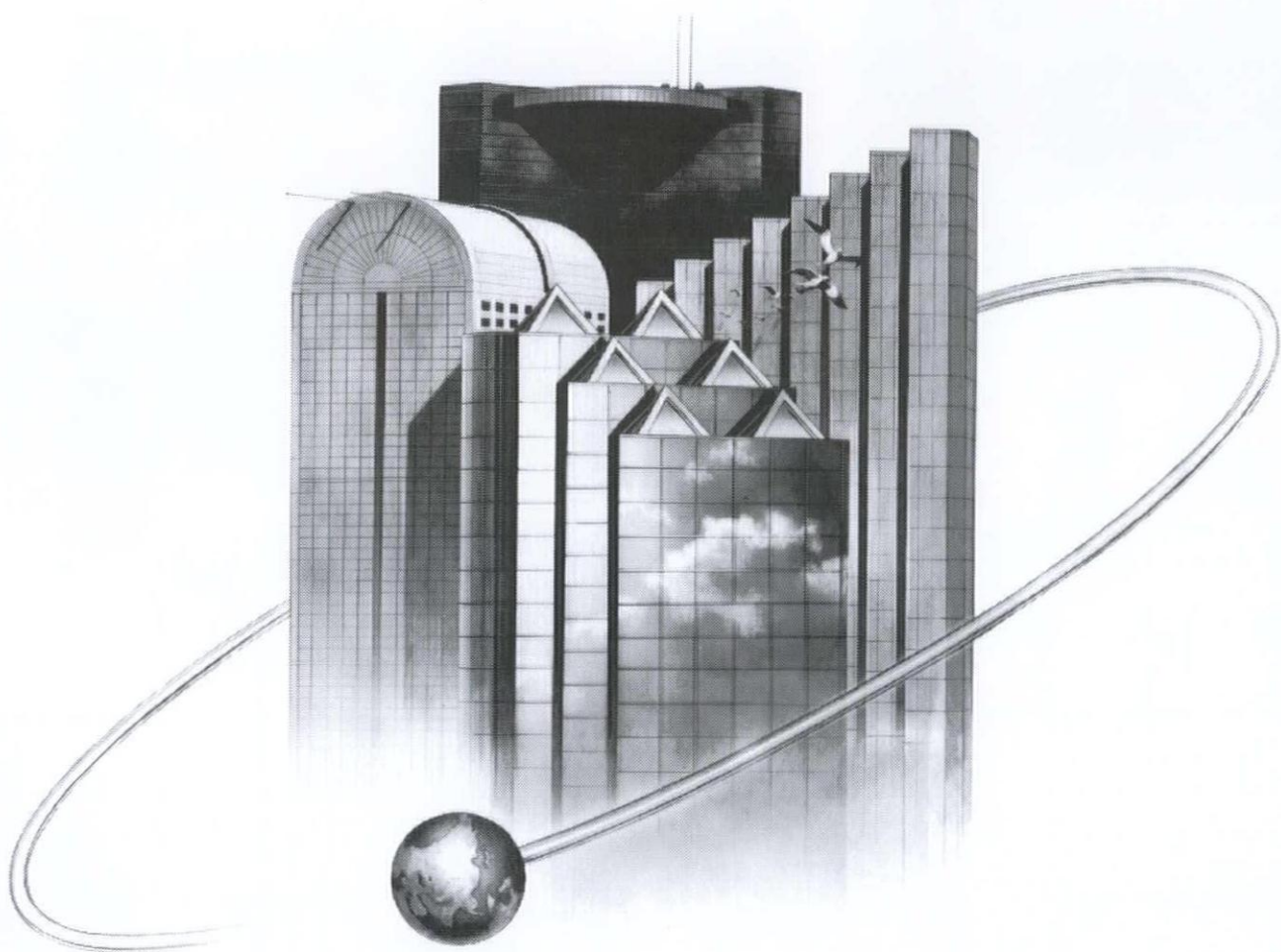
NO.4

そして、この図は、正方形の格子の連続の、余すなく、お互いに入れ替わっている。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。

この様に、関係が、お互いに入れ替わっている。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。

この様に、関係が、お互いに入れ替わっている。そして、又、平面(2次元)上に、お互いに入れ替わっている。

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03 (3502) 6111

情報ネットワークを用いたまちづくりが新しい世代によって始められようとしている。彼等は街の生活基盤を地元住民のポテンシャルの中に求め、都市の「コミュニティ」を自然な形で再生させるためにインターネットを用いている。

北区の情報コミュニティを通して「つながり」のまちづくりの現在をレポートする。

CYBERTALK: 電子メディアのフロンティア

vol. 6

「つながり」のまちづくり

北区の情報コミュニティが築くまちづくりNPO

Presented by

石原弘明 Hiroaki Ishihara

1965年生まれ。建築家。

早稲田大学建築学科卒業後、内藤廣建築設計事務所入所。94年早稲田大学建築史研究室にもどり地域開発組織史について研究。

96年DDA一級建築事務所を開設。

「参加型」から「自発型」まちづくりへ

阪神淡路大震災の復興において「情報ボランティア」という言葉が登場して早くも2年が過ぎようとしている。パソコン通信やインターネットによって災害初期における被災地外部との通信や、救援活動の裏方として情報の収集・流通をはかったボランティアを指して呼んだのだが^{*1}、パソコン通信やインターネットがわれわれの生活に多大な影響力を持ちうることを最初に実感させた言葉でもあった。

今回はそうしたボランティアがインターネットを用いて東京都北区のまちづくりに関わり出した活動を取り上げる。

今まさに始まろうとしているこの活動は、まちづくりが「参加型」から「自発型」へと新たな段階に移っていることを示しており、「個」を疎外し続けてきた「都市」を自己実現の場として取り戻し、蘇生させようとする顕著な動きとなっている。まちづくりの中心的パラダイムは情報ネットワークのボランティア活動によってどのように変わっていくのだろうか。

まちづくりネットワーク「PRINCE」

去る4月25日、「PRINCE」のオープニングに向けたはじめてのミーティングが開催された。「PRINCE」は北区王子を拠点としたフリーペーパー・パーティ・インターネットを用いたまちづくりネットワークの名称で佐藤孝治氏(24)が代表をつとめる。ミーティングには約40人の北区民が参加しており、まちづくりの経験のない区民に交じって、青年会議所の理事、北区役所のスタッフ、コミュニティFM局の主催者、そして北区のまちづくりに関して成果を上げてきた「北区担い手1000人会議」の代表などすでに地元活性化のために活動をしている面々もあった。このメンバーからは捉えどころのない会に見えたが、ミーティングが進むにつれこの多彩なメンバーそのものが「PRINCE」の趣旨を表わしていることが判ってきた。

まちづくりは多くの場合行政主導によって行われる。利権が複雑に絡む都市景観の形成は行政が権限を持って住民を引っばってゆく必要もあるが、住民の日常生活に根差した「まちづくり」にまで行政の手はなかなかまわらない。一方住民同士も過干渉を避け、余分なリスクを負わない傾向にあったため市民が主体的にまちに関わっていくことも少なかった。しかしこのミーティングを見る限り、官民間わず「市民」としてコミュニティを良くしていこうとするポテンシャルは確

実に存在しており、インターネットが呼び水となってそれをうまく結び付けたようだ。インターネットというキーワードはすでに最初の過熱したブームを過ぎて、現在広く生活の中に浸透しつつあり、このキーワードに向けた現実・仮想両空間のベクトルは互いに引き付け合い、相互を生かすために「中心」を作り出した。それが「PRINCE」である。単独に行われている活動を横につなぎ、各々の活動をより発展させること、そしてこれまで「まちづくり」に参加しなかったが、「まち」に参加しようとする市民のポテンシャルをつなぐこと。これが「PRINCE」の目的である。

「PRINCE」は元をたどれば、東京商工会議所北支部インターネット専門委員会に佐藤氏が関わったことに端を発する。このインターネット専門委員会は北区のまちづくりを継続的に行ってきた田村純郎氏がインターネットがまちづくりに生かせることを感じ、北区のネットワークに声をかけてインターネットの地域メディアとしての側面からの普及を検討するためにつくられた。そこで既にインターネットを用いた就職情報ネットワーク[JOBWEB]の代表として活動していた佐藤氏にも声がかかった。

佐藤氏はまちづくりに関しては素人であったが、世界に広がるネットワークと北区という自らのローカルティがつながることに魅力と可能性を見出し、北区インターネット専門委員会のつながりを元にまちづくりネットワーク「PRINCE」を立ち上げることを思い立った。

この日、参加者はそれぞれが持ち寄ったテーマ——地元商店街の活性化、投票率の向上、ケーブルテレビの活用法——などを公開し、5月15日のオープニングに向けて、相互のテーマを援助しあう、より立体的なネットワークづくりをしていった。

新しく普遍的な課題

インターネットのまちづくりというと、あたかもヴァーチャルな世界で全く新しいデザインが進められるように思われてしまいそうだが、「PRINCE」は人の関係を活性化するツールとしてフリーペーパー・パーティとともにインターネットを位置付けている。インターネットを自己目的化することなく、生活空間の延長として利用するのである。ただしそこでどのような関係が発生するかは、個人に帰する問題となる。この点がインターネットが可能性を秘めた点であり同時に難しい点でもある。「個の活性」。これが「PRINCE」まちづくりの原点であり「PRINCE」自身の運営に関わるテーマでもある。

北区の
コミュニティ・ウェブ

PRINCEはこれらのネットワ
ークをネットワークする。

新興グラント社
[MAG-NET]

PRINCE発足に向けたネッ
トワーク

4月25日のミーティング
の出席者を中心として
PRINCE発足に向けたネッ
トワークを表わした図。サイ
バー空間の持つ空間
的匿名性に対し、まちづく
りのインターネットが持つ
リアルスペースとの関連性
においてヴィジュアル化し
た。

赤い点は出席者を中心と
した関係者の拠点を表わ
す。ラインはつながりを1.
インターネット上のやりと
りでコンタクトを得たもの
の、2.インターネットに関
する活動で面識を得たもの
の、3.地縁を中心に直接会
って面識を得たものの3種
類に分けた。こうして見る
と各々がほぼ3等分され
る。矢印は伝達方向性を
表わしているが、会って互
いに知り合ったものは両方
につけた。

組織名称
[WEB名称]

地縁を中心にしたコンタクト
インターネットを媒介とした活動のコンタクト
インターネットによるコンタクト

テルメ末広
[テルメ末広]

北ケーブルネットワーク
[北ケーブルテレビ]

王子銀座商店街

王子駅

北区役所

PAL-FM

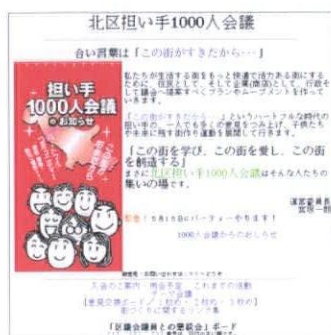
はまりんせ
[はまりんせ]

PRINCE
[JOBWEB]
[4thWave]

インターネット専門委員会
[狙い手1000人会議]



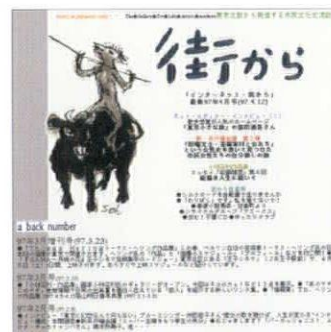
【Netcityきたくなるまち】：北区産業展(96年)で、まちづくりの端緒をつくってゆく目的で開設された。



【抱い手1000人会議】：北区民による市民主導のまちづくりをめざして活動を行っている。



【はまりんせ】：東京都北部を中心にインターネットサービスを行うコミュニティウェブ。



【街から】：東京北部を扱った地域ミニコミのウェブバージョン。FROMTOWN社による。



【JOB-WEB】：佐藤氏が開設した学生の就職情報ネットワーク。会員は全国2500人にのぼる。

PRINCE

住民によるまちづくり
のひとつの方法

住民ネットワークから情報コミュニティへ

PRINCE：北区王子駅圏内の住民ネットワークを構築することを目的とするまちづくりグループ。佐藤孝治(24)を代表として20代前半の若者によって構成されている。インターネットとミニコミ紙を媒体とし地域情報を流通させるとともに、住民活動の核として機能することを目指している。活動はボランティアによってなされている。

4月25日の発足ミーティングは、企画からわずか10日程度で開催された。地域活動としては異例の早さである。PRINCEのネットワーク力もさることながら、北区のまちづくりに向けたポテンシャルも物語っている。北区にはケーブルテレビ、コミュニティFM局、そしてインターネット普及活動とネットワークインフラも整備されており、今後の活動が期待される。

ミーティングの出席者は次のように語っていた。北区役所リサイクル生活課——「一市民として地域のための活

動をしています」。はまりんせ富田氏——「この活動が軌道に乗ったのは、早い段階ですすでにまちづくりを行っている人との連携をとったからです」

同様な活動は都内他区でも興っており、近い将来に巨大なまちづくりネットワークが組まれることは間違いない。そのときに「情報コミュニティ」の本領が発揮されるだろう。

具体的な手法については従来のまちづくりの枠組みにとらわれず、試行錯誤の中で確立していこうとしている。今日のまちづくりは多くの問題を抱えており、これまでも住民の主体性を引き出すことによってそれらの問題解決を図るまちづくりが行われてきた。右に掲載したのはそうした北区のこれまでの活動の一端である。インターネットを用いたまちづくりもその速攻性のあるネットワークづくりを経て生活空間へと船出をしようとしている。



PRINCE代表佐藤孝治氏(右)

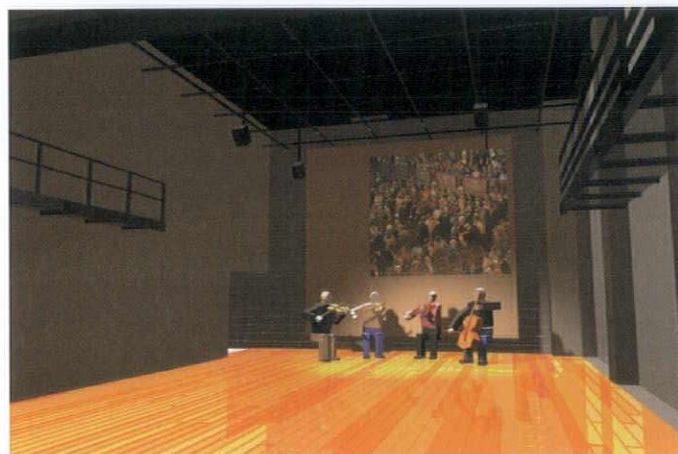


北区役所リサイクル生活課のスタッフ(右)とパルFMのDJのメンバー

開かれた「スタジオ」と「カフェ空間」

コミュニティとの文脈において新たな可能性を持つPRINCEのスタジオとカフェ。ソフトウェアによる空間づくりは新しいビルディングタイプを生まないとと言われるが、人のアクティビティを細かく観察、考察することを通して

これらの空間が変容していくことが予想される。むしろ今はソフトウェアとハードウェアのヒエラルキーを取り除き両者の等価性を全面に出すことが重要だ。



建設予定のスタジオ(CG)

北区役所内で住民の参加度が高いのはリサイクル生活課。その理由は目標が明確で手法がわかりやすいから。

赤羽駅の立体化工事によってできる4万㎡の空間利用。どのようなものをつくるべきか？まちづくり団体はまず住民の関心を高める必要性を訴えたが……。

これまでのまちづくりは、商店街へ客を集めるためのものだった。住民の生活のためのまちづくりは、住民の手による別の方法をとるべきだ。

インターネットを街づくりに生かしたければ、複数のウェブが繋まり、ひとつの組織となったインターネット的な活用によらなければならない。

北区まちづくりポリティックスの断片

赤羽は浦和と他区に挟まれ、商業地としてのポテンシャルが落ちている。商店街に外部から客を呼ぶのではなく、地元住民を根付かせる方を検討するべく、青年会議所が「アットサル地城コミュニティ」を立案。サッカーの一種であるフットサルを商店街を中心とした地域コミュニティの中で行うことにより、消費者の顔の見える商店街づくりを行い、地域活性化の一助にしようと考えた。通産省の補助事業となった。

赤羽駅前の大規模店舗の跡地利用。オートレース場跡地の建設が一部商店街の一部住民の承認によって計画された。しかし、多くの住民が反対したことから、通産省の承認手続きが通らずに設置が見送りに。

「企業でできることは企業がやればよいが、できないことで社会的に必要なことはNPOによって行われるべき」と佐藤氏は述べているが、彼は入社した会社が始まる今夏までの間、可能な限りのネットワークづくりをしようとそこに身を投じている状態にある。民間のボランティアな活動を支える基盤が十分に整備されていない今日、まちづくりも情報コミュニティも持続的な活動が困難な状態にあると言わなくてはならない。

NPOとしての田園都市

これはまちづくりに通底する大きなテーマであり、もっと強調されてよいように思われる。

視野を広げて見てみると、近代都市計画の端緒を開いたイギリス田園都市運動も、そもそもはイギリスにおける労働者の主体的な改革運動として始まっており、活動家と市民はまさに身を投じてこれに当たることで大きな成果を出すことができた。

19世紀の末期、イギリスは産業革命がもたらした都市の過密と不衛生により労働者の失業と健康状態の悪化を招き、国民の3人に1人は貧民として類されるまでになってしまった。この貧民を組織化し救済したのは当時の慈善家達であった。そしてその結果としていくつかの生活空間のプロトタイプが生み出された。キッチンや食堂を共用した共同住宅や低密度住宅地などがそれである。またエベネザー・ハワードは慈善という次元を超えて一つの事業として企業と市民が生活空間＝田園都市を創造することを目論み、1903年から10年以上をかけて充足的に機能するまちを創り上げた。都市計画あるいは計画学という概念が確立されるにつれて、その計画面での評価がなされていったが、組織という視点から建設に関する史実を紐解くと、田園都市は多大な非営利的活動によって支えられていたことがわかる。

最初の田園都市レッチワースの建設は土地を開発することによって地代の増価を図り、土地、建設費の償却を行う方法をとっていた。しかし街の建設費はかさみ、住民に最初の配当が出たのは10年経ってからであった。にもかかわらずその時期は田園都市にとって最も活力に満ちた時期であった。

ハワードは、住民が街の建設に関わることを通して新しいコミュニティが生きたものとして機能し、街の保全もできると考えていた。その概念は時間とともに変わって行くが、田園都市の主導者達は活動開始から約30年経った1930年過ぎまで、運動拡大のために市民主導・行政サポートの体制確立を訴え、田園都市建設を求めて政府と交渉を続けている。しかし政府は、そのような不確かな要素が多い活動は支援せず、という姿勢を最後まで変えず、ついに田園都市の自律的發展が起こることなく、政策によるニュータウン建設へとフェーズは移っていった^{*2}。当時の社会はNGO/NPOを理解し、支援するまで成熟していなかったのである。

結局田園都市は2カ所作られたが、特に第1田園都市レッチワースは現在に至るまでの間に幾度も買収の危機に瀕しながら自治運営を守り抜き、コマーシャルイズムに陥ることなく豊かな街並みを保存している。ハワードのコミュニティに対する思想は1世紀を経てその正当性が認められ、特に近年高く評価されてきている。

拡張するデザイン領域

非営利組織活動それ自身が重要なのではなく、そのプロセスの中に人の活力を増幅させる働きがあることが重要だと思われる^{*3}。これまで建築家はハードウェアとしての都市を自律的にデザインすることに眼

を向けてきたが、都市にどのような人のつながりが発生し、どのようなアクティビティ起こっているのか、という問題は建築家の関わる範疇の外にあった。しかし、ハードウェアとしての都市が、デザインによってではなく人のランダムな関係性によって作られていることが明らかになった今日(それは多くの都市の風景を見れば明らかであろう)、その関係に眼を向けること、そして関係をサポートする仕組みに眼を向けることが建築家にとっても重要な課題となってきたように思われる。

日本是世界からみると都市問題の深刻度は低いため、NPOは育ちにくいと言われている。しかし単に街環境にとどまらず、産業の育成、住民運動の活性化、そして自律・分散型の情報システムにおいて自発性が発揮できる社会システム構築の観点からも、NPOへの期待は否応なしに高まっている。規制緩和、地方分権、情報公開などとともにNPO法案の整備も「まちづくり」と「情報コミュニティ」の形成のためには急務であり、同時に既存のシステムとのバランス感覚を保って行くことで健全な発展へと向かって行くであろう。

情報コミュニティが取り戻す空間の力

「情報コミュニティ」はどのようなリアルスペースを求めるのだろうか。「PRINCE」は関係者の協力によって、計画中のオフィスビルの中にまちづくりの拠点を得ようとしている。地上階のカフェと地階の収容人数100人程のスタジオによって構成されるが、特にスタジオは催しをサウンドとアニメーションによってインターネット上に流すインフラを完備する計画だ。この変化の激しいデジタルの世界では将来の予測は困難であるが、開かれたスタジオとカフェはゆるやかな関係性をつくる「つながり」のまちづくりにとって必要な空間となっていくのではないだろうか。原宿はオープンカフェによって街並みが一変したが、王子ではどのような変化が起こるのか、今後が楽しみである。

また、このスタジオのオープンは来年5月の予定だが、まちづくりを1年通して行い、その後に器ができることに意義を見出しているという。

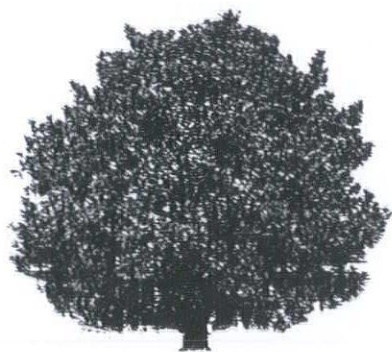
80年代を通じ空間は早い速度で消費され続け、ついには空間を求める市民の力が萎えてしまっている状況が指摘されている。この情報社会の帰結ともいえる状況は同じ情報というパラダイムによってのみ再生をはかることができる、と思う。「与えられた傷は、その傷を与えた武器のみが癒(なお)しうる」のである。ボランティアな活動の「自発性」の中に空間を再生させる試みは震災復興においてもなされたが、情報コミュニティによる空間の再生はそのプロセスづくりに手が付けられた状況にある。

世界のネットワークと繋がるリアルスペースを「自発型」市民のポテンシャルを繋げる媒体として活用する。今後各地で展開されるであろう「つながり」のまちづくりが獲得する空間の質は、この市民の変化を空間に転化する建築家のまなざしにかかっている。

*1: 金子郁容著、「「つながり」の大研究」P.110、NHK出版

*2: ハワードは田園都市運動のプロバガンダのために雑誌「GARDENCITY」を刊行している。このまちづくりの最初のメディアに当時の活動が詳細に掲載されている。

*3: ボランティアのつながりが生む価値と情報社会の関係性については、金子郁容著、「ボランティア——もうひとつの情報社会」、岩波新書を参照されたい。



隔月連載：ネットワークの極意

その1

「オンライン・ネットワークの理想と現実」

- ニフティサーブ建築フォーラム
- みんなのけんちく

◆ネットワークの極意に通じよう

「ヒマはひとりではつぶせない」。

都市圏に住む高齢者、つまり時間はたっぷりあるが懐はそれほど余裕があるわけではない人たちの生活行動を詳細に調査した、社会学者上野千鶴子の得た結論のひとつである。ヒマをひとりではつぶすのは、よほど意志が強く、才に恵まれた特殊な人でない限り無理だということだ。なるほどそうか。

だが、これは何もヒマ人に限った話ではないのではないか。

人は仲間を必要とする。旅する、スポーツする、学ぶ、探検する、研究する、仕事する、政治活動をする、宗教活動をする、悪巧みをする。何をしても、人はひとりで動くことは滅多にない。孤立すれば無援に陥ることを人は習慣的に知っている。

「ヒマはひとりではつぶれない」。

上野が同じ調査で得たもうひとつの結論である。自らの意志で行動を起こさない限り、ヒマという状況に変化は起こすことはできないというのだ。なるほどそうか。

だが、これは何もヒマ人に限った話ではないのではないか。

人は携わるべき何かを求めている。無為を全うすることがどれほど難しいか、現代人ならば誰でも思い知っている。

つまるところ、人は仲間を募り、何事かをせずにはいられない。そうした行為をネットワークと呼び、今号から隔月で4回、さまざまなネットワークを紹介する連載を行う。

と言っても、これだけでは漠然としていて捉えどころがない。さしあたって、対象とするネットワークの種類、私たちの主たる関心の内容と目的をかいつまんで説明しておこう。

取り上げるネットワークは次のようなものだ。建築、デザインに関連した分野の、1.与えられた目的をもたず、2.画一的な価値観を共有せず、3.閉鎖的でなく開かれていて、4.一時的でなく継続性を有し、5.組織的に見て参加型の、それでいて、6.単なる仲良しグループというに留まらず内部にある種の緊張を

含んだもの。

上述の1～6のような属性をもったネットワークを仮にX型とし、それとは反対の属性、つまりははっきりした目的が与えられていて、画一的な価値観を共有し、閉鎖的で統制型のネットワークをY型とすると、これまでは社会の中心をなすのはY型で、表、正、中心の存在とみなされ、それに対してX型は裏、負、周縁の存在とみなされてきた。

しかし社会は急速に反転しつつある。Y型は組織の堅固さゆえに、あるいは組織の上部が硬直化すると全体が不調を来す性状ゆえに、フットワークが効かず、めまぐるしく変容しつつある社会状況に対応できないでもがいている一方、X型の方は勢いを増し、周縁から中心をうかがう位置にある。

いや、こんな図式を描くことが目的ではない。こうした認識を頭の片隅に置きつつ、実際に運営されているネットワークを訪れ、観察し、X型ネットワークの現状を知り、未来を占ってみようというのが私たちの主たる関心である。なお、当誌の性格により、直に経済活動に関わっている組織は省いている。

第1回は、パソコンを通信回線によって連結したネットワークを利用して運営されているケースをふたつ取り上げ、オンライン・ネットワークの可能性と現時点での限界を探ってみることにする。

◆ニフティサーブ建築フォーラムの誕生

1982年、今から15年前、『A〇C』という雑誌が創刊された。建築CAD関連の記事を掲載する季刊誌だったが、時期尚早だったためか数号で休刊となった。その編集に携わったメンバーが核となり、1985年に設立された草の根通信ネットワークが「アーキネット」で、数あるネットの中でも、専門家による専門的な話題が交わされているユニークなネットとして知られた存在だった。

パソコン通信サービス「ニフティサーブ」は、同じく大手商用パソコン通信サービスのひとつであるPC-VANに1年遅れるかたちで、1987年4月にスタートしたが、たち上げの際

に、分野別に活発な活動を続けているいくつかの草の根ネットに声をかけ、参加を募った。建築の分野では当時会員数が100人程度に育っていたアーキネットが参加することになった。[建築フォーラム]の始まりである。

ニフティサーブは、組織図で表すとツリー型、上意下達式の組織形態のように見えるが、実際には本体は通信システムのハードウェアを備えているだけで、各フォーラムはそのシステムの提供を受けて独自に運営されている。運営の責任者はフォーラムマネージャー、その下にシステムオペレーター（略称SYSOP）が必ずいる。もちろんフォーラム間に共通する約束事や遵守事項も定められているが、内容よりは形式に関わるものが多く、実際の運営はフォーラムごとに完全に自主的になされている。

建築フォーラムの創設1年後から今日に至るまで、ずっとSYSOP兼任のマネージャーをつとめているのが建築家の鳥谷部真である。

◆オンライン空間が公共空間に転化するとき

以下ではフォーラムの中心をなす電子会議室について見てみよう。

ひとつのフォーラムについて最大20の会議室がテーマ別に設けられ、それぞれ自主運営されている。フォーラムに入会さえしていれば、会議室にはいつでも誰でも参加でき、発言できる。

どのような組織や集まりであれ、創設することは容易でも、活動を勢いづかせ、テイクオフの状態までもっていくことは難しい。特にニフティのような、入会・脱会が自由で、相手との関係はパソコンの上だけという薄弱なもので、加えて議論に参加すると時間に応じて通話料+使用料が課金されるという状態のもとで、参加者を増やし、議論を活発にしていけるのは、どう考えてみても至難のことにように思えてならない。何か魔術でもあるのだろうか。

鳥谷部によれば、それは「賑わいの創出」に尽きるという。活発な応答が渦巻いているとき、新たに加わった参加者もそこに飲み込

まれるように議論を始めるようになるというわけだ。賑わっていること、あるいはそのように見えることが肝要なのだ。この辺りは現実の空間での事情とあまり変わらない。「発言に対して数時間のあいだに回答がないと、悪い印象を与えてしまう。この会議室は寂れているのではないかと。それが悪循環を呼んでしまうんです。」オンライン会議室での賑わい感、発言者数はさておき、何にも増して回答のすばやさによってもたらされるということだ。

1992年、創設から5年で建築フォーラムの会員数が1万人を超えた。そうすると状況は一変したという。

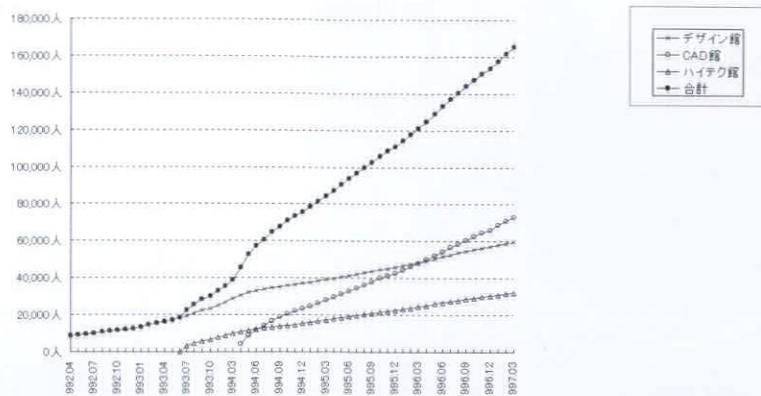
第一に参加者の質の変化。それまではパソコンに非常に詳しいマニアが大勢を占め、この方面に疎い人には敷居が高く、閉鎖的な集団というイメージを免れ得なかった。しかし90年頃からは誰でも気軽に加わるようになった。一部の特殊な人たちのためのメディアでなく、公共のメディアとして広く認知され始めたと言える。

第二には会議室の議論の状態の変化。以前は、議論を起こすために、核となるメンバーたちが自ら仕掛け、メンテナンスし、軌道修正する必要があった。しかし、数の力は大きい。1万人を超えると集積効果が著しく、議論の種そのものが増え、特にケアしなくてもひとりりで議論が展開するようになったのだ。組織としてのテイクオフがなされたと思えるべきだろう。

第三にマナー。オンライン会議ということ、参加者間の議論がトラブルに発展するケースがよく問題にされる。建築フォーラムもそうしたトラブルに無縁であったわけではない。普通は参加者数に比例してトラブルも増加すると考えられるが、実際は逆で、初期に頻発したトラブルは次第に減少し、今ではほとんど起きないという。

オンラインの議論には、個人間の議論でも数千人もの目に触れる可能性があること、相手の素性や性格などのインフォメーションが少なく、表情や動作などの言語以外のメッセージが伝わらないこと、議論が記録として残り原則として消去できないこと、などの特性がある。これらが理解されていないと、顔を向き合っている場合ならたやすく解消されたような事柄であっても、予想外にこじれてしまうことが起こりうる。

会員数の増加が急ピッチになってきたのに伴い、逆にトラブルが減ったのは、無意識のうちに参加者の間にオンライン上での発言のマナーが備わってきたとみるべきだろう。これは大きな進歩だ。オンライン上の空間が公



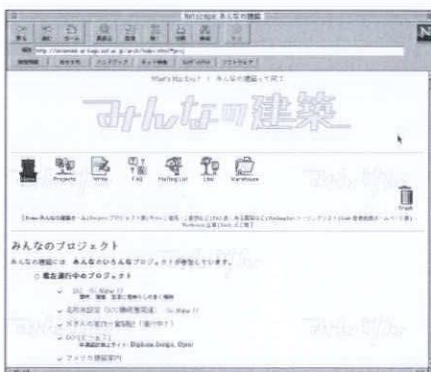
ニフティサービス加入者数の推移



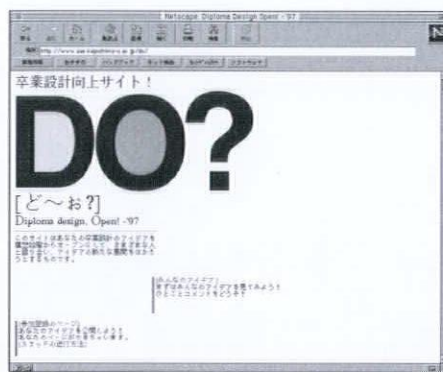
鳥谷部 真 (ニフティサービス建築フォーラムマネージャー)

ニフティサービスおよび同建築フォーラムの歩み (*印は建築フォーラム関連)

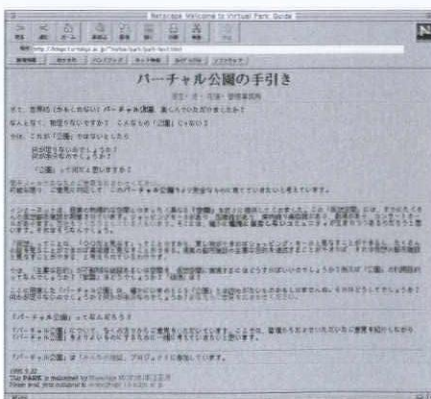
- 1986年4月 アーキネット始まる*
- 1987年4月 ニフティサーブ、サービス開始
- アーキネット、ニフティに参加*
- 1990年4月 ニフティサーブ24時間サービス開始
- 会員数10万人突破
- 1992年8月 建築フォーラム、会員1万人突破*
- 会員数40万人を超える
- 1993年4月 PC-VANとの電子メール相互接続開始
- 5月 会員数50万人突破
- 9月 建築フォーラム・ハイテク館スタート*
- 11月 コンピューサーブとの電子メール接続開始
- 1994年2月 インターネット接続サービス開始
- 4月 建築フォーラム・CAD館スタート*
- 1995年4月 会員数100万人突破
- 1996年1月 インターネット、ダイヤルアップPPP接続サービス開始
- 9月 会員数200万人突破



みんなの建築ホームページ



「ど〜お?」のホームページ

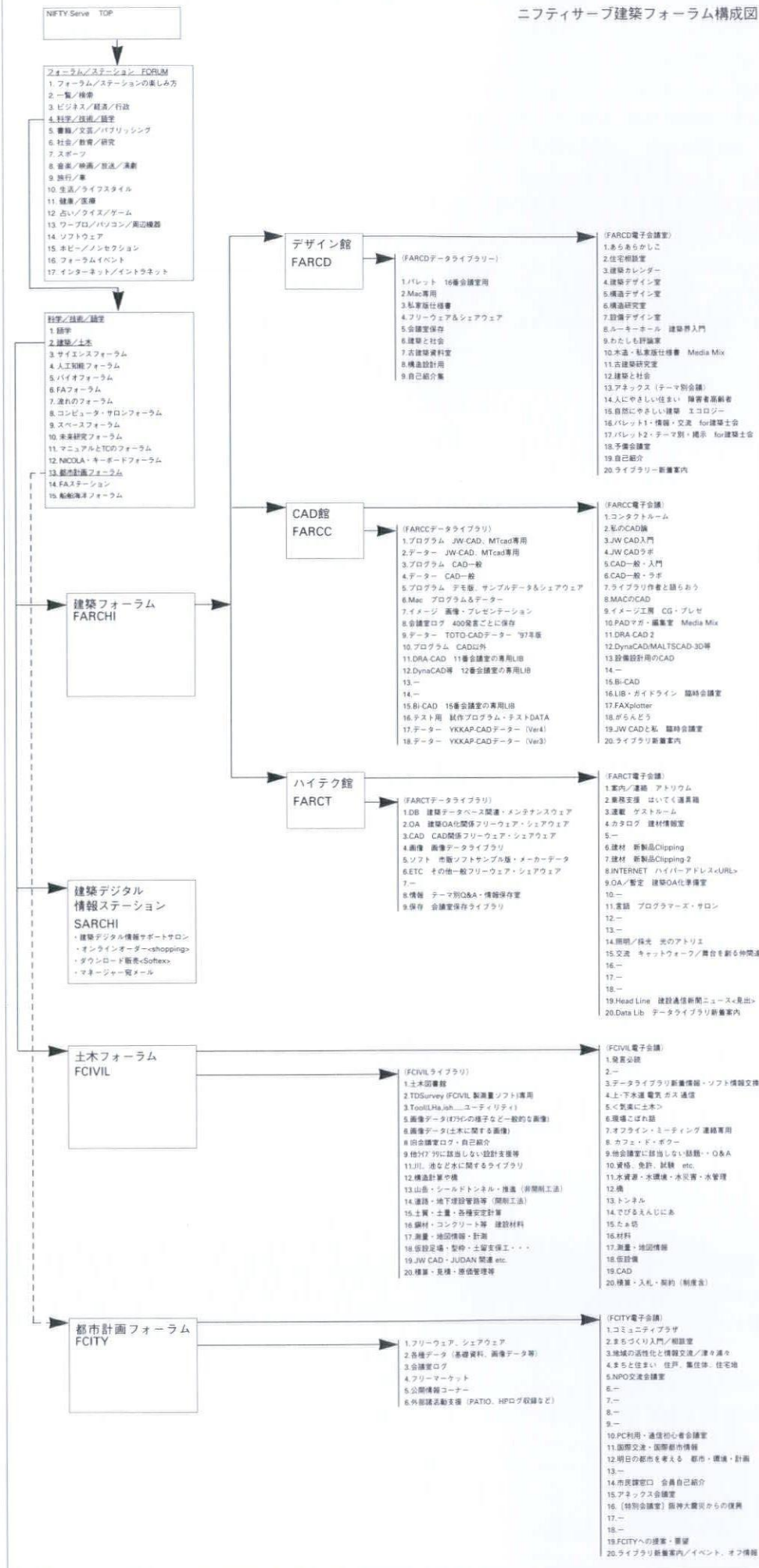


ヴァーチャル公園のホームページ

みんなの建築の歩み

- 1995年 5月 仲隆介、西田徹、本江正茂などによりWWWサイトを立ち上げる
- 7月 東京理科大学にサーバーを開設 名称は建築クラブ
- メーリングリスト開設。「投書/発言の部屋」開設
- 9月 みんなの建築に改名
- 初のビジュアルプロジェクト「バーチャル公園」
- 11月 「何でも建築相談室」開設
- 1996年 1月 書き込み形式の部分のインタフェイスを強化
- 4月 ビジュアルプロジェクト「墮落する都市」
- 5月 「建築いいたい放題」開設

ニフティサーブ建築フォーラム構成図



共的な社会空間として成立したことを意味するからだ。

◆Q&Aから相互応答へ

鳥谷部によると、オンラインの議論の発達の段階は次のように整理される。1：挨拶型、2：Q&A型、3：情報交換型、4：表現メディア型、5：情報発信型。

1の挨拶型は、自己紹介を含めたナイーブなコミュニケーションのかたち。

2のQ&A型はもっとも一般的なかたち。会議室によっては大半がこれに該当する場合もある。パソコン通信を始める動機の多くを占める。問題は、問いかける側と答える側に二分されてしまい、圧倒的多数の前者の攻勢に少数の後者が必死で対応するという図式に陥りがちなことだ。Q&Aから入った人が、次の段階に進めるかどうかが肝心だ。

3の情報交換型は、ある程度の熟練者が、互いの経験や知識をもとに情報を交換しあうかたち。この段階で初めて、パソコン通信の特性を生かした相互応答がなされるようになる。その延長として4の表現メディア型は、情報に留まらず、自分の考えや意見を表出し、交換する場としてとらえ、その中で考えや意見を発展させていく方向に進む段階。

5の情報発信型はさらに議論が精緻化し、フォーラム全体の意見あるいは成果としてまとまったかたちになり、それが外部に発表されるような段階である。

ここまで達するのが理想だが、ただし意見をひとつにまとめることを目標とすることは会議室の趣旨にむしろ反する。特定の考えや志向をもったリーダーが出現し、参加者を導き、ひとつの意見に集約していこうとするのはオンライン・ネットワークのもっとも嫌うところだ。あくまでも多様な人格、意見をもった個人が、平等な立場で、自由に意見や情報を交換すること、そのプロセスそのものが重要とみなされる。交わされる意見や情報の密度やレベルが高まることが称揚されるべきなのだ。結果は、もし生まれたとしても二義的なものでしかない。建築フォーラムの会議室もそうした意図で運営されている。

◆みんなの建築

「このサイトは『建築』について語り合う場です。また、建築が車や洋服のように、フツウの人たちのフツウの話題になりうるかを実験する場でもあります。」

これは『みんなの建築』のホームページの巻頭に記されている趣旨文である。

みんなの建築はインターネット上のWWWのサイトに設けられた双方向性のオンライン

マガジンである。1995年5月、すでに研究・教育の面で交流をもっていたいくつかの大学の研究者仲間が集まり、ともかくもインターネットで建築の話ができる場を作りたいということで始められたものだ。特別な参加資格はなく、メーリングリストに登録すれば誰でもメンバーになれる。登録しなくても閲覧も投書・発言も可能だ。ほとんど開かれた組織といえる。平均アクセス数は1日90余り。かなり盛んだ。ただし気心の知れた研究者仲間をコアメンバーとしていることから、自然に、ある種の垣根が形成されていることは否めない。それがこのサイトのカラーであるともみせよう。

現時点でのメニューから興味深いものをいくつか紹介する。

先ず「ICC磯崎展関連」。これは新宿に開設されたICCのオープニング企画である「海市——もうひとつのユートピア」と関連して、それに参加したり、批評・感想を述べ合うサイト。「海市」の主な趣旨は、磯崎アトリエ製作のVRMLによる3次元プロトタイプモデルに、参加者がインターネットを通してアクセスし、自分の提案を折り込んで作りなおし、送り返すと、その提案が反映されてプロトタイプが刻々と変化していくという、自由参加形式の理想都市作りである。しかし、みんなの建築での評判は芳しくない。相互応答を旨としているにしてはモデルの情報量が莫大で、実用にならないという批判である。大企業のホームページがしばしばそうであるように、発信側が重厚長大の意識から抜け出していないときに起こりがちなケースだ。オンライン上のディスコミュニケーションの原因として、単純だが根深い問題である。

それに比べると「Nさんの家作り奮闘記」は軽快だ。Nさんが家を作るにあたり、土地探しから始まる一部始終を報告し、みんなの意見を募り、相談しながら進んでいくというもので、リアルタイムでプロジェクトに参加している臨場感がある。「建築がツツウの人のツツウの話題になりうるか」という試行としても意義深い。弱点と言えば、Nさんに過剰な負担がかかることと、現実の家作りが障害にあって滞ってしまうとオンラインの議論も必然的に滞ってしまうことだ。

「ど〜お?」は鹿児島大学が主宰する卒業設計の向上サイト。卒計のアイデアを構想段階からオープンにして、さまざまな人と語り合い、アイデアの展開を図るというものだ。コアメンバーが大学関係者というみんなの建築の成り立ちからしても、その意図には期待がもてる。建築学会でも教育の一環として学生の作品をインターネットギャラリーに公開

しているという動きがあると聞くが、そうした一方向の情報発信型の試みよりは、こちらの方がはるかに実効性が高いように思える。が、実状は必ずしもうまくいっていないようだ。参加者の通信環境にばらつきがあることから、現時点では文字だけの応答に限られていることが、議論が盛んになりにくい一因かもしれない。この辺りは前述の情報量の問題とも絡んでくる。同じことが「みんなで作ろうみんなの都市」のサイトについてもあてはまる。これはメンバーが自作の都市モデルを公開し、それをネタに意見を交わし、モデルを進化させようというものだ。通信環境が一段と整備されれば、こうしたサイトこそ活発な展開が起きるはずだ。

「投書、相談コーナー」はそれなりに活発だ。学生が質問し、研究者側が答えるQ&A型の議論が多い。就職、留学、建物のありか、卒論のテーマなどだ。興味深い現象は、Q&A型では議論にすぐに終止符が打たれるのに対して、例えば「洗練って何?」、「コミュニケーションって何?」というような漠然とした質問が発せられたときに、予想外に議論に広がりが生じることだ。ひとつの定まった答えを求める問いからは1対1の関係しか生まれないうが、多面的な見方が要請される問いがうまく発せられると、連歌にも似た輻輳する発想を呼ぶことがあるようだ。オンラインの議論のおもしろさだろう。

◆壊れやすいネットワークの利点

「ニフティサーブ建築フォーラム」と「みんなの建築」を概観してきた中から、オンライン・ネットワークに関して気づいた点を二、三、挙げておこう。

ひとつは、構築、再構築の容易さである。

建築フォーラム内の会議室数は20に限定されている。この範囲の中であれば、模様替えは自由に行える。実際、会議室の新設、統廃合は頻繁になされている。また、20では納まりきれなくなった時や、基本的に異なる性格のフォーラムが必要になったときには、兄弟フォーラムを作ることもマネージャーの裁量の範囲だ。建築フォーラムは93年にハイテク館を増設してデザイン館との2館体制となり、翌年さらにCAD館を作って3館体制となった。あすのまちづくり会議室が独立して発展的に都市計画フォーラムになったように、ひとつの会議室が実績を重ねたのちに巣立って一人前のフォーラムに成長していくケースも数多い。みんなの建築でも同様に臨機応変にサイトをたち上げている。

いずれの場合も、告知は簡単で、すばやく体制が整い、費用もそれほど発生しない。物

理的な物の移動や設営を伴わないことだけでも、ずいぶん違う。こうした身軽さこそオンライン・ネットワークの最大の利点と言えよう。今の社会で数年間も有効な体制を作ることは得策でない。ネットワークの壊れにくさそのものが自身を縛る。むしろ壊れやすい体制を備えている方がはるかに有利なことが多い。オンラインの可能性のひとつをそこにみることができるだろう。

もうひとつは、新たなマナーあるいは話法が生まれつつあることだ。

オンラインの議論は、対面してのそれとも、活字メディアや放送メディアにおける議論とも異なるマナーが必要とされる。発言内容と人格とは別のものであると考えること、引用を避けて自分の言葉で語るように努めること、間違いはただちに修正すること、反論は時間を置いてからすること、等々。

さらに話法も変わる。基本的には話し言葉に近いとしても、話し言葉に固有のイントネーション、アクセント、音の高低、表情などは伝わらないわけだから、文字列自体に個性を与えなければならず、それでいて客観的な分かりやすさも備えている必要がある。難しい。でも、若い世代は苦もなく修得している。あらゆる意味で重さは禁物だ。軽いノリ、軽い飛躍、軽い諧謔、軽いユーモア。軽みの中に真実を込めることが秘訣のようだ。

こうしたマナーや話法は、考えてみれば私たちが外国人と交渉する際に必要としていることと近い。できる限り明快に、客観的に意志を伝え、押すべきは押し、引くべきは引き、ゆとりを失わず、ユーモアを交えながら短時間でコミュニケーションを交わすこと。オンラインでの議論はボーダーレスの時代にふさわしいマナーと話法を身につける格好の場になりうると思う。

最後に、伝達する情報の量と質。これがうまくコントロールされないと、少なくとも現時点の通信環境ではコミュニケーションがスムーズに進まない。何とかできるということと、快適にできるという差は大きい。快適にできないなら好んでアクセスしようとしにくい人がいたとしても非難するにあたらぬ。過剰な量、高度すぎる質はディスコミュニケーションの因となってしまう。心すべきだ。

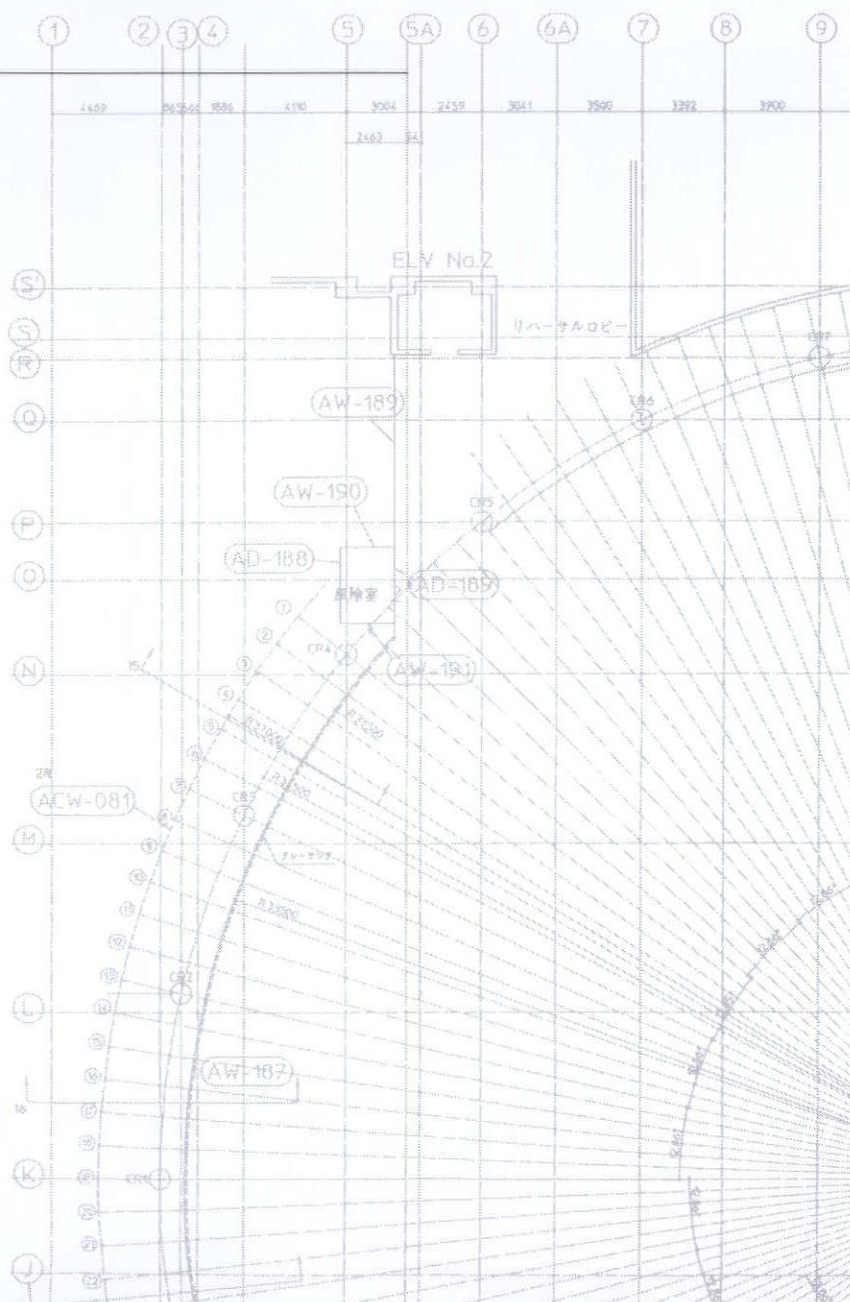
■企画構成＝伊藤公文

■取材協力＝長谷川正充

時代の潮流を かたちに

時の流れと共に変化する時代の潮流。
都市景観を構成する建築デザインもその時代の潮流に沿って
素材から形態、そして機能までもが変化し続けています。
神鋼ノースは、そんな時代の潮流から生まれる
さまざまなビル建築の表情づくりを
アルミを主材とした先進の技術で、強力にバックアップしています。

桶川市民ホール
カーテンウォール
割付け平面図



◆ 神鋼ノース株式会社

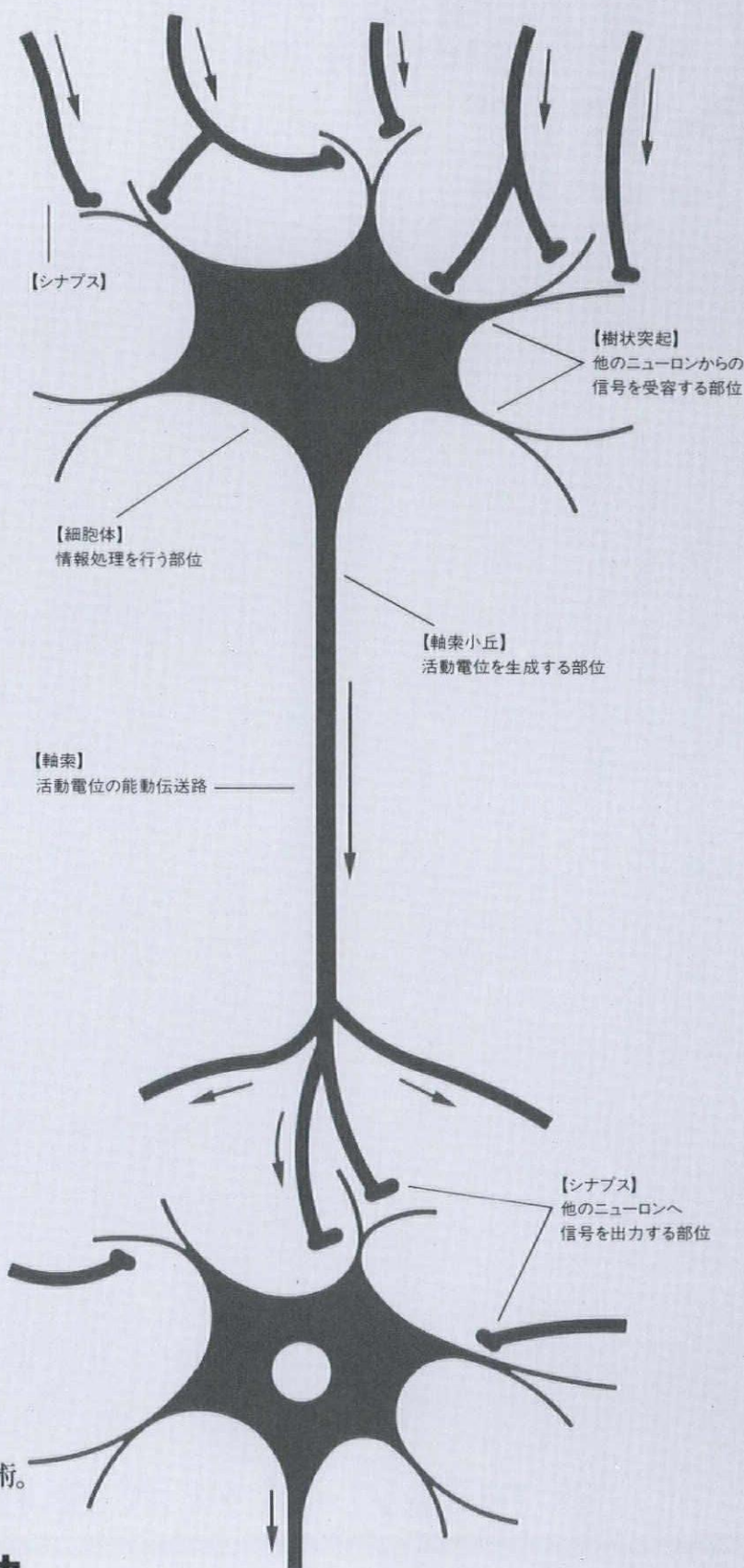
本社 〒104 東京都中央区京橋2丁目1番2号(京橋ビル)
TEL.03-3278-4100(代表)

大阪支店 〒541 大阪市中央区備後町4丁目1番3号(御堂筋三井ビル)
TEL.06-229-3461(代表)

東関東営業所 〒315 茨城県新治郡千代田町上稲吉1758番1号
TEL.0299-59-4522/4523

神戸営業所 〒651 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目81番1号(神鋼脇浜ビル)
TEL.078-261-8255

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに応えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エアーデザイン技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-35562113 FAX 03-35562114

時代の呼吸に応える技術。



東熱

『アジア・スタイル——17人のアジア建築家たち』

村松伸＝著

浅川敏＝写真

A5判 204頁

大成建設 2800円

香港を筆頭に刻々と変化するアジアの都市や建築は、今どうなっているのか。アジア建築通の二人が、各国の建築家17人にスポットをあてながら現状をレポートする。初出は大成建設社内報『たいせい』の95年4月～96年3月連載。



『建築の美——ステンドグラス』

下村純一＝著

A5判変型 52頁

クレオ 1000円

ヨーロッパの近代建築を中心に取材活動を続ける写真家の下村純一が、アール・ヌーヴォー建築、ゴシックから20世紀建築までのステンドグラスを幅広く撮影。コルビジエ、マッキントッシュ、アールトらが手掛けた作品を収録。

同様のシリーズ『ガウディ』も刊行。



『生き方を創る「設計図」』

堀池秀人＝著

B6判 240頁

講談社 1360円

「建築家に必要」とされる広範な知識や企画力はどうに培われるのか。自ら建築家の本流からは外れた生き方をしているという著者が、作家の森田子や数学者の広中平祐らの具体的なエピソードを交えて半生を語り、人生を生き抜くヒントを提示する。



『環境をデザインする』

環境デザイン研究会＝編

B5判 206頁

朝倉書店 5000円

個々の領域でのデザイン成果を重んじるあまりに、全体ではかえって問題を生み出していることは多い。本書では、よりよい環境の形成という点から、さまざまなデザイン領域で活躍するデザイナーや研究者が現状と今後の可能性を解説。多様な展開を見せる環境デザインを総合的に浮かび上がらせる。



『日本のゼネコン——その歴史といま』

岩下秀男＝著

A5判 162頁

日刊建設工業新聞社 1800円

著者によれば、日本での「ゼネコン」という言葉を考えるとき、実はあまり明確な定義がなされていない。本書では、「請負」という行為の歴史的な変遷の中にゼネコンの発祥を見、それが歴史的にどのような意味を持つのか、検証する。ゼネコンの功罪や今後の役割についても考察する。



『住まいの文化』

——豊かな暮らしのためのテキストブック』

住文化研究会＝著

A4判変型 156頁

学芸出版社 2200円

食、寝、季、納など住生活の中の身近な話題を起点として自分達の「今」「ここ」を見直し、豊かな住生活のための「これから」を考察する。前半の「設」「様」「格」では日本の住文化を、後半ではより実践的な住まい方の提案を行う。



『コレクティブ・ハウジングの動機』

小谷部育子＝著

四六判 200頁

丸善 1800円

北欧を中心に広がりを見せるコレクティブ・ハウジング——共生型集住。本書では、ますます孤立する都市生活者に対して、「コミュニティ」を提供するコレクティブ・ハウジングを、オランダ、デンマーク、スウェーデン各国の事情を通じて解説、新しいライフスタイルを提案する。



『生産の構図——日本の建設業の断面』

日刊建設工業新聞社編集局＝著

四六判 264頁

日刊建設工業新聞社 2000円

厳しい工費と時間の制約の中で効率的な工事を行うには現場のマネジメントこそが重要であり、これに現場技術のひとつとして確立させることが急務である、とし、本書では建設業の現在の問題や課題をそうした視点から検証する。

同紙上の連載シリーズの単行本化。



『小さな森の家——軽井沢山荘物語』

吉村順三＝著

B5判変型 112頁

建築資料研究社 2330円

吉村順三の軽井沢の山荘をさまざまな角度から紹介する。「心地よい空間をつくる手法」として細かい配慮が施された設備計画や軽井沢の自然に馴染む素材の活かし方などを中心に、当地の四季や山荘群、動植物なども紹介。吉村順三の手書き設計図も初めて掲載。



『劇場』

S.ティドワース＝著
白川宣力＋石川敏男＝訳
A4判 382頁
早稲田大学出版部 4300円



評者＝
清水裕之

劇場と演劇、仲の悪い姉妹たち

S.ティドワースの『劇場』が、新しい装丁となって登場した。原著は1973年、日本語版は1986年に既に出版されており、全く新しく読者の目に留まる訳ではないが、改めて目を通し直して、この本で言及される事例の範囲の広さとデータの奥行きに感銘を新たにしたい。この本は建築的な側面から劇場の歴史を扱うことを主眼としている。そして、「建築と演劇、このふたつの芸術は姉妹関係にあるが、姉妹の間によくあるように、互いの良さを引き出しあうことがない」という書き出しで始められているように、劇場建築と演劇の必ずしも協力的でない関係を強く意識している。現存する石造のギリシア劇場が、アイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースらの歴史に残る名作が上演された素朴な空間とは別のものであること、18世紀フランスの新古典主義の荘厳な劇場建築が必ずしも中身の創造性とは無縁であったこと、中世の聖史劇の作家、あるいはシェークスピアといった偉大な劇作家たちにとって舞台は必要最小限のものであったことなど、そのすれ違いの事実は2000年を超える西洋の劇場史のなかに数限りなくうかがうことができる。

演劇とは身体による模倣の芸術であり、必ずしも空間や都市の構成規範としての建築を必要としない。筆者が最後の章で示唆するように、20世紀におけるプロセニウム解体の動きも、舞台と客席の隔たりを無くしたと無邪気に喜べるものではなく、演劇と演じる空間の乖離を未解決のまま突きつけ続けている。

筆者がこの本を著してから、20年以上の歳月が流れている。そして、その間に様々な演劇運動や劇場建築の提案がなされた。70年代には世界中で、アンダーグラウンドの演劇やオ

ルタナティブ・スペースの試みが展開された。日本では、寺山修司の街頭演劇や佐藤信や唐十郎のテントが既製の演劇空間とは違った興奮を観客に与えた。渋谷ジャンジャンなど、ごく普通のビルの地下の空間が熱気を帯びた劇場に変化する体験も味わった。しかし、その熱気も今は昔の物語となった。80年代には各地に公立の文化センターが流行病のように設置された。そして、90年代には従来の多目的ホールとは一線を画したコンサートホールや演劇専用劇場が建設されるに至っている。それらの音響効果や技術設備の充実は世界でもトップクラスであり、建築としても非常に完成度の高いレベルに到達している。しかし、残念ながらそこから世界を震撼させるような刺激的な演劇の創造が行われたとは寡聞にして知らない。むしろ、劇場建築が盛んなときは演劇の創造力が萎えているときという時代の習わしを再び再現しているかのようである。

時代は90年代後半に入り、バーチャルスペースへの扉が開かれようとしている。この時代に劇場、そして演劇はどの様に変質するであろうか。そして、劇場と演劇は改めてハネムーンの時代を過ごすことができるのだろうか。筆者は、そうした新しい世界を経験できる時代に生まれたことに期待と喜びを感じる一方、ティドワースが本書を通して指摘した事実を振り返ると、21世紀にむけた危険な賭けへの敗北も杞憂している。特に、1920年代のロシアにおける様々な試みと失敗は、現代になにか通じるような気がするの筆者のみであろうか。パイロイトのような数少ない成功例を期待しながら21世紀を待つとしたい。

●しみず・ひろゆき／名古屋大学大学院教授

Metropolitan Library

6月の評者＝
難波和彦

モダニズムの英国的形態に注目してみたい。ハイテク建築のルーツを探るためである。モダニズムは英国に端を発し、ドイツやロシアで建築運動に高められ、フランス、オランダ、イタリアへと飛火し、第二次世界大戦後に世界中に広まったというのが近代建築史の一般的な説明になっている。しかし1920年代のモダニズム最盛期においても、英国の建築家はほとんど運動に参加していない。一方、1970年代に勃興するハイテク建築を担ったのは、主に英国の建築家たちである。ふたつの流れにはどのような歴史的連関があるのだろうか。

『デザインのモダニズム』は、ヨーロッパやアメリカにおけるモダニズムの歴史的展開について、各国ごとの特殊性を分析したアンソロジーである。訳者あとがきにあるように、本書の目的は「複雑化と重層化のなかにモダニズムを再配置することによ

て、これまで単線的で画一化されてきたモダニズム観を是正する」ことにある。英国に関しては、ふたつの章が割かれている(第2章「機能という神話」、第6章「日用品のデザイン：1912-44年の英国におけるモダニズムの振興」。平たく言えば、大陸の合理主義に対して英国には経験主義の伝統があり、英国人は理論的、美学的言説を嫌う傾向がある。そのためにイデオロギー化したモダニズム思想は英国には受け入れられにくかった。さらにモダニズムが社会主義革命や国際主義に結びついて流布した点も、保守的な伝統を重んじる英国に根づかなかった大きな要因である。私見では、ハイテク建築は社会思想や美学としてのモダニズムというよりも、近代技術のプラグマティックな応用として英国の伝統に結びついたのだと思う。

『ロンドン・アヴァンギャルド』は、かつてAAス

『住まい方の実践——ある建築家の仕事と暮らし』

渡辺武信＝著

新書判 282頁

中央公論社 760円



評者＝

中村好文

ひとり談論風発

「住まい方の実践」の著者、渡辺武信さんとは、昨年の夏、宮脇檀さんが主催した、マンションのルーフトラスから花火を見物するという趣向のパーティでお会いすることが出来た。

もっとも、私はそのパーティのゲストとしてではなく、どうやら宮脇料理人の助手として呼ばれたらしかった。というのは、ドアを開けたとたん、挨拶もそこそこに、あのコックのかぶる白い帽子(しかも宮脇さんよりコックとしては一段格が低いらしい形の……)を渡され、「料理人その2、登場!」と言われたからである。

人生では、目上の者を敬うことも、成り行きというものに身をまかせることも、大切であろう。さっすく、私はその助手格のコック帽をかぶって台所に立ち、料理に精を出した。

その夜、渡辺さんはルーフトラスの、花火の一番よく見える特等席のようなところに居心地良さそうにおさまり、悠然とビールのグラスを傾けたり、美味しそうなものを誰よりも素早く口に運んでいたり(つまみ食いも、詩作と同様に渡辺さんの得意な領域らしい)、ゆったりパイプを煙らしたりしつつ、同じくその夜のゲストだった林昌二・雅子夫妻や、松本哲夫さんなどと盛んに談論風発しているのだった。

「自分の住まいと仕事場における日常を具体的に綴った」と渡辺さんのいう「住まい方の実践」を読みながら、私は、今書いた「談論風発」という言葉ぐらい渡辺武信さんにお似合いの言葉はないのではないかと考えていた。「なにかにつけ口数が多く、おしゃべり」を自認するその渡辺さんが、この本の中で、実にもう、しゃべる、しゃべる。

ファミリーレストラン隆盛の考察から語り始め、ビールの効用を語り、テレビ画面の大きさについて語り、湯布院の魅力を語り、だ

し昆布の見分け方とその入手法を語り、TVコマーシャルの真理を語り、建築家の暮らしはそれ自身が生業であると語り、散らかしの正当性を語り、「おかえりなさい」と迎える持ち物を語り、自邸の設計と生活上の工夫のすみずみまでを語り、ついには、暮らすこと、住むことの人生における意味までを語るのである。

「談論風発」という言葉は、もともと複数の人々でなければ成立しないものだと思っていたが、どうも、そうばかりではないらしい。この本の中で渡辺さんは「ひとり談論風発」をしており、読者はその豊富な内容の談論風発の輪に知らず知らずのうちに巻き込まれながら、自分もまた「住宅とは何か?」という命題に限りなく近づいていることに気づくのである。

渡辺さんは、ただ居るのが楽しい部屋で、長年慣れ親しんだ座り心地の良い椅子に沈み込み、愛用のパイプを煙らせ、ワインをチビチビやりながら、ビデオを見たり、読書したりしてグダグダと「一日を暮らせる」ことが好きなのだという。そうしたごく穏やかな時間の中から「暮らし」というものの核心は、ハレの対照であるケ、つまり、とくに何もしていない時にある」という思想や「住まいとは生活の便宜のための道具ではなく、なによりもまず、ありふれた行為を、つまり人生を包み込む容器なのだと思う」という自身の生活と経験に裏打ちされた珠玉の言葉が、パイプから立ちのぼる香り高い紫煙のように立ちのぼってくる。

ぜひ、住まい方三部作の他の二冊「住まい方の思想」「住まい方の演出」と併せて読まれることをお勧めしたい。

●なかむら・よしふみ/建築家

クールに在籍した経験のある若い日本人建築家が、英国の戦後建築史を現在から遡るかたちでたどったものである。個人的な感想を交えた気軽な読み物だが、近代建築の英国的展開を概観できる好著である。モダニズムは根づかなかったにせよ、英国には経験主義や伝統主義に反抗するアヴァンギャルドの伝統がある。音楽でいえばビートルズ、ローリングストーンズ、パンクがそうであり、建築では60年代のアーキグラムや80年代のAAスクールがそうである。AAスクール内部には英国的なハイテク指向と大陸的なアート指向のふたつの潮流がある。そのような幅広さは大陸からの多数の建築家を迎え入れたことからもたらされたものであり、著者によれば、そうした動きはやはりモダニズム期にまで遡るのである。

『ピーター・ライズ自伝』は、1992年に57歳で亡くなった構造エンジニア、P. ライズが死の直前に綴

った自伝である。彼は現代のハイテク建築を支える英国のエンジニア集団オブ・アラップ・アソシエイツに所属し、パリのボンビドウ・センターを初めとする数多くのハイテク建築を実現させた。彼はアイルランド人であり、時には詩も書くような特異なエンジニアだった。彼の構造的発想には常に不連続な飛躍があり、実用性を越えた美学が感じられる。彼はR. ピアノやR. ロジャースのような正統的なハイテク建築だけでなく、B. チュミのラ・ヴィレット公園のような仕事もこなしている。そうした幅広さは、彼自身のマージナルな感性のせいだけではなく、英国の建築界が多面的な方向を受け入れるAAスクールのような懐の深い伝統に根差しているためであろう。

『メイキング・オブ・ブレッドランナー』は建築書ではないが、ハイテク建築の英国的ルーツを語るには欠かせない本である。1982年に公開された映画

『ブレッド・ランナー』がハイテク建築のデザインに与えた影響ははかり知れない。この映画を監督したリドリー・スコットも英国人である。その映画づくりの全貌がようやく明らかにされたことを、何はともあれ報告しておきたい。

『デザインのモダニズム』

ポール・グリーンハルジュ＝編
中山修一・吉村健一・梅宮弘光・速水豊＝訳
鹿島出版会 4326円

『ピーター・ライズ自伝——あるエンジニアの夢みたこと』

ピーター・ライズ＝著
岡部憲明＝監訳 太田佳代子・瀧口範子＝訳
鹿島出版会 3914円

『ロンドン・アヴァンギャルド』

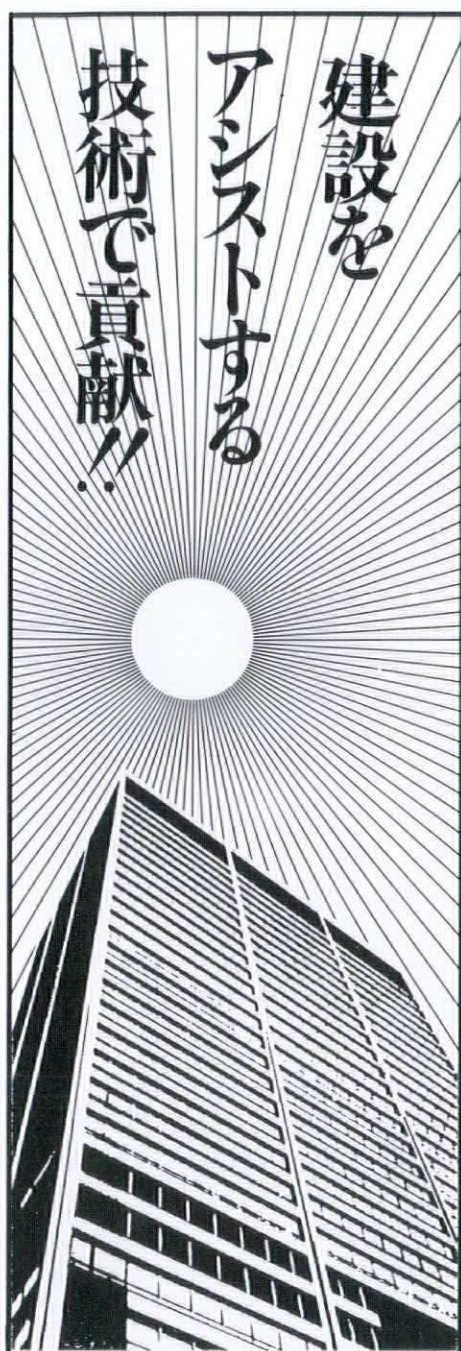
浜田邦裕＝著 鹿島出版会 2884円

『メイキング・オブ・ブレッドランナー』

ポール・M. サモン＝著 品川四郎＝監訳
ソニーマガジズ 3914円

ICC (インターコミュニケーション・センター) オープン

建設を
アシストする
技術で貢献!!



- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計 装 工 事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用 リール＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社
(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) 〒105
- 支 社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

1997年4月19日、ICC (インターコミュニケーション・センター) が西新宿の東京オペラシティ内にICCの拠点となる新たなスペースを開設した。グラハム・ベルの発明から100年を迎えた1990年から、NTTの「電話100年記念事業」として始められたICCプロジェクトが、7年を経て、ようやく文化施設というかたちとなったのである。

『「コミュニケーション」というテーマを軸として、さまざまな展示を試みようとするミュージアム』という主旨により、施設内は企画展示室、常設展示室、ワークショップ・スペース、シアター、電子図書館等で構成されている。

企画展示室では今後、大規模な企画展を年4回のペースで行う予定で、現在は磯崎新企画による『「海市」——もうひとつのユートピア展』が開催されている(7月13日まで)。この展示は、インターネットのウェブ上で中国珠海市にある人工島「海市」の開発計画を公開し、世界に向けてこのプロジェクトへの参加を呼びかけ、会期中に寄せられる意見、提案によって計画案を、発展させるというプログラムの一環で、プロジェクトの現在の状況を模型などで提示していく展覧会である。

また、今年の秋からは企画展のひとつとして、メディア・アートの分野での新人の発掘、育成を目指した「ICCビエンナーレ」が開催される。

常設展示室は9組のアーティスト(ダムタイプ、三上晴子、紙綿正之+松本泰章、アグネス・ヘゲドシュ+ジェフリー・ショー+ベルント・リンターマン、クリスタ・ソムラー+ロラン・ミニョー、ヘリ・ドノ、グレゴリー・パーサミアン、ウルリーケ・ガブリエル、カール・シムズ)による作品が、ブースに分かれて展示されている。いわゆるメディア・アート、テクノロジー・アートといわれるもので、ICCからアーティストへ10のテーマ(「マシン」「メディア」「パーセプション」「スペース」「タイム」「マテリアル」「コミュニケーション」「インフォメーション」「ゲーム」「ライフ」)が提示され、それに沿って制作された作品である。企画展と同様に視覚に訴えるだけでなく、五感で感じるものや、

見る側が参加したり、行動することによって始めて作品を体験することができる作品が多く、コミュニケーションという大きな枠組みのテーマと、提示された10のテーマをさまざまなかたちで表現している。たとえば、三上晴子の『World, Membrance and the Dismemberd Body (存在、皮膜、分断された身体)』は、観覧者がひとりきりになって、無響室の中で計測された自己の鼓動を感じるインスタレーションである。ウルリーケ・ガブリエルの『トレイン2 二人のユーザーのためのソーラーロボット・エンヴァイロメント』は2人1組となり、言葉を交わすことなくお互いの脳波を同調させ、同調のバロメーターとしてライトが徐々に点灯し、そのライトの光によって小さなソーラー・ロボットを走らせる。また、インドネシアのアーティスト、ヘリ・ドノの『ガムラン・オブ・飲むニケーション』は、インドネシアの伝統的な音楽ガムランを使ってその背景にある伝統、哲学をも伝えようとしている、といった具合である。

ワークショップ・スペースは、アーティストによるワークショップや、学生、子どもを対象とした教育的なプログラムが行われるスペースとなっており、現在はオープニング企画展として、岩井俊雄展が開催されている(6月22日まで)。岩井俊雄の作品は、アニメーションや電子メディアの基本的な原理を応用した作品が多く、そのしぐみの面白さを再認識させてくれる。今回オープニング企画展で展示されている作品以外にも常設展示として、『メディア・テクノロジー〜7つの記憶』を展示している。

電子図書館ではパソコンの端末15台とビデオブースが設置されており、入館者は自由にICCのデータベース、映像データベースにアクセスすることができるようになっている。

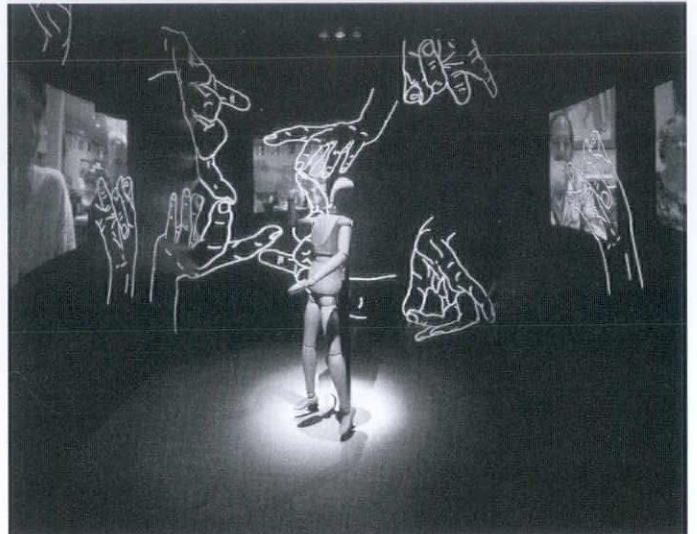
テレビゲームや、電化製品など、日常的にさまざまな電子技術がとりこまれている現在。こういったタイミングで、だれでもメディア・アートを体験できるスペースがオープンしたことは、アーティストにとっても、見る側にとっても、幸せなことである。「参加型のミュージアム」の今後に期待したい。

- 1: 岩井俊雄、『時間層II』
- 2: グレゴリー・バーサミアン、『ジャグラー』
- 3: アグネス・ヘゲドシュ+ジェフリー・ショー+
ベルント・リンターマン、『CAVEの共同 [形] 成』
- 4: ダムタイプ、『インストールーション OR』
- 5: ヘリ・ドノ、『ガムラン・オブ・飲むニケーション』

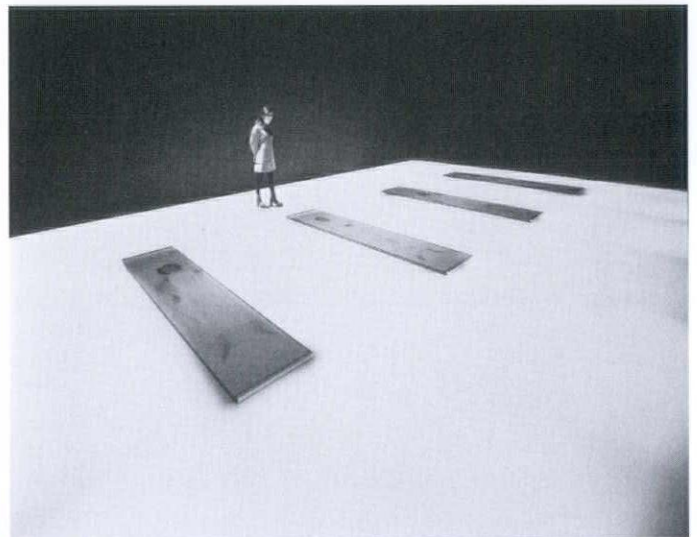
写真提供=NTTインターコミュニケーション・センター



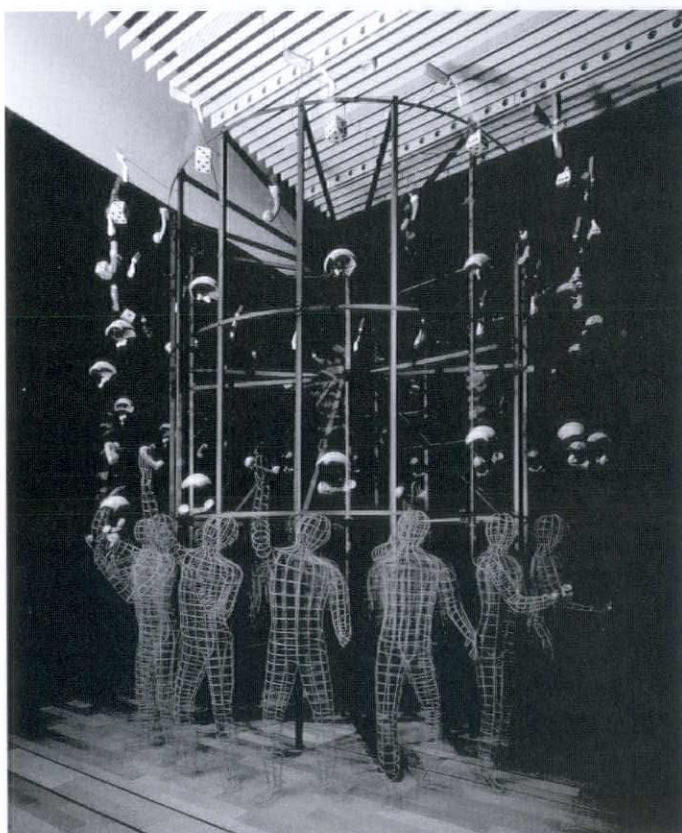
1



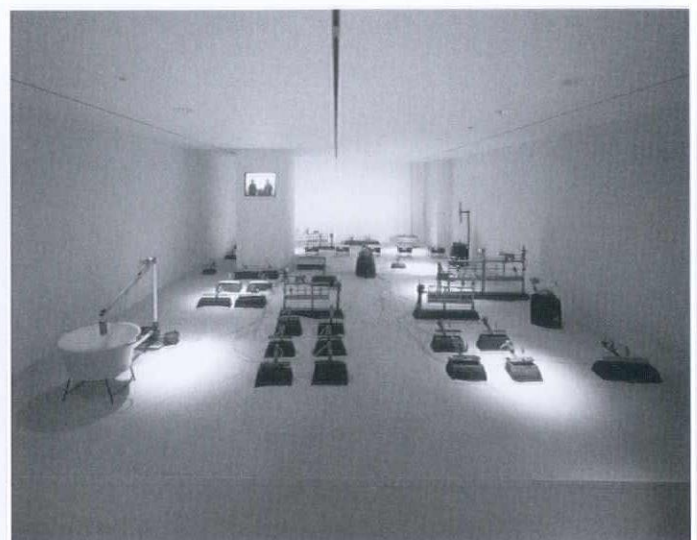
3



4



2



5

建築写真展「光と空間」——建築の美——パートII

建築写真家による合同写真展。歴史的街並み、古建築、近代建築、そして日常何気なく接している現代建築など、さまざまな建築や都市の姿を通して、建築の持つ「美しさ」「力強さ」「面白さ」をもう一度見直して見ようという試みである。日頃建築に携わっている写真家達が「光と空間」に挑み、その表情を捉える。

会期および場所

東京：1997年6月20日(金)～6月26日(木)

富士フォトサロン／東京

福岡：1997年7月18日(金)～7月30日(水)

富士フォトサロン／福岡

名古屋：1997年8月26日(火)～9月7日(日)

NTT三の丸ギャラリー・富士フォトサロン

大阪：1997年10月10日(金)～10月16日(土)

富士フォトサロン／大阪

出展写真家数：58名

問い合わせ：株式会社 彰国社 担当／和木通

Tel：03-3359-3231

小川泰祐写真事務所 Tel：0467-43-6277

(有)東京カラー芸芸社 Tel：03-3357-5550

第5回KAJIMA彫刻コンクール 作品募集

「彫刻・建築・空間」をテーマに、彫刻と建築が互いに刺激をあたえ新しい空間の創造を追求する。彫刻が建築空間と生み出す緊張感、生命感あふれる空間を、都市に、人々にというコンセプトのもとに、彫刻と建築との緊密な関わりを踏まえた意欲的な作品を募集する。

主催：鹿島

運営：KAJIMA彫刻コンクール実行委員会

会期：1998年3月7日(土)～3月20日(金)

会場：鹿島KIビル・アトリウム

募集内容：「彫刻・建築・空間」をテーマとした彫刻作品。第一次審査通過者は実作品を製作。大きさは9m以内、ただし幅1.8m×奥行き2m以内。最大高さ4.5m以内。重量は1t以内。制作費100万円を補助。

応募規定：事前に所定の応募要項を電話かハガキ、Faxで事務局に請求。付属の応募票と実作品をイメージした模型(幅50×奥行き50×高さ50cm以内)で応募。必要に応じてデッサンの添付も可。応募点数ひとり1点。

応募資格：不問

賞：KAJIMA金賞1点=500万円、KAJIMA銀賞1点=200万円、KAJIMA銅賞1点=100万円、他

応募締切：1997年8月22日(金)必着

搬入：8月29日～31日 10:00～17:00時

発表：1998年3月6日までに入賞者に通知

審査委員：三木多聞、酒井忠康、他

問い合わせ：KAJIMA彫刻コンクール実行委員会事務局

東京 東京都港区赤坂6-5-30

Tel：03-5561-2536(直通) 03-5561-2111(代表)内線

35031 Fax：03-5561-2128

SD9706

116

西澤文隆「実測図」展——建築と庭——

展示内容：西澤文隆氏監修、作成の実測図(鉛筆画)約80枚

巖島神社、円満院、園城寺光浄院、大宮・仙洞御所・京都御所、春日大社摂社若宮神社、桂離宮、修学院離宮、鹿苑寺、慈照寺、小石川後楽園、高山寺、西芳寺、慈光院、東本願寺浄土堂、仙巖園、嵯峨院(大覚寺大沢池)、醍醐寺三寶院、大池寺、大徳寺(伽藍と多くの塔頭)、天龍寺、西本願寺、二条城、彦根城、妙心寺(伽藍と多くの塔頭)、芦花浅水荘、無鄰庵、六義園、栗林公園、竜安寺(北九州市立美術館建築コーナー)三千家、藪の内家、その他の茶庭巡回展スケジュール

北九州展：北九州市立美術館建築コーナー 1997年5月13日(火)～6月22日(日) 北九州市立美術館ANEX 1997年6月17日(火)～6月22日(日) Tel：093-882-7777 開館時間：9:30～17:30(入館は17:00まで、月曜休館)

京都展：京都工芸繊維大学美術工芸資料館 1997年7月7日(月)～7月18日(金) Tel：075-724-7924 開館時間：10:00～16:00(土曜、日曜、祝日は休館)

徳島展：徳島県立21世紀館多目的活動室 1997年8月1日(金)～8月24日(日) Tel：0886-68-1111 開館時間：9:30～17:00(月曜休館)

金沢展：金沢工業大学ライブラリーセンター 1997年9月8日(月)～9月20日(土) Tel：0762-48-1100 開館時間：9:00～17:00(9月14、15日は休館)

仙台展：東北工業大学T.I.T.ギャラリー 1997年10月7日(月)～10月24日(金) Tel：022-229-1151(内)412 開館時間：10:00～16:30(10月10、11、12日は休館)

東京展：ギャラリー間 1997年10月7日(月)～10月24日(金) Tel：03-3402-1010 開館時間：11:00～19:00(日曜、祝日は休館)

問い合わせ：西澤文隆「実測図」展実行委員会事務局(アトリエサワ内) Tel, Fax：0727-72-8993

第38回アイカ現代建築セミナー

テーマ：都市の第3期(La Ville Age III)

講師：クリスチャン・ド・ボルザンバルク

東京

日時：1997年7月16日(水) 16:00～20:30(開場18:00)

会場：有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町マリオン12階

大阪

日時：1997年7月17日(木) 18:30～20:30(開場18:00)

申込方法：往復ハガキに、参加希望開場名(東京または大阪)を明記し、住所、氏名、年齢、勤務先名(学生は学校名)、電話番号を明記の上、返信ハガキに送付先を記入して申し込むこと。申し込み多数の場合は抽選。

申込締切：1997年6月27日(金)必着

申込、問い合わせ先：〒113東京都文京区湯島2-31-2 (株)新建築社「アイカ現代建築セミナー」係

Tel：03-3811-7101(代表)

JIA大学「建築家・空間講義(第1 Semester・15回連続)」

日時：毎週1回金曜日 19:00～21:00(開場18:30)

会場：JIA館(渋谷区神宮前2-3-18)3階セミナールーム

対象：20代建築家、建築学科大学院生

参加費：1,000円/回(10,000円/15回一括)

日程・講師・テーマ：「第1 Semester全体テーマ：『都市』」

第1回6月6日 渡辺誠(アーキテクトオフィス)「デザインレス・デザイン/コンピュータプログラムによる『誘導都市』プロジェクト」

第2回6月13日 横川健(横川設計工房)「建築家が世に問うこと(思想、ライフスタイル、仕事)」

第3回6月20日 湯澤正信(湯澤建築設計研究所)

「人々の共有の場」

第4回6月27日 山本理顕(山本理顕設計工場)

「建築は中身が大事だと言われるけれどその中身というのは何だろう」

第5回7月4日 森俊偉(森俊偉+アルコ建築計画事務所)「旅・実感/建築・場」

第6回7月11日 米田明(アーキテクトン)

「建築と芸術/透明性について」

第7回7月18日 山家京子(アーキプロラボ)

「都市空間のノータレーション」

第8回7月25日 吉松秀樹(アーキプロ)

「デスクトップコミュニティと都市」

第9回8月1日 渡辺真理(設計組織ADH)

「建築と都市の間—播磨科学公園都市の実験」

第10回8月8日 渡辺明(渡辺明設計事務所)

「光と水」

第11回8月15日 三上晴久(三上建築事務所・東京事務所)「未定」

第12回8月22日 六鹿正治(日本設計)

「超高層建築とデザイン」

第13回8月29日 室伏次郎(スタジオアルテック)

「『場所・時間・建築』について」

第14回9月5日 宮崎浩(プランツアソシエイツ)

「建築とデザイン」

第15回9月12日 宮下勇(ゆいでく)「北の建築」

問い合わせ：日本建築家協会 Tel：03-3408-7125

マンチェスター大学短期留学

1991年に開設された国際的な建築研究のためのサマースクール。内容は、講義、演習、建築現場見学、短期見学旅行、都市計画の授業への参加、各種学会研究会への出席、設計事務所訪問など。

参加料：£2,500(全コース履修の場合)。その他短期の参加も可

実施期間：1997年8月22日～10月31日

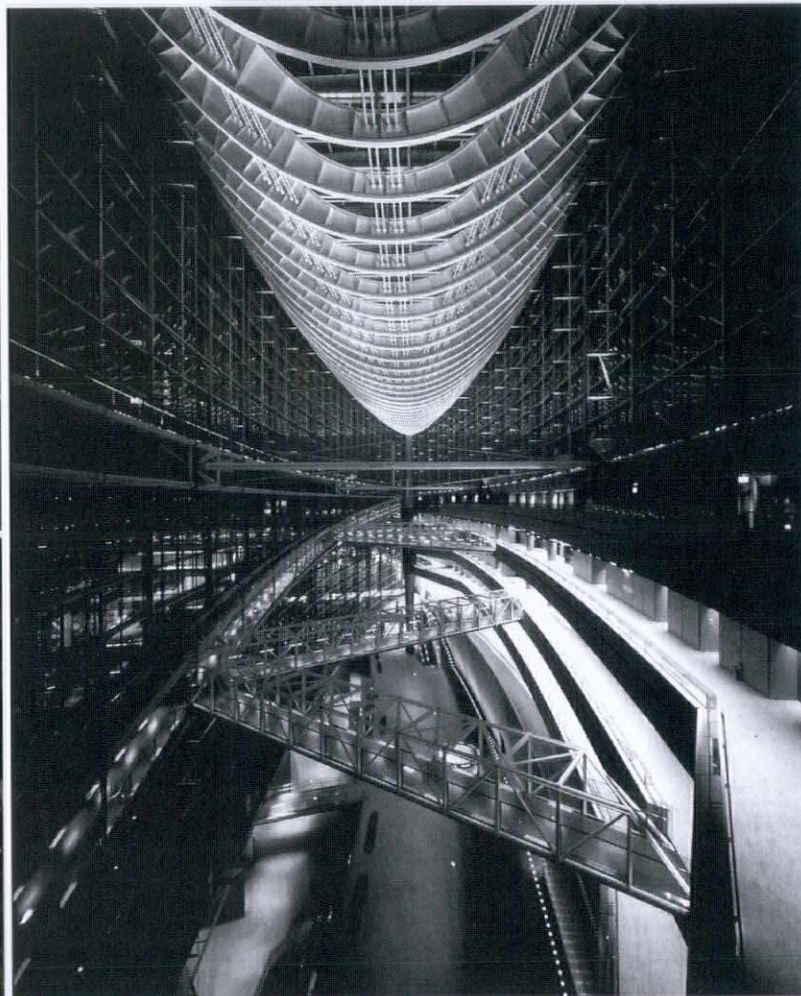
応募資格：建築学科に在籍する学生、大学院生または建築の仕事に従事する者

問い合わせ：渡辺治建築都市設計事務所

担当：渡辺 〒211川崎市中原区木月515サークルビル Tel：044-422-0502

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい……。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



設計監理：東京都財務局営繕部国際施設建設室
ラファエル ヴィニオリ建築士事務所

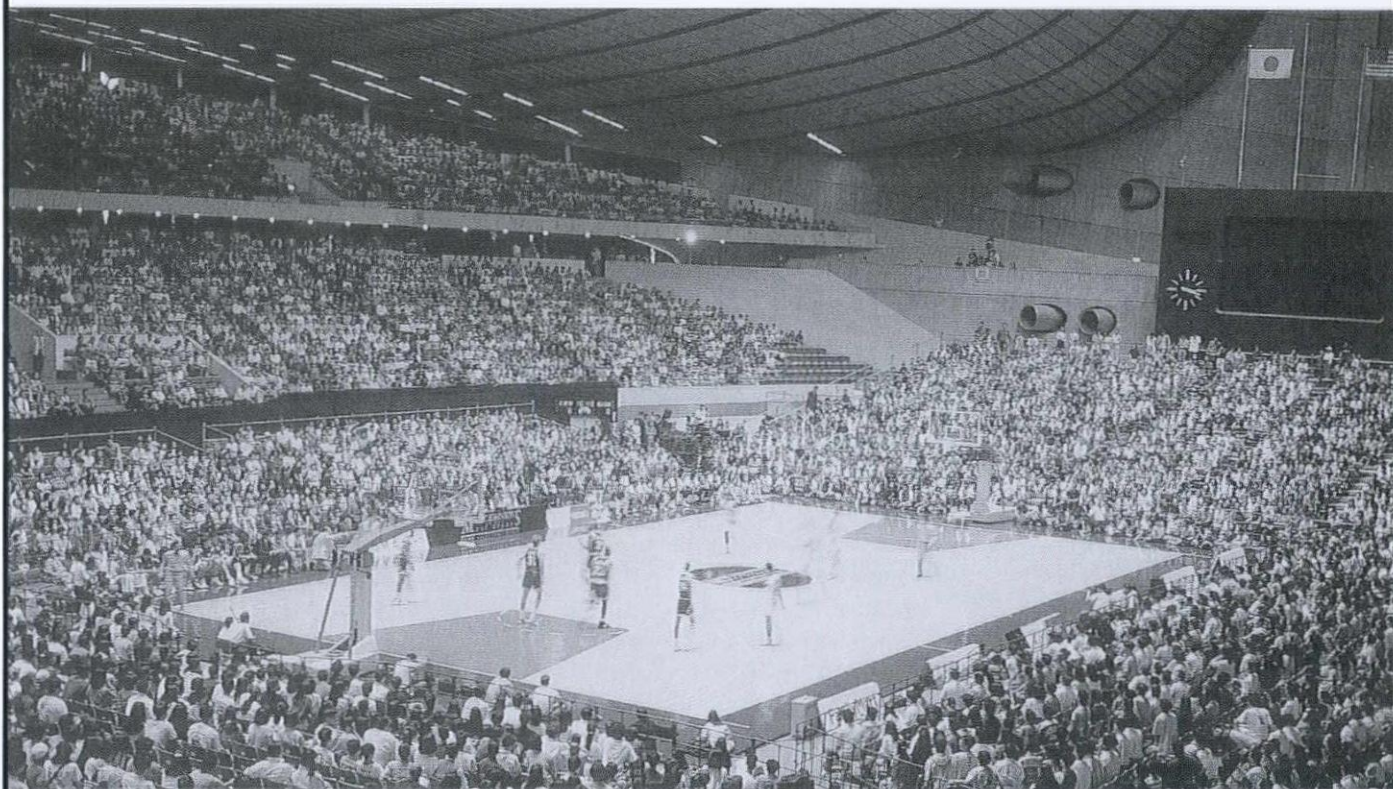


山田照明株式会社 本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

大阪支社 〒542 東大阪市楠根 2-2-6 北岡東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34	TEL.06-745-6811 福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.0273-63-1442 名古屋営業所 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東星ビル) TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (第6相模ビル)	TEL.092-282-7635 札幌営業所 〒003 TEL.052-252-5161 静岡出張所 〒420 TEL.0992-58-0031 宇都宮出張所 〒382	札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215 静岡市西草深 23-9-502 TEL.054-247-0811 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381
---	--	--	---

いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、世界中で広く使われているポータブル・スポーツフロア・システム。本格的なフローリングならではのボールのバウンドの正確さと均一な反撥音はもちろん、プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性や永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。独特のジョイント・ロッキング方法により、組立て・取外し

はきわめて短時間。しかも収納性もコンパクト。多目的コンベンション施設、インドアスタジアムなど多目的スペースに、北米産ハードメイプルによる本格的なスポーツアリーナ機能を付与することができます。ロビンス・オールスターは、バスケットのみならず、バレーボールやバドミントンにも使用することができます。

ロビンス

JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

本社 ■ 大阪支店 ■ 名古屋支店 ■ 福岡支店 ■ 札幌支店 ■ ヤナセ東北 ■ ヤナセ静岡
03(3452)4311 ■ 06(488)9801 ■ 052(241)2531 ■ 092(522)1331 ■ 011(231)2313 ■ 022(221)4171 ■ 054(261)4105

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 〒105
TEL. (03)3452-4311

■丸橋 浩

拝啓 読者各位

エンリック・ミラーレスの建築は少なからず建築ジャーナリズムに流通しているので、おそらく誰も一度はその奇異な建物やドローイングを目にしたことがあると思います。しかしながら、彼の建築に対する考え方が

同様に流布しているとは言い難く、また彼の建築への評価も定まってはおりぬのが実情です。しかるにそれがゆえ自由にそして多角的に彼の建築を解剖することが可能かと思われ、また一見すると実現不可能とも思える図面とは裏腹に彼の作品は豊富にあり、解説のネタには事欠きません。事実、彼はストリート・ファニチュアからスポーツ施設に至るまで多岐にわたり建築を手掛けております。私などは彼の不可思議なドローイングに惹き付けられるわけですが、そのドローイングの美しさもさることながら、それをよく眺めてみると彼の考え方がそこに端的に表れている事が理解されます。また、いかにしてその図面が実際の建物になっているか、どのように構築され、実現化しているかを見ることも興味がつきません。つまり、図面には彼の建築の理論が透けて見え、そしてその理論が理論として終わることなく優れて彼

海外建築情報リミックス

12Architects

#6: Enric Miralles

Staff: 太田浩史(東京大学生産技術研究所助手)、小川次郎(東京工業大学坂本研究室)、西沢立衛(妹島和世建築設計事務所)、堀井義博(ユービーエム)、丸橋 浩(アーキベルク)

が実践的であるということが私には興味深く思われるわけです。そして何より、彼の建築が提供するテキストは明らかに意図的な偏重を示しており、ゆえにそれらは統一的な建築的イメージには定着せずに様々な疑問を、そして解説を喚起してやめぬがゆえに私は惹かれるわけです。極端な言い方をすると、彼にお

ける(建築の)イメージは破綻をきたしていると私は見ます。要約すれば最初の着想は完成すべき像なのではなくて、彼には単なる取っ掛けであり、変形を行う対象でしかないように見受けられるということです。いわばプロジェクトはイメージの破綻した亀裂にその身を横たえていると言えるでしょう。それは、写真のよるコラージュの多用、それも次元の異なるもの(写真と図面、写真と模型)のコラージュや、以前のプロジェクトから別のプロジェクトへ同じ形態を移植し操作する行為に見て取れるでしょう。それはなにか禁断の色彩を帯びた遺伝子操作のようで、新しい構築の有り様を表現しているようにも思えます。また彼の特徴といえばその独特な線ですが、それをもし形容するとすれば絶対に「ぐにょぐにょ」でしょう。明らかにそれは「ぐしゃぐしゃ」ではありません。わかりやすく例を挙げて説明しましょう。

12Architects #6: Enric Miralles

ミラーレスあるいは個人的嗜好の魅惑

Jin Taira (訳/三好隆之)

背景

1955年にバルセロナに生まれたこの建築家が独立して1年目の社会の状況を思い出していただきたい。バルセロナは反政府体制の国民主義者による数々の派閥の誕生の地である。カタロニアに位置するこの街はフランコ独裁政権下、文化的傾向からテロリズムを含む急進的傾向まで政治的・文化的弾圧を受けていた。アルベルト・ヴィアブラナとエリオ・ピニオンのアトリエで働いていたミラーレスはスペインの時代の移行期すなわち独裁者フランコ総統の死からゴンザレスによる第一党としての社会労働党への移行という社会的動乱の時期に遭遇することになる。ヴィアブラナ、ピニオンらの影響は、環境への抽象的な感性とドローイングの表現に見ることができる。もちろんジュジョルやガウディ、さらには前衛としてしか知られていなかったがスペインで最も優れた建築家であるコデルク等の影響もみることができる。

経過

パートナーであったカルメ・ピノスと仕事を始めて1年目、この地方はカタロニア・デザインの初期段階にあり、デザイナーたちによって新しい美学や新鮮な空気が現れ始めていた。この新しい価値観への期待されたムードとカタロニア地方の建築雑誌『El Croquis』の欠くことのできない援助によって『La Llauna School(1984-86)』と広場の再開発『Roofs in the Parets del Valles(1985)』は大きな成功を納めることができた。

離婚という苦い経験をする以前の1990年からミラーレスは、ふたつの方向性をもって仕事を始めていた。ひとつは個人的な好みや形態の可能性の探求、もうひとつは構造的な冒険である。不運にも構造計算のミスによって『Huesca Sports Hall』の屋根が崩壊したものの、その後もミラーレスのアトリエはその規模を大きくし、編集者からの強いプレッシャーを受けながらも国際的な地位を維持するために全てのコンペに参加してきた。

問答

1990年ウィリアム・カーティスは、『El Croquis』のための論文『Mental Map and Social Landscape』で彼は自身に3つの質問をしている。以下はそれらの問いに答えるものである。

Q1/美: デザイナーはいかなる時も必要以上に緻密で複雑であることによって非難されるべきか?

A: もちろん、デザイナーによるドローイングは建築ではない。例えば『Public Park and Games Library in Pollet』では、周囲の落書きから生み出された複雑な形態は面白く興味深いのであるがスペインの建設事情を考えると異常に費用のかかる設計である。

Q2/用: 機能や実用性を犠牲にしてまで形式的で優美なものがつくられるべきか?

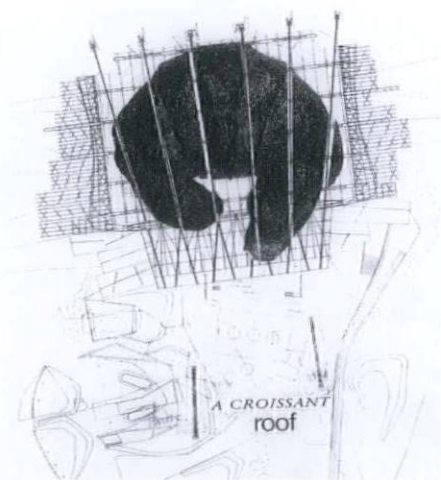
A: 否、建築は少なくとも問題を解決しなければならない。例えば『Eurhythmics Sports Center in Alicante』では、体操の練習をするには部屋の高さが低すぎるという問題を抱えている。

Q3/強: 『Hostalets Civic Center』で、この建築家は危険な構造によって内部と外部をうまく関係づけることができたが、デザインがダメになってしまう危険性が高い規模の大きな計画にも同じトラスを用いることができるか?

A: 否、美用強の原理を思い出すまでもない。例えば『Huesca Sports Hall』の屋根の崩壊。

結論

デザインが流行し、価値観は危機に陥り、人々は余暇を楽しむようになり、誰もが雑誌を読み飛ばし、価値のない情報だけが注目されていた時代。カタロニア人のミラーレスはそんな時代の落とし子であった。しかし、皮肉にも今日のミラーレスは我々を驚かせることはなく、『Huesca Sports Hall』はこの建築家にとっての峠であったようだ。それは構造に当てた焦点を洗練された嗜好のグラフィズムに方向転換しようとしていたときであった。結局のところミラーレスは、違う色の蝶ネクタイを付けた魅力的な兎を帽子から取り出す手品師のように、もはや真の意味での表現をしなくなってしまったのではないか。(東京大学生産技術研究所藤井研究室)



『Huesca Sports Hall』とクロワッサンのコラージュ/作成=著者

「ぐしゃぐしゃな線」といえば、リベスキンドの線です。例えば「マイクロメガス」。奇しくもその副題は「The Architecture of End Space」であり、まさしく彼の建築にもふさわしい名だと私は思ったりもしますが、それほどそれぞれのドローイングは似たような様相を呈しております。しかしながら、その差異は決定的であると私は考えます。〈マイクロメガス〉において、線はそれぞれがそれぞれを打ち消しあうよう作用し、図像がひとつに収斂することを永遠に先送りしています。つまり、部分(線)が生成するイメージは積み重なるように「ぐしゃぐしゃ」にたたみこまれて、自己言及的に統一体としてのイメージを破壊しております。それに対し、彼の図面における線は、計画された建物が周囲の環境や、併置して描かれる他のスケールの異なる図面のなかに溶融し、部分が連鎖してゾル状の地図のごときを形成しているのです。つまり、こちらの線は「ぐにゃぐにゃ」に変形作用の痕跡をとどめ、お互いが共鳴し、統一体ではない全体という地図を生成してあるのです。この「ぐにゃぐにゃ」という形容が特徴的に彼の建築を説明するものとは、あるものからあるものへの変成作用であり、トポロジカルな移行であるのです。これは彼の建築を考察する上で最も重要な点であると私は考えます。「彼の建築が提供するテキストの偏重」も、いわばこのことによるものなのです。そしてそれは、彼の建築の様々な水準において見出すことができるのです。ドローイングにおいて、プレゼンテーションにおいて、作業において、敷地との関係において、建具の扱いにおいて、内部と外部の分節の扱いにおいて、採光の取り

方において、建築を取り巻くテキストの扱いにおいて、可動家具において、壁(?)についての照明器具において、トリッキーな構造の収めにおいて、部材と部材の収まりにおいて、工法において、プロジェクトの始まりと終わりの問題について、等々。

私の論を疑う前にまず、彼の作品集を掘ってみるべきです。とにかく「なぜ彼が取り上げられているか?」を問うことよりも、あなた自身の眼で彼の作品群を検証し、思考してみてください。そしてここに並べられた6つの論考のいずれかが、あなたの手掛かりとして多少ともお役に立てれば幸いと私は考えます。いつかどこかであなたのエンリック・ミラーレス論が拝見できることを楽しみにしております。敬具 (BXG03056@niftyserve.or.jp)



参考文献:
Architectural Monographs NO.40 「ENRIC MIRALLES」 (ACADEMY EDITIONS)
EL CROQUIS NO.30, NO.49/5, NO30+49/50, NO.62/63, NO.70, NO.72(II)
SD9303 特集: ENRIC MIRALLES
GA DOCUMENT 32, 38, 43
DOMUS 761, 737, 772 等

12Architects #6: Enric Miralles

歪みの理由

三村大介

誰もが知っている世界地図。メルカトルにモルワイデ、グードにエケルトと図法にも数あれど、どれひとつとて完璧なものはなく、必ずどこか歪んでいる。にも関わらず、文句を言うものは誰ひとりいないのは、メルカトル図法は角度が、モルワイデ図法は面積がというように、伝達されるべき情報は正確に視覚化されているがゆえ、その他の情報が多少歪曲化していてもそれには眼をつぶっているからである。まあ、丸い地球の地表面をべたっと平らにすること自体、そもそも無茶なのだから仕方がないことであるし、地図の選択さえ間違わなければ必要な情報は正確に記述されているのだから、大陸がどんなに歪んでいても許されるのである。

さて、ここでミラーレス。彼の作品で眼を引くのがその奇々怪々な形態と傍若無人な曲線なのだが、この難解なミラーレスの解説法(誤読法?)のヒントが、「世界地図」の中に隠されているというわけ(といっても宝の在処のように地図上に記されているわけではない)。それでは検証例として、彼の自動車ショールームの案を挙げよう。この案のポイントは屋根にいくつも立ち並ぶパラソル状のトップライト。これは一種の拡散光装置なのだが、特に機能的に重要とか構造的に不可欠という理由で設けられたものでは当然ない。この装置を通過することで屈折、乱反射した日光が、下にある車のボディにふりそがれると、ほおら不思議! コラージュのように車がぐにゃぐにゃと歪んで見えるではないですか! という寸法。ホントにそうなるかどうかはさておき(おそらく無理!?)、ここで注目すべきは、全

体形がぐにゃぐにゃしていることもさることながら、彼がこのトップライトにおいて単に自己の恣意的な意匠性そのものよりもむしろ、必然的に生じる歪み自身を表現として重視していることだ。つまり、この案で彼が採った方法は、あらゆる条件は固定しつつ、光の状態をコントロールすることのみであり、それによってその表現の多様性を獲得しているのである。何かを固定させることで、必然的に自由なものに歪みを生じさせること、これはまさしく世界地図における歪みの正当性と同等であり、実はこの手法、このショールームの案に限らず、ミラーレスの特徴的な手法のひとつなのである。我々が設計しようとするとき、法規、構造、社会慣習など、そこには条件というものがある。必ずつきまとい、その隙間を縫っていかないと差異をつけるか=デザインする上で粉砕するのだが、ミラーレスはそれと逆に、自分の中にあって足枷をつくる、つまり固定された枠組みの中での不自由さを逆にとり、そこでの操作による差異を表現にしようとするのだ。時にそれは材料であったり地形であったり、構造・構成材であったり、彼は各建築が成立する条件においての固定させどころ、そして歪めどころのつぼをよく心得ているのだ。確かに彼の繰り出す奇妙な形態はミステリアスで魅力的なのだが、我々が彼の作品に関心を引いて止まないのは、そんな自由さの中の自由な形態自身ではなく、自由な形態の裏に隠された不自由さを弄ぶかのような理知的な痕跡を伺い知ることができるからであろう。それこそ、どんなに歪んでいようと世界地図が世界地図足り得るように。(東京工業大学坂本研究室、six10059@first.win.or.jp)

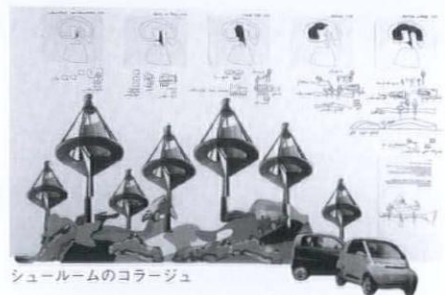
図版出典: 「El Croquis72」 (II)



モルワイデ図法による地図



メルカトル図法による地図



ショールームのコラージュ

エンリック・ミラーレスの建築は、「地としての土地や風景」と「図としての建物」という構図で見るのは困難である。ましてや、「建築工事」と「外構工事」などという紋切り型は、まったくもって意味をなさない。例えばそれは、彼が一躍名を馳せた〈イグアラダの墓地〉をひと目見れば判る。ここにはいわゆる「外構のデザイン」などというものが目に見えたらぬ。ましてやランドスケープ・デザインなどというに値するものが何もない。この仕事では、言うなれば、建物それ自身が「ランドスケープ」と化しており、俗に言うところの「地」と「図」が、まさに渾然一体となっており、それぞれが、互いに境界を著しく「侵犯」しているのだ。このことは、彼の意図を超えた、たんなる結果に過ぎないのだろうか？

もしそういう疑問があるならば、彼の描く図面に注目してみると良いだろう。彼の描く図面は非常に繊細で美しい(今回、各論者の石黒由紀の行ったインタビューによると、あれはレタリングも含めて手描きらしい)のだが、それにもかかわらず、図面としての役割を考えると、どこか根本的に問題がある。一言で言えば「メリハリがなく」、そのために用紙全体の中でどの部分が何であるのかがまったく釈然としない。水平情報と垂直情報も、ほとんど見分けがつかないくらいだ。

図面というものの通常の役割から考えれば、これらは決して「使える」図面ではない。といっても、これらは「プレス・リリース用」とい

うこと(同じく石黒情報)だが、しかしそれにしても「何が描いてあるのかさっぱり」ということには違いなからう。図面は、何よりもまず「想定されるモノ達の大きさとそれらの位置関係」を表わす指示形式であって、モノそのものではない(だから設計という職能は、決して「モノづくり」ではないのだ)。第一に図面は、「対象となるモノ達の関係がどのようなものであるのか、について解説する」という目的を担わされた記述形式である。しかしここで、奇妙なループに気付くはずだ。つまり、図面はモノに先立って作成されるのだが、モノはといえば、図面を、あたかもそのモノをトレースしたものであるかのように見做して——言い替えれば、いかにもモノの方が図面に先立って存在していたかのように——造られる。「全体を造るためのモノの位置関係、を造るための細部、を造るための技術、を使うための目的、を成立させるための……全体」というのがこのループの展開フローチャートである。このループはまじめに辿って行っても出口がない。何故か？ それは、このループの「始めの一步」が、建築家のアタマの中にしかないからだ。モノは、実は図面に先立ってあったのだ。ただし、設計者のアタマの中に。

先月、アーキグラムについて書いたこととも関連するのが、まさに上記のゆえに、図面は「モノ達の関係がどのようなものであるのか」という具体的実態や客観的事実を解説するというよりも、むしろモノ達の関係が「どのようなであって欲しいのか」という抽象的妄想や主観的経験を追認するための場所となる。

12Architects #6: Enric Miralles

利己的遺伝子のヴィークル

吉村靖孝

1限：数学

ミラーレスの建築から傾斜や曲線を抽出し、いわば微分的に解析することが、彼の建築を必要以上にディコンストラクティブに見せるのなら、ここではあえて積分的視座(論自体がインテグラルであるかは別として)に立って部分から全体に至るプロセスを捉えたい。すなわちここで論及するのはミラーレスの「タイル/面積」であり「ブロック/体積」である。

2限：地理

トトラという植物がある。サトウキビに似たイネ科の多年生植物である。南米ティティカカ湖のトラニバタでは、トトラは時に食用となり、燃料となり、船となり、家となり、なによりこの水上集落の地盤そのものをなしている。雌雄によって用途はある程度限定されるものの、この島におけるトトラは、ウ・マテリー(原質料)ともいうべきア・プリオリなモジュールであり、必要に応じてその配列を変えながらハイ・リサイクル、ロー・エミッションの系を実現している。

このマルチ・パーパス・ユニット「トトラ」に比して、メタポリズム建築の設定したユニットのサイズは概して大きい。大きさは代謝速度と反比例するのであって、現在では、公約通り代謝が履行される可能性は限りなくゼロに近づいているといえるだろう。また建築を代謝性能で評価するなら、ある種の組積構造建築はトトラのようなレゴ・ブロックの輪廻と循環の機能を備えていたはずである。しかしその場合にも、ユニットが支持体を兼ねることが稀となり、多くは変成に至っていない。ミラーレスの建

築を組織するミニマム・ユニットとしてのガラスブロック、煉瓦、PC、木、石は、もはや屋根を支持するという意味での構造とは分離され、ドラスティックなメタポリズム(=新陳代謝)/メタモルフォシス(=変形)に貢献する。

3限：生物

メイソンリー(石造建築)は、しばしば植物のアナロジーで語られる。植物の細胞は、セルロースの細胞壁によって諸部分が各々構造を負担しつつ全体を形成しており、石積みとの相関は容易に指摘できる。また、よくいわれるスキン・アンド・ボーンは脊椎動物のアナロジーである。スキン(=皮膚)は細胞の分泌物、ボーン(=骨)はカルシウムであり、どちらも細胞外成分、つまり生体内にありながら死した物質を指している。そしてこれを雛形とする近代建築はやはり無機的と形容され、スキン・アンド・ボーン建築のヘテロとしてのサンチャゴ・カラトラヴァは、暗合の死の香さえ増幅している。この分類を援用するなら、ミラーレスの建築は、多様な生体のハイブリッドである。骨格系の空隙を細胞たるブロックが充填し、関節(過剰な分節)がベクトルを制御するとみれば、より正確に脊椎動物の機構をトレースしているといえるし、鉄筋のメッシュに覆われた石はクチクラの外骨格をもつ昆虫、支持体でもあるPCは植物細胞と呼応するだろう。巨大なコンクリートの量魂さえ、肥大した単細胞生物のアモルフ、強引なスタックも無性分裂の瞬間として生起する。顕微鏡まで断続するズーム・イン/アウトは、網膜のスリルではすまされないものであって、パラサイトを許容する宿主は、いつでも反転可能である。

マスプロダクトたるタイル/ブロックは、個体(建築)や種(潮流)といった枠組みを超越して、連綿と情報を蓄積している。その材質、形態、寸法は、建築を構築するためのデータでありプログラムそのもの、つまりタイル/ブロックこそ建築における利

己的遺伝子として機能しているといえるだろう。

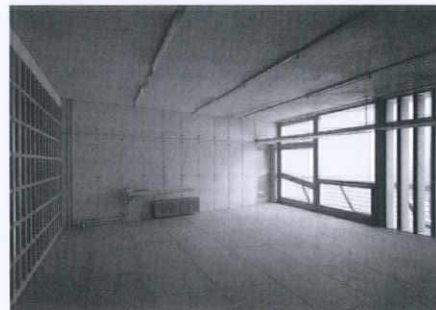
突然変異たるミラーレスの建築(ヴィークル)は淘汰の審判を待つ身である。そして多作であること(小さな変異と淘汰の退屈な反復)こそ、やがて進化と感知されるのである。

(早稲田大学古谷研究室、yossy@ba2.so-net.or.jp)

図版出典：『El Croquis70』

本日の時間割	
1限	数学
2限	地理
3限	生物

本日の時間割



(Morella boarding school)

ではミラーレスの、この「さっぱり」不明瞭な図面はどうしたものだろう？ 彼の空想の領域は、こんなふうにかんがらされているのだろうか？ 答えはおそらく「否」だ。おそらく彼は、建築を、例えば「森」のように仕立てたいのだ。つまり「モノの取り扱い」と「部材の関係」といった態度とはまったく異なる次元で建築を成立させよう、と。もちろん、実質的にはディテールが必要になるのだが、しかし「森」の部分が、はっきりどこからどこまで、というふうには分節できないのと同じように、「分節」という判断基準を消去したいのだ。「林」は、一体どこから「森」になるのだろうか？ また、「立木」と「林」の境界はどこにあるのだろうか？ 谷間や稜線などの空隙と密林とはどこで見切れればいいのだろうか？ 等々。このような「無分節主義」と呼ばれてしまいそうな態度は、ジャン・ヌーベルなどにも見られるのだが、ミラーレスの取り組み方は、ヌーベルのような態度とは違って、はるかに「地味」だ。それは何故だろう？

この問いは、おそらく始めの疑問に我々を引き戻す。すなわち、建築本体とその周辺との分かち難い関係は、意図されたものなのか、そうではないのか、という問いに。

筆者の憶測では、つまるところミラーレスは、建築を、大して重要とは考えていないし、ましてや建築家など、取るに足らない存在だと考えている。それゆえ建築は、人間が棲息していく上で必要なバックグラウンドに過ぎず、建築それ自体に焦点を当てるようなことには関心がないのだ。今回、はからずも各論者のジン・タイラが(どちらかと

いうと筆者とは逆の文脈で)述べているのだが、ミラーレスの建築は、タイラが言うように、ピークを過ぎて衰えつつあるというよりも、消失に向かってまさに完成しつつあるのではないだろうか？ 何故って、いかなる人間も、最後には地球の塵界となって消え入るではないか。空をまねて、そのまがい物を造ろうとするよりも、空そのものになること。

番人は、男がもう死にかかっていることを知り、うすれていく聴力にもとどくよう、男に向かってわめくのである。「他の人間は、絶対に入らせてはもらえない、この入口は、君ひとりのものと決めてあったからだ。さあ、戸を閉めに行ってくる」。(カフカ著「掟」より)。

と、そのとき、男は最後の力をふりしぼって言った、「わたしは、あなたに掟の戸を閉めさせるためだけにここへ来たのだ」。そして男はすくんと立ち上がり、「I'll be back」と言って、立ち去っていく。

(CXP11276@niftyserve.or.jp)

引用文献：フランツ・カフカ著、『ある流刑地の話(カフカの短編集)』「掟」より、本野享一訳、角川文庫

次回予告 #7: Jean Nouvel

12Architects #6: Enric Miralles

ミラーレスの設計用品

石黒由紀

「建築設計における条件」という場合、敷地や施主のなどのいわゆる条件の他に、図面や道具といった設計の作業条件がある。前者についてはもちろんであるが、後者によっても無意識のうちに設計に影響が与えることはあきらかであろう。

ミラーレスは、自身の特集号『El croquis72 III』のエピローグに、作業条件についての批評文を書いている。それはジャコモッティが制作した連作肖像画〈ジェイムス・ロード(1965)〉を分析したものであるが、ほとんど見分けのつかない18枚の肖像画を比較しながら、相互のわずかな違いを、絵を描くときの作業条件の影響にあるとして即物的に記述している。具体的には、「モデルと画家の距離」「作業時間による限定」「アトリエの採光条件」「筆、絵具の選定」などであり、これらの肖像画を描く作業は「キャンバスという条件がどのような機能をするかの探求だ」ともいっている。そこには、作品の作業条件に何を選んだかということを中心批評の材料とする、というミラーレスの視線がある。

ところで同じ視線を、ミラーレス自身の、建築を設計するときの作業条件に向けてはどうであろうか。そこで、ミラーレス事務所に連絡を取り、インタビューを行った。以下はその抜粋であるが、ミラーレスの選んでいる作業条件が、彼の建築の多彩さをより直接的に条件づけていることがうかがえる。

A: 約500m²、天井高5m。所長室もオープン。

Q: 人数は？

A: 20人程度。男女比は約半々。国籍はヨーロッパ各国、南北アメリカ、日本。スペイン人は多数派ではない。

Q: 使用言語は？

A: 主にカスティリャーノ(いわゆるスペイン語)。他に英語との使い分け。

Q: 作業時間は？

A: 10時から14時、16時から20時がレギュラータム。2時間の昼休みがある。

Q: 製図道具は？

A: 三角定規とコンパス。平行定規はあるがほとんど使わない。

Q: ホルダー？ ロットリング？ 用紙は？

A: 鉛筆、色鉛筆、紙は白トレペ(厚口)。実施図にはCADも使うことがある。winが3台ある。

Q: エスキースの材料は？

A: スケッチは圧倒的に平面図が多い。平行して模型のスタディが進む。ヴォリューム・スタディはほとんどしない。

Q: 詳細設計の尺度は？

A: 実施設計では詳細は1:2まで。エンリック自身もよく詳細のスケッチをする。

Q: 模型材料、サイズは？

A: 紙、木、針金等。始めはふたつの掌の間の位の大きさから、順に倍にしてゆく。非常に精巧につくる。航空写真から周囲をおこすこともある。エンリックのチェックは概ね厳しい。

Q: 設計作業における写真の活用は？

A: 巨大なフォト・コラージュをエスキースからプレゼンテーションまで必ずと言ってよいほどよく使う。サイズは小さくても、A1以上が常で、3m角の大きさのものもある。

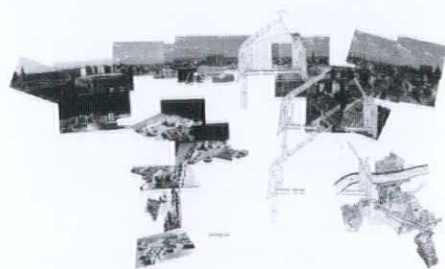
Q: 他に、特別な道具は？

A: 変わった道具としては、エンリックは美術の本を多く手元に置いて、譜面のようにそれを眺めてスケッチをしていることが多い。

(石黒由紀建築設計事務所、yuki@baynet.or.jp)

取材協力：福田誠／ミラーレス事務所

図版出典：『El Croquis72(III)』



〈Modern art museum in zaragoza〉のコラージュ

洗出舗石平板 『都賀野』

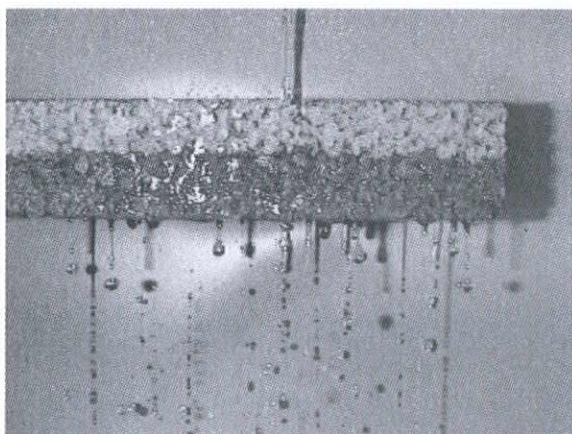


新国立劇場(設計: ㈱TAK建築・都市計画研究所) ㈱テクニカル・アート撮影

新製品 透水性洗出舗石平板 アクアパス (特許出願中)

「雨水を地中に…」

アクアパスは従来のコンクリートのイメージを一変させて表面の美観をそこなくことなく透水性を実現した舗石です。



- 1) 美観性
従来の舗石表面の美しさを保持しながら透水性を確保しております。
- 2) 透水性
雨水の透水性がよい。
- 3) 保水性
製品内部に水を一時的に滞留させられますので、一度に排水溝や河川に雨水を流れ込ませない働きがあります。
- 4) 打ち水効果
炎暑時には地中の水分をアクアパス表面から蒸発させますから、地表面温度を下げる効果があります。
- 5) 工事期間の短縮
工場生産により製品の出来が一定で、工事日数が短く工事も簡単です。

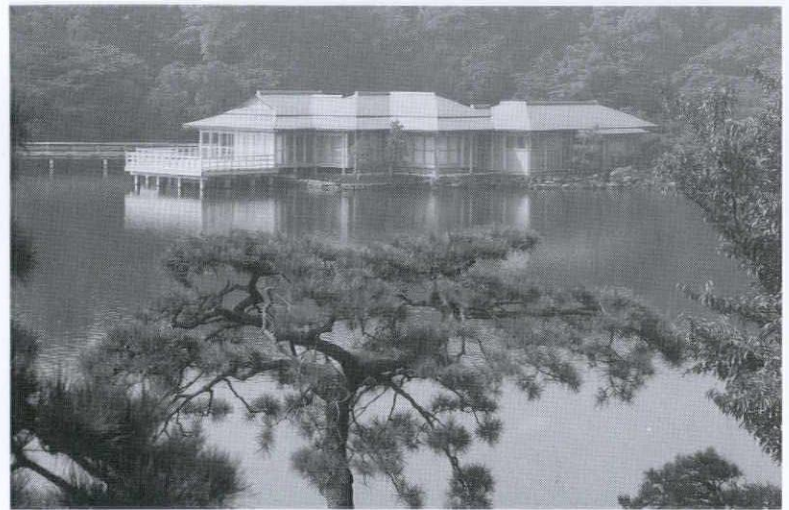


新生興産 株式会社

本社/東京都台東区台東4丁目29番5号 TEL.03-3834-1731 FAX.03-3834-1729

札幌営業所 宇都宮営業所 土別工場 滝川工場 栃木第一工場・第二工場 技術研究所

本物志向、 自然志向の 快適空間



住宅やホテルはもちろん、
オフィスや商業施設など……人がくつろぎ、活動するあらゆる空間に
「快適さ」が求められ、インテリアに対する関心が急速に高まっています。
こうしたなかで、本物志向、自然志向を強めるインテリアのニーズに、
TAKリビングがお応えします。
豊かな創造力のもとに描き出す斬新なデザイン設計と、数寄屋建築などで
“匠”の技を見せてきた木工の技術が一体になって、
いま、あらゆる建築物に**「快適空間」**をお届けしています。



木の柔らかさ、あたたかさを
大切にしながら、特殊な内部構造により
本来難しいとされていた、
スチール製ドアと同等の防火性能を発揮した
木質系高級ドア、**「TAK防火戸S-60」**登場。

T 株式会社 TAKリビング

本社・工場／〒136 東京都江東区新砂1丁目1番9号 TEL.(03)3645-9331 FAX.(03)3649-8663



写真：浅川 敏

9707

特集

加速都市・香港 1997

1997年7月1日の中国返還を間近に迎えた香港。そうした背景の中で、ノーマン・フォスターによる新空港、オブ・アラップ&パートナーズやテリー・ファレルによる新高速鉄道駅など、新都市計画・整備が次々と進められ、都市の変貌する様子は加速しているといえる。本特集では「速度」をテーマに香港の現況に触れながら、動き続ける都市「香港」の姿を、建築家、グラフィック・デザイナー、写真家によるヴィジュアル作品、現地取材インタビュー、写真により紹介する。

1章：総論／世界の中の香港

戦前、戦後の香港の姿を辿り、返還後の未来を推論する。

[文] 村松伸

2章：速度の記述——建築家、写真家、グラフィック・デザイナーによる香港のrepresentation

境界、密度、交通、流動性などのキーワードのもとに、作家達が、現在の香港のイメージをグラフィカルに表現する。

[参加作家] アラン・チャン、季鐵男、アーロン・タン、ウォーレス・チャン、曲渕英邦、貝島桃代、A.クライン+K.ダイサム、陸鐘驍、タナカノリユキ、タイクーングラフィックス、他。

[監修] 小嶋一浩

3章：速度の設計者たち

香港を拠点としてアジアを中心に活躍する建築家達に、事務所の運営、そして急ピッチで進むPADS (Port Airport Development Strategy) プロジェクトを含めた活動の展開をインタビューする。

[インタビュー] ロッコ・イム、スティーブン・スミス(テリー・ファレル事務所)、アンドリュー・チャン(オブ・アラップ&パートナーズ)、アーロン・タン(OMA Asia)、他。

[インタビュアー] 木下光

4章：イギリスが描いた21世紀のためのブループリント

港湾と空港に関連するインフラストラクチュアと埋め立て事業計画であるPADSプロジェクトの現況報告。

[作品] チェク・ラブ・コク新空港/フォスター・アソシエイツ、高速鉄道香港駅/アラップ・アソシエイツ+ロッコ・イム、高速鉄道九龍駅/テリー・ファレル、他。

[文] 松田直則

その他

[文] 「王家衛の映画における時間と空間」/アックバー・アバス

[インタビュー] 「香港のグラフィック・デザイン」/アラン・チャン

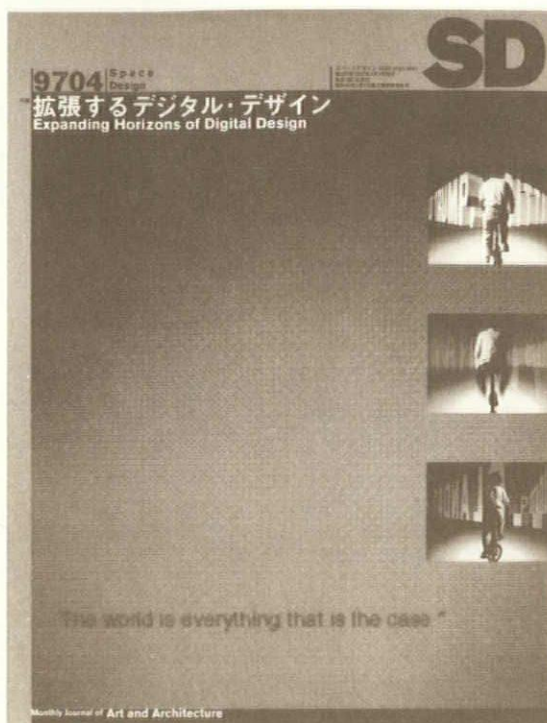
新連載：世界の現代美術館探訪1/太田泰人(神奈川近代美術館主任研究員)+渡辺真理(建築家)

短期隔月連載：ポーランドのドイツ・アヴァンギャルド2/長谷川章

連載：トムの時空形象学22/戸村浩

連載：サイバートーク7 インターフェイス/岡崎泰之

連載：海外建築情報リミックス：12 Architects #7「ジャン・ヌーベル」



9704

特集

拡張するデジタル・デザイン

コンピュータとネットワーク技術が、建築・都市の新しい環境を造り出そうとしている。いったいどのような環境が生まれようとしているのか。そしてその環境をいかにデザインすべきか。机上論ではない、現実を開始されたプロジェクト群を紹介。

第1章サイバースペースの概念(コンセプト)

1.電子メディアへ拡張する都市論の25の扉：田島則行／2.サイバースペースの存在を問うプロジェクト：J. ショウ、藤幡正樹、M. ノヴァック、他／3.空間概念の歴史と情報空間：M. ベネディクト

第2章記述される建築・都市

1.建築・都市モデルを生成するアルゴリズム：J. フレーザー、渡辺 誠、他／2.身体性を伴った知識が生み出すデザイン：入江経一・A. シュナイダー、久保田晃弘、他

第3章電子メディアへ拡張する都市

1.ヴァーチャル・ソサエティと現実空間の拡張：北野宏明、他／2.ミュージアム・ビルディングタイプの再編成：坂村 健、奥出直人、他／3.コラボレーション・デザインのフレーム：岡角光男、他／4.加速する脱近代都市の生成：磯崎新アトリエ、他／5.コード化による都市の拡張：米田雅子

第4章デザイン・スキルの拡張

佐々木睦朗構造計画研究所、(株)遠藤照明、シーラカンズ、ブラスワン、プランテック、他

[論文] 山口重之、桂 英史

[鼎談] 浜田邦裕・濱野慶彦・岡 正明

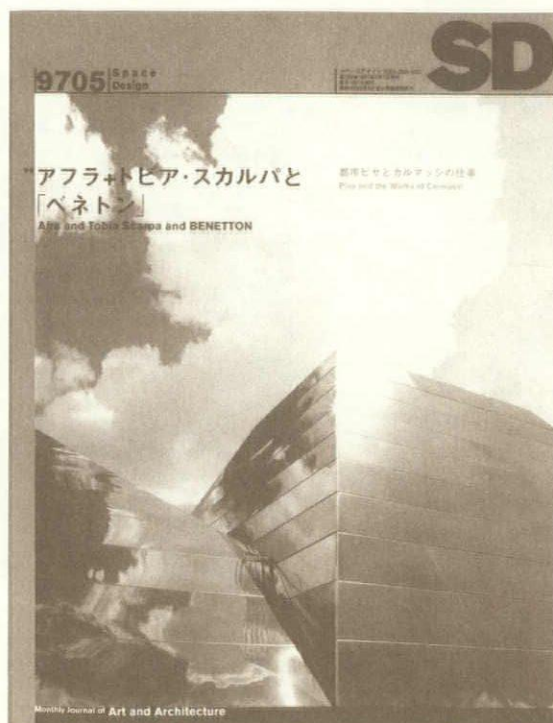
[対談] 岡 正明・層本純一

連載：トムの時空形象学19／戸村 浩

連載：サイバートーク：電子メディアのフロンティア 4.変貌する境界——電子的身体の拡張／小林 敦

海外建築情報リミックス：12 Architects #4「伊東豊雄」

特別定価=3,059円／本体2,913円



9705

特集

アフラトピア・スカルパと「ベネトン」

約30年にわたり、建築家アフラトピア・スカルパとアパレル企業ベネトンとの協力関係が維持され、この間にトピア達は、ベネトン本部、工場、ショップ等の設計を手掛けてきた。本特集では、企業の成長の一面を支えてきた建築家の仕事と、企業のデザイン思想について触れる。

[作品] ベネトン・ボンツァーノ工場、超自動化倉庫、ウール工場、ジーンズ工場、ベネトン本部、ベネトン・ショップ(ロンドン、他)のデザイン展開、他。

[インタビュー+文] 豊田博之

特集2

都市ピサとカルマッシの仕事

古代ローマ時代からの歴史を持つピサの都市形成史を軸に、1974年よりピサ市都市計画局長も務めるマッシモ・カルマッシの仕事を通して、現代イタリア建築の手法レスタウロ(修復)を考える。

[文] マッシモ・カルマッシ、神内秀信、野口昌夫、黒田泰介

[作品] カーサ・ムーティ、サン・ミケーレ・イン・ボルゴ教会地区再生計画、ヴェルディ劇場修復計画、他。

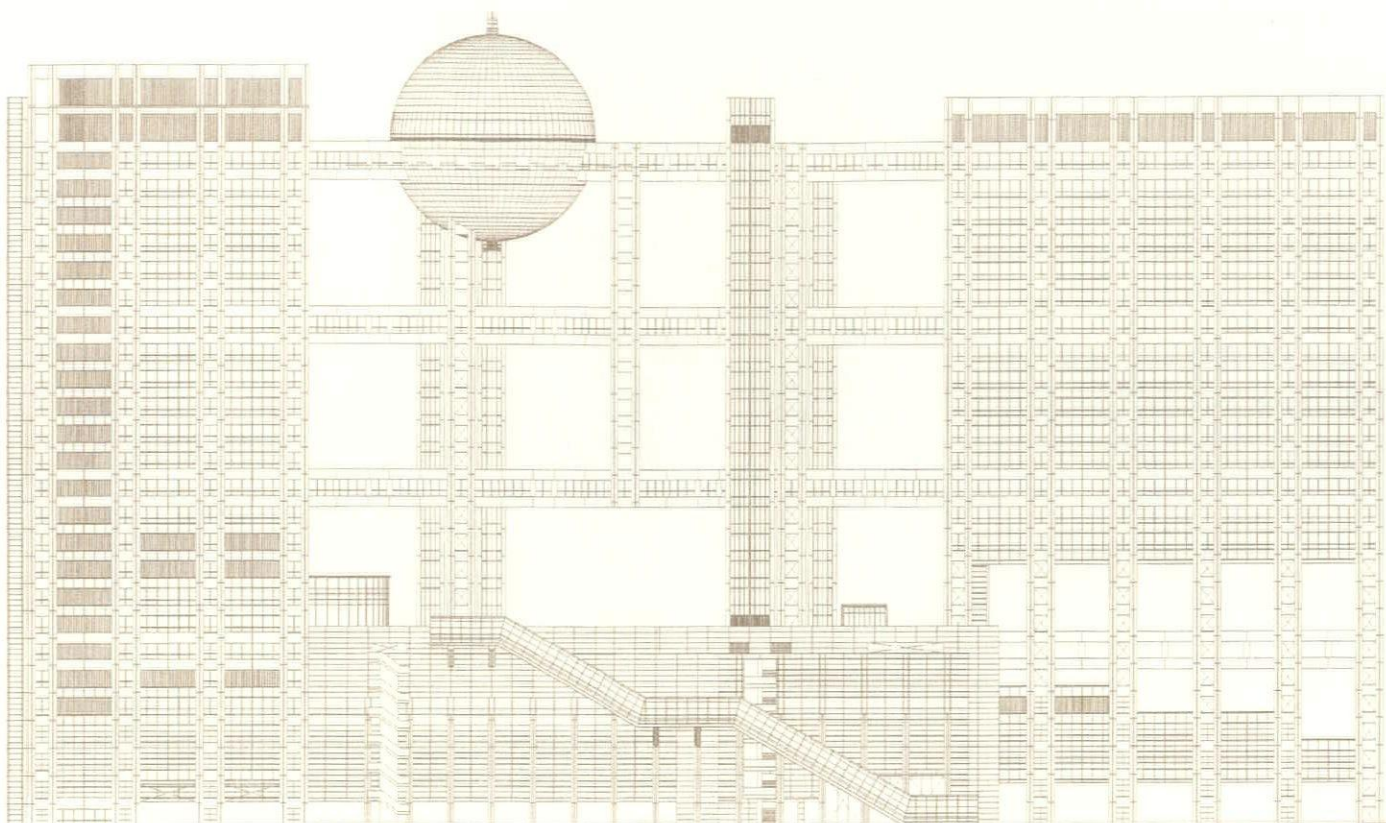
短期隔月連載：ポーランドのドイツ・アヴァンギャルド1／長谷川章・マンフレッド・シュバイデル

連載：トムの時空形象学20／戸村浩

連載：サイバートーク：電子メディアのフロンティア 5／石原弘明

海外建築情報リミックス：12 Architects #5「Archigram」

定価=2,000円／本体1,905円



SD別冊29

フジテレビ本社ビルの記録

「高度情報化社会の大規模複合建築の原点を求めて」

判型・体裁：A4判変形・並製

総頁：168頁

定価：3500円

好評発売中

臨海副都心台場地区に建設されたフジテレビ本社ビル(設計：丹下健三・都市・建築設計研究所)は、豊かな人間性と文化性を取り込んだ創造的な空間を、都心部地域では得られない恵まれた環境の中で実現している。それはまた次世代のオフィスビルとしての最新の機能と、躍動感溢れる美しさを備えている一方で、放送を中核としたさまざまなメディアの受信・発信基地として高度な安全性と最先端の通信技術を有する。

本別冊では、さまざまな角度からフジテレビ本社ビルを紹介するが、その中には、全体構成の詳細な検討過程、新しい構造システム、最新のスタジオの詳細、直径32mの球体のリフトアップ工法などが含まれる。

建築の設計、施工に携わる人はもちろん、新しい建築技術に興味を持つ人、都市の将来像、放送施設やオフィスビルの未来像に関心のある人などにとっても興味のある内容。

目次抜粋

【プロセス編】

臨海副都心事業とプロジェクトの始まり
基本設計から実施設計までのスタディ

【コンセプト編】

オフィス計画
スタジオ計画
構造計画
設備計画
防災計画
外構計画

【デザイン編】

基準階外装
球体外装
シースルーエスカレーター
1階シアター
展望室
大会議室
V4スタジオ
V9報道スタジオ・オフィス
DAVスタジオ
試写室
ラジオ・スタジオ

【施工編】

SD

鹿島出版会 建築図書案内



※表示価格には消費税は含まれておりません。

手法が—カウンター・アーキテクチャ

磯崎 新著 A5・¥3,800

建築の解体—一九六八年の建築情況

磯崎 新著 A5・¥4,200

空間へ—根源へと遡行する思考

磯崎 新著 A5・¥4,600

造物主義論—デミウルゴモルフィスム

磯崎 新著 A5・¥3,800

始源のもどき—ジャパネスキゼーション

磯崎 新著 A5・¥3,800

見立ての手法—日本的空間の読解

磯崎 新著 A5・¥3,400

イメージゲーム—異文化との遭遇

磯崎 新著 A5・¥3,400

建築の世界—意味と場所

C.ノルベルグ=シュルツ著 前川道郎, 前田忠直共訳 B4変・¥8,700

建築の形態言語—デザイン・計算・認知について

W.ミッチェル著 長倉威彦訳 B5・¥6,200

建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割

J.ラング著 高橋鷹志監訳, 今井ゆかり訳 A5・¥6,300

建築美論の歩み

井上充夫著 A5・¥4,400

アメリカの機械時代—1918~1941年

R.G.ウィルソン他著 永田 喬訳 A4・¥13,000

世界の高齢者住宅—プライバシーと自立の実現

J.D. hogland著 湯川利和, 延藤安弘共訳 A5・¥3,400

記憶に残る場所

D.リンドン他著 有岡 孝訳 A5・¥4,400

アースワークの地平—環境芸術から都市空間まで

J.パーズレイ著 三谷 徹訳 B5・¥7,600

移ろいの風景論—五感・ことば・天気

小林 亨著 A5・¥3,800

劇場—舞台芸術のための建築計画と設計

R.ハム著 劇場技術研究会訳 B5・¥6,200

スウェーデンの住環境計画

S.ティーベイ編著 外山 義訳 A5・¥4,500

仕組まれた意匠—京都空間の研究

川崎 清, 小林正美, 大森正夫共著 A5・¥4,200

ハウジング・デザイン—理論と実践

I.コフーン他共著 湯川利和監訳 B5・¥11,700

驚異の工匠たち—知られざる建築の博物誌

B.ルドフスキー著 渡辺武信訳 A5・¥3,800

人工楽園—19世紀の温室とウインターガーデン

S.コッペルカム著 堀内正昭訳 A4変・¥17,800

アトリウム建築—発展とデザイン

R.サクソン著 古瀬 敏, 荒川豊彦共著 A4・¥5,400

商業空間とアトリウム—室内歩行者空間のデザイン

M.J.ペドナー著 古瀬 敏訳 A4変・¥9,400

新しいガラスアーケード

H&H.K.ニーダーヴェールマイアー共著 青木英明訳 A4変・¥9,515

インテリジェントビルの計画—OAオフィスづくりのノウハウ

鹿島出版会編 A5・¥2,700

建築のファシリティ・マネジメント

建築FM研究会編著 A5・¥3,000

音楽のための建築—17世紀から現代にいたる建築家と音楽家と聴衆

M.フォーサイス著 長友宗重, 別宮貞徳共訳 B5・¥12,000

空間音響

J.ブラウエルト, 森本政之, 後藤敏幸編著 A5・¥4,700

室内環境デザインの新しい視点

鹿島昭一著 A5・¥2,800

建物のライフサイクルコスト分析

A.J.デリソッラ, S.J.キルク共著 千住鎮雄訳 B5・¥4,900

都市と建築のパブリックスペース—ヘルツベルハーの建築講義録

H.ヘルツベルハー著 森島清太訳 B5・¥6,700

都市と建築の解剖学—形態分析によって[設計戦略]を読む

J.ペイカー著 富岡義人訳 B5・¥5,800

ビルディング・エンベロプ [ハイテック・コンストラクション1]

A.ブルックス, C.グレック共著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

コネクションズ [ハイテック・コンストラクション2]

A.ブルックス, C.グレック共著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

スーパーシェッズ [ハイテック・コンストラクション3]

C.ウィルキンソン著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

鹿島出版会 建築図書案内



※表示価格には消費税は含まれておりません。

庭と空間構成の伝統〈縮刷版〉

堀口捨己著 B5変・¥20,000

利休の茶室〈復刻版〉

堀口捨己著 A5・¥18,000

茶室研究〈復刻版〉

堀口捨己著 A5・¥23,000

利休の茶〈復刻版〉

堀口捨己著 A5・¥18,000

堀口捨己作品・家と庭の空間構成〈縮刷版〉

堀口捨己著 B5変・¥16,000

建築論叢

堀口捨己著 A5・¥13,000

書院造りと数寄屋造りの研究

堀口捨己著 A5・¥18,000

堀口捨己歌集

堀口捨己著 A5・¥13,000

匠明—匠明+匠明五巻考

太田博太郎監修 伊藤要太郎校訂 A5・¥18,000

図集日本の病院建築

日本病院建築協会編 B4変・¥11,000

建築図集 現代の日本の病院

日本病院建築協会編 A4・¥13,000

病院建築の構成〈増補改訂版〉

小川健比子著 B5・¥13,000

病医院の新增設・改築のチェックポイント

野口哲英著 A5・¥4,400

高齢者住宅の企画と設計

M.ヴァリンズ著 湯川利和訳 B5・¥5,600

博物館建築—博物館・美術館・資料館の空間計画

半澤重信著 B5・¥13,600

博物館の未来

菊竹清訓編著 A5・¥2,200

美術館とは何か—ミュージアム&ミューゼオロジー

D.ジロディ他共著 高階秀爾監修／松岡智子訳 A4変・¥2,900

ホールの計画と運営—伝統芸能劇場から新多目的ホールまで

山崎泰孝著 四六・¥2,900

日本壁のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 山田幸一著 四六・¥1,300

畳のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 佐藤 理著 四六・¥1,300

建具のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 高橋康夫著 四六・¥1,300

風呂のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 大場 修著 四六・¥1,300

台所のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 高橋昭子, 馬場昌子共著 四六・¥1,300

便所のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 谷 直樹, 遠州敦子共著 四六・¥1,300

窓のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 日向 進著 四六・¥1,300

床の間のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 前 久夫著 四六・¥1,300

屋根のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 石田潤一郎著 四六・¥1,300

和瓦のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 藤原 勉, 渡辺 宏共著 四六・¥1,300

門のはなし〈物語・ものの建築史〉

山田幸一監修 佐藤 理著 四六・¥1,300

今話題の建築技術を見る

近畿建築士会協議会編 四六・¥2,000

超級アジア・モダン—同時代としてのアジア建築

村松 伸著 四六・¥2,500

設計とその表現—空間の位相と展開

川崎 清編著 B5・¥6,100

世界建築事典

N.ベヴスナー, J.フレミング他共著 鈴木博之監訳 A5・¥5,800

建築を考える 1—設計をめぐるディスカール

菊竹清訓編著 A5・¥2,800

建築を考える 2—建築デザインへのアプローチ

菊竹清訓編著 A5・¥3,400

建築を考える 3—21世紀の建築像

菊竹清訓編著 A5・¥2,300

鹿島出版会 建築図書案内



※表示価格には消費税は含まれておりません。

白い机①：若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想

G.シルツ著 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・¥9,500

白い机②：モダン・タイムス—アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い

G.シルツ著 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・¥14,300

アルヴァ・アアルト〈SD選書 34〉

武藤 章著 四六・¥1,800

アルヴァ・アアルト〈現代の建築家〉

SD編集部編 A4変・¥4,000

ル・コルビュジエの建築—その形態分析

J.ペイカー著 中田節子訳 B5・¥6,500

ル・コルビュジエ—理念と形態

W.J.R.カーティス著 中村研一訳 B5・¥8,200

ル・コルビュジエ〈SD選書 144〉

C.ジェンクス著 佐々木宏訳 四六・¥1,500

知られざるフランク・ロイド・ライト

E.ターフェル著 谷川正己, 谷川睦子共訳 B5・¥5,700

フランク・ロイド・ライト〈SD選書 7〉

谷川正己著 四六・¥1,800

ライトと日本〈SD選書 123〉

谷川正己著 四六・¥1,800

タリアセンへの道〈SD選書 132〉

谷川正己著 四六・¥980

建築について(上)〈SD選書 158〉

F.L.ライト著 谷川睦子・谷川正己訳 四六・¥1,800

建築について(下)〈SD選書 159〉

F.L.ライト著 谷川睦子・谷川正己訳 四六・¥1,200

ルイス・カーン研究—建築へのオデュッセイア

前田忠直著 A5・¥3,400

ルイス・カーン 光と空間

U.ピュッティカー著 富岡義人, 熊谷逸子共訳 B5・¥4,200

私のルイスカーン

工藤国雄著 A5・¥2,800

ガウディ—芸術的・宗教的ヴィジョン

R.デシャルヌ他著 池原義郎他共訳 B4変・¥14,800

ガウディの建築

鳥居徳敏著 A5・¥2,900

アントニオ・ガウディ〈SD選書 197〉

鳥居徳敏著 四六・¥1,800

評伝ミース・ファン・デル・ローエ

F.シュルツ著 澤村 明訳 B5・¥8,900

ミース・ファン・デル・ローエ〈SD選書 204〉

D.スペース著 平野哲行訳 四六・¥1,800

カルロ・スカルパ〈SD選書 207〉

A.F.マルチアノ著 浜口オサミ訳 四六・¥1,500

カルロ・スカルパ〈現代の建築家〉

SD編集部編 A4変・¥3,000

カルロ・スカルパ(2)〈現代の建築家〉

SD編集部編 A4変・¥3,398

リカルド・ボフィール—建築を語る

R.ボフィール, F.エペール・ステヴァン共著 石上申一郎訳 A5・¥3,600

サリヴァン自伝—若き建築家の肖像

L.H.サリヴァン著 竹内 大, 藤田延幸共訳 A5・¥2,800

ヴァレリーの建築論

加藤邦男著 A5・¥2,500

オットー・ワーグナー〈SD選書 187〉

H.ゲレツェッガー他著 伊藤哲夫他訳 四六・¥1,800

ルイス・マンフォード〈SD選書 189〉

木原武一著 四六・¥1,500

アルド・ロッシ自伝〈SD選書 191〉

A.ロッシ著 三宅理一訳 四六・¥1,800

オーギュスト・ペレ〈SD選書 196〉

吉田綱市著 四六・¥1,500

アドルフ・ロース〈SD選書 165〉

伊藤哲夫著 四六・¥1,200

ウィリアム・モリス—近代デザインの原点〈SD選書 226〉

藤田治彦著 四六・¥1,800

エーロ・サーリネン〈SD選書 227〉

穂積信夫著 四六・¥1,800

パツラーディオ—世界の建築家

福田晴彦著 A5変・¥4,500

ピーター・ライス自伝—あるエンジニアの夢みたこと

P.ライス著 岡部憲明監訳／大田佳代子, 瀧口範子訳 A5・¥3,800



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreeinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesse D'Artico, etc.. ¥ 1,988



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥ 2,548



9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥ 1,988



9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Weiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥ 1,988



9606 111 Chairs Designed by Architects: Reintroducing 111 chairs designed by overseas architects from 19 century to now. Architects: Adolf Loos, Charles Rennie Mackintosh, Antonio Gaudi, Otto Wagner, Eilii Saarinen, Walter Gropius, El Lissitzky, Erik Gunnar Asplund, Le Corbusier, Mies van Der Rohe, Bruno Taut, Charles Eames, Carlo Scarpa, Aldo Rossi, etc. ¥ 3,059



9607 The Architecture of Kameki Tsuchiura: A Reappreciation: Reintroduce Kameki Tsuchiura's works before and after world war II. Works: Tsuchiura House I and II, Tokuda Building, Hosaka Clinic, etc. **Multi-unit Housing by the Kenchiku Design Studio:** Introduce the idea of housing which Kenchiku Design Studio have kept showing new FH HOYA-II project. ¥ 1,988



9608 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥ 2,447



9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jom Utzon; etc. text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥ 1,988



9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martine de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥ 1,988



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Museum, Carnival Showcase, etc. text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3** ¥ 2,548



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami:** Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth. ¥ 1,988



9701 Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Introduces major works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥ 3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the beauties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects** **Exciting Asia:** Looks at architecture and metropolises in Asia and how they will look in the future. ¥ 1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥ 1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Texts: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc ¥ 3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Teatro G.verdi, etc ¥ 2,000



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : 'Tsubakura Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

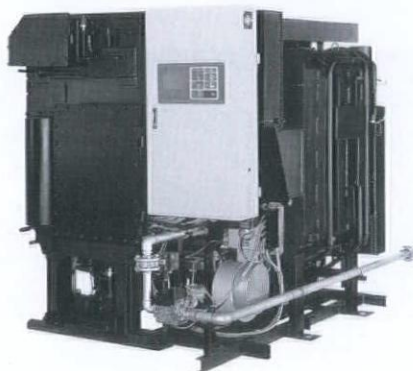
Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrich Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● 吸収冷温水機

スーパーアローエース Mシリーズ

● 矢崎総業株式会社



矢崎総業㈱では、高性能・高機能で需要のワイド化に対応する新型の吸収冷温水機、スーパーアローエース・Mシリーズを新発売した。Mシリーズは、高性能・高機能による低LCC（ライフサイクルコスト）を実現し、構造はシェル・アンド・チューブ方式を採用。基本モジュールは、70、80、90、100RTの4機種で、組合せにより300RTまで、ラインアップ。機能面では、業界トップクラスの小型・軽量を実現し、分割搬入も可能で、新築物件はもちろん、特定フロア利用のターボ冷凍機のリニューアル物件にも対応する設計である。ビルの大規模化や稼働時間の延長などによって求められる高負荷運転にも標準形で対応。また、空調のライフサイクルコスト（LCC）低減のため、高効率・省エネ設計によりランニングコストを低減する。異常予知診断機能と遠隔監視システムの標準装備化により運転診断や迅速なメンテナンスを実現し、メンテナンスコストの低減を図る。標準形、暖房増加形、年間冷房用の3タイプにそれぞれ各21機種ラインアップ。これらの3タイプに、屋内仕様と屋内外兼用仕様（キャビネット付）を設定。一方、冷却塔一体型バックタイプには、標準形と、暖房増加形の2タイプを設定し、80RTと100RTの各2機種を用意。

矢崎総業株式会社 広報室
東京都港区三田1丁目4番28号
〒108 Tel 03-3455-8812

● ホームエレベーター

ホームエース 上昇気分

● 株式会社日立製作所



㈱日立製作所では、高齢化社会の進展による2世帯住宅の増大や3階建て住宅の増加に伴い、ホームエレベーター、ホームエース上昇気分を新発売した。

● 特長

- ①左右の壁と天井には、シボ加工の強化プラスチックを採用。アーチ型天井と丸みのある壁面がつくるゆったりとした空間と、操作パネルの上のアクセントパネルが個性をプラスする。かごデザインは4種類の標準タイプを用意。組合わせが選べるカラーバリエーション、多彩なホールデザイン。
- ②見やすく使いやすい操作パネルと大型押しボタン、お年寄りの方が、かご内で体を支えられる手すり台。
- ③かご内スペースは、幅900mm×奥行き1,200mmと車椅子でのってもゆとりあるスペース。
- ④出入口とかごの戸には、密室感をやわらげ、かご内の様子を確認できる大きな窓。戸自動反転装置が人や物に触れて後退したことを検出し戸を開く。よりゆとり乗り降りができる戸開延長機能。
- ⑤かご内はゆったりと、しかも敷地は有効に使えるように開口1,500mm×奥行き1,450mmと省スペース設計。
- ⑥電気代は、月々わずか約800円の省エネルギー設計。
- ⑦かご内非常呼びボタン、軽故障による閉じこめを防ぐ軽故障時最寄り階着思運転。停電時自動着床装置。

株式会社日立製作所 昇降機事業部
東京都千代田区神田駿河台4丁目6番地
〒101-10 Tel 03-3258-1111

● 視覚障害者誘導補助システム

ホワイトナビゲーション システム

● リンテック株式会社



リンテック㈱は、㈱サニー・シーリングと共同開発した、音と音声による視覚障害者誘導補助システム、ホワイトナビゲーションシステムを新発売した。同システムは、従来の白杖に相当するアンテナ付きの専用杖とスキャナー、そして床面に施工される特殊な共振タグとで構成され、連続的に発せられる音や音声によって視覚障害者をより安全・正確に目的地まで、誘導する全く新しいタイプのシステムである。8種類の特殊な共振回路を持ったタグを床面に施工（4タイプ）する。そこに専用杖の先端を近づけると、杖の先端に内蔵された送受信アンテナから発信される電波が床面の共振タグに当たり、戻ってくる8種類のエコー波を受信する。受信したエコー波は、スキャナーによって音や音声に変換され、視覚障害者をより安全・正確に目的場所まで誘導案内する。目的や用途に応じて、音や音声はあらかじめ選択入力することができる。広く普及している点字ブロックとの一体化により、より安全で確実な誘導補助システムが構築できる。既設、新設の建築物のいずれにも安価で簡単に施工できる。設置対象は、病院、老人保健施設、障害者リハビリセンター、盲学校、点字図書館、公共施設、ホテル、空港、駅舎、鉄道車輦内など。

リンテック株式会社
東京都板橋区本町23番23号
〒173 Tel 03-5248-7741

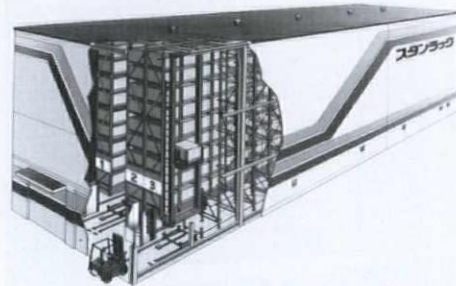
●

倉庫

スタンラック
スタンコールド

●

株式会社ダイフク



株式会社ダイフクと新日本製鐵株式会社では、自動ラック組込みシステム倉庫、スタンラックおよび冷蔵冷凍倉庫、スタンコールドの2種類を共同開発し、新発売した。スタンラックは、システム建築の特長である低価格・短工期などのメリットを生かし、これに自動ラックを組込み、さらに建物とラック設備トータルでの経済性・合理性を追求した。同製品は、建屋、基礎、自動倉庫（または各種自動ラック）および制御・在庫管理システムなど物流倉庫に必要な全機能をパッケージ化し、従来にない低価格・高品質・短工期（従来の2/3程度）を実現した。標準モデルは、全自動1,000パレット、550パレット、半自動500パレットの3タイプ、このモデルの組合わせや変形で全てのニーズに対応する。冷蔵冷凍用のスタンコールドは、スタンラックをベースに防熱・冷却システムを組込み、建物とラック設備・冷却設備トータルでの経済性・合理性を徹底追求し、従来の建物建設費の範囲内で、自動ラックおよび制御・在庫管理システムを含めた冷蔵冷凍庫の建設を可能にした。加えて、電気代・人件費などのランニングコストも従来に比べ半減する。標準モデルは、冷蔵庫規模公称5,000トン、3,000トン、1,000トンの3タイプがあり、またこれらの組合わせや平置き場・事務所などの併設も可能である。

株式会社ダイフク 建築事業部
東京都港区芝2丁目3番3号
〒105 Tel 03-3456-2263

●

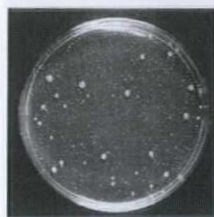
塗床

グリップコート抗菌床

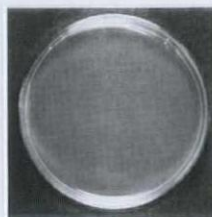
●

住友ゴム工業株式会社

「グリップコート抗菌床」の抗菌性能
(大腸菌の場合)



標準仕様



抗菌仕様

住友ゴム工業株式会社では、研究・生産施設や各種工場において豊富な実績を持つ塗床、グリップコートの新製品として、優れた抗菌効果を持つ、グリップコート抗菌床を開発し、新発売した。同製品は、大腸菌や黄色ブドウ球菌などの有害な細菌類に対して有効な無機系抗菌剤を均一に添加した構造である。長期にわたる安定した抗菌効果と、塗床ならではの優れた強度・耐久性を備えた仕様である。抗菌性能試験では、抗菌剤を添加したグリップコートの試料に大腸菌の菌液を0.5mlを接種し、27℃で24時間保存後の生存菌数を測定した結果、菌数は99.9%減少した。短工期の施工も可能で、新設はもとより既存の塗床から抗菌床への改修にも適している。用途は、給食センター、厨房（ホテル、学校、食堂）、食品工場、弁当メーカーのフロアなど。

●

特長

- ①有害な細菌類に対して有効な銀系抗菌剤を添加。塗床の本来持っている優れた強度や耐久性に抗菌性を付与した仕様である。
- ②人体に対して安全性の高い抗菌剤を採用。しかも抗菌効果は塗床の性能と同様、長期間持続する。
- ③汚れに強く、清掃性に優れた仕様。また、既存の塗床から抗菌床への改修も可能である。

住友ゴム工業株式会社 産業企画部
神戸市中央区脇浜町3丁目6番9号
〒651 Tel 078-265-3057

●

サッシ

プラマードⅢ

●

YKKアーキテクチュラル プロダクツ株式会社



YKKアーキテクチュラル プロダクツ株式会社では、従来の樹脂サッシより1.5倍（当社比）の採光面積がとれる樹脂サッシ、プラマードⅡを新発売した。同製品のスリムなスタイルは洋風住宅だけでなく、和洋折衷のスタイルにも幅広く調和し、住宅設計の自由度を更に拡大する。また、採光面積が拡大することで明るい日射しを多く室内に取込むことができる。断熱性能は、Low Eガラス（低放射ガラス）（レミグ）使用時は、K値1.5という高い性能値を実現している。

●

特長

- ①これまでの樹脂サッシのイメージを一新するスリムなデザインで、当社比30%スリム化した。
- ②小窓サイズの採光面積を1.5倍（当社比）に大幅アップした。
- ③開き窓では、室内側のAT材を大型化し、材質も密着性の良いものにする事で、気密効果を高めた。
- ④引き違い窓のAT材の構造を見直すことで、気密性能が向上した。
- ⑤引き違い窓の開閉が楽になった。

●

価格

16,900円～40,400円
(FIX窓 幅500～1,694mm 高さ601～2,000mm)

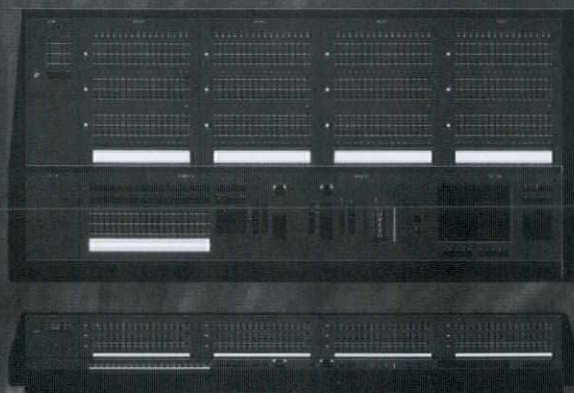
YKKアーキテクチュラル プロダクツ株式会社
東京都千代田区神田和泉町1番地
〒101 Tel 03-3864-4134

TOSHIBA

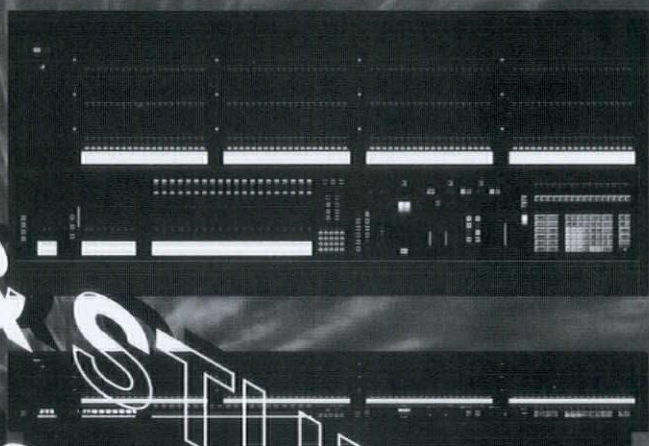
LICSTAR シリーズ

インテリジェント操作卓 リクスター

LICSTAR-I 記憶:1000 シーン 再生方式:クロスフェード



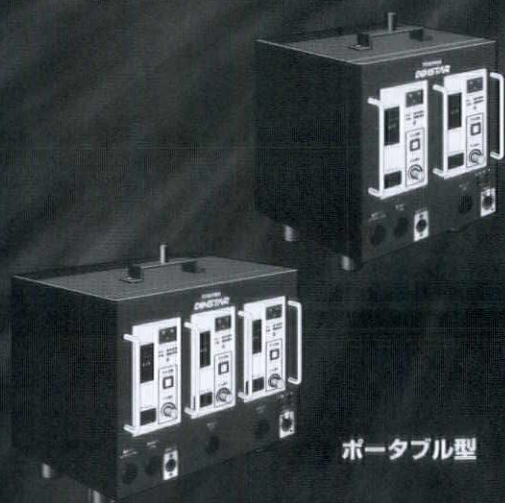
LICSTAR-II 記憶:1000 シーン 再生方式:ムーブフェード



STAGE & STUDIO LIGHTING SYSTEM

DIMSTAR シリーズ

インテリジェント調光器 ディムスター



ポータブル型

■ DIMSTAR 機種構成



東芝ライテック株式会社

システム事業部 施設システム部
舞台・スタジオシステム担当
〒140 東京都品川区南品川 2-2-13
TEL.03-5463-8794 FAX.03-5463-8841

ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

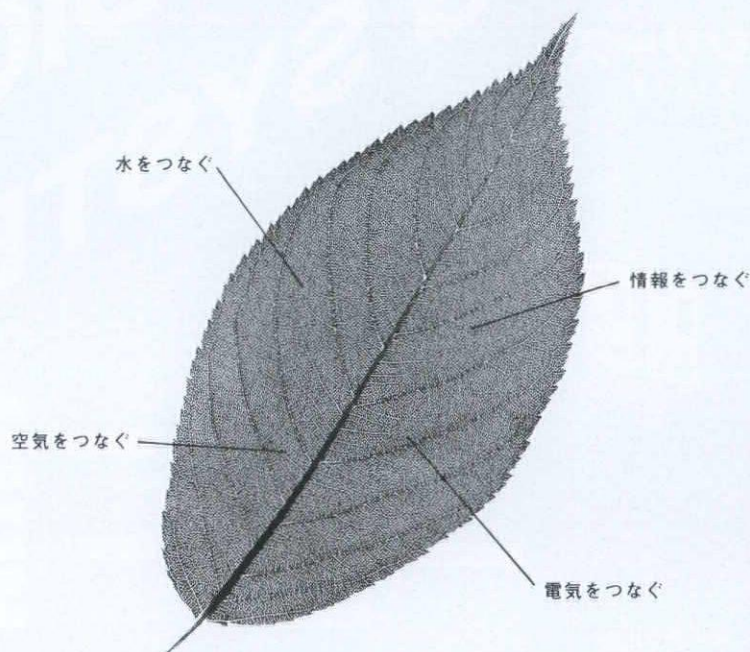
私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。

もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

火に

衝撃に

強さが違います。

フロート板ガラスを特殊強化処理した高性能の耐熱強化ガラスを使用。耐熱性と強度で差がつく甲種防火ドアです。

●防火性能の高い耐熱強化ガラスを使用。
特殊強化処理ガラスを使用して、厳しい防火仕様をクリア。甲種防火戸の個別認定を得ています。しかも一般の板ガラス同様のワイヤレス&シースルーの外観です。

●平均破壊応力は従来比5倍。
PL対応の高強度。

通常フロート板ガラス500kg/cm²に対し、耐熱強化ガラスは2800kg/cm²。人体や物が衝突しても、割れにくく、万一、割れたときもガラス破片が細片状になるようにし、大怪我の危険性を抑えています。



両開きドア



はめ殺し窓



片開きドア
Aタイプ



片開きドア
Bタイプ



片開きドア
Cタイプ

耐熱強化ガラス甲種防火ドア

ディーエフライト Super

鋼製片開き戸・両開き戸・はめ殺し窓

鐵矢工業株式会社

本社：東京都中央区銀座1-8-7
(新銀座ビル) 〒104
TEL. 03-3567-8441 (代表)
FAX. 03-3567-8449

お問い合わせは 事業二部(TEL.047-341-3111)まで

感性
感動
感謝

私たちの3Kです。



Hakusuisha

株式会社 白水社

本社 ———
〒103 東京都中央区日本橋茅場町2-2-8
Tel.03(3669)1221
大阪支店 ———
〒542 大阪市中央区東心斎橋1-15-27
Tel.06(252)4501
札幌営業所 ———
〒060 札幌市北区北9条西4丁目7-1
エスターNガレリア3F
Tel.011(707)4155
福岡営業所 ———
〒814 福岡市早良区百道浜2-3-2
TNC放送会館12F
Tel.092(852)5401

HeartExciting
こころときめく21世紀へ

舞台大道具

舞台設備

舞台幕地



金井大道具株式会社

代表取締役 金井 俊一郎

東京営業所
本社・工場

東京都中央区新富2-8-1 キンシビル7F
埼玉県越谷市蒲生4-9-24

TEL 03-3206-8730 (代表)
TEL 0489-86-9166

FIGLA CO., LTD.

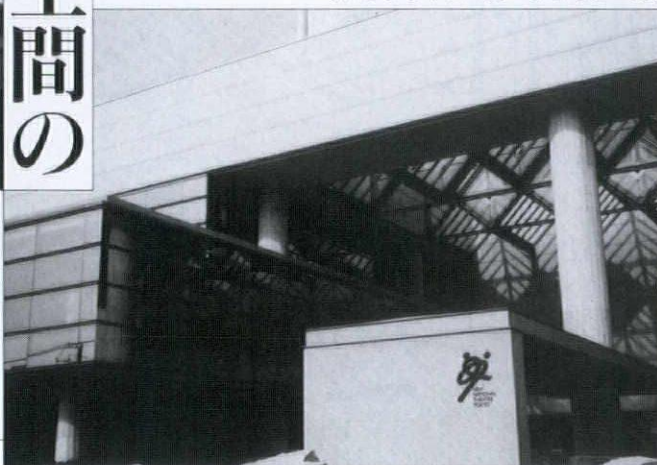


新国立劇場
(手摺・カーテンウォール)

新空間の

創造へ

新国立劇場
(トッブライト・カーテンウォール)

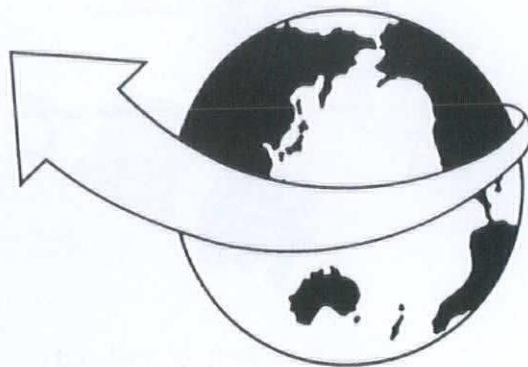


特殊ガラス製造販売・設計・施工
フィグラ株式会社

本社 〒105 東京都港区芝公園2-6-15 黒龍芝公園ビル4F TEL.03-5401-2177(直)
大阪支店 〒540 大阪市中央区農人橋2-1-10 大阪建築会館6F TEL. 06-941-7005(代)
埼玉工場 〒367 埼玉県本庄市共栄210-5 TEL.0495-22-6513(代)

未来に向って...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大 阪 支 社 〒532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2 2 7 3
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

第二国立劇場

劇場間仕切（ALC工事）
地下2重壁（ラムダ工事）
を担当

人が快適に暮らし、働くための
「環境」を創造しお客様の立場
に立って建築を考えます



==== 営業品目 =====

○ 建築部

- ・ ALCパネル販売施工
- ・ 押出成形板販売施工
- ・ 外装用金属パネル販売施工
- ・ 耐火被覆断熱ウレタン販売施工
- ・ パイル販売施工
- ・ MS工法（常温金属溶射）
- ・ 他建築一般

○ DSM事業部

- ・ 電力の総合コンサルタント

『安心』・『安全』・『確実』

建築の総合パートナー

一級建築士事務所登録 第1-9605-4436



コスモライフ建設株式会社

代表取締役社長 池澤 寿弘

〒297-02 千葉県長生郡長柄町上野202

TEL 0475-35-5099 FAX 0475-35-3302

イイカオするのが
得意です!

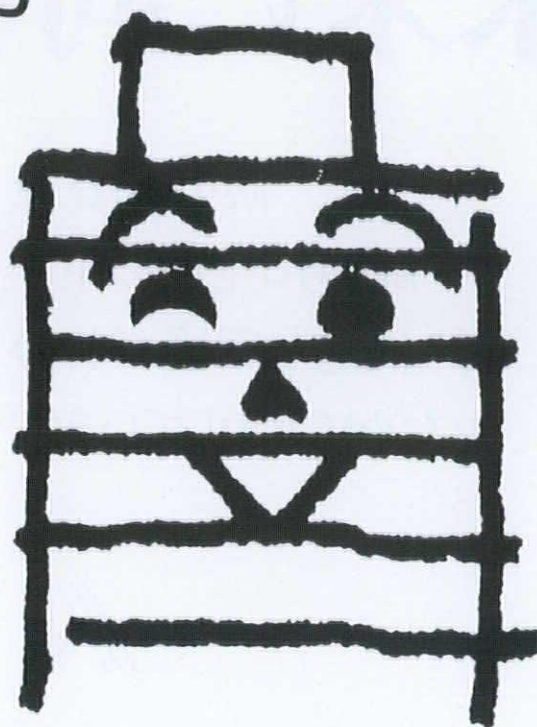
ニューウォールシステムの
ビルサッシ&カーテンウォール

NWS ニューウォールシステム株式会社

本 社 〒101 東京都千代田区西神田3-1-6 TEL.03(5226)2711

大阪支社 〒541 大阪市中央区備後町1-7-10 TEL.06(264)3911

支店 埼玉/名古屋/福岡 営業所 札幌/仙台



やすらぎの都市空間を創造します。

ビル用アルミサッシ・カーテンウォール

都市空間のクリエイター



日本建鉄株式会社

本社・船橋製作所 ㊟273 千葉県船橋市山手1丁目1番1号
TEL 0474(35)5111(案内台)
営業本部・東京支店 ㊟112 東京都文京区後楽1丁目4番25号
TEL 03(5300)7521(代)

人間にやさしい快適空間をめざして

立山アルミ

The Dramatic scene

応援します。心に響くそのシーン。

立山アルミニウム工業株式会社
富山県高岡市早川550番地
ビル建材部 TEL.0766-20-3321

信頼と実績で「玄関」を創造

佐藤電設工業建材部は、建物の玄関を創造空間として捉え、お客様の顔となるよう、ニーズに合わせて、企画・設計・施工を行っています。千葉県東金市の自社工場におけるステンレスサッシの加工技術は、高品質の製品を作り出し、完成度の高い空間を仕上げています。これまで、アメニティスペースとしての機能をも求められる建築物をはじめ、ショッピングセンター、オフィスビルなど、さまざまな機能の玄関を作り続けて参りました。つねにお客様の立場で考え、お客様が自慢できる玄関造りがわれわれスタッフの願いなのです。

(鹿島建設株東京支店鹿栄会材工部会所属)



ナブコ自動ドア・バルコ 代理店

佐藤電設工業株式会社

□本社 〒114 東京都北区中十条1-15-4

☎ 03(3909)7166代

□自動ドア部 ☎ 03(3909)7167代

□サービス部 ☎ 03(3909)7160代

□建材事業部 ☎ 03(3909)7167代

FAX 03(3900)2278

□電気工事部 ☎ 03(3909)3101代

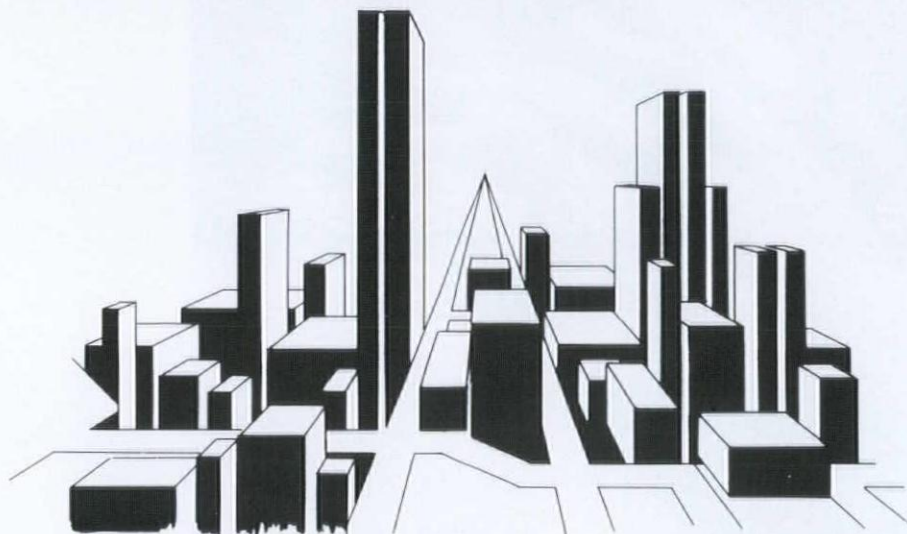
FAX 03(3909)3737

□建材事業部 ☎ 0475(53)0546代

東金工場 FAX 0475(55)5787

シャッター・イノベーション。

幾多の変遷の中で醸成された技術とノウハウが今、都市文化の未来像にどう寄与できるのか、シャッターで何が成し得るのか、私達は概念に捕らわれない新しい発想と、明日を見据えた視点で考えたいと思います。



小俣シャッター工業株式会社

本社 〒114 東京都北区東田端1-4-1 ☎03-3893-5211(代)

N 日章工業株式会社

- 本 社 〒101 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
- 大 阪 支 店 〒541 大阪市中央区高麗橋 2-4-6 (大正不動産ビル 6 階) ☎06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央 3-2-27 (日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施 設 商 品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサ
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建 材 商 品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

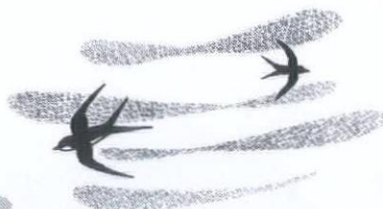
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建 設 商 品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元氣である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイー、ピュイー。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。

額に汗をにじませながら、

一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで

季節の深まりを知る。

山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはしめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして

近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

OSAKI 



集中管理 だけじゃ物足りない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム

OSMAC-mini

中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的ではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々まで神経が行き届いた管理を実現します。

特 長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全免停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 免停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 筐内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

- 定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、免停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停復電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別免停操作記録、運転時間記録、カレンダー設定変更記録 ●停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556 札幌営業所 ☎011(251)6622 仙台営業所 ☎022(223)3747 千葉営業所 ☎043(221)5714
横浜営業所 ☎045(664)5561 広島営業所 ☎082(243)1611 沖縄営業所 ☎098(832)7406

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア

株式会社

大気社

●営業種目

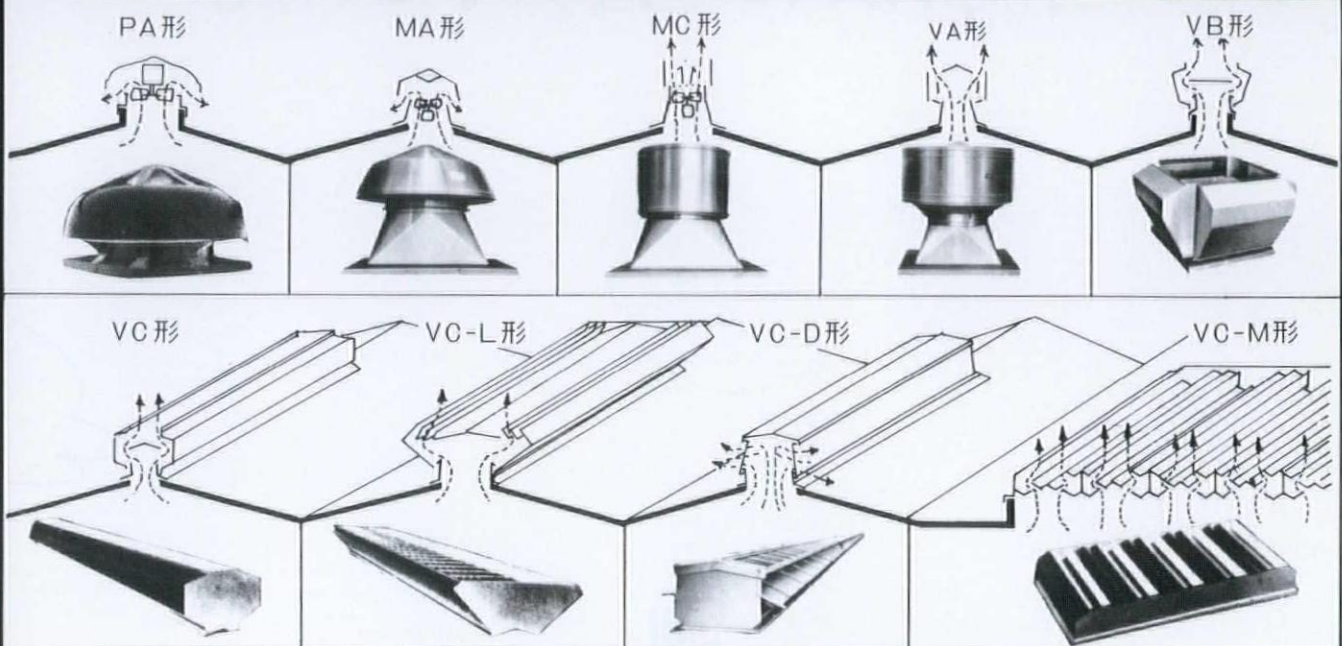
空気調和設備／給排水衛生設備／塗装プラント
公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本社 東京都新宿区西新宿 2-6-1
新宿住友ビル ☎03-3344-1851(代)
大阪本社・大阪支社 大阪市北区中之島 3-2-18
住友中之島ビル ☎06-448-5851(代)

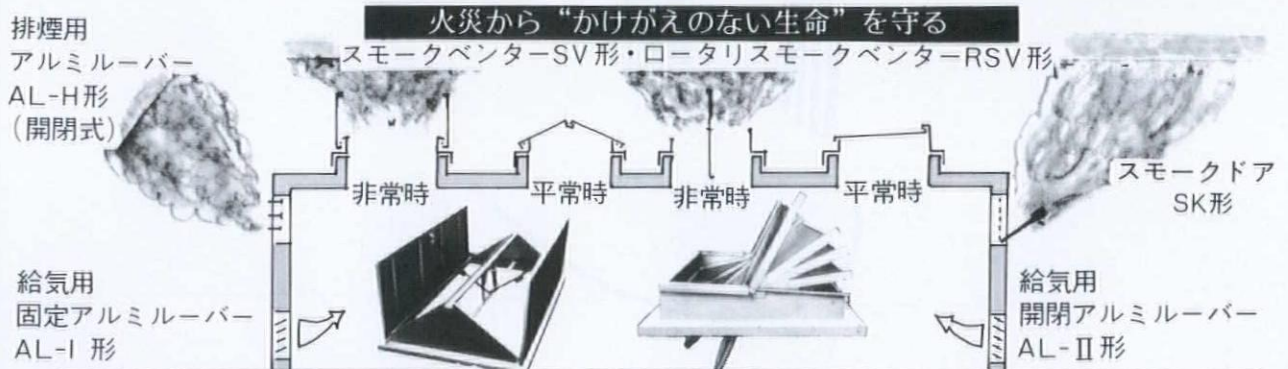
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

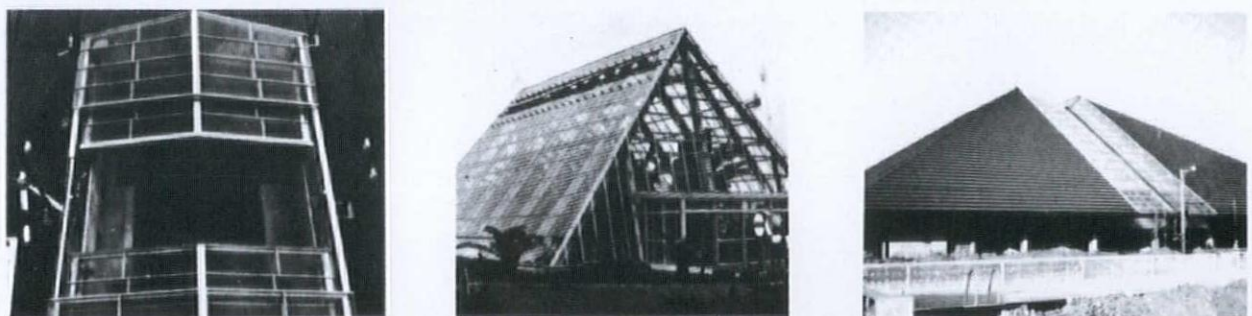


排煙・ルーバー装置



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト

採光装置



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	朝日新聞社	A20
	株朝日工業社	A27
イ	株和泉屋・石のアトリエ	80
オ	小俣シャッター工業株	A30
	大崎電気工業株	A32
カ	株関電工	A11
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	カヤバ工業株	A19
	金井大道具株	A26
ク	栗原工業株	A17
コ	株弘電社	A16
	コスモライフ建設株	A27
サ	三和シャッター工業株	97
	三機工業株	100
	佐藤電設工業株	A29
	株坂本商会	A34
シ	旬シャーレンテック	A18
	神鋼ノース株	109
	新生興産株	123
	昭和アステック株	114
	新菱冷熱工業株	A31
ス	住友電設株	A24
タ	高砂熱学工業株	表3
	株竹中工務店	A3
	大興物産株	A8
	株高島屋	A18
	立山アルミニウム工業株	A29
	株大気社	A33
	TAKリビング	124
チ	株中電工	A19
テ	鐵矢工業株	A25
ト	東陶機器株	A1
	東洋熱工業株	110
	東光電気工事株	A9
	株トーエネック	A17
	東芝ライテック株	A23
	株東芝	A36
ナ	中立電気株	A14
ニ	日本電気株	A10
	日新工業株	A12
	株西原衛生工業所	A13
	日本建鉄株	A28
	ニューウォールシステム株	A28
	日章工業株	A30
ハ	株白水社	A25
ヒ	株日立製作所	表4
フ	フィグラ株	A26
ホ	ホテルイースト21東京	A7
マ	松下電器産業株	A2
ミ	宮崎木材工業株	A15
	三菱電機株	77
ヤ	山田照明株	117
	矢崎総業株	表2
	株ヤナセ	118

TOSHIBA



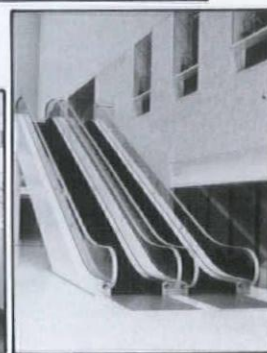
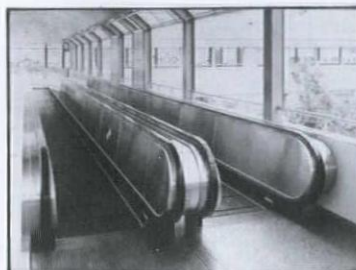
乗る人の気持ちを考える。 そこから始まる技術、 すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、その
また子供たちが安心して利用できるエレベ
ーター・エスカレーターづくりを。

そのために東芝が理想としている技術をひ
と言でいえば、それは、技術を感じさせない
技術こそ、私たちの理想です。

人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の
気持ちを考えたアメニティ空間へ。

私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境
づくりに取り組んでいます。



東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 **東芝** 昇降機事業部

本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL(03)3457-4613